

Fate/Φ's Order

うろまる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダー555+Fate/Grand Orderのクロスっぽい何かです。

藤丸立香に憑依した乾巧の冒険活劇。よろしくお願いします。

目次

序節「目覚め」	1
A・D・2004 炎上汚染都市 冬木	
第一節「胎動」	8
第二節「吼える孤狼」	19
第三節「白亜の運命」	31
第四節「異形襲来」	41
第五節「輝ける脅威」	57
第六節「Dead or Alive」	75
第七節「ファイズ復活」	84
第八節「駆け抜ける鉄騎」	99
第九節「泥に染まるは」	111
第十節「Start Up!」	123
第十一節「クライマックスF」	142
第十二節「生誕」	175
終節「掌の灰」	202
A・D・1431 邪竜百年戦争 オルレアン	
序節「灰と焰の影」	214
第一節「穏やかな旅の始まり」	232
第二節「邂逅」	246
第三節「魔女、強襲」	262
第四節「夜空の月に誓うこと」	279
第五節「影が彷徨う街」	291

序節「目覚め」

途切れていた意識が断続的に繋がり出し、やがて大きな光が、すべてを覆い尽くした。

燃え続けている巨大な焚火の中心に、勢いよく突き飛ばされたような。まるで肉体の末端から、徐々に灰へと巻き戻されていく感覚。

閉じられた目蓋を焼く鋭利な赤光に耐える事が出来ず、とうとう、乾巧はその目を覚ました。

「痛っ、つう——」

出迎えたのは、鋭い痛みだった。続いて、鼻腔を殴りつけてくる、鮮烈な鉄錆の臭い。べちゃべちゃと全身を濡らしてくるそれが血であることに、数秒経つてようやく気づいた。

ぱちぱちぱちと、何かが弾ける音。何処かから際限なく入り込んでくる熱気。闇の中に閉じ込められていても、わかった。どこかで何かが燃えている。それもすぐ近くで。暗闇に慣れてきた眼が、節くれ立ってはいるが未成熟な白い手を映す。幼い頃の夢でも見ているのかと、とりとめのない思考が浮かぶ。

「俺、何で、」

乾いた喉を動かして、ようやく、脳味噌が重い腰を上げた。擦り切れたビデオテープを早回すように、錆びついた情景が、次々と脳裏に浮かんで消えていく。木場との決着。王との戦い。そして、木場の最期。

——俺には分からない。何が正しいのか。その答えを、君が俺に教えてくれ。

木場が最期に絞り出した、魂の慟哭。

何が正しいのか、何が間違っているのか。本当の所を言えば、最後まで分からなかった。当たり前だ。人間は誰もが、自分だけの正しさを信じて生きている。他人の正しさは所詮、道端に転がっている石ころのようなものにしかたれない。邪魔にならなければ、無視する。邪魔になれば、蹴飛ばす。ぶつかるか、ぶつからないか、零か一でしか

測れない。そんなものに正しいも糞もあつたものではない。土台、無理な話なのだ。万人が納得する正しさを出すのは。

分かり合えると信じていたものに裏切られて、正しさを見失つた。それでも諦める事が出来なくて、傷ついて、苦しんで、悩み抜いて。全てを失つてしまつて、彷徨い続けて、それでも最後にしがみついてしまつたのは。

それはまだ、奴が捨てられずにいたからなのかもしれない。人間を。

呪いという名の、夢を。

正しさというものは、夢によく似ていると巧は思う。己の心の中にあるそれを少しでも曲げてしまえば、二度と立ち上がれなくなつてしまふ。自分が自分で無くなつてしまふ。そういうもの。

草加雅人にとって、オルフェノクの殲滅こそが宿命であるように。村上峽児にとって、オルフェノクの繁栄だけが生涯であるように。木場勇治にとって、オルフェノクと人の共存が理想であるように。決して受け入れられない、相容れない考えだつたとしても、その夢に魅せられ、憧れて、その後を続こうとする奴は必ずいる。その事に、人間もオルフェノクも関係ない。例えば灰の一片になつても、連綿と受け継がれていく物は、確かにあるのだ。

だから、木場が最後に選んだ答え。——木場勇治という人間が二度の生を懸けてまで、足掻き、もがき苦しんで、刻みつけた痕跡。迷い続け、血反吐を吐きながらも出した答え。

それを追い掛けてくれる誰かがこの世界にいるのなら、それはきつと。

——すべてに、意味はあつたのだと思つた。

○

立ち上がる他に道は無かつた。

鉛を詰め込まれたかのように動かない鈍重なこの身体が、いい加減うざつたい。それでも足を踏ん張り、歯を喰いしばつて、覆い被さつ

てくる棺桶型の置物を乱暴に押しつけた。

全身に刻まれた裂傷が小さく悲鳴を上げる。身体中を走り回る痛みがたまらなく鬱陶しい。苛立ちからふらつく身体を何とか立て直し、ようやく立つ。熱を孕んだ風が髪を荒々しく舐り、闇に慣れ切った目を眩い炎が出迎えた。視界が白く明滅する。喉の奥底で蠢く吐き気。煤けた服で顔を拭い、眼を開く。

——そこには、地獄があった。

紅蓮の津波が、加速度的に広がっていったその情景。砕け散った建材はどす黒く濁り、もうもうと立ち込める暗雲は止む気配を見せず、まるで世界全てが燃やし尽くされてしまったかのよう。

この光景を、巧はよく知っている。

黒煙に包まれ苦しみ抜いた死体が、ゴミのように転がっていた。誰か助けてくれと、行く当てもなく伸ばされた腕が、墓標のように突き立つその景色を、巧はよく知っていた。もはや、苦しみの叫びすら聞こえなくなつたそこに、俺はまた取り残されてしまったのだと、今さら知つた。

諦観が全身を、ゆつくりと満たしていく。行き場を無くしたどす黒い感情が降り積もり、頭が金槌で叩かれているように痛んだ。また、助けられなかった。救えなかった。ほんの少しだけ手を伸ばせば、届いていたかもしれないのに。歯を砕きかねないほど喰いしぼり、真っ赤に燃える虚空を睨みつける。零れ落ちたのは汗か、それとも血か。あふれ出る後悔が、口から溢れ出しそうになつた瞬間、

「——れ、か」

激しく燃え盛る意識に、弱々しい呻き声が響いた。

居ても立つても居られず、走りだした。

幻聴かもしれない。それに、もし本当に誰かが助けを呼んでいたとしても、生きている、という証拠はない。助けられる、という確証もない。だが、誰かが声を上げている。生きていたいと、叫んでいる。それだけで、充分だった。

死体が散らばる広場を駆け抜ける。泥のように纏わりつく熱気を振り払う。ひっきり無く噴き出す汗が背筋を滑り落ちる。乳酸がた

まり切った足は擦り切れた棒の如き有様だ。既に全身の感覚も、火炎に巻かれて薄れ始めている。大きく、呼吸。口内を黒煙が殺到する。喉を蝕む苦しみの黒煙。涙と額汗で視界が滲んだ。思い通りに動かないこの身体に、むかつ腹が立つ。降りかかる無数の痛苦に、どうしようもなく苛立つ。怒りで思考が真つ赤に覆われる。それでいい。どのような些事であれ、この身体を動かす力にさえなれば。

瓦礫の山を登り切り、犬のように舌を出して喘ぐ。

その眼下には、瓦礫に埋まる少女の姿があった。

「——おいっ！」

駆け降りながらも、叫ぶ。少女に反応は無い。閑散とした空間に繰り返される巧の叫びだけが、痛々しく響いた。

「おい、しつかりしろっ！ おい！ ——っ、」

辿り着き、絶句する。少女の下半身は、瓦礫に押し潰されている形になっていた。隙間から湧き出す真紅の液体の量は、想像を遙かに越えていた。噎せ返る芳醇な血臭。穢悪なまでの破壊衝動が、一瞬首を持ち上げかけた。握りつぶす。

今までに、死は何度も見てきた。しかし、こうして目の前でゆつくりと死に絡めとられていく人間を見るのは、無かった。

「せん、ぱい。……よかつ、た。ぶじ、だったんですね」

傍にいる巧に気づいたのか、見知らぬ少女の瞳が、ひび割れたレンズを透かして滑らかな弧を描く。この少女は、他人も同然の筈の自分の身を、本気で案じてくれているのだと、その瞬間わかった。どうして笑えるんだと、思わず叫びたくなった。

瓦礫に手をかけた。無駄だと喚く自分を殴り飛ばす。肉が焦げる音。あまりにも鮮明な衝撃。掌を侵す鋭い痛みに呻きつつ、構わず力を籠める。大地に根を張り巡らしたかのように、動かない。もう一度力を籠める。腕が折れても構わない。残り少ない体力を振り絞る。だが、忍び寄る死の気配は、少しも衰える事が無かった。

何の為に、俺はここにいる？ 怒りのあまり目が霞み、衝動的に瓦礫を殴りつけた。固く握り締められた拳から、ぽたりと一滴、血が漏れ落ちた。これこそ、悪夢だ。何もできない自分が心の底から憎かつ

た。

「はやく、逃げてください。も、うすぐ、隔壁が」

息も絶え絶えな少女の言葉を遮るように、何処かで何かが閉じられる音が聞こえた。

少女の双眸が、深い自責に歪んだ。

「しまつ、ちゃつ、た……」

数秒の沈黙。やがて、二人の間に静寂の帳がゆつくりと降ろされた。聞こえるのは、何かが燃える音だけ。最早、何もかもが限界だった。長時間の酷使により、痙攣し続ける足を引きずり、少女の隣に座り込んだ。地に伏せられた薄葡萄の頭が、ふるふると震えていた。

虚ろに揺らぐ薄い虹彩を宿した眼。今にも泣き出しそうなほど眼を潤ませているその表情は、何処か人形めいた無機質さを感じさせる。整った顔立ちに、すつきりとした鼻梁。その下にある唇は、噛みちぎられんばかりに、しつかりと引き結ばれていた。そこから隙間風に似た、か細い後悔が流れる。

「どう、しましょう。これじゃ、あ。せんぱい、が」

「……別に、お前のせいじゃねえだろ」

「いいえ、わたしが、わたしさえ、いなければ。せんぱいは、にげ、られた……はず、なのに」

「だから、」

思わず、口調が強くなった。震えた肩を見て、自分の不必要なまでの無愛想な挙動を悔やんだ。

「……もう、いい」

「……………わかり、ました」

そして、沈黙。

自分が未だに一夜の夢の中にいるのか、まだ判別がつかなかった。夢と断言するには、あまりにも現実感が有り過ぎる。未だ燃え続ける炎も、全身を蝕む裂傷も、もたれかかった瓦礫から伝わる熱さも、全てがリアルだ。しかし、この場所は現実から乖離し過ぎていた。

中空に浮かぶ赤い球体を見上げる。地球儀を際限無く膨れ上がった様な形のそれは、幾つもの円環を周囲に纏わせ、その巨体から耳

障りな警告音を吐き散らし続けている。そういえば、ここが一体どこなのかすら、分からないままだ。自分の記憶は、王との決戦を最後に途切れている。となれば、ここは王が産まれた場所に違いないのだろうが、それにしても、小綺麗だ。そこまで考えて、止めた。ここが現実か夢かなど、どうでもいい。どうせ、答えなんて見つかりはしないのだから。

「せん、ぱい……」

声に振り返れば、少女がこちらを見上げていた。瞳の色彩が、消えつつあった。生々しい死の香り。それを振り払いたくて、巧はわざとぶつきらぼうに返した。

「何だ」

「手を、」

「は？」

「手を、にぎつ、て、もらえませんか……?」

嫌だ、と反射的に言いかけて、止めた。少女の相貌は、こうして喋れているのが不思議なほど、蒼白だった。遠のきつつある意識を引き戻すように、巧は自分でも驚くほど優しく、少女の柔らかな手を握り締めた。

「……あつた、かい……」

「そりや、熱いからな」

「ありがとうございます。これで、未練は、なくなりました」

「バカ、大した事してないだろ」

笑みを浮かべる少女を、軽くこづく。弛緩した空気が二人を包んだ。

いつの間にか、熱さを感じなくなっていた。

そういうえば視界も、やけに薄暗い。

「せんぱい、どうか、生きて——」

次第に、少女の声も遠のいていく。全身が、黒いベールに包まれていく感覚。

とうとう夢から醒めるのか、それとも夢でも眠るのか。どちらでもいい。

ただ、目の前の少女が助かればと。叶わない筈のそれだけを願うて。

深い暗闇の中に、乾巧の何もかもが消えていった。

——全工程完了　ファーストオーダー実証を開始します——

第一節「胎動」

廃墟となつた高層ビル群の一角。薄暗く、人の営みの痕跡すら消え去つた一室。

静寂と薄闇が充満し、床に積もつた埃が、幾重にも膜を張り巡らせたりビング。かつて、新都の閑閑な風景を一望できたベランダは、役目を無くし手持ち無沙汰に突っ立っている。割れた窓から入り込むのは、街が生み出す瘴気混じりの炎光。

その明かりに照らされ、塵まみれの床に異様な陰影を映し出しているのは、およそ人の物ではない灰色の躯体。古代の彫刻を連想させるその身には、何らかの生命を示唆する、精巧な意匠が施されていた。

——オルフェノク。

死の淵から這いずり出てきた、異形の魔物。

もはや真つ当な生命が息づかぬ魔境。おどましき十三の異形が並び立つ中心に、しかし妙齡の女が一人、平然とした様子で居座つていた。

闇の中でも栄える紅唇は、恐ろしい程に艶めかしい。墨汗に融かし込んだように黒く、滑らかなウェーブのかかった長髪が、流れ込む温風に揺らぐ。怜悯な印象を与える切れ長の瞳の奥には、禍々しい情念がゆつくりと渦を巻いていた。

「——随分、遅い到着ね」

不意に、女が口を開いた。鈴の音が鳴るような声。続いて、かつ、と鳴り響いた靴音。

その瞬間、密室に籠る悪意が、許容量を超えた。

息苦しさを越えて、窒息死しかねない極限の悪意。得体の知れぬ「何か」がいると、そう判断した異形——スズメバチの特質を持つホーネットオルフェノクが、瞬時に装填された毒針を、紫電の如き速度をもって背後の闇へと向けた。決して狙いは外さない。視界に一ミリ

でも入り込んだ瞬間、撃ち殺す。出来ない事では無い。牽制で逃げ場を無くし、四肢を撃ち抜き、頭蓋を木つ端微塵にし、脳漿を散りばめるまで一秒も掛からない。満点の殺意が射線上に収束する。

だが、その腕は、女によって遮られた。

臆す事なくむしろ案じているかのように、女は怪物の腕を撫で、次に五体に絡みつき、そしてその手は背中にも達し、女は怪物を躊躇なく抱き締めた。豊満な肢体から伝わる柔らかな感触が、ざらついた皮膚に染み込んでいく。乳房が胸板で軟体動物のように、ぐにゆりと形を変える。

数秒の逡巡。やがて、ホーネットオルフェノクは渋々といった様子で腕を下げた。直後突き刺さる嫉妬と羨望の粘ついた視線。女は、ただ笑みを浮かべるだけだった。

「——飼いだには、きちんと躰けをしておかなければね。後で痛い目を見る事になるよ」

冷たい暗闇から、かつかつと耳障りな靴音を立て、瘦身の男が両手を上げながらその姿を現した。初対面の人間を、無条件に安堵に導く柔和な笑み。しかし、理知的な眼差しには、虚無的なまでの暗闇が、濃く彩られていた。

レフ・ライノール——かつて、カルデアの技術顧問として名を馳せ、爆破テロによって命を落としたと思われていたその男は、今やカルデア崩壊の原因を作り出した大罪人として、生きていた。

異形から離れ、庇うように前に立ち、女はレフと向かい合った。その形相は、濃厚な侮蔑に歪んでいる。

「忠告には、感謝するわ。けれど、貴方の方こそ、配下の手綱は握っておいた方が良くないじゃないかしら。——人間、全滅させたそうね」

女のヒールが、湧き上がる苛立ちを隠せずに、こつこつと床を叩く。瞳に宿る熱が、燃える勢いを増した。知らず、周囲の殺気がその厚さを増す。

しかし、レフは気にせず、厭らしい笑みを浮かべた。

「何、大したことじゃない。どうせ、この時代の人間のほとんどは、君達のエネルギーに耐えられないだろうからね。言ってしまったては悪

いが、無駄足を踏んでしまっていたわけだ、君達は」

「余計なお世話。けれど、貴方は一体どうするつもりなのかしら。貴方、失敗したんでしよう？ カルデアの——」

「その名を、口に出すな」

レフの纏う空気が、比喩抜きに変化した。

あくまで人のカタチに留まっていた害意が、脆弱な器から溢れ出し密室を蹂躪していく。空を覆い尽くす黒雲が雷鳴の唸りを上げる。怯えから唸る異形の吐息が白く輝く。満ちていくどす黒い殺意。滲み出る底無しの邪悪。圧倒的なまでの力の奔流。脳味噌が理解を激しく拒む。女の眼には、背後に映った男の影が、まるで、まるで——
「不愉快だ」

たったひと言に溢れ出る憎悪を全て詰め込み、心底蔑むように吐き捨てて、レフは黙り込んだ。女も男の力の一端を見た以上、沈黙を守るしかなかった。

重苦しい空気が一室を満たす。吐息だけが刻々と満たされていく。一瞬の間、窓から見える分厚い黒雲の隙間に、青く輝く一条の流星が掠めた様な気がした。同時にレフが、大きな溜め息をついた。隠しきれない嫌悪がちらついている。

「どうしたの」

「……いやはや。ロマニが生き残ってしまった以上、何らかの介入があるだろうと予測してはいたが——どうやら、カルデアを買い被り過ぎていたらしい。笑い種だが、笑えない」

「わざわざ、関わるほどでは無いとっ」

女の疑問に男は、両手を広げて嘲笑った。

「無論。だが手抜きはしない。死に損なった彼らには、ちゃんと野垂れ死んで貰わなければならない義務がある。——しかし、あの被害状況では、ここで事切れて終わるだろう。私も鬼じゃあない。最期の一時ぐらい、自由に足掻かせてやろうと思ってね。いわゆる、慈悲という奴だよ。これは」

「そう——随分、悪趣味ね」

それきり、女は興味を無くしたようだった。生白い手が、怪物の顎

を撫でる。洞穴に響く風に似た、低い呻き声が漏れた。

女——影山冴子にとつて、周りにいる十三匹の怪物は、腹を痛めて産んだ我が子も同然だった。

王に注入された、強大なオルフェノクエネルギー。男根の先端で時を待つ幾億の精子の如く、冴子の体内を這いずり回るそれに耐えられない人間は、決して多くはない。ほとんどが、因子に打ち負かされ、内部を食い荒らされ、全てを灰に帰してしまふ。

確固たる自我と強靱な肉体。その二つを兼ね備えた人間だけが、人類の進化における偉大な一步に、貢献出来る権威を与えられる。だが——余りにも、少なすぎた。地球には、骨の髄まで腐り果てた肉袋が増え過ぎたのだ。

裏切りが横行し、憎悪が連鎖し、殺意が充満する。眨め、蹴落として、蔑み、苦しめる事に一切の躊躇いが無い。他人の積み重なる不幸に蜜の味を覚え、あらゆる尊厳を傷つけてもなお飽きないと言わんばかりに、己の快樂だけを追い求める執念には、一種の感嘆すら覚えてしまふ。

こんな生命がいることに、今まで気づかなかつたとは。そう思うと、冴子がかつて人間だった自分にすら耐え難い吐き気を覚えてしまふ。

しかし、いくら個で優つていても、戦争は数で決まる物と相場は決まっている。便所の片隅に潜むゴキブリ一匹を放置しておけば、いずれ数千匹に増えるように。このまま人間の増殖を放っておけば、オルフェノク——いや、この惑星は破滅を迎えてしまふだろうと、奇妙な確信が冴子の胸の内にはあつた。

——「王」さえいれば。と冴子は思う。

——「王」はいない。と冴子が答える。

無限に続く自問自答。ループ。ループ。

自分達は何処に辿り着けば安穩を手に入れられるのかという煩悶、一刻も早く状況を改善させなければ滅びてしまふという焦燥。恒常的に襲い来るそれらに精神が壊れかけた時、冴子はある噂話を聞く事になる。

聖杯戦争。

極めつきの人非人である魔術師達が、万能の願望器である「聖杯」を巡り、血みどろの争いを繰り広げる儀式。

曰く、聖杯を手に入れた者は、どのような願いでも叶える事が出来る、らしい。

馬鹿らしい。一笑に付す価値もない、冗談の内にも入らない、奇跡。だから、縊った。

到底信じ難い与太話であろうとも、そこに未来があると、信じたいと、思ってしまった。

そうして、様々な紆余曲折を経て、影山冴子はこの暗闇にいる。未来を創るために、ここにいる。

「聖杯の寵愛——果たして、君達は、受けられるかな？」

何気なく呟かれたひと言に、冴子は口端を強く噛み締めた。長細い血糸が、生白い肌に赤い道を彩る。

眼前の男の言う、王の寵愛さえ受けられれば、「王」が復活する道を作る事が出来る。

そうなれば、もはや人類に用は無い。

オルフェノクだけの楽園が、産声を上げるのだ。

ある筈も無い奇跡を探し求め、苦難の末に、ようやく掴む事が出来たか細い糸。離すわけにはいかない。何があっても。何としても。

滅びゆく運命など、認めない。

このままでは、終われない。

終わるわけには、いかない——。

未だ煌々と燃え続ける街を睨みつけ、冴子は決意と共に埃まみれの空気を飲み下した。

○

目覚めは唐突に降って来た。

硬く閉じ切った目蓋を押し開けば、どす黒い黒雲が立ち込めた夜空が視界いっぱい広がった。背筋を覆う尖った感触。ちらちらと香るガソリンの臭い。まだ夢の続きを見ているのかと、寝惚けた頭で巧はそう考えた。

起き上がり、がしがしと頭を搔き巻く。長い間寝転んでいたのか、大量の礫が次々と頭から転がり落ちていった。身体の節々が、鎖か何かで縛りつけられているように痛む。一体何があったのか。未だに記憶は不鮮明なままで、思い出せない。その事がひどく、不愉快だった。

周りの景色にも、見覚えは無い。世界中の廃墟をかき集め、自由気ままにばら撒けばこういう街が出来上がるかもしれない、という他愛ない感想が湧くだけ。強いて言うならば、かつて住んでいた場所に似ている気がする。だが、あの優しく暖かい洗濯舗に相応しい街並みとは、とても思えなかった。

やはり、まだ夢の中にいるのか。そこまで考えた巧の脳裏を、一人の少女が過った。

——手を、握って——

「あいつ——！」

飛び起きた。すぐ傍にいた筈の、血塗れた少女の姿は無い。それどころか、あれだけ積み重なっていた大量の瓦礫さえ、その凶体を忽然と消していた。

何かが、おかしい。平均以上に鈍感な巧にも、自分がどれだけ異常な状況に放り込まれたのかが、ようやく理解出来たのか。全身を強い警戒が満たし、節くれ立った拳が強く握り締められた。もはや夢とは思うまい。そうさせないだけの「何か」が、この澱んだ街に渦巻いている。根拠も無く、そう思った。

張り詰める緊張の糸、今にはちきれんとばかりに膨張し続ける圧迫感。知らず、足が退がった。冷や汗が背筋を流れ落ちる。呼吸を忘れ、喉がかさつく。

「——」
心配。

左。角。光。

何かが、いる。

悟ると同時に地を蹴った。急激な運動に肺が焼けつく。逃げ出した巧の気配を察知したのか、得体の知れない気配が爆発的に膨れ上がった。今まで感じた事の無い、異様な感覚。逃げ切るしか無い。

丁度よく転がっていた、折れかけの鉄パイプを手に取り、でたらめな方向に投げつける。瞬間、角から無数の光弾が、中空に放り込まれた鉄棒目掛けて射出された。つるべ打ちにされ、数秒と経たず穴だらけになったそれに、自分の未来を幻視した。

相手を見る暇などあるわけが無い。たまたま目についた雑居ビルの木製ドアを蹴りつける。幸いにも蝶番が壊れていたらしく、扉は鈍い音を立てて倒れ込んだ。もうもうと立ち込めた埃の群れに咳き込みながら、階段を駆け上がる。二階。踊り場。三階。足音が、ついて来ている。心臓が早鐘を打ち、頭が割れんばかりに痛んだ。四階。視界は点滅を繰り返し、意識は遠くなりかけていた。呼吸がやけに大きく響く。次々と湧き上がる熱だけが、この身体を走らせている。疲労は限界を超え、自分が何処をどう動かしているのかさえ、見当がつかない。五階。行き止まりだった。足音、四階にいる。咄嗟に、部屋入口の凹みに身を隠した。

しばらくして、足音が、止まった。正体の分からない荒れた呼吸が、白く長い廊下に反響している。

思わず口に手をやった。漏れ出す吐息は灼熱だ。口を押さええている掌が即座に汗ばむ。吸って、吐く。ただそれだけの行為があまりにも遠く感じる。

——足音が一步、近づいた。躊躇は出来ない。逃げ道が無くなった以上、先手を打つ以外に道はない。

——足音が二歩、近づいた。巧の身体が、臨戦態勢に入る。ひゅう、と細い呼吸が、小さく響いた。

——足音が、三步。細い白魚のような指が、壁を突き出した瞬間。

行った。

前も見ずに、走り出た。驚愕の気配を感じる間も無く、巧は相手の懐に飛び込んだ。抱き寄せた腰は、想像以上に細く柔らかだった。そのまま、倒れ込み、押し掛かる。脇に膝を詰め込み、腹に尻を乗せてマウントポジションを取った。甲高く黄色い悲鳴が耳をつんざく。状況を理解した敵が、荒々しく暴れ出す。だがマウントを取った以上、恐れる物は何も無い。殴って気絶させれば全てが終わる。一瞬の安堵を感じた巧の腹筋に、ぴたりと、華奢な手が添えられ、不可解な文言が呟かれたと同時に爆発した。

「がっ——！」

その衝撃は内臓を攪拌し、脊椎を揺るがした。未知の攻撃。全身を貫いた熱波に、脳髓が焼き切れかけた。

熱く燃える脳味噌に、穴ぼこになった鉄パイプの姿が今更過る。熱くなっていた自分を恥じた。だが反省したところで、事態が解決するわけが無い。

吹き飛ぶ身体を押さえる術は結局見つからず、あえなく巧は壁に叩きつけられた。息が切れ、ぐわんと頭蓋が揺れる。

手加減など、している暇など無い。目の前の敵が、自分を確実に殺す事が出来る存在だと、巧は確かな実感を持って理解した。

まだ死ぬない。死ぬわけにはいかない。自分にはまだ、会わなければならぬ人がいる。

全身を、幾何学的な紋様が走り抜ける。蒼く収縮する光の波。魂の奥底で、どす黒い衝動が吠え立てる。床に積もった埃が、呼応するかの様に虚空に浮かび上がった直後、巧の額に指が突き付けられた。息切れた叫びが、わんわんと響き渡る。

「——大人しくっ、しなさいっ!! もう、あんたに、勝ち目は無いわよ」その瞬間、濁った黒雲が白刃のような風に裂かれ、割れ目から差し込む月光に照らされた時間が、ゆっくりと動きを止めた。廊下にへばりついていた暗闇が、徐々に削ぎ落とされて行く。相手の表情。思わず笑ってしまうほど、呆気に取られていった。

「——あ、貴方……」

目の前で下ろされた指が、力無く垂れ下がる。巧の紋様も、見られる事無く消えていく。その事に、僅かに安堵した。

「——四十八番」

少女の顔。深い安堵が過った、気がした。

○

「そ、それじゃあ、今いるのは貴方一人だけっ!? 他の適正者はどうしたの!?!」

「俺が知るか」

「嘘でしょ……そんなの、冗談じゃないわよっ。何で私ばかりこんな目に遭うのよっ!」

俺もまさかこんな目に遭うとは思ってなかった。

目の前でヒステリックを起こしかけている少女に、巧は思わず眉を顰めた。オルガマリー・アムスフィア、と長つたらしい名乗りをあげた少女が長広舌でまくしたてた全てを、巧は半分も覚えていなかった。

カルデア。魔術師。レイシフト。何とか理解出来たのはそこまでで、後は覚えていない。というより、話の三分の二を、レフとかいう奴の話題が占めていたせいなのもあると巧は思う。

ふあ、と小さい欠伸が漏れた。

眼前の男が、自分の話を全く聞く気が無いとそれで分かったのか。オルガマリーは、唸り声をあげつつ頭を抱えてうずくまった。深い溜め息をつき、巧をちらと見上げて、また溜め息。

初対面であるにも関わらず、不躰極まりない態度に加えて、先程喰らったあの攻撃。腹と頭が痛くなり巧の機嫌はますます悪くなった。自然と、言動にも棘が入る。

「何だよ」

「……何でこんな奴が、レイシフト適正者選ばれて。——ああ!

そういえば貴方、さつきはよくも乱暴働いてくれたわね!? 一体、どう落とし前つけてくれるのかしらっ。一般人が魔術師の当主に齒向かうなんて、前代未聞だったらありやしないっ」

びしっ、と鼻頭に突きつけられた指を払い除ける。

「落とし前? 俺が何をした」

「何した? じゃないっ! 人の腰に抱きついて、挙句の果てに、押し倒してくれたじゃないっ! 何処をどう酌量しても、私を襲おうとした様にしか見えないのよ!」

「そんな物好き、いねえだろ」

「その物好きが、貴方なんでしょうがっ!!」

心底、うるせえ。

ますます機嫌が悪くなる巧を他所に、ひとしきり叫んで満足したのか。ぜえぜえと息を切らしてオルガマリーは立ち上がった。妙にスツキリとした顔をしているのが、ムカついた。

取り繕う様に、一度だけ咳をするオルガマリーを見て、巧は既に何もかも放り出して、帰りたい気分になっていた。というか、帰りたい。「……とにかく、私と貴方以外の適正者を探しましょう。どのような事態であれ、特異点に送られた以上、修正、修復は私達カルデアが果たすべき責務なんですから。何でか、カルデアと通信が繋がらないのは置いといて。……四十八番? ちよつと! どこ行くの貴方! こらっ、待ち、なさいってば! こらっ!」

さつきから痛み続ける腹をさすりながら去ろうとする巧の裾を、逃げ出した子猫を捕まえるが如き手つきで、オルガマリーが掴んだ。思いのほか勢いが良かったのか、巧はたたらを踏んで危うく転びかけた。気まずい沈黙。掴まれた裾を振り払い、ゆっくりと、巧は振り返る。その視線、既に人を刺し殺せる域に達していた。うぐ、と喉仏から詰まった音が聞こえたが、しかしオルガマリーは怯まない。

「……いい? 四十八番。例え、一般協力者である貴方にも、いいえ、一般協力者だからこそ。冠位指定である特異点修復は、最優先に成し遂げなければならない事態なの。つまり、下っ端の下っ端もいいところの貴方は、カルデアの全権限を持つ私の指揮に、従わなければならな

い義務があるのよ。だから、」

「義務？」

限界を超えた苛立ちに吊り上がった巧の形相を見て、今度こそオルガマリーは怯んだ。

「俺はそういうのが一番嫌いなんだ。自分の面倒くらい、自分で見たらどうだ。……大体、その四十八番ってのもやめろ。名前も呼べねえのか、お前」

「……じゃあ、藤丸。はい、これでいいでしょう？」

「——お前、わざとか」

「は？ 何言って——ちよつと、藤丸っ！ もう、何なのよあいつ……！ 待ちなさいってば！」

いい加減、付き合い切れない。未だ聞こえる叫び声を振り払うように、巧は歩き出した。今思えば、半分でも話を聞いていた自分が馬鹿だった。どうせ今までに話された何もかもが、おふぎけで造り出した妄想なのだろう。

何が魔術師だ、馬鹿らしい。付き合ってられねえや。

思案に耽りつつ、角を曲がろうとして——止まった。今思えば、止まらなかった方がまだ幸せだっただろう。

すぐ横の割れかけたショーウィンドウ。なんてことない、廃墟には有り触れた光景だ。問題は、それに映っている物。まだ十六歳半ばの若い顔つきをした少年が、鬼の如き形相でこちらをねめつけていた。

「——は、」

呼吸が、止まる。恐る恐る、手を顔に伸ばせば、ガラスに映る少年もそれを真似た。

深い海色の目。ぼさついた黒髪。硬く引き締められた唇は無愛想極まりなく、不機嫌に歪められた眉が、今だけは驚きに曲がった。

もう一度、鏡を見て、自分を映す。

そこには、明らかに自分以外の少年の顔が、映っていた。

第二節「吼える孤狼」

出来の悪い夢を見ている。

何故自分は、見覚えの無い街中を見知らぬ女と二人で、暢気に歩いているのか。

「ちよつとつ、貴方つ、歩くの速いのよつ！　ねえつたらつ、ちよつと聞いている!？」

ずかずかと、道路に散らばる瓦礫を蹴飛ばしながら乱暴に歩き続ける巧の四、五歩後ろを、オルガマリーが息を弾ませながら必死についていく。当然、男と女の間にある歩幅の問題に対する気配りなど、巧の脳味噌に存在するわけが無く。少女が追いつけず、時には足を取られて転びかけても微塵も気にかけることなく、巧はひたすら思案に暮れていた。

最初からおかしいと、思っではいた。

燃えている知らない場所。瓦礫に押し潰された眼鏡の少女。意識を失い夢から醒めると思ったら、今度は廃墟と化した燃える街。そして最初に出会ったのが、ヘンな妄想を撒き散らすアブナイ女。仕上げに鏡を見れば、自分が自分で無くなっていると来た。悪夢もここまで来るといつそ笑えてしまう。

一体、戦いはどうなったのか。真理は、啓太郎は。自分が守りたかったものは、果たして最後まで守り通す事が出来たのか。表しようのない昏い焦燥が、心臓をじくじくと苛む。低い、舌打ちが漏れた。「ちよつと！　……あつ」

ぐぎやっ、と曳かれた犬のような呻き声と同時に、何か重いものが転ぶ音が聞こえた。さすがにうんざりして振り返る。地面の上へへたり込み、耐え難い羞恥と屈辱から涙目になっているオルガマリーの姿。巧は大きく溜め息を吐いた。

「お前、いつまでついてくるつもりだ」

「……仕方ないでしょ。認めたくないけど、貴方も一応、適正者の一人なんだから。カルデアに所属している以上、所長である私は貴方から

眼を離すわけにはいかないのよ」

「だから、俺はその適正者とかじゃないし、藤丸とかいう奴でもない。何度言ったら分かるんだ？」

うざったそうに放たれた巧の言葉にオルガマリーは苛立たしげに眉を歪め、突き刺さんばかりの勢いで巧に指を突きつけた。

「何度言っても分からないのは、アンタの方でしょうがっ！ そうじゃなきゃ、名前は——別として、その礼装は一体何なのよ？ ……こらっ、脱ごうとするなっ！」

巧は裾口に延ばされた手を引っぱたいて、後ろも見ずに歩き出した。叩かれた手を押さえぐちぐちと文句を言いつつ、立ち上がったオルガマリーがその後ろを続ける。

「——貴方、そんな性格でよく生きてこれたわね。どうせ、友達も少なかったんでしょ」

「お前に言われたくない」

「はあっ!? ちょっととそれどういう意味よっ」

「言葉通りの意味だ」

オルガマリーの顔が暗がりでもわかるほどふるふるとうるうると痙攣している。

「……とにかく、さっきのは全部忘れることっ。わかった!? ほらさっさと前見て歩く！」

つい数秒前まで涙目だった事実も無かったかのように気丈に振舞うオルガマリーを見て、真理に似ているなど取り留めも無く思う。特に、気に食わない事があればすぐ怒鳴る所とかそっくりだ。

——あんだね。ずっとそんな態度だと、いつか絶ッ対痛い目見るんだから。あたし、そんな時になって助けてくれて言われても知らないからね！

いつまで経っても無愛想かつ無神経な態度を取り続ける巧が気に食わないのか。真理は事あるごとに、そうやって突っかかっていた。当然、巧が黙っている筈もなく。売り言葉に買い言葉でエスカレートするのはよくある事だった。

——バーカ。何でお前なんかに助けてもらわなきゃならないんだ。

こつちから願ひ下げだぜ。

——あつそ。あれ？　じゃあこの前千円貸したげたのは、一体どこ
の誰だったのかなあ。

——お前、それはっ。

——何？　またタツ君お金貸してもらったの？　もう、駄目だつて
俺言つたじゃんか！

——おい真理！　お前よくもっ。黙ってろつて言つただらうがっ
！　おい啓太郎、いい事教えてやる。こいつな、最近木場の奴に——
——巧！　あんたほんといい加減に——！

激しい暴露合戦の末、お互いに隠していたあらゆる秘密を微に入り
細を穿つまでバラし合つた結果、啓太郎の機嫌を激しく損ねてその日
の晩飯は無くなつてしまった。

当然、次の日はお互いに口を利かず、一週間は子供じみた罵り合い
が頻繁に巻き起こり、最終的には険悪な空気に耐え切れなくなった半
泣きの啓太郎による必死の休戦協定が両者の間に結ばれ、事態は終息
を迎えた。

巧は、懐古を終えると、再び歩き出した。ただしその歩調は、さつ
きより緩やかで、柔らかい。それは混乱し切つていた心の整理が、よ
うやくついてきた事もあるが、ただひたすらに懐かしい追憶が、巧の
ささくれ立つた心をゆつくりと解きほぐしていつたせいもある。

よく考えれば、自分が自分で無くなっているのが何だというのか。
一度死んでオルフェノクになって生き返つた事に比べれば、ほんの些
細な出来事では無いだろう。

元々突拍子もない事態に耐性がついている巧は、徐々に自分が置か
れている状況を受け入れつつあつた。

ようやく追いついたオルガマリーが、巧の右隣に並ぶ。乾巧という
人間とまともな会話を試みるだけ時間の無駄だとようやく理解した
のか、今度は黙々と歩いている。しかしその眼は、何か物問いたげな
光を含んでいた。

突き刺さる視線を気にも留めず、巧はマイペースに歩き続ける。ふ
と、空を見上げた。冴え冴えと輝く月に濁つた雲が覆い被さり、僅か

に混ざった赤光がちらちらと瞬いている。湿気を卷いた風が、砂埃を巻き込んで天高く舞い上がる。多分明日は曇るだろうなど、巧は根拠も無くそう思った。

○

結局、適正者とやらは、一人も見つからなかった。

生存者さえ見つけられなかった、というのが正直な所だ。とつくに避難している可能性を考えたが、ならば街全体が燃えているという異常事態が放つて置かれる筈が無い、というオルガマリーの辛辣な言葉によって、ばつさりと否定された。

申し訳ばかりの探索を終えて、半ば崩れ落ちた教会の古びた扉を開ける。蝶番が軋む鈍い音が、夜の中天に響き渡った。

幅広い石畳に沿って均一に並べられた針葉樹が緩やかに揺れている。満ちる夜気を吸い込めば、雨の予感を混ぜ込んだ空気が、肺に染み込んでいった。

何故か、ここまで付き合う羽目になってしまった。もちろん何度も逃げようとはした。が、その度に目の前の高慢ちきな女が引き起こすであろうヒステリックを想像して、気が滅入った。

見知らぬ街の中、あの妙な攻撃から逃げ切れる自信はあまり無かつたし、殺意にも似た陰惨な気配が、目の前の女と合流してからずっと鼻先を漂っている事が、巧の足を無理にでも止めさせていた。バイクでもあれば話は別だったのだが。

くん、と獲物を見つけた猟犬の如き仕草で、巧は鼻をひくつかせる。随分薄くなったが、自分達に対する確かな害意が、霧のようにじつとりと辺りに立ち込めていた。

梢が作る深い闇に紛れて、誰かが獲物を見定めているような目つきで、こちらを見ている。喉仏を締めつける圧迫感が、教会を離れるにつれて段々と色濃くなっていく。まるで、底無し沼に気づかず、自ら沈み込んでいく感覚。

敷石を一つ踏みしめるごとに、気配がまた一段と濃くなった。知ら

ず、掌に嫌な汗が滲む。

——面倒臭え。

「——恐らく、だけど。私達以外に、レイシフトした人間はいないでしょうね」

教会を出て、なだらかな傾斜の坂を下りている途中。いつの間に拾ったのか、考え込むようにして瓦礫を握り締めていたオルガマリイが、一連の調査をそう結論づけた。

「何でだ」

オルガマリイが声を出した巧を凝視し、訝しげな表情を作った。小一時間も自分を無視し続けていた男が、いきなり話し始めたのだから、当然と言えば当然なのだが。

喋る珍獣を見たような目つきに耐え切れず、巧は苛立しげに首を振って先を促す。我に返ったオルガマリイは、人差し指を立てて話し出す。

「……さつき、貴方の話を思い出してただけど。私と貴方に共通する特徴が一つあるでしょう?」

分かるわよね? という目つきをされても、まるで見当がつかない。巧の視線にその思考を読み取ったのか、あからさまな失望が、表情に浮かんだ。こいつやっぱロクな奴じゃない。巧の脳内で、オルガマリイの顔にそう落書きが入った。

「——二人とも、コフィンに入らず、生身でレイシフトに巻き込まれた事つ。……あのコフィンには、いざという時のセーフティが付いてたから、もしやとは思ってたんだけど。——前途多難……どころじゃないわね。ああもう、何だって私がこんな目に……」

「大変そうだな」

気の無さげな巧の返事。オルガマリイの眉が、不快げに歪んだ。

「……ねえ、貴方。何でそんなに平気な顔が出来るの? カルデア内部にテロリストがいるかもしれないのに。それに私達がこうしてもたついている間にも、私のカルデアが大変な事になってるかもしれないのよ!?!」

「どうにもならねえ事を考えたって、仕方ねえだろ」

「それはっ！……確かに、そうだけど」

元々、オルガマリーは聡明だ。心身共に落ち着いていれば、どのような現実でも受け入れ、飲み下すだけの力はある。嫌がらせとしか思えないほど立て続けに押し寄せた災いは、もはや遠い過去の出来事ではかなく。だから今さら喚いてもどうにもならないと、冷静になつた今ではよく分かっている。

しかし。

頭でそう理解出来ても、どうしても割り切れない物が心にあつた。

——カルデアス。

地球の生存を示す、希望の灯。

アニメスファイア家が産み出した奇跡の産物。

それを管理する事が、アニメスファイア家代々の当主に受け継がれていくべき使命であり、オルガマリー・アニメスファイアが、オルガマリー・アニメスファイアである為に必要不可欠な宿命。カルデアスが無ければ、私の存在は誰にも認めてもらえない。私は私でいられなくなる——半ば本気で、彼女はそう思っていた。

だから、どうしても諦め切れずにいる。未練がましいと、自分でも思う。時計塔を続ける十二のロードにあるまじき心情。だが——

黙りこくつたオルガマリーの複雑怪奇極まりない胸中を他所に、巧は暇そうに辺りを見回しつつ、密かに付き纏う気配の元を探していた。

やはり、見当たらない。というか、本当にいるのかさえ怪しくなつて来た。何度も死線を潜り抜け、先鋭化されたオルフェノク感覚でも判別できないほど、薄らいだ存在。ともすれば、夜気に紛れて消えてしまいそうなほど儂い。しかし、乾巧が十九年間積み上げて来た人間としての直感が、危機は必ず存在すると告げていた。

「——どうかしたの？」

ぼうっと暗がりを見つめる巧の顔を、胡乱な目つきでオルガマリーが覗き込んでくる。

「何でもない。それより、これからどうすんだ。まだ探すのか？」

「——いいえ、それはもう後回しにしましょう。こうなったら、私達だ

けで、この特異点の原因を発見するしかありません」

その言葉を聞いた瞬間露骨に顔を顰めた巧を完全に無視して、オルガマリーはつり上がった眼差しで、彼方まで包み込んでいる炎の海を眺めている。その危うげな雰囲気、巧は自分が付き合わざるを得ない事を瞬時に察知し、深いため息を吐いた。

「出来んのかよ」

投げ掛けられた言葉にも振り向かず、オルガマリーはぼそりと、

「このまま何の収穫も無しで帰れば、カルデア解体は必至。……そんなの、冗談じゃない。何としてでも、結果を残さなきゃ。私は、」
誰にも認めてもらえない。

搾り出すように吐き出されたオルガマリーの言葉。そこには、煮え滾る感情が僅かに見えた。

○

喧噪の絶えた新都を遠ざかりしばらく歩いていると、やがて冬木大橋の巨大な姿が二人の視界に飛び込んで来た。風が強い。黒々と濁る水面には、新都と同じように煌々と燃え盛る深山町の情景が静かに浮かび上がっていた。

オルガマリーがこんこん、と錆びついた欄干を叩く。鈍い音が深夜の静寂を切り裂いた。

「2004年の冬木に、一体何が起きたのかしらね」

「さあな」

「……貴方、好奇心が欠如してるって言われた事あるでしょ」

「いいから黙って歩け。寒いんだよここ」

「……ほんとうに、何でこんな奴と……」

あらゆる不平不満がだらだらと垂れ流されてくる背後を無視して、巧は黙して歩を進めた。その表情は硬い。辺りを見回す視線は警戒に満ち、尖った神経が充満する悪意に反応し続けている。この橋に辿り着いてから数秒も経たない内に、気配の濃度は飽和点に達しようとしていた。

嗅ぎ慣れた、殺意の匂い。視覚化出来るのではないかと思う程に、濃い。

全身から蒼い炎が燃え上がる錯覚。

脳髓を侵す絶え間ない疼きに、視界がぐらりと曲がっていく。

「——あれ、誰かしら」

背後から、疑問の声。俯いていた顔を上げれば、数メートル先の闇の中に、女が立っていた。

亡霊を思わせる佇まい。刀身の歪んだ槍を携えた影。黒衣の下の黄色い瞳が、こちらを見て大きく弧を描く。

むせかえるような、血の臭い。

瞬間、感覚が弾けた。

あれだ。

「——逃げろ」

「はっ？」

「早く逃げろっ!!」

叫ぶと同時に、女の姿が掻き消える。気づけば巧は飛び込んでいた。少女を突き飛ばし、その後で回避する。間に合う訳が無い。それでも身体だけは動いた。視界の端で白刃が閃く。間延びする緩慢な時間の中、自分の物ではない腕が、自分の意思を確かに伴ってオルガマリーの肩を掴む。瞬間、灼熱が背筋を食い千切り、閃光が脊椎を走り抜けた。到底耐え難い苦痛。視界が白く点滅する。世界が反転し眩い光に包まれる。上げた声は悲鳴に近い。それでも、手を止める訳にはいかない。脳天を焼き尽くされる中、少女の肩を突き飛ばした。

「——づっ、あ」

「藤丸!!」

「いいから、いけっ!!」

「行けるわけないでしょっ!!」

怒声に怒声を返しながら、オルガマリーは膝を折る巧に近寄った。苦痛に歪んだ表情。自分を庇って、出来た傷。思わず、唇を噛みしめ

る。血に濡れた礼装を脱がせて傷を診る。興味深そうに遠くからこちらを見つめる女はこの際無視する。考えが全く読めないが、通り魔同然の思考を理解出来ると思う事が間違っているのかもしれない。

「——っ」

脊椎を両断するかのように刻まれた裂傷。真一文字に引き摺られたそこから、未だにぷつぷつと血珠が噴き出している。幸い、出血の量はあまり多くない。この程度なら十数秒で完治できる。短い文言が呟かれ、オルガマリーの両手が淡く輝いた。治癒魔術の繁雑な刻印が巧の背中を包み込む。やがて、薄膜が剥がれ落ちるように魔法陣が消えた箇所は、もはや残痕すら残されていない——

「——うそ」

——筈だった。

啞然と口を開くオルガマリーを見て、くすくすと黒衣の女が、無垢な少女の如き微笑みを浮かべた。

「治る訳が無いでしょう。我が槍は『不死殺し』。たかが人間のちっぽけな魔術風情で、打ち破れる宝具ではありません」

「——宝具。まさか、貴方。サーヴァント……!」

戦慄に身体を波打たせるオルガマリーに、女——サーヴァント・ランサーは美しい笑みを向ける。

「在り方は大分異なつてしまいましたが、そういう事にしておきましようか——それにしても、なんて、甘美」

恍惚とした表情。女が頬にこびりついた血を指で浚い、口に含んだ。小ぶりの唇が指先を包む。眼を瞑り、皮膚に染みついた分まで丹念に味わっている。つ、と引き延ばされた銀の糸がか細く尾を引いた。ぎよくりと上下に揺れる喉。漏れる官能の溜め息。色濃い嗜虐を湛えた黄金の瞳は、確かに伏せる巧を捉えていた。

「死を目前にした人間の血は、得も言われぬ甘さがありますが——貴方の血は、特別濃厚ですね。まるで、永遠に死に続けているよう……生きたまま、標本にしましょうか」

膨大な魔力が女——ランサーの総身から立ち昇る。つい先刻までとは比べるのも烏澁がましい程の殺気。オルガマリーの足が退がり

かけ、しばらく躊躇して、止まった。怪訝な顔をする巧に、オルガマリーが呟いた。

「これで、貸し借り無しだからね」

「——お前」

巧を庇う位置に立ったオルガマリーを見て、ランサーの表情に愉悦が滲んだ。

「邪魔を、する気ですか？」

「……生憎だけど、こいつはもうカルデアの所有物なのよ、ランサー。そんなに欲しいのなら、引取り手続きを済ませてからにしてくれるかしら。そんな物、無いけど」

「その必要はありませんよ。どうせ、貴方は死ぬのですから」

その言葉に嘘は無いと、すぐに分かった。恐怖で脚が震える。逃げ出したい、という気持ちで胸が一杯になる。だが、逃げ出す訳にはいかない。もしそうすれば、二度と自分は立ち上がれなくなる——。

脚の震えを見たランサーが、くす、と小さな笑みを零した。

「……ですが貴方には、上等な食事を持ち込んで来てくれた礼を言わなければなりませんね。特別に——優しく、殺してあげます」

ランサーが蛇のようにその肢体をくねらせ、駆け出した。距離、僅か八メートル。一瞬で細切れにする自信があつたが、限界まで恐怖で熟成させてから殺す。その方が血肉にコクが出ると知っているからだ。二歩で半分を過ぎ、三歩で到達。手始めに、腕を切り飛ばす。それから先は単純作業でしかない。末端から徐々に削り取っていく。恐怖に歪む少女の相貌を幻視し、やがて訪れるであろう饗宴の時に、心の底から笑った。

それが、唯一の隙だった。

後ろ手に回されていたオルガマリーの手が動き、ルーン文字の刻まれた瓦礫が宙に投げ放たれた。ランサーの眼に、一瞬の隙が生まれる。好機。すぐさま大量の魔力が乱雑に送り込まれ、ルーンが音を立てて唸り出す。耳障りな眩暈。暴発寸前でようやくランサーが意図に気づいたが、もう遅い。

瓦礫は光を伴って、ランサーの眼の前で爆発した。

だが足りない。その程度でサーヴァントが止まらない事は分かっている。あくまでこれは本命から目を引き離す為の囮に過ぎない。

本命は、至近距離から脳天を打ち砕く、超高密度の魔力を込めたガンド。

莫大な魔力が込められた連撃が、噴煙を切り払い、女の元に殺到する。

——その全てが、紙屑のように消え去った。

「なっ——」

「それで対抗出来ると思っっている所が、本当にかわいらしいですね」

極限まで手加減されたランサーの蹴りが、オルガマリーの腹部を貫いた。張り詰めていた意識は限界を迎えて消失し、元々身軽な体軀は軽々と吹き飛ぶ。数メートル後方に重い物が落ちる音が、巧の耳に聞こえた。すぐ傍で、優しい気な声が囁く。

「——後で、ゆっくり楽しみましようね」

そして、遠ざかる足音。朦朧とする意識の中で、やけに鮮明に聞こえた。

——追想したのは、自分だった。

まだ、真理とも啓太郎とも出会っていない頃。オルフェノクである事に恐怖し、いつ殺人衝動に吞まれるか分からない空っぽの自分を嫌悪し続けていた。

ほんの少しでも手を伸ばしていれば、助けられたかもしれない命があった。

それでも、怖かった。

自分が人を手酷く裏切り、傷つけてしまう事を何よりも恐れていた。

結局、最後に残る物といえば、山のように積み重なる灰と、どうしようもない自分に対する底無しの後悔ばかり。

そんな俺にも、夢が出来た。

数え切れない離別の果てに、運命に抗い続けた男の尊い理想を受け継いだ。

あの時確かに聞こえた、頷く木場の最期の声。

——俺の出来なかつた事を、君が。

立ち上がる。ふらつく身体は、とつくに限界を越えている。泥のよ
うな眠気が全身に纏わりついている。

だが、立った。痛みで意識を叩き起こす。

「二度と、目の前で——」

倒すべき敵がいる。乗り越えるべき困難が見える。足はまだ動く。
拳はまだ作れる。

ならばは、一步踏み出すだけだった。

「死なせたり、するかよっ——!!」

——たまらず、吼えた。

そして駆け出す。内から湧き出す烈火の如き衝動。一步踏みしめ
るごとに、魂に刻み込まれた孤狼の遺伝子が脳髄にまで響く咆哮をあ
げる。闇に覆われた視界が眩い流線の中に融けていく。もっと、速
く。死と再生を躰すオルフェノクレストが蠢く。全身を迸るエネル
ギーが臨界点を迎え、いつしかその身体は、銀色に輝く外骨格に包ま
れていた。狼の遺伝子を配された異形。人類が行き着く成れの果て。
人の理を打ち砕く、唯一無二の進化系。

——乾巧は、ウルフオルフェノクに変身した。

第三節「白亜の運命」

「な——」

ランサーの気配に、驚愕が色濃く混じるのが確かに見えた。僅かに緩む気配。数舜の不覚。巧は疾駆する勢いそのまま跳躍。けたたましい咆哮と共に、無数の刃がこびりつく右腕を振り下ろす。咄嗟に振るわれた横薙ぎの斬撃を叩き落とし、その腕はランサーの鎖骨を打ち砕いた。

生木が割れるような音。余裕を絶やさなかったランサーの表情が、初めて苦痛と屈辱に歪み、不安定な態勢に陥った。逃しはしない。胸倉を掴み寄せ、顎を打つ。ほんの一瞬、ランサーの眼から意識が消えた。連撃。蹴りで膝頭を叩き割り、くの字に折れた胴体に拳を叩き込む。崩れ折れようとした身体を無理やり立たせ、もう一度顔面を殴る。泥臭い連撃は止まる事を知らず、生臭い鮮血が、点々と宙を舞った。

——まだだ。

巧の手が更に追撃を加えようとした瞬間、宙を蠢く蛇が変則的な軌跡を描き、同時に左手の指がぼつさりと斬り落とされた。虚空に四つの指が散乱する。火傷のような痛みは無言の悲鳴をあげつつ、返す斬撃を何とか躲し、態勢を立て直す。交錯する両者の視線。血に塗れたランサーの顔には確かに、憤怒の色が見えた。

吸って、吐く。見せつけるように、大きく呼吸を繰り返す。そうする事が一種の挑発になると、巧は長年の戦闘経験から知っていた。ましてや、負傷している相手の前でするなど。

「——！」

喰らうだけの餌に手傷を負わされ、しかも挑発されるとは思ってもいなかったランサーが、激怒の怨嗟を纏い突進する。賭けには、勝った。なら後は、支払いを受け取るだけだ。

迫る、白刃。空間を裂くそれは、一直線に巧の喉を貫かんと突き進む。回避はしない。

食い止めるように差し出された指の無い掌を、遠慮なく刃が貫いた。細胞の間をすり抜けていく冷たい感覚に苦痛を覚える。背筋に冷えた鉄の棒を刺し込まれたように、全身が硬直する。だが、これでいい。瞬時に万力の如き力を加える。掌の中で締めつけられた槍はランサーの全力をもってしても微塵も動かない。ランサーの顔に焦りが走るのが見えた。もう、遅い。

渾身の踏み込みが、アスファルトを砕く。

そして一瞬の躊躇もなく、女の胸に全力の一撃が叩き込まれた。

拳を透かして骨を揺るがす堅牢な衝撃。明らかに人間が出している感触ではない。今は、どうでもいい。吹き飛んだ敵影も、血飛沫く自分の拳も歯牙にかけず、巧は倒れ伏すオルガマリーに駆け寄った。蒼ざめた顔色に、目覚める気配は見えない。腹部をじんわりと汚す血液。だが、生きている。柔らかく暖かな鼓動が、オルフェノク化した事により鋭敏化した巧の耳朵を叩く。まだ死んでいない。その事実に、たまらなく安堵した。

「——驚きました。まさか、人間でなかったとは」

響く、死神の声。振り向けば、当たり前の様に無傷なままのランサーの姿があった。振るわれた槍の刃が月光に反射し、苛烈な煌めきを放つ。

燃える脳髓が視界を覆う分厚い暗幕を焼き払い、落ちている微小な砂粒の一つ一つさえ認識出来た。女の淫靡な笑みが闇夜に浮かぶ。知らず、唸り声が漏れた。

「ならば、あの血の濃さも領けるといふもの——獣化。いえこれは、変化、でしょうか？ ……どちらにせよ、標本にするのは変わりませんが」

ランサーの姿が消えた。咄嗟に屈んだ巧の頭上を、銀風が通り過ぎていく。躲しきれなかったのか、薄く斬られた額から出血。浅傷と判断した巧は、オルガマリーを抱えて背後に跳躍。しかしランサーは冷徹なまでに間合いを潰し、先程の意趣返し如く、上段から一撃を繰り出した。

無理だ。

咄嗟に出した左腕の刃が、嘘のように簡単に折れた。続く斬撃。不規則に切り刻まれていく身体から、多量の血液が飛び散り、幾何学的にアスファルトを汚していく。

「まだ、まだあー」

持ち主の激情が乗り移ったかのように、槍撃はその凄絶さを増していく。アスファルトを削り火花を上げつつ下段から迫る刃を避けたが、それは囷。電撃の速度で手首を返し、右肩から左脇腹を切り裂かんと白刃が飛来する。反射的に右腕で受け止め、払い除ける。無理に捻じ曲げた腰から嫌な音が聞こえたがいつさい無視する。

走り回る激痛を抑え込み、ケラ首を地面に蹴り込んで距離を稼ぐ。追撃は無かった。ただ、厭らしく光る嗜虐の瞳が、じいっとこちらを睨みつけていた。

視線を逸らす事なく、転がっていた瓦礫を蹴り飛ばす。そこに、抱えているオルガマリーをそっと横たえた。腹部の血はじわじわと広がり、蒼ざめた色はその色彩をいつそう濃くしている。もたついている暇は、無い。

「その少女を助けるつもりですか？ 無駄な事は止めておいた方が、身の為だと思いますが」

「――」

振り返り、敵と対峙する。大きく呼吸。そして一步目で加速した。時速三百キロを越えるスピードでウルフォルフェノクが風となってランサーに突進する。槍が大きく半円を描き、曲がった穂先がこちらを凝視する。ざわめいた、首筋。必死で頭部を捻り、音速の刺突を回避する。耳元を掠める暴風。敵が引き戻すより、僅かにこちらの方が速い。

喰らえ。

抉り込むような左アッパーが放たれた。回避は出来ないし、させるつもりも毛頭ない。決して避けられない決死の拳。血糸を中空に撒き散らすそれは確実に、ランサーに致命傷をもたらす軌道にあった。

――突然、鎖に縛られなければの話だが。

「――!?」

「あはあつー！」

獲物を捕らえた狂喜の歓声が、ランサーの妖艶な唇から堪えきれず洩れた。これは、まずい。必死の形相で腕を引くも、絞めつける鎖が離れる事は無い。ランサーは笑みを零したまま、鎖を絡みついた巧ごと振り被り、アスファルトに叩きつけた。胸部を中心として、全身にさざめく衝撃。めきめきと、肋骨とアスファルトが割れる音が混ざって聞こえた。

執拗にしがみつくと鎖を引き離そうとしても、ランサーの超人的な臂力がそれを許さない。鎖に触れるどころか、身動き一つさえ取れないまま、巧の身体は宙を舞い、叩きつけられ続けた。

感覚は既に消えた。ただ、熱い。ゆっくりと歩み寄る死の気配。攪拌された脳髓が、極彩色に輝く景色を見せる。間隙に入り込む夜空が、やけに赤く見えた。

やがて鎖に繋がれた生物とは言えない物体が、アスファルトに鈍い音を立てて転がった。

「——気が変わりました。ただの標本など生温い。脳味噌を曝け出し、全身の皮を剥ぎ、自分の内臓と神経が掻き混ぜられる様をじっくりと見学させてあげましょう。私にも慈悲というものはあります。意識と痛覚は残してあげますから。どうぞ楽しんでくださいね」

返事は、無い。虫の息のぼろキレに、ランサーは喜色満面の表情を見せる。

「いいえ、まずは少女の方からしましょうか？　そうしましょう！　まだ破瓜の痛みも知らぬ生娘のようでしたから、手始めに犯します。それからじっくりと、指先、足先、それぞれを神経の末端に至るまで、じわじわと削り取っていきましょう。苦痛という物は鮮度が大事ですからね、やり過ぎては、一瞬で終わってしまう。それでは、面白くない」

巧はぶちりと、音を立てて鎖を千切った。

鈍い音を立てて、鎖がアスファルトに散らばる。鎖が絡みついていた左腕はもはや、腕と呼べる代物ではなくなっていた。皮膚を突き破り飛び出す尺骨。銀色の外骨格は、ぼろぼろと加速度的に剥がれ落ち

ていつている。感情を一切表意しない瞳は、どこか空虚だ。今にも崩れ落ちそうにふらつく足。立てたのは、ほぼ偶然に近い。

しかし、半身を朱に染めながらも、立った。

「——いい加減、鬱陶しいですよ」

巧が駆け出し、ランサーの相貌が、耐え切れないとばかりに歪んだ。もう飽きた。『屈折延命』は不死系の能力を持たない相手にとつては、単なる治癒無効の宝具にしかない。何から何まで、忌々しいペルセウス。だが、死にかけの獣には十分過ぎるだろう。

呼吸と同時に投擲の態勢に入る。敵は風を切り、真つ直ぐ突っ込んでくる。馬鹿が。このまま、貫かれて死ね——！

轟音と共に槍が投擲された。鼓膜が限界を越えて破裂した激痛が、無理やり巧の意識を取り戻した時には既に、その穂先は巧の脇腹を深く切り裂いていた。

「ぐ、が——あ、」

大量の血反吐が地面に撒き散らされ、脇腹から零れ落ちた内臓が、びちゃと地面に叩きつけられた。たちまち漂う濃厚な血臭。標的の確実な死を嗅ぎ取ったランサーの頬が大きく歪む。

——それでも、止まらない。

「な、こいつ？」

「お、あ、あああああ——！！」

当たればすぐ死ぬ。当たらなくても、もうすぐ死ぬ。

初めから負けると確定している博打に全額を突っ込む馬鹿は、この世界のどこを探しても多分、どこにもいないだろう。生きていたいと思うならば、今すぐ後ろで寝転がっている少女を捨てて、ここから立ち去るべきだという事は十分分かってる。

それでも自分に出来るのは、意地を張って前に進み続ける事だけなのだ。元々不器用な自分が寄り道など出来る筈が無い。後ろに逃げることなど許されない。ならば、前に進み続ける事を一生貫くしかないのだ。

例え命を、懸けてでも。

それが、俺に出来るのなら——！

灰の星が紅い尾を引き、たった一度の奇跡を成す。
ランサーの瞳が妖しく輝く。石化の魔眼。止められないなら打ち砕く。

コンマ数秒の空白。無限に引き延ばされた刹那。赤黒い時間に包まれた脳髓。

そして、

石化される寸前、巧の手刀は正確に、ランサーの霊核に刺し込まれた。

○

満身創痍どころでは無かった。

あの戦いの後。放置していたオルガマリーを背負って、巧は新都方面へと歩き出した。深山町とやらの病院の類があるとはとても思えなかったし、多少でも土地勘がある新都を探索する方がまだマシだろう。それにしたって、目の前に広がる広大な街中を、たった一人で探索出来るとは思わないが。

腹を割いて漏れ出た小腸が、ぷらぷらと間抜けに揺れながら、地面に赤色の曲線をずるずると引いている。どういう訳か、あの不可思議な槍で傷つけられた箇所は治りが極端に遅くなるらしく、オルフェノクの人知を超えた治癒能力をもつてしても、この程度が精一杯だった。

足取りは、当たり前のように重い。ひっきりなしに垂れ続ける血液と一緒に、何か大切な物まで流れている様な気がする。点滅し続ける視界はもう限界に近い。正直に言えば、アスファルトの上でもいいから、今すぐ倒れ込んで眠ってしまいたい。そう考えれば背負った物が、たまらなく重くなったように感じた。

「おい、起きろ」

「――」

「いい加減、起きろって」

数秒経ってからようやくやく、背中の物体がもぞもぞと返事を返した。

「——うる、さい」

「重いんだよ、ったく」

ずり落ちかけた少女を背負いなおす。思わず咳き込めば、アスファルトに紅い花が咲いた。朦朧とした意識の中で、せめてこいつだけでも助けると、ただそれだけを考えた。

ひたすら、無心で歩き続ける。揺さぶられるオルガマリーが、上唇を噛み締めながら、巧の耳元で呟いた。

「……藤丸」

「なんだ」

「どうして、私を庇ったの」

「さあな」

素っ気ない巧の答え。首に回されている少女の腕に、わずかな力が込められた。

「ふざけないで。……どうして？ どうして、赤の他人の私に、命を賭けたの？ 運が悪かったら貴方、殺されてたかもしれないのよ？」

「それ、答えなきや駄目か」

「……」

無言の行。心なしか、首を締めつける力がさらに強くなった気がする。なんて女に関わってしまったのか。巧は溜め息を吐き、突き放すようにして答えた。

「——助けられたから、助けた。それだけだ」

オルガマリーは信じられないと顔を上げて、前を見据え続ける少年の顔を見た。固く引き締められた唇に、不機嫌そうに曲げられた眉。相変わらず無愛想極まりない面だったが、その翳る瞳の奥底には、燃え続ける意思の光が見えた。思わず、首を締める力が強くなる。

「……貴方。ほんとに、バカね」

「振り落とされたいか」

死にかけても続く巧の憎まれ口がよっほど面白かったのか、最初はくすくすと小声で、やがて、深夜の街に響き渡る大声でオルガマリー

は笑い出した。つられて、巧も小さく笑った。ただただ、無性に嬉しかった。生きていられるという事が。

ひとしきり笑って疲れたのか、オルガマリーはすうすうと寝息を立て始めた。暢気な奴。幸いにも腹の傷は浅いらしいが、こっちの傷はただ事じゃなかった。辺りを見渡せば、視界を埋め尽くさんばかりの瓦礫の山が、茫洋と広がるのみだった。

「クソ。どっか、ねえのかよ」

空を見上げる。相変わらず、憎らしい程の曇り空だった。微かに割れ目を通る月光だけが、暗闇を照らす道しるべになってくれている。そこを、一筋の影が通り過ぎた。

「な、」

轟音。

嘘だろ、という衝撃と、またか、という諦観が心中で複雑に交錯する。粉塵を切り裂き現れたのは、白い髑髏の仮面を顔面に張りつけた瘦身の男だった。その身体から放たれているのは、先程と同じような殺気。この二つを結びつけなくても分かる。目の前の奴も、また敵なのだ。

オルフェノク化の前兆を示す紋様は、どれだけ繰り返しても浮かび上がらない。変身する事も出来ないこの状況。ここまでくればいっそ笑えると、巧は思った。

耳障りな雄叫びと共に、無数の刃が殺到する。

ここで終わるのか。終わってしまうのだろうか。

木場との約束も果たせず、真理や啓太郎にもう一度会う事も出来ず、こんな廃墟で塵屑同然に死んでしまうのか。

——ふざけるな！

迫る白刃を真っ直ぐ睨みつける。無駄だと分かっている、最後まで拳を握り続ける。

まだ、この胸には、木場が手渡した物が残っている。どれだけ手の届かない理想であったとしても、確かにそれは確固とした形をもって、自分に受け継がれている。

——オルフェノクと人間の共存。

叶える事の出来ない夢物語だと、今でも思っている。どちらかが滅びる事でしか決着のつかない生存競争の結末など決まっている。

だが、夢を見た。見てしまったのだ。ならば、叶える他に道は無い。又聞きした、海堂の言葉を思い出す。

『夢つてのは、呪いと同じなんだ』

呪い。

確かにそうだ。夢は呪いによく似ている。一度囚われてしまえば、一生抜け出せない。

夢を——呪いを解くには、叶える以外に道は無いのだ。

そして木場は、最後まで呪われて死んでいった。夢を叶えられなかったばかりに。

俺も、多分そうなるのだろう。巧は思う。決して叶わない夢に手を伸ばし続けて、最期には何もかもに呪われて死んでいく。あまりにも、分かり切った、当たり前前に訪れる終焉。

だが——

右手が鈍い疼痛を繰り返す。心臓が脈動を繰り返し、全身が燃える錯覚を覚えた。

この手はまだ、何にも手を伸ばしちやいない——！

握り締めた右拳が深紅に燃え盛り、紅く輝く令呪が浮かび上がる。そして、風が吹いた。

天上より舞い降りた白銀が、黒く濁る影を軽々と消し飛ばした。振り下ろされる盾。荘厳な重圧を放つそれは、雪花の儚さを併せ持っている。

「今なら、印象的な自己紹介が、出来ると思います」

鈴の音が鳴るような声が、閃光を放つ柱の中から響く。

荒い風が吹きすさび、濁った曇天は去った。

夜空にはただ一つ、円満な月が浮かぶのみ。

薄い紫紺の髪が清廉な月光に照らされ、淡く光を放つ。

「——先輩。貴方が、私のマスターですか」

巧に振り向いた少女の顔。どこか、見覚えのある澄み切った紫の瞳。

全てを思い出す前に、巧の意識は闇の中へと消えていった。

第四節「異形襲来」

「——先輩？」

ずいぶん、長い夢を見ていた気がする。

重い目蓋をこじ開けると、こちらを覗き込む紫色の瞳が、巧の薄暗い色彩に入り込んできた。その背後では古臭い雰囲気染みついた板が、木製の枠に沿って几帳面に並べられている。

独特の臭いが、鼻をつんとつく。全身を包む柔らかい感触から、アスファルトではなく布団の上に寝転がされている事が数秒経つてようやく分かった。

「ここは……」

何処だ。疑問符と共に起き上がった巧の身体に、無視できない鈍痛が迸る。ぐうと、間拔けな呻き声が、静かな和室に反響する。少女が慌てた様子で、倒れ込もうとする巧の身体を抱き止めた。

「いけませんっ。いくら強力な治癒魔術があっても、すぐに動けるような怪我じゃありませんでしたから」

しつこく伸ばされる手を振り払おうとする度、全身が錆びた螺子の如く軋んだ。数度の試行の末、とうとう諦めて布団に潜り込む巧を見て、少女は安心したような表情を見せた。

一体、ここは何処なのか。自分はどうなってしまったのか。何もかもが分からないが、今はひたすらに眠かった。柔らかな羽毛に深く身体を押しつけければ、沈んでいた眠気が再度浮上を開始しようとする気配を感じた。ずっとここで寝そべっていたい。巧の意識が、本格的に二度寝のスイッチを入れようとしたと同時に、顔面にべちゃりと濡れた何かが押しつけられた。

「がっ」

「あっ、すいません」

慌てて取り除かれたタオルの下の巧は、過剰に吸い込まれていた水分をぶちまけられ、惨憺たる有様になっていた。濡れた口の端が引き

攣る感覚。いつもの癖で怒鳴ろうとして起き上がった瞬間、俯いた紫の瞳と目が合った。

——手を、握って——

唐突に止まった巧の挙動に、少女も訝しむ。

「——どうしました?」

言っているのか。散々迷った挙句、巧は口を開く事に決めた。

「……お前、あの時の奴だろ」

巧の眼の奥で瞬く何かを感じ取ったのか。少女の顔に驚愕が走った。

「……覚えて、いたんですか?」

「忘れる訳無いだろ、あんな」

あんな——。下半身を瓦礫に押し潰された少女の凄惨な姿が、巧の脳裏を一瞬掠めた。血の気を失い白くなった顔。瓦礫の隙間から漏れ出る、オイルのような血。明らかな、致命傷だったはずだ。鼻根目に見ても見なくても、あらゆる老若男女が死という太鼓判を押す重傷。死ぬまで十数秒もかからないだろうと巧は思っていたし、耐え切れなかった意識に黒い帳が降りる寸前にはもう、少女の肌から生気というものが抜け落ちていた気がする。

仮に、自分が気絶した後何らかの奇跡が起こり助かったとしても、あの燃え盛る炎の群れを単独で抜けられたとは、到底信じられなかった。

一体何が、どうなっているのか。

呆然としている巧を他所に、少女は今度こそタオルの水気を充分絞り取ってから、唐突に巧の上着を剥いだ。ひんやりとした空気が背筋を這い上り、大きく身震いした。

「何すんだっ」

「じつとしていてください——今の先輩は、マスターである前にひとりの怪我人です」

有無を言わせぬ視線と口調に圧倒され、思わず視線を逸らしてしまう。それを了承ととったのか、タオルが背中を丁寧に往復しはじめた。

気まづげな、かといつて居心地が良くない訳ではない空気が部屋を漂う。特にする事の無い巧は、ちら、と横目で少女を盗み見た。一心を巧の背中をふき取る事だけに賭けているその顔に、傷は一つも見受けられない。

眼に宿っているのは死を前にした虚無では無く、力強い生を思わせる意志の光。その眼を見れば、この少女は一度死んだのだと誰にどう言っても、信じてもらえないだろう。それほど、少女には生命という物が溢れていた。

——まさかこいつ、オルフェノクじゃないだろうな。

巧が疑念を渦巻かせているうちに、少女は一仕事を終えたのか。大きく息を吐いて、往復していた手を止める。背中に貼りつく濡れた感触を気持ち悪がっていると、少女は申し訳なさそうに呟いた。

「お疲れ様でした。……その、いきなりこんな事してすみません」
「全くだ」

不貞腐れたようにそう吐き捨て、上着を着直す。その後、巧は思いついたように、口にした。

「それよりお前——怪我はどうした」

「? 怪我、とは?」

少女の瞳が疑問に彩られる。

「だから……あん時の奴だよ。——瓦礫の」

躊躇いがちに零された巧の言葉にようやく思い当たったのか、少女は納得したように掌を叩いた。

「……ああ、はい。デミ・サーヴァントとなった時点で、負傷箇所も修復されたみたいです。今は、傷一つありません」

「……そうか」

巧のまなじりが、安堵によって緩やかな円弧を僅かに描いた。少女は目の前の無愛想な壁に現れた微かな亀裂に眼を見張り、くすりと笑った。

「なんだよ」

「その、先輩にとっては、取るに足らない事かもしれませんが。先輩が私の手を握ってくれた事を思い出して。……あの時は、ありがとうご

ございました」

頭を下げた少女に、巧はうざったそうに手を振る。

「よせ。大した事じゃないだろ」

「それでも、私は嬉しかったです。……本当に」

元来の性格もあって、他人から純粹な好意をぶつけられた事の無い巧は、少女の笑顔にどう対応していいか分からず、黙り込む事しか出来なかった。その様子を見た少女が、再び笑った。巧が顔を背けてがしがしと頭を掻きむしる。暖かく、どこかむずがゆい空気が二人の間に染み渡っていった。

「……ここは、何処だ？」

甘ったるい雰囲気能耐え切れずこぼれ出た疑問に、少女は困ったような顔を見せた。

「実は、私も知らないんです。キャスターさんが、今はこの場所が一番安全だと言っただけで」

「キャスター？」

「はい。この街の唯一の生存者……なのででしょうか？」

「はつきりしない物言いだな」

「サーヴァントはあくまでも死者の精霊なので、生存者、という言い方はあまり適切ではないかもしれません。受肉しているなら話は別ですが、未だ聖杯が誰の手にも渡っていない以上、それはあり得ないかと」

「そうか」

長くなりそうな話を無理やり打ち切り、ざらついた畳に手をついて巧は立ち上がった。少しふらつくが、問題ない。そのまま立ち去ろうとする巧を、慌てて少女が止めた。

「先輩、駄目ですっ」

「平気だ」

「ですが」

「平気だっつってんだろ。ほっとけ」

助けてくれた事には感謝している。だがそれ以上に、赤の他人も同然の相手と同じ空間に居るといふ事が、巧にとっては耐え難い苦痛

だった。そして、これ以上親しくなってしまうえば、いつか必ず後悔する羽目になるという確信が巧にはあった。だから、出て行く。ただ、それだけの事。

少女の悲しげな視線が巧の五体を抉る。

たまらず、足を止めかけた。

「先輩っ！」

悲愴に満ちた声に耐え切れず、このままさっさとずらかろうと襖に手をかけた巧の裾を、少女が引つ掴んだ。ふらついた巧に少女が自責の念を浮かべたが、ぐつと唇を噛み締めて、再び握り締めた。熱の籠った視線が、巧の背中に浴びせかけられる。ひどく、熱い。

「離せ」

「いけません。絶対安静にしていなくては」

「離せてっ！」

「離しませんっ！」

「お前なっ!!」

振り払おうと力を込めても、少女の腕は鉄釘で縫い留められたかのように、微塵も動かない。普段の腕力も出せないほど、身体が衰弱しきっているのか、それとも少女の方が自分よりはるかに力強いとでも言うのか。馬鹿馬鹿しい妄想だと笑い飛ばそうとして、止めた。そういえばここに来てからは馬鹿馬鹿しい目にしか合っていない。突然襲ってきた槍持ちの通り魔に、喚きを撒き散らすヒステリック女——その瞬間、巧の脳髓を電撃が貫いた。

「あいつはどうした」

「あいつ？」

振り向いた巧の表情、焦燥の色が濃い。何故今まで忘れていたのか、その思考ですらも今ではもどかしい。少女の肩を掴む。硬い鉄の感触が、神経を透き通っていった。

「俺と一緒にいた奴だ。どこやった」

「所長の事なら、隣の部屋ですが」

居場所を聞くや否や、巧は隣の襖を躊躇なく開けた。その仕草には女性に対する気配りなど全く存在しない。

巧の記憶は、謎の影に襲われた所でぶつかりと途切れている。だから、どうしようもなく不安だった。自分はその少女を助ける事が出来たのか。二度と目の前で死なせないと決めたのだ。人間を守ると、誓った。だが、もし間に合っていないかつたとしたら。最後の最後に堪えきれず倒れてしまった自分が心底憎らしくてしようがない。だからか、巧は少女の制止にとうとう気づかなかつた。

不安と期待を入り混じらせながら開けた扉の先には、

「——な、あ、あんた」

着替え真っ最中の、オルガマリーの姿があつた。

薄闇の中だからこそ映える銀髪が、微かに差し込む月光に照らされてぬらぬらと輝いている。滑らかな曲線美が均整の取れたシルエツトを生み出し、きめ細やかな白肌を覆う質素な下着でさえも、一種の芸術として成立させていた。その肢体には傷一つ見当たらない。遅れて、安堵の溜め息が漏れた。オルガマリーと目が合う。濃い狼狽に彩られた金色の眼。気まづくなり、眼を逸らした。

「着替えてんなら、着替えてるつて言えよな」

無茶苦茶な巧の言いがかりに、オルガマリーは顔を赤くしたり青くしたりするのに忙しくて答えられない。わなわなと口が震え、ぶち、と何かが切れる音が確かに聞こえた。後ろで少女が耳を塞ぐ。

数秒後、雷鳴の如き轟音が、巧の耳孔を鋭く貫いた。

○

「——以上が、所長達と合流するまでの経緯です。」

マシユ・キリエライトと名乗った少女は、一連の話をその一言で締めた。

オルガマリーと衝撃的な再会を果たした後、語るのも憚られるほど複雑な紆余曲折を経て、巧達は居間に集まっていた。少女——マシユから聞かされた一部始終によって、オルガマリーはキャスターと名乗る瘦身の男、を多少はまともなサーヴァントだと信用する気にはなつたらしい。もつとも、巧は話半分しか聞いていなかったが。その気配

を目敏く嗅ぎつけたオルガマリーは、嫌味たっぷりの視線を巧に送りつけた。

「……何だよ」

「いえ、別に。ただ、女性の下着を覗いておいて平気な面してられる人間は、さすが精神の出来が違うなって思ってただけ」

「お前、まだ引き摺ってんのか?」

巧のめんどくさそうな態度が癪に障ったのか、だんと、机を叩いてオルガマリーは立ち上がった。その形相には怒りに燃える修羅が色濃く映されている。

「当たり前でしょっ! レフにだって、見られた事無いのに……何でよりにもよってあんたなんかにつ!」

「俺だってあんなもん見たくなかった」

「あんな、もの……!?!」

「大体、下着見られたぐらいでごちゃごちゃ騒ぐな。ガキかお前。バーカ」

怒りに震えるオルガマリーに容赦なく追撃を加える巧。その鋭い舌鋒の燃料は、自分が仕立てた、巧の頬にべつとりと張りついた手形の紅葉から来ている事をオルガマリーは知らない。自業自得ともいえる。

「誰が、バカですって!?!」

「お前だこのバカ女」

「ふたりとも、もうやめておいた方が——」

止めようとしたマッシュであったが、一度火がついた時点で、常人よりも頭に血が上りやすくなっている巧の頭が止まる訳が無かった。巧の口舌に呼応するかのようには、オルガマリーの思考も怒りの赤一色に染まっていく。

「なによっ! この無神経、無愛想、野蛮人っ! 唐変木のあんぽんたんっ!」

「バカ、バカ、バカ、バカ!」

「——このバカ男っ! バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ!!」

「バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ!!」

「やめてください二人ともっ！ キャスターさんも、面白がってないで止めるのを手伝ってくださいっ！ こらっ！ やめてくださいっ
てば!! ——もおっ！」

○

結局、見かねたマシユの武力介入によって事態は鎮火の気配を見せたが、いい歳をして取っ組み合いになりかけた二人の間の空気は、最悪になっていた。目を合わせた途端、威嚇しあう猫のように睨み合う二人の姿に、マシユはどうとう匙を投げ、台所に行った。逃げたともいえる。

「——これが、こちらの凡その事情です。……貴方、確かキャスターだったわね」

真っ先に正気を取り戻したオルガマリーが、巧を牽制しつつカルデアの事情を話す。その様子を見ていたキャスターは堪えきれないとばかりに大きく笑った。

「おうよ、何か用か。気の強いお嬢ちゃん」

「……態度は放っておくとして、あなた、真名は何？」

「ほほお、いきなりそれか、いいね。大胆な女は嫌いじゃない。仮にも今は聖杯戦争中なんだが……ま、今となつちや隠していても意味はねえか。——アイルランドの光の御子って言えば、分かるよな？」

「光の、御子——貴方はもしや、赤枝の騎士団のクー・フリーンでは？」
そう言いつつ、マシユが湯飲みをそれぞれの前に置いていく。中身は当然の如く、お湯だった。中空をゆらめく湯気を見て、巧が苦虫を噛み潰した顔をした。

「御名答。ま、今回はキャスターでの現界なもんだから、槍は無いんだがね。——ああくそつ、槍さえありやなあ。あんな奴ら、一刺しで終わらせられたのによ」

「無い物をねだってもしょうがないでしょうが。——それより、この異変は一体何なの？ 冬木の聖杯戦争に一体何が起きたっていうの？ 確か、この街の聖杯戦争は七騎のサバイバルだって聞いてたけ

ど」

「最初におかしくなったのはこの街だ」

キャスターは湯飲みを掲げ一気に飲み干すと、何でもないので、う言った。

「一夜にして炎に覆われ、人外生どもが闊歩するクソみてえな有様になった。元からきな臭い気配はあつたんだがな。——最初に聖杯戦争を再開したのはセイバーの野郎だ。アーチャー、ランサー、ライダー、アサシン、バーサーカー。オレ以外の英霊はセイバーの奴にぶつ倒されて、真つ黒い泥に汚染された。盾のお嬢ちゃんも聞くまでもねえが……あんたらも、会つたんじゃねえのか？」

ランサーという単語を聞いた瞬間、巧とオルガマリーの表情が忌々しげに歪んだ。

「その顔だと、心当たりがあるみてえだな。……それで、奴らは怪物どもと一緒に何かを探してる。それが何なのかはオレにも分からんが、幸か不幸か、探し物にはオレも含まれている」

「唯一聖杯戦争を続行する意思が残っているまともなサーヴァントが、貴方とセイバーだけだから、か」

顎に手を当て考え込むオルガマリーに、キャスターが莞爾とした笑みを浮かべた。

「そういう事だ。だが、オレもいい加減終わらせようと思つてな。永遠に終わらないゲームなんざ退屈だろう？ 良きにつけ悪しきにつけ、駒を先に進めないとな？」

「それでキリエライトを助けたワケ。何よ、結局のところ、自分の都合が最優先つて事じゃない」

「人間、大体そんなもんだ。それにお互いに悪い話じゃないだろ？」

あんたらの目的はこの異常の調査。オレの目的はこの戦争の幕引き。ほら見る、利害は一致してる」

「——貴方が、裏切らないという確証が無い」

ランサーに襲われたからこそ、言える言葉だった。確かに今は正気を保っているかもしれない。だが、いつか泥という物に汚染されて、こちらを襲ってくるかもしれないのだ。不発弾を隣に置いて眠るよ

うな行為を、カルデア所長として、許しておける筈が無かった。

オルガマリーの疑念の視線に、キャスターは杖を掲げ、不敵に宣言した。

「オレは、良い女を裏切らない」

オルガマリーは、信じられない物を見つめる目つきをした後、深いため息を吐いた。

「……………わかった、わかりました。冬木のキャスター、貴方と協力しましょう」

「おつ、話が早いな。アンタ、将来美人になるぜ」

「……本当にこんな調子で、大丈夫なのかしら」

「任せとけて！ ルーン魔術の真髓つてもんを見せてやるからよ」

軽快に笑うキャスターを不安げに見つめた後、オルガマリーは巧を睨みつけた。視線の先。巧は話に関わろうとする気配すら見せず、ふうふうと溶鉱炉のように煮えたぎるお湯を吹いていた。

「……藤丸」

「ふーふー」

湯飲みの保温性がよほど良いのか、中々冷めない。巧がひたすら吹いているその隣では、冷やした水を持って来るかどうかでまごつくマシユが見える。さすがに、オルガマリーの堪忍袋も限界だった。

「藤丸っ！ 貴方ね、話ちゃんと聞いてた!?!」

「聞いてた」

「嘘っけっ！ ずっとふーふーやってんのバレてんのよっ!」

オルガマリーが机を勢いよく叩いた瞬間、湯飲みが飛び跳ね、中身が巧の手に飛び散った。

「熱っ!」

「ああつ、先輩大丈夫ですか」

「物に当たるのは良くねえぜお嬢ちゃん」

「どいつもこいつももうるさいうるさいっ! ——四十八番、藤丸立香っ! 貴方、カルデアの一員としての自覚を、ちゃんと持つてるんでしょっねっ!?!」

突きつけられた指先を、巧はうざったそうに見つめた。

「何だよ」

「何だよ、じゃないっ！ 話には参加せずっとフーフーしてるわ！ わたしを差し置いてマスター資格を有してるわ！ 拳句の果てには人の裸を見ても謝罪の一つも無いわっ。ちよつと！ 一体どういう事なのよこれはっ！」

前半はともかく、後半は明らかかな私情も混じっていた。巧はめんどくさそうに眉を顰めて、

「話は纏まったんだろ。だったらそれでいいじゃねえかよ」

「そういう問題じゃないの！ 良い？ 貴方には協調性とデリカシーってモノが欠落してるようだから教えてあげる。……コラっ！ 寝るなバカっ！」

先輩がんばつてくさいと、マシユが眠りかけた巧の肩を揺する。舌打ちしながら巧は話を聞く態勢を作った。

「……認めるのは本当に、非常に癪だけど、私にはマスター適性がありません。だから、私達が頼れるのは貴方一人しかないのよ。わかる？ 貴方しか、いないの」

ひと言ひと言を諭すかのようにオルガマリーは告げた。本当はこんな、魔術のまの字も知らなさそうな素人も同然の人間を頼りにするのは間違っている。そんな状況に追い込まれてしまった事自体、魔術師として——いや、ひとりの人間として恥ずべきだった。

だが、それ以外に道は無いというのも、また動かしようの無い事実なのだ。

オルガマリーの言葉に、キャスターも追随するように告げる。

「オレはマスターに従うのみだ。例えば仮契約だろうが、マスターである坊主が行けって言うんなら、すぐにでも奴らの居所に乗り込んでも構わねえよ。ま、オレ自身がそうしたいのものもあるがな」

「私も先輩にお任せします。私は、先輩のサーヴァントですから」
「だから、俺はな」

一同の視線が、巧に集められた。

心底、鬱陶しい。

しばらく黙りこんだ後、巧はおごそかに宣言した。

「疲れたから、寝る」

○

庭先には、濃い夜の帳が落ちていた。

あの後、オルガマリーの視線に追われるようにして寝室に戻り、布団に入ったまでは良かったが、何故か、一睡もできずにいた。たまらず飛び起きた巧は、自然と縁側に足を向けていた。

中庭に降り立つ。一月半ばの冷たい夜気が、羽織ったコートを透かして肌を刺す。長い間整備されていないのか、伸び切った雑草が風に揺れ、川のせせらぎにも似た音を闇に響かせていた。

しつこく纏わりついてくるそれらを、靴で乱雑に掻き分けつつ歩いていると、寂れた土蔵の近くに少女が立っている事に今さら気づいた。

冴え渡る月光が、刹那の瞬間、マシユを照らし出す。ただ、何をするわけでもなく、じつと空を見つめ続けるその姿に、巧は何故か途方もない虚しさを覚えた。わざと靴音を立てて近寄る。すると虚ろだったマシユの瞳が、そっと光を取り戻していった。

「——先輩？」

「どうした。眠れないのか」

巧の問いに、マシユは困ったような笑みを浮かべた。

「いえ、その。少し、空を見たくて。……先輩こそ、眠れないんですか？」

「そんなところだ」

「こんな所に出てきているのを見られたら、また所長に怒られますよ？」

「まあ。何とかなるだろ、多分」

適当な答えを返して、少女に倣らうように巧も空を見上げる。あれだけ立ち込めていた黒雲は刃物のような夜風に全身を切り裂かれ、夜空に淡い破片を散りばめて消えていた。無数の雲片をささやかに照らす月が、黒い画用紙に一つだけ描かれた円のような風情で居座って

いる。

ふと強い風が吹き、マシユが肩を震わせた。巧はしばらく逡巡した後、羽織っていた砂色のコートを脱いで、マシユの前に突き出した。「……大丈夫です。まだ未熟とはいえ、この身体はサーヴァントですから」

「いいから着ろ。見てることちまで寒くなるんだよ」

「……ありがとうございます」

マシユは、半ば強引に押しつけられたコートを戸惑いながらも、鎧の上から着込んだ。幾分か珍妙なそれを見届けた巧は鼻を鳴らし、踵を返して足早に屋敷に向かった。いい加減、寒い。確か居間にはヒーターがあった筈だ。キャスターとオルガマリーは未だにぺちやくちや喋り込んでいるだろうが、暖房には変えられない。いずれ直面するだろう叱責に、足取りを重くした巧の背に、少女の鋭い制止が響いた。

殺気。

脳髓でサイレンが鳴り響く。振り返れば、颯風と化した針が、巧の脳髓を貫かんとする射線に乗っているのが見えた。避けられない。過剰分泌されたアドレナリンが世界を緩慢に彩る中、音速を越えて放たれた射撃は、咄嗟に割り込んだ白銀の盾によって弾かれた。中空を回転しつつ舞った針が、蒼く燃え上がり灰となって散る。

「先輩、無事ですかっ!？」

「——右だっ!」

思考より先に身体が反応し、マシユは即座に盾を掲げた。轟音。掲げられた盾に殺到しているのは無数の針。微細な振動が無数に連なり、瀑布の如き衝撃を生み出している。骨を伝わる絶え間ない振動に、このままではいづれ押し負けると判断。巧を抱え、マシユは上空に跳んだ。瞬間、留まっていた場所を、無数のクレーターが埋め尽くした。

「敵……!　　そうだ所長達はっ」

「おい来たぞっ!」

巧の叫びと同時に、暗闇から敵手はその姿を現した。ヤマアラシの

特質を備えた異形——ポークユパインオルフェノクは、瞬時に掌で長大な槍を生成し、マシユへと投げ放つ。防御。しかし敢えて前に出る。突進の勢いも重なって、白亜の円卓は槍を真正面から打ち砕いた。蒼炎の欠片が宙を舞う。退こうとする敵の焦りが見て取れた。反撃はさせない。無呼吸で盾を振りかざし、そのまま殴り抜いた。

渾身の力で振り回された盾に、音が遅れて追いついた。得物の速度が常軌を逸した証。明らかに人間では成し得ない所業。肉を砕く感触が腕を伝わる。だが、浅いとすぐに分かった。防がれた。その証左に、壁に激突したポークユパインオルフェノクは、ほぼ無傷に近い。盾越しに相手を睨みつつ、じりじりと近寄っていく。後悔している暇は無い。

レイシフトしてから数分も経たない内に、キャスターと共にライダーを倒した経験を積んでいるとはいえ、単独での戦いはこれが初めてだった。害意と殺気が満ちる禍々しい世界に自分が足を踏み入れた事を、今さら知った。冷や汗が背筋を流れる。

怖い。本音を言うならば、今すぐ逃げ出したくてたまらない。

しかし、自分には守るべき物がある。——ならば、戦わなくてはならないのだ。

どんな事であろうとも。

「」

互いに間合いを測る中、先に痺れを切らしたのは、

ポークユパインオルフェノク。

両手に無数の針を生成し、投擲。銀矢が重なり豪雨となつて殺到する。恐らく敵の武器より、こちらの盾の方が強度は上。ならばやるべき事は一つしかない。マシユは怯む事無く豪雨の中に踏みこんだ。鋼と鋼がぶつかり合う耳障りな音が空間を迸っていく。しかしマシユは止まらず、ひたすら敵の懐を指して駆けていく。距離、半歩も無い。この一撃に全てを賭ける。地を踏みしめ溜め込んだ力を解放。

裂帛の気合と共に盾が打ち込まれ、一際大きい砂柱が昇った。

手応えは——無かった。

嫌な予感が全身を舐め回す。推察。自分が敵の立場ならまず最初に狙うのは誰か？ 自分と拮抗し得る実力を持つ相手より、遙かに狙いやすい——つまりはマスターを狙う。何の為に？ 人質に取るならすれば相手の行動を制限する事が出来るし、何より今は聖杯戦争。サーヴァントより弱く、かつ現界する為の楔であるマスターを狙うのは、当たり前前の事。しかし敵がサーヴァントでは無い事と、冬木の聖杯戦争が大きくその形式を歪ませていた事が、マシユの判断を誤らせた。

先輩——！

振り返る。そこには、長大な槍を大きく振り被る異形の姿と、己がマスターの姿があった。駆け出す。間に合わない。手を伸ばす。届かない。誰か来て。あの人を、助けて。

全てがコマ送りとなった景色の中、突き出された先端が巧の頭を貫こうとした瞬間。

「——A u s u z」

炎を纏った灰塊が、唐突に異形を襲った。

轟音と共に吹き飛び、そのまま壁を突き破って道路に飛び出る。もうもうと立ち込める噴煙がマシユの視界を覆う中、縁側からゆっくりと、キヤスターがその姿を現した。その脇にはオルガマリーが抱えられている。

「——いい機会だ、嬢ちゃん。何心配すんな、腕前じゃあいつらに負けてない。なら後は、心胆決めりやいいだけだ」

「キヤスター、さん」

「何かっこつけてんのよっ。キヤスターのクセに接近戦するなんてサーヴァント、聞いたこと無いっ！」

「そりゃアンタが世間知らずなだけだ。ま、ランサーの時の癖がまだ残ってるのかもな。——それより、来るぞ」

瓦礫を押し退けて、二つの灰の影が煙を切り裂く。フードの下のキヤスターの顔に、知らず獰猛な笑みが浮かんだ。

第五節 「輝ける脅威」

見渡す限りの闇が、影山冴子の視界を隅々まで埋め尽くしていた。粘ついた湿気を染み込ませて、木々の狭間でごうごうと唸りを上げる生臭い風が、冴子の全身に満遍なく吹きつけられる。不可視の暗渠が、ゆつたりとその身を横たわらせて、自分達の行く手を遮っているのを確かに感じる。思わず眉を顰めるほどの暗い空気の中に入り混じっているのは、尋常ならざる血みどろの気配。明らかに何かがいる。そうと分かっているにもかかわらず進むのは、果たして何の為なのか。

——聖杯。

底知れない闇に眼を凝らす度に、冴子の思考は自然と、レフ・ライノールの依頼を思い出していた。

大空洞に居座るサーヴァントが所持する、聖杯の回収。

「それを君達に頼みたい。彼女は聖杯を与えられていながら、この時代を維持しようとしていてね——まったく、余計な手間をかけさせてくれるよ」

苦笑交じりに放たれたレフの言葉に、冴子は怪訝に眉をひそめた。

「貴方が行けば、手っ取り早く済むんじゃないの」

無論、その聖杯を持つサーヴァントとやらが目の前の男より強い、という可能性も捨てきれない。だが、単純な強弱を抜きにしても、誰もこの生命には勝てないだろうという強い確信が冴子にはあった。

何かが、違っている。

全てがどこかズレている。

何が違うのか、どこが狂っているのか。説明してみろと言われてれば、冴子のはつきりとした答えを返す事が出来ない。勘にも似た薄らばやけた認識だけが、男に対する全てを覆っている。

まがりなりにも人間だった時の感覚が未だに残っているのだろうか。恐怖など、とうの昔に捨て去ったと思っていたのに。

今も目を凝らせば、男の背後の闇に得体の知れない何かが這いずり回っているのがよく分かった。

——薄気味悪い。

冴子の心情を知ってか、レフは大きく手を広げて、

「そうしたいのは山々なんだが、少し野暮用があつてね。それに、君達の実力を見ておきたいんだよ。果たして、我等が王の御眼に入る資質があるかどうか。私は君達にあまり詳しくなくてね」

「つまり、貴方達の言う王様とやらに会う為の採用試験つてワケ」

「そういう事になるかな。まあ、過度な期待はしないでおくよ」

レフの顔には、確かに冴子達に対する侮蔑と、僅かな期待の色があつた。

失敗するわけにはいかない、と冴子は思う。この無様な命に代えてでも、成し遂げなければならぬ。

生き残る為には。

「——冴子さん？」

深く思考に沈んでいた冴子の耳孔に、伺うような調子の声が届く。俯いていた顔を上げれば、前方を進んでいた男が振り向き、その相貌に心配の色を滲ませていた。

「——何？」

「あともう少しで、目的地に着きます。——水原の奴は？」

「彼には、漂流者を相手にしてもらつてゐるわ。一応、念のためにアレも持たせてあるから。よほどの事が無い限りは大丈夫でしょうね」

「そうですか……まあ、アレもあるならあいつも大丈夫でしょう」

手に持ったスーツケースを、忌々しい物を見たかのような顔をして冴子は持ち上げる。その金属質な表面には、スマートブレインのシンボルが印されていた。それを見た男の顔にも緊張が走る。

「そういうえば、冴子さん——」

何を、言いたかつたのか。

冴子が男の言葉を聞くために耳を傾けた時、男の喉を、一本の銀矢が貫通した。

「おげ」

呻きが聞こえた瞬間、小さな破裂音が響き渡つた。砕けた喉仏の破片と脳漿が地面に飛び散る。バレーボール大となった首が、生い茂る

雑草の中をごろごろと転がった。一頭身小さくなった身体が崩れ折れ、どす黒い粘液を断面から垂れ流しつづ蒼い炎に包まれた。一瞬間、やがて、集団に漣のような動揺が走る。落ち着けと怒鳴る冴子の声はしかし、再び飛来した矢によって遮られた。

雷撃にも似たその一射を、弾く銀閃が一筋。

冴子の女性らしい妖艶な丸みを備えていた身体は、刹那の間で異形の姿——ロブスターオルフェノクへと変異していた。シエルグラブを装備した手に握られた細身のレイピアがゆるゆると震えている。視界外から攻撃。おそらく狙撃手。何とか弾き返せたが、連撃されればまずい。闇から距離を取り、号令を放つ。たちまち八つの異形が立ち並び、陰惨な殺意と敵意が森の中に充満する。

「——今のは警告だ。これ以上、ここに踏み入る事は許されない。誰であろうとな」

男の冷え切った声が、闇の奥から響いた。静まり返った暗闇を反響するその声は、オルフェノクの超感覚をもつてもどこから響いているのか見当がつかない。恐らくは、数百メートル先。それしか分からない。冴子は油断なくレイピアを構えつつ、その視線は男の姿を探している。

「貴方が門番というわけ……という事は、ここに聖杯があるのは間違いでは無いようね」

「——彼女目当てなら、なおさらやめておいた方がいい。無益の争いは、不毛な結果しか産まないぞ」

「残念だけど、こちらでも簡単に退がる訳にはいかないのよ。色々と、瀬戸際なものだから」

「私は退けと言った筈だ。君達の事情など、知った事ではない」

「——レオ」

むき出しの、殺意。

反応した冴子が叫ぶより早く、レオと呼ばれた男は不敵な笑みを浮かべて、受け取ったスーツケースから白銀のベルトを取り出し、筋肉質な身体に巻きつけた。

「——？」

それを見た男——アーチャーの眼に、一瞬の戸惑いが映る。何を仕掛けてくるのか。いや、何があるかと構わない。叩き潰す。

一瞬で思考を打ち切ったアーチャーから幾条もの銀矢が放たれた。膨大な魔力を纏い、数百メートル先から殺到するそれらをつまらなそうに一瞥し、レオは手に持った携帯電話型マルチデバイス——サイガフオンにコードを打ちこむ。軽快な電子音が森閑とした空気を渡り歩く。それがどうした。何をしようがもう手遅れだ。しかし、人知を超えたアーチャーの聴覚は、男が携帯に打ちこんだ番号を鮮明に聞き分けていた。

315。

○

「Ausuzi!」

鼓膜を震わせる宣誓と同時に、数発の炎塊がキャスターの持つ杖の先端から放たれた。空間を切り裂きつつ迫るそれを真正面から受け止める馬鹿はこの場にはいない。灰色の影が左右に散開する。標的を見失った炎弾は、壁を貫き新たな爆炎を生み出した。巨大な火柱が上がり、砂埃が大量に舞う。その中を、駆け抜ける一陣の異影。

煙を切り裂き、白刃が半円を描いて迫る。

ノコギリザメの特質を備えたソーシャークオルフェノクの振るう刃が、キャスターの蒼い頭蓋を切り裂かんと飛来する。マシユは割り込み、真正面から刃を受け止めた。散る、火花。そのまま弾き返し、颯風となって駆け抜ける。摺り上げるような一打が、ソーシャークオルフェノクの顔を掠めた。

圧力が空を目指し、上昇する。外した。悔やむ間も無く、返しの斬撃が唸りを上げて襲い掛かる。

「——ッ!」

足を留め、姿勢を無理に捻じ曲げる事でかろうじて回避。雑音が耳元を薙ぎ、遅れた紫色の毛髪が数本空中に散らばった。頭上を掠めた斬撃の行方を気にする暇など無い。半ば倒れかけた姿勢のまま、盾を

振るつた。狙う、脇腹。しかし、唐突に割り込んだ銀槍がそれを阻んだ。

鋼がぶつかり合う甲高い音。好機を得て退いた敵の背後に、投擲の体勢を取るもう一つの影が見える。マシユの瞳に焦りが生まれる。まずい位置だった。防御、間に合わない。そして、必殺の刺突が確約されようとした瞬間、蒼い陰影がその影を吹き飛ばした。

「槍の使い方が、なっちゃんねえ——！」

逃れようとするポーキュパインオルフェノクを、走狗の如き疾走でキャスターが追う。態勢を崩しつつ突き出された長槍に、するりと蛇のように杖が絡む。すう、と浅い呼吸が聞こえ、刹那。絶妙な手首のひねりによって、槍は上空に飛ばされていた。

ガラ空きになつた腹部を、キャスターの振るう杖が打ち抜く。規格外の打撃によって、灰色の外骨格に罅が入る。内臓を完膚なく潰され、意識を朦朧とさせたオルフェノクが、腹を押さえて大きく姿勢を崩した。弄ぶように、キャスターは一度後ろに下がり、杖を槍のように半身に構えた。

満ちる殺気に空間が歪む。獲物を仕留める笑み。そして短く息が吐かれた瞬間、敵の額、喉笛、鳩尾に、神速の一撃が叩き込まれた。

苦悶の声。勢いよく壁に打ちつけられた異形の敵を、円で囲むように、キャスターの指が複雑に蠢く。

原初のルーン。

虚空に描かれた文字が、キャスターの宣誓と同時に灼熱を纏い、噴き出した極大の爆炎が、轟音と共に闇を深く切り開いた。

膨大な熱波が中庭全体に行き渡る。夜の帳が眩い燐光に切り払われ、刹那の瞬間だけ、真昼の様相に成り代わる。そして、噴煙が晴れた後には、キャスターと、円状に融かされた分厚い堀の姿だけがぽつりと残っていた。

「クソツ、逃したか」

舌打ちを漏らしたキャスターを誰もが呆然と見やった。圧倒的という言葉すら生温い力。生物としての本能が、あの男は危険だと警告している。知らず退いた左足。偶発的に敵に産まれたその一瞬を見

逃さず、マシユはすかさず盾を構え直し、突撃を再開した。技量は負けていない。後は心胆だけ。その言を信じるならば、今が絶好の好機――！

雷光の速度で迫るマシユに対し、ソーシヤークオルフェノクは上段から繰り出す渾身の振り下ろしを以って応えた。斬撃が唸りを上げつつ空間を引き裂いて迫る。盾を掲げ、突き進む。ぶつかり合った剣と盾が、闇の中に火花を散らす。骨を貫く衝撃。大きく息を吸い込む。負けない、負けられない。奥歯を砕かんばかりに噛み締め、雄叫びと共に得物を弾き返した。生まれた好機に脳が撓んだ途端、背筋に耐え難い悪寒が走った。視界の端。

迫るは、もう一對の刃。

二刀。横からの一撃。完全に隙を突かれた形。思考が今さら早回しになるがもう遅い。

間に、合わない。

「――ッ!!」

斬られた。

肋骨にするりと入り込む異物。かろうじて機能した鎧の隙間から漏れ出す赤い液体。くの字に折れ曲がった自分の身体が、宙に浮くのをどこか他人事のように感じた。激痛で視界が白く眩む。熱い何か喉元をせり上がってくる。撒き散らされる血反吐。その飛沫の向こう側に見える、愉悦に歪む敵の顔。天高く振りかざされた、刃。灰色の輝き。避けられない死を確かに見た。

「おおおおっー!」

諦めかけたその時、雷鳴の如き咆哮が、マシユの意識を覚醒させた。眼下に過った、走る巧の姿。敵を見据えるその表情は、固い。病み上がりも良い所の身体は、思うように動いてはくれない。全身が熱く燃えている。息は荒く、すぐ側に転がっている死を意識せざるを得ない。だが、足を止める訳にはいかなかった。

「あの――馬鹿はっー!」

駆ける巧の肩先を、オルガマリーが罵声と共に放ったガンドが、音を立てて掠めた。疾る赤黒い光は、柄を握る灰色の掌に着弾。破裂音

と血玉が空中に散布され、零れ落ちた長剣が大きく音を立てる。駆け走る。繰り出された乱雑な刺突を、咄嗟に拾った針で受け止めようとするが堪えきれず、切先は肩に深々と突き刺さった。

肉を深々と抉られ、蹂躪される違和感に吐き気が止まらない。それでも、呻きながら腰にしがみついた。力を籠め、なぎ倒そうとするが——無理な話だった。自分も同じオルフェノクとはいえ、ほとんど病人と健常者の差に近い物が、相手との間にあつた。

嘲笑うかのような膝蹴りが、鳩尾に叩き込まれる。えずき、離れた巧の背中に、今度こそ突き刺そうと振り被られた剣。鈍い音が中天に響く。

その先端は、欠けていた。

疑問を浮かべた敵の頭上に陰が落ちる。咄嗟に上を向く。得物を振り切った反動に逆らわず、極限まで腰を捻り、ふたたび盾を大きく振りかざすマシユの姿が、ソーシャークオルフェノクの視界を埋め尽くした。今度こそ、決める。

「は、ああ——っ!!」

折れた切先が、宙に弧を描きつつ、地面に突き立つたと同時に、その一撃は、完全にソーシャークオルフェノクの脳髓を打ち砕いた。

○

その後、帰って寝ていたいという巧の願いは、オルガマリーに襟首を引つ掴まれる事で儂く散った。正直言えば、面倒くさくてたまらない巧であつたが、この異変にオルフェノクが関わっているとされた以上は、そうそう逃げ出す訳にもいかない状況になつていた。

空き家を出て、新都と深山町を繋ぐ大橋を目指すべく、廃街をひたすら歩き続ける。瓦礫が重なり、歩き辛いことこの上ない道を歩くのは、疲労も重なって想像以上に辛い。時折漂う焦げたにおいが、巧の神経をちりちりと焦がす。じくじくと痛む肩が、纏わりつく火に呼応するように熱くなる。思わず漏れた舌打ちに、マシユが過剰な反応を見せた。

「——あの、先輩。本当に大丈夫ですか」

何度目か数えるのも飽きた謝罪に、前を向いたまま、巧はうんざりした顔を見せた。

「わかったから。もう謝んな」

「でも、私のせいで」

「あのな」

自分が悪いと、何もかもを背負い込もうする自罰的な考え方が、巧は一番嫌いだった。それが、なんとなく木場勇治の在り方を思い出させるからだという事は、巧自身も気づいていない。

誰にも、責任はあるのだ。あの時飛び込んだのは、結果的に間違っていないかったにしろ、肩に怪我を負ったのは間拔けた自分の責任だ。だから、そうやって自分ばかりを責める必要など、本当はどこを探しても無いのだ。それなのにこのクソ真面目な少女は、すべて自分が悪いんですとばかりに頭を俯けるばかり。

——くそ。

ささくれだった気持ちもあつて、言葉を上手くく?げる事がどうしても出来ずにいる。この時ほど、口下手な自分を恨んだ事は無かった。喉仏をコールタールじみた何かが塞いでいるのが分かる。

「いい加減、鬱陶しいぞ」

自分でも狼狽してしまう鋭い声が飛び出た。ひう、と息を呑む声はやけに鮮明に聞こえる。罪悪感と焦燥感が入り混じったどす黒い気分が、胸を覆い包もうとした瞬間、

「あんまり気にする事無いわよ、マシユ。この大バカが、勝手に出て行ったのが悪いんだから」

巧の思考を遮るようにして、オルガマリーが辛辣にそう言った。

「ランサーの時もそうだったし……貴方、頭のどっかがおかしいんじゃないの?」

「お前にだけは言われたくない。アレ、もう少しで当たる所だったんだぞ」

「それは仕方ないじゃないっ。そうでもしなきゃ、貴方死んでたかも知れないのよ? むしろ、感謝の気持ちをもって接してほしいわね」

すうっと、一息入れて、

「貴方は心底わかってないようだから、一から教えてあげる。いい？
マスターの役割は、徹頭徹尾サーヴァントを補助する以外に無いの。貴方みたいに、庇う為に前線に出る大馬鹿なんか何処にもいないのよ。」

大体、さつきからずっと思ってたんだけど、貴方にはまず誠意が足りないの、誠意がっ。そこら辺をよく考えてから、私に感謝してみなさい」

「……」

突きつけられた指先をじっと見つめ、次にオルガマリーの顔にクスをキメた馬鹿を見るような視線を移してから、巧は力強く断言した。

「絶対、嫌だ」

「何でよっ！」

「お前に頭下げるなんて、死んでもごめんだ」

「このっ……!!」

背後に炎のエフェクトを生み出しつつ、オルガマリーがぐおーっと吼える。また面倒くさい事になるかと巧が身構えた時、控えめにマシユが話題を転換した。

「所長。カルデアと連絡を取らなくてもいいのですか？」

「そうだ、忘れてた——って何、貴方も取ってなかったの？」

オルガマリーの詰問に、マシユは言葉を詰まらせた。

「もちろん、何度か通信を試みたのですが、デミ・サーヴァントになった直後だからか、上手く魔術回路が回らず——すぐ後にライダーに襲われたのもあって、ここまで引き延ばしになっていました。それに、先輩とのレイラインも不明瞭だったみたいで——すみません」

「ふうん——ま、そんな状況じゃ仕方ないか。それじゃ、早くベースキャンプを設置しましょう。あっちの安否も気になるし。触媒は……貴方の盾を使うとして、まずは霊脈のターミナルを探さないとね。この街の場合は……何処かしら」

「所長の足元ですね」

「……………もちろん、分かっています、分かっています、分かっています、分かってたから。本当に。……なにその目は。言っとくけど、本当にわかってたからね！——本当だって言ってるでしょっ」

オルガマリーはなによまったくと文句を並べつつも、マシユを連れて手際よく準備を進める。する事がなく暇な巧がそれをぼうつと見ていると、不意に影が全身に覆い被さった。見上げれば、表現のしづらい表情を浮かべたキャスターの顔が近くにあった。注がれる視線。居心地が悪いどころではない。何故男同士で見つめ合わなければならぬのか。

「……何か用か」

「——いや、」

「じゃあジロジロ見んな、気持ち悪い」

巧の暴言にも応えず、キャスターは黙り込んでいる。ダメだ。付き合い切れない。空中に映し出された優男に対して、何やらぎやあぎやあ騒いでいるオルガマリーの元へ行こうとした巧の背筋を、

「——お前、何者だ？」

得体の知れない、怖気が走った。

キャスターの総身から立ち昇る絶大な魔力が、巧の生存本能を刺激している。人間ではない、尋常ならざる気配。喉元に収束する、指向性を持たされた殺意。油断していた。この男もまた、あのランサーのような存在である事を、巧は忘れていた。あまりにも、迂闊過ぎた。警鐘が鳴り響き、脳髓が灼ける。オルガマリーとマシユの背中が目に入る。まだ何も気づいていない。

コートに突っ込まれた巧の手が、自然と拳を形作る。狙うのなら心臓。だが、相手には到底理解できない力があって、しかもその威力はオルフェノクを塵一つ残さず消し飛ばしてしまう程。構わない。全身を焼き飛ばされながらも心臓を潰す。

ここで、倒せるか。

殺気立つ巧を見て、キャスターはようやく納得がいったかのように掌を叩いた。

「それだ」

「はっ。」

立ち込めた不穏な空気が、一瞬で霧散する。後に残ったのは、あつけらかんとしたキャスターと、何が何だか分からない巧の姿。キャスターは構わず言葉を続ける。

「普通の人間って奴ならな、今ぐらいの魔力を、この至近距離でまともに喰らっちゃえば、失神ぐらいはしちまうもんなんだ。オレと同じサーヴァントや魔術師は別としてな。それを坊主は何だ。え？ あわよくば反撃する気でいやがる。どう考えても普通じゃねえよ、てめえ。よっぽどの鈍感か、さもなけりや救いようのねえ大馬鹿か」

「……ひどい言い様だな」

「それに、ランサー相手にどう生き残ったかも疑問だ。お前の傷は、気の強えお嬢ちゃんの魔術でも、オレのルーン魔術でも治せなかった。つてこたあ、あの不死殺しをお前さんはまともに喰らった訳だが……奴が中途半端な所で獲物を逃がす奴じゃねえのは確かだ」

熱気を含ませた風が、二人の間を通り抜ける。黙り込む巧に構わず、キャスターは、間合いを測りかねるように言葉を続けた。

「それじゃあ、坊主が奴を——サーヴァントを撃退できる程の魔術師なのか。と言われりや違うよな。あの気の強い嬢ちゃんとはともかく、お前にはまるつきり魔力を感じない。嬢ちゃんを傷だらけのお前が背負ってたって事は、ランサーの奴は真っ先に唯一の戦力である嬢ちゃんを倒したって事だ。勿論、オレだってそうする。」

普通なら、嬢ちゃんが倒され、そして丸腰の一般人である坊主だけが残り、お前ら二人は仲良く石像になっている筈なんだ。それがどうだ？ 腹に穴が開いたり、内臓が零れ落ちてたりはしていたが、概ね五体満足で済んでいるときだ。——なあ、おまえマジで何なんだ？」

結局のところ、最後はそこに落ち着く事になった。隣で無愛想に黙っている少年。その正体が一体何なのか。キャスターは未だに見当がつかずにいた。膨れ上がる疑問は、いつしか黒い疑念に変わっていた。万が一という事もある。さっきの試しの牽制は、そうした意味も込めての物だった。

その不穏な気配を嗅ぎ取ったのか、巧はつまらなそうに顔を歪め

て、ぼそりと呟いた。

「さあな。それよかアンタこそ、何か隠してんじやないのか」

「ほお、オレが。何故？ そう思う根拠はあるのか？」

その時、はじめて巧はキャスターという男の存在を、真正面から見据えた。むき出しの野生を連想させる獰猛な気配。獲物を狙う肉食獣のように、爛々と紅く輝く瞳を気に入らないとばかりに睨みつけて、言い放った。

「気に入らねえんだよ、何となく。それで充分だろ」

自然と睨み合う形になった二人の間に、硬い沈黙が降り積もる。巧が拳を握り、キャスターが杖を動かした瞬間、オルガマリーの間抜けた怒声はその空気をつんざいた。気の抜けた二人の視線が交錯する。振り上げかけた拳の行方を無くして、巧は何もかも馬鹿らしくなってきた。

「……アホらし」

巧の声に、キャスターも頷いて杖を下ろした。

「そうだな。痛くもねえ腹の探り合いなんざ、時間を無駄にするだけだ」

「お前から吹っ掛けてきたんだだろうが」

「ま、そうカリカリせずにごうや。さっきも言った通り、互いに利益は一致してんだ。ならなるべく足並み揃えといった方が良いだろ」

「あのな……まあ、いいか」

蒸し返す方が面倒くさいと考え直した巧は、言葉をひっこめた。もつとも口論を選んだところで、どうしてか目の前の男に勝てる気は全くしない。それが無性に腹立たしい。

思わず漏れた溜め息。キャスターは巧の苦心の入った表情を見て鬱憤を晴らせたのか、大きく笑った。

○

『ええええっ！ 所長はともかくとして、君も生きていたのかいっ!?
なんてこった……カルデアは不死身の集まりか』

「どういう意味ですかっ！——それよりロマニ。帰ったらこいつ、どうにかしなさいよ。まるっきりの素人をこの重大任務に入れるなんて、一体何考えてんだか」

「おい、指差すな」

無遠慮な扱いに憤る巧をとことん無視する事に決めたオルガマリーに、目の前のロマニと呼ばれた男は首を傾げた。

『——あれ、所長ご存知なかったんですか？ 参ったなあ、アンダーソン君がてつきり知らせていたものだ』

「あいつかつ！……道理でこのザマね。アンダーソンは？」

『彼なら、臨時ボーナス貰って新車買いに行きましたよ。彼、当分は戻って来ないんじゃないかなあ』

「……あの、馬鹿は……」

頭を押さえて唸るオルガマリーを押し退けて、巧はかつたるような仕草で前に出る。

「それよりもだ。あんた、俺達は今すぐ帰れないのか」

単に帰りたくてたまらないだけの巧の言葉をどう曲解したのか、ロマンは深刻そうにしばらく考え込んで、

『今すぐは、厳しいだろうね。何せ、特異点Fは未だに修復されていない。その不安定な状態のまま再びレイシフトを行えば、意味消失が起きてしまう可能性も有り得る——何より、結果第一の所長が認めないだろうね』

「だろっうな」

半ば予想していたとはいえ、さすがに堪える。少し肩を落とした巧を慰めるように、

『だけど、そっちにはデミ・サーヴアントであるマシユとアニムスファイア当主の所長。それに、心強い協力者がいるようだし。よほどの事が無ければ、必ず帰還出来ると約束するよ』

「——アーチャーの野郎はともかく、セイバーはキャスターのオレじゃきついで」

黙り込んでいたキャスターから放たれた言葉に、オルガマリーは胡乱な目を向けた。

「……そういえば、まだ相手の真名を聞いてなかったわね。何度か戦ったような口振りだけど、まさか知ってるの？」

「あいつの宝具見りや、嫌でも分かる。王を選定する岩の剣、その二振り目。神代から続く歴史の海において、最も有名な聖剣の一つ」

「……まさか」

「——アーサー王、ですか」

その名前を聞いたマシユの眉が、驚きから僅かに顰められた。

「多分な。オレ以外の五騎がやられたのも、奴の宝具がでたらめに強力だったからだ。オレが言うのも何だが、ありや化け物だな」

「アーサー王——エクスカリバー、ですって？ そんなの、一種の神造兵装じゃない……！」

オルガマリーが思わず悲痛の声を上げると、キャスターの杖はマシユを指し示した。

「ま、オレから言わせりや、嬢ちゃんの盾も決して負けちゃいない。そいつはな、何があるかと絶対に砕けない盾だ。多分、セイバーの宝具にも対抗出来るだろうさ」

マシユに一同の視線が集中する。注目される事に慣れていないのか、すっかり困り果て、無言で巧に助けを求めてくる。しかし巧が自ら面倒ごとに首を突っ込む筈もない。非情にも逸らされた視線に、彼女はこの世の無常さを悟った。

沈み込んだ場の空気を切り替えるように、オルガマリーが掌を叩く。

「——とにかく今は、修復を最優先しましょう。私達はこれから特異点Fの原因を調査します。それで良いわねロマニ」

『分かりました。こっちも外部との連絡が取れば、すぐに物資を送ります。——藤丸君。マシユの事、よろしく頼むよ』

「……気が向いたらな」

巧のあまりにも気の無い返事を聞き、苦笑しながら男は消えていった。疲れた。見知らぬ他人との会話に疲労した肩を動かす。

「とりあえず、そのセイバーがいる場所に行きましょう。キャスター、貴方が道案内しなさいよ」

「へいへい、サーヴァント使いが荒いこって。お嬢ちゃん、ひよつとしてSMとかやってる?」

「どういう意味よっ!」

軽口を交わしつつ歩き出した二人についていこうとした所で、巧は立ち止まったマシユの気配に気づいた。振り向き、声をかける。

「どうした」

「……その、私は先輩のお邪魔になっていないかと」

またか。溜め息を吐き、がしがしと頭を掻き毟る。

「……もしかしておまえ、責めてもらいたいのか?」

巧の鋭い口調に、マシユは身を縮こませた。サーヴァントでありながら、守らなければならぬ筈のマスターに助けってもらってばかりいるこの状況。到底許せるはずがない、と彼女は心の底から思った。

しかし。

悲嘆に塗れた予想とは裏腹に、巧は俯き、眼を瞑るマシユの髪を乱雑にかきまわした。

「……あの、先輩?」

「よくやってるよ、おまえは」

ぼさついた髪をそのままに顔を上げれば、目を虚空に投げ、苦虫を噛み潰したような表情で、そう答える巧の姿があった。とことん上から目線なその態度は、ぶん殴られても文句は言えなかった。

しかし通常の巧を知る人間からすれば、天変地異もかくやと思われれる態度である。正直、こうして欠片でも素直になっている自分が、たまたまなく気持ち悪く感じた。逸らしていた眼を戻せば、マシユの驚いたような、呆気にとられたような奇妙な表情が視界に入った。

「……なんだよ」

「いえ。その……先輩もそういうことが言えたんだなと……あつ、違いますつ。今のは、言葉の綾というか、多少の語弊が混じったというか」

つい漏れた失言をぐいよぐいよと取り繕うマシユに、巧は少しだけ歩調を緩めて歩き出した。

「……置いてくぞ」

「——はいっ」

小走りでちよこちよことついてくる。まるでヒヨコの雛だ。うざったいが、無条件の信頼がどこかくすぐったく感じられた。

数メートル先で立ち止まっていた二人に追いついた。瞬間、焦ったロマンが空中に映し出された。

『——すまない！　すぐにそこから離れてくれっ!!』

「な、なによいきなりっ！　びっくりさせないでっ！」

『サーヴァントだ！　それに、反対側から高速反応っ!!　——ダメだ。もう近いっ!』

黒影。

反応する暇も無かった。まるで最初から傍にいたように、その黒い影は闇からその姿を現した。

放たれる、短刀。かろうじて対応したキャスターの右肩に近づいたそれは、見えない壁に阻まれたように弾かれ、音を立てて地面に落ちる。

「——ワリイな、アサシン。てめえの攻撃はオレにや通じねえよ」

キャスターの杖がまっすぐ向けられた先には、白骨を顔面に張りつけたアサシンの姿があった。そよぐ檻樓切れが、地面に陰影を作る。

「何故漂流者の肩を持つ、キャスター。貴様も馬鹿ではあるまい」

「お前らよりは万倍もマシだからだよ。元々オレ達や聖杯戦争してたんだ。なら、てめえらを先にぶっ潰すのは当然だろ？」

「——愚かな」

「それはてめえだろうがあっ!!」

濁流のような爆炎が、唐突に細身の影に向かって放たれた。しかし、回避。行き場を失くした炎がアスファルトを穿つ。立ちこめる噴煙に紛れて高速で接近するアサシンにマシユが反応。煙を切り裂いて迫る烈矢。難なく弾いたその先にある筈のアサシンの姿は、文字通り影も形も無くなっていった。

「——何処へ」

「くそが、みみっちいやり方ばっかしやがってよ」

背中を合わせて辺りを見渡す。あれだけ濃厚だった気配は、今や完

全にその姿を消し去っていた。

静寂が満ちる。呼吸だけが、荒れ果てた街の中をざわつかせる。誰かが、暗がりから覗き込んでいる感覚がする。

「——アレ、何？」

不意に聞こえた疑問の声。指された指先を見れば、アスファルトの間を縫って何かが高速で近づいていた。

何故か聞き慣れたエンジン音の判別がつく前に、その影は姿を見せた。

異形——ポークユパインオルフェノクは、その灰色の半身を酷く焼け爛らせながらも、こちらを萎える事無い憎悪の目つきで睨みつけている。それだけならまだいい。だが、

その腰には、巧がよく知る物が、見せびらかすかのように巻かされていた。

「な——！」

思わず漏れた、驚愕。

オルガマリーの訝し気な視線ももはや気にならない。開かれた携帯ツールにコードが着々と入力されていく。もはや一瞬すら遅い。

——『Standing By』

撃て、と言う前に撃っていた。

オルガマリーのガンドとキャスターの爆炎が、確実に到達する射線に乗った。今度こそ外さない。外してはいけない。

殺った。赤黒い光と光り輝く炎が、怪物を直撃する。

その直前に、

希望を打ち砕くひと言が、怪物の口から放たれた。

「——変身」

——『Complette』

折り畳まれた携帯がベルト中央部の空白に叩き込まれた。

瞬間、流体光子エネルギー——フォトンブラッドが携帯を装填したベルトから放たれ、ポークユパインオルフェノクの全身を包み込む。闇夜を深紅のフォトンストリームが切り裂いていく。ダイヤモンドに限りなく近い硬度を持つ特殊金属——ソルメタル315が金属織

維と化し、ソルフォームを形作った。

すべてが刹那。そして光が止み、

——超金属の仮面の騎士、ファイズがその姿を現した。

第六節 「Dead or Alive」

「——何、あれ」

何らかの生物を想像させる、灰色の異形——それだけならまだ、珍しくはない。魔術師の総本山とも言える時計塔には、神経の繋がりを疑ってしまうような姿形をした使い魔を、何十匹と飼育しているような変人も多くいる。だからこそオルガマリーは突然の襲撃にも、一瞬自分を見失っただけで——決して気絶などしてはいない——済んだのだ。

だが。

あれは、何だ？

コンピュータグラフィックスのような、現実から乖離したエフェクトが怪物の粗雑な姿を包み込んだ瞬間、そこには洗練された戦士の姿があった。金に輝く二つの眼が辺りを睥睨し、鋭く尖る銀の指先が、義手の馴染みを確かめているかのようにゆっくりと開閉される。全身を規則的に走る真紅のラインは、血脈のように脈動し続けた。

いったい、なにが、どうなって。

押し寄せる事態に茫然自失としたオルガマリー目掛けて、銃口が構えられる。閃光。数度のマズルフラッシュが焚かれた瞬間には既に、巧の身体は動いていた。立ち尽くしたままの細身の身体の腰を横抱き、押し倒す。三度、光が視界の端で瞬き、同時に黄金色の光弾が突っ立っていた場所を鋭く穿った。

連射。再び照準を合わせられた二人の前に、瞬時にマッシュが立ちはだかった。想定される衝撃に歯を食いしばる暇も無く、構えた盾に超高密度のフォトンブラッドが衝突する。轟音が唸る。凄まじい圧力が、円卓の隙間から溢れ出ようとしていた。抑え込めるか。否、抑え込む。鉛が纏わりついたような感覚に襲われながら、腕を上げる。碎けるような音と共に、濺んだ空に行き場を失くした光が散った。

「——ッ！」

一息の間髪すら入れさせず、第三射が襲い掛かる。光と鉄が弾ける甲高い音が、断続的に響き渡った。その合間に火球を放とうとしたキャスターに、ビルの隙間から急速に近づく影が一つ。——アサシン。気配遮断によつて反応が遅れたキャスターの肩に、懐から飛び出したダガーが、深く突き立てられた。抉られた肉片と血飛沫が舞う。呻きつつ振るわれた杖を嘲笑うように躲して、アサシンは再び闇の中へと消えていった。

「——あの、ヤロウ」

正確に筋を切られたキャスターの左腕が、力を失つたように垂れ下がった。血まみれのそれを見た巧は、へたりこんだオルガマリーの腕を掴んで、全速力で駆けた。急激な変化に、心臓が金槌で叩かれているように、強い拍動を繰り返す。たちまち湧き出す汗。荒い息遣いも、今だけは気にならない。

もぐようにして腕を引つ掴まれ、訳もわからず走りだしたオルガマリーが爆発したように叫んだ。

「いきなりっ、なにっ!!」

「喋んな、舌噛むぞっ!」

叫び返しつつ、後ろを振り返る。殿を守るようにしてついてくるマシユと血を垂れ流すキャスターの向こう側に、手持ち無沙汰にファイズフォンを弄っている敵の姿があった。

「——くそっ」

ここに来て、何も出来ない自分と逃げるしかない状況に、どうしようもなくムカッ腹が立った。しかし、オルフェノクが絡んでいたとはいえ、まさかベルトまで揃えていたとは。舌打ちした巧の表情に何かを感じ取ったのか、オルガマリーは細身の足に魔力を通して加速、全速力で走る巧の隣を容易に並走し始める。

「——いったい何なのよ、あいつはっ!　へんなベルト巻いてあんなのになるしっアサシンも出てくるしで、もうわけわかんない——っ!」

頭を掻きながら悲痛な叫びをあげたオルガマリーのすぐ横を、光弾が高速で掠めた。穿たれたコンクリートがあげる噴煙を切り裂

き、飛び出した少女の顔は涙と鼻水でぐしょぐしょに濡れていた。もはや恥も外聞も無くなったらしいその顔を見て、巧は少しだけ鬱憤を晴らせた。

「所長、一度落ち着きましよう」

「落ち着けるわけ、ないでしょうがっ!! 大体、藤丸っ。あなた何でいきなり逃げたつてのよっ。こっちはキャスターにキリエライトがいるんだから、あんなの一発で——まさか、あいつがこの二人より強いって言うの?」

「——さあな」

「はあっ?」

その短い返事に対して、オルガマリーは淑女が決してしてはならない顔を見せた。

そんなものが分かれば苦労しないと、巧は思う。

分からないが、侮ってはいけないという事だけは確かな事実だった。それはファイズギアと共に、永劫とも思える血みどろの戦場を戦い抜いた巧だからこそ、抱ける確信だった。

「ちよつと、それどうい——」

オルガマリーの怒声を切り裂くようにして、光弾が放たれる。キャスターは振り返らず、六角形の防御陣を張り巡らせるが、超高密度のフォトンブラッドは止まる気配を見せない。硝子が割れるような音と共に、周囲の大地が深々と穿たれる。

キャスターは舌打ちを鳴らしつつ、再び指を振るって防壁の構築を続けた。相手が使用するエネルギー体は、どうやらこちらと滅法相性が悪いらしい。尤も食らったところで、せいぜいが掠り傷程度だろうが、連続して食らえば数秒程度の足止めにはなるだろう。

そして、その数秒さえあれば、サーヴァントは容易に事を成せる。

ビルの隙間に激む闇から、黒い影が一つ。突如として噴き出した魔力に引き寄せられたのか、八つの短刀を先行させて、アサシンが肉薄する。髑髏に映し出された陰影が、嗤うような形を作った。だが遅い。マシユの振り回した盾が、接近する烈矢をまとめて薙ぎ払った。飛び散る火花。しかし、逃れた一刀が軌道を曲げつつ、少女のこめか

みを削り取る。遅れて出血。裂けた肉の割れ目から、生暖かい血液が噴き出した。

血を流しながらの一振り、風切り音を伴いつつ、迫る漆黒の外套を絡め取った。しかし、無意識に怯んでしまったためか、踏み込みが甘い。アサシンは身体を高速回転させて伸びた外套を引き千切り、跳び退って追撃を回避。着地したビルの外壁を、獣のような動きで走り始めた。

盾を構え直したマシユと、壁を走るアサシンの視線が交錯。泥化したせいで宝具は使えないが、唯一の脅威であるキャスターは負傷で左腕が使えない。残るは未熟極まりない半端者と、格好の獲物が二匹。片腕でも間に合う。一撃離脱。それが暗殺における最低限の鉄則であったが、脳髄で疼き続ける得体の知れない汚泥が、アサシンの思考を黒く濁らせていた。

間合いも測らず加速。奇声を上げ、弾丸のような速度で、アサシンが近づく。マシユの首筋を、ちりちりと薄汚れた殺気が焼き焦がす。片方の視界が鮮やかな鮮血に彩られる中、ほんの少しだけ躊躇ってから、必死の形相で駆ける少年をマシユは見た。跳ねる前髪の隙間から映る、深海を思わせる青色の瞳。風雨にさらされた巖のようにかきついた掌。

何度も、守ってもらった。

何度も、助けてもらった。

あの時、手を握ってもらった。

——それだけで、少女は覚悟を決めた。

急激な制動をかけられた靴底が、火花を散らしつつ悲鳴を上げる。刹那の反転。決意の眼差し。真正面から、アサシンに向き合う。すぐ後ろで、ぽつかりと死が口を開けたのが、はつきりと分かった。そこから絶えず吐き出される、恐怖というにおい。後ずさろうとする本能を、理性で叩き潰す。死んでも食い止めるつもりだった。

そして、前に踏み出すための蹴り足が地を噛んだ瞬間。

——その盾を、白い触手が絡め取った。

「――」

突如地面に縛りつけられた己が得物を呆然と見るマシユの全身に、不意の激痛が迸った。ハエトリグモの特質を持つ、ジャンピングスパイダーオルフェノクが放った糸が、瞬時に硬化化し、少女の肩を深く、貫いていた。怪物の唾液を引いた口元が大きくにやつく。皮膚に入り込んだ糸が、神経を乱暴に掻き混ぜていく。沈黙の後に訪れた激痛を前にして、少女の身体は耐えることが出来なかった。

倒れ込んだマシユの身体に、ジャンピングスパイダーは糸を振りかけていく。一瞬の間も無く、少女の四肢は白い枷に封じ込められた。

「——おいっ！」

思わず叫んだ巧の背後に、悲鳴。振り向けば、透明化していた異形——カメレオンの特質を持つ、カメレオンオルフェノクの気泡だらけの腕が、オルガマリーの細い首を掴んでいた。かはっ、と細い呻きがオルガマリーの口から零れる。咄嗟に伸ばした手は、繋がれる事なく、やがて巧とキャスターは四方を囲まれる形へと陥った。

荒い呼吸が、背後から聞こえる。背中を濡らす汗に、キャスターの肩から溢れ出る血液が混じっているような気がする。

「——大丈夫かよ」

「——ちつとばかり、面倒だな。こりゃ」

荒い呼吸の中でぼそり、と呟かれたキャスターの言葉。多分、本当にまずい状況に陥っているのだらうと、巧はキャスターの語意から判断した。

——やらなければ、ならないのかもしれない。

心の奥底で、いまだに揺蕩っている決断。オルフェノクに、なる。だがそれは、オルガマリーやマシユとの間に出来つつあった大切な何かを、この手で壊してしまう事を意味していた。

——それでも、ここで死なせるよりは、何億倍もマシだ。

止める、と言わんばかりに四指が蠢く。制止にも似たそれを、握り潰すようにして、巧は拳を握り締めた。

白い残影を暗中に引きつつ、サイガは逸れる事無くアーチャーに迫る。どうやら見えているらしい。ならば、隠れる必要も無くなった。しかし番えた長剣を放つ前に引鉄が引かれ、サイガ専用が開発された飛行バツクパツク——フライングアタツカーのマズルから光弾が発射された。濃縮されたフォトンブラッドが、唸りを上げて闇を裂く。凄まじい圧力。想定以上に速い。あれはまずい。瞬時にそう判断し、アーチャーは後方の枝に飛び移った。標的を見失ったフォトンブラッド弾は、アーチャーの狙撃拠点であった太い枝を粉々に打ち砕き、その勢いを微塵とも緩めず、虚空へと飛び去っていった。

その破壊の爪痕を見つめるアーチャーに、奇妙な影が覆い被さった。殆ど、無意識の動きだった。飛びつくようにして跳躍した瞬間、先程までいた着地点を蒼白い光が埋め尽くした。上空からの狙撃。視界の端に映る、白い煙。どうやらあれだけの威力を連射可能らしい。多少は手古摺らせてくれそうだ。皮肉な笑みを浮かべつつ、敵の戦力を修正する。再び跳躍。梢を根こそぎ切り払わんばかりに、所構わず撃ち放たれる光弾を避ける。木の間を滑るように動くアーチャーに対して、サイガは焦る表情を見せず、冷徹に光弾をばら撒いていく。

生い茂る葉の隙間から、かすかに見える敵の姿。枝々の間を飛び移りながら、アーチャーは更に考察を深めていく。マズルが唸った回数から顧みて、弾数はおおよそ120発、滞空時間はあれだけの制動をしておきながら、今もなお速度を緩ませない事から、恐らく無限に近いだろう。自立供給。厄介だが、つけこむ手は無くもない。

アーチャーの眼が、サイガのフライングアタツカーを見る。ロングレンジで不利ならば、ミドルレンジに持ち込むべし。

サイガの単眼が、木々の狭間から抜け出そうとする影を映した。すかさず撃鉄を下ろす。秒間120発で放たれるエネルギー弾が、風船のように無防備に浮かんだ敵影を、文字通り塵一つ残さず消し飛ばした。仕事は終わった。仮面の下の男の顔が、物足りなさを感じさせるような表情を作る。

その、背後。

「――トレース、
投影、開始」

冷酷な男の声。サイガが己が不覚を悟るが、気づいた瞬間には、もう遅い。迅速な投影。アーチャーの両手に携えられた二刀が、殺気を含む鈍い光を放った。ここで、死ぬ。サイガの首を断つようにして、干将莫邪が空を走る。視界の端に映る、防御の為の動作。間に合う訳が無い。

そして二刀はサイガの首を、
砕かれた。

「――何？」

刀身が無くなった二刀を、呆然と見やるアーチャーの脇腹に、躊躇なくサイガの横蹴りが入った。骨が折れる音。脇腹の感覚が根こそぎ掻き消えた気がする。

叫んだアーチャーの顔面に、右。咄嗟に避ける。頬を掠めた金属質の拳が、柄を握り締める手を叩く軌道に乗った。激痛。鉄を叩き折る様な音と共に、アーチャーの右腕の人差し指と小指が、ありえない方向に押し曲げられる。苦し紛れに振るった腕は止められ、腹部に蹴りが叩き込まれた。そのまま、踏み台にするような形で、サイガは空へと昇っていく。

無様な形で着地する。周囲を見回せば、年季の入った寺社の風景があった。いつの間にか、柳洞寺まで押し込まれていたらしい。

暴れる痛覚を抑え込み、上空を見る。およそ高度百メートルの位置に、敵は陣取っている。背筋を走る悪寒。駆け出すと同時に、再び砲弾がばら撒かれ始めた。身を隠す遮蔽物も無くなった今では、凶弾を避ける術はこの身ひとつしかない。投影する暇も、この状況下では皆無に等しい。

降り注ぐ光の雨が、アーチャーの逃走経路を潰していく。しかしアーチャーは人知を超えた感覚で、地上を埋め尽くす光を捌きつづける。矢避けの加護でもあれば、この程度の弾幕はもつと楽に済んだのだろうが、生憎と持ち合わせていない。脳裡に過った蒼い男を吹き消し、アーチャーは柳洞寺のただっ広い境内を駆け抜け、逆転の手段を模索する。

直撃さえしなければ、大した傷はつけられないだろう。幸いにも装着者は無類の狙撃手というわけでもないらしい。しかし、それは同時に千日手の到来を意味していた。それだけはまずい、とアーチャーは思う。

空に過った青い光。あれが恐らく、レフと名乗る男が言った、漂流者とやらなのだろう。

あれはいずれ、大空洞に辿り着く。そういう確信があった。だが、それだけは何としてでも、阻止しなければならぬ。こんな場所で、雑兵と戯れている暇など無い。

柳洞寺の壁を打ち壊し、異形の群れが押し寄せる。

先頭を走る異形——バイソンの特質を持つ、バイソンオルフェノクが、巨大な大鎚を振り降ろす。疾走。大柄な身体を砲弾に対する盾に仕立て上げ、滑るようにして懐に飛び込む。

投影。生み出された夫婦剣が、神速の勢いで振るわれ、バイソンの両脇腹に潜り込み、極彩色の弧を空に描いた。

断末魔すら響かない。たちまち零れ出す大量の内臓と体液が、アーチャーの白髪を暗褐色に染め上げる。しかしアーチャーは止まらず、切り裂き分かれた上半身を蹴り飛ばす。即席の砲弾と化したそれは、後方から迫ろうとした異形を巻き込み、その脳髓を擂鉢状に潰した。

そして、起き上がったアーチャーの手には既に、弓が握られていた。引き絞られた剣が、螺旋状に歪んだ。アーチャーの全身から溢れ出す膨大な魔力が、雷撃のように空間をうねり、伝わる。遠目にもそれとなく分かるほどの圧力が、徐々に矢先に収束していく。それを見たサイガは焦りを帯びた光弾を放つが、赤い騎士の姿勢は微塵も揺らぐ事は無い。

ただ、静かな暗闇が辺りを満たしていくのを、アーチャーは感じていた。

狙うは、虚空の支配者。油断はしない。警戒もしない。撃つ。ただそれだけを、脳に思考させる。

狙うは必中。穿つは心臓。

今度こそ、逃しはしない。

「I am the bone of my sword」

呪文の詠唱。自己の変革。想像するは、最強の己。

それ以外には、何もいらぬ。

機は熟した。開かれた双眸。

真紅の騎士は、白銀の流星を完全に捉えた。

——撃ち落とす。

「カ
ラド
ボルグ
II
偽・螺旋剣」

アーチャーの指が、柄から離され、

瞬間、世界が消し飛んだ。

第七節 「ファイズ復活」

傷口から神経をじわじわと侵食していくジャンピングスパイダーの糸は、意思を持たされた蠅のように、緩やかな速度でマシユ・キリエライトの意識を削りつつあった。粘ついた糸が皮膚と筋肉の隙間を通るたびに、焼け爛れたような鋭い痛みが、断続的に走り抜ける。痛みを少しでも逃そうとする身体はしかし、四肢を封じられたことによつて、芋虫のように蠢くことしかできない。

すぐ傍にある筈の盾は、掴もうとする度に立ち昇る湯気のごとく、掌を透けて消えていく。何も出来ない。走るための足もある、武器を振るうための腕もある。なのに、身体は一つも言う事を聞くこと無く。朦朧とする意識の中で、痛みの鋭い光だけが、かろうじて、マシユ・キリエライトという一個を形作っていた。

——声だけが、聞こえている。

「——なあ、水原。こいつら、どうするよ」

澱んだ失意に沈むマシユの頭を踏みつけながら、吐き捨てるようにして、蜘蛛の異形の口腔が複雑に動く。大小四つの眼球は神経質なまでに、絶え間なく辺りを見回していた。その手には、奪い取った円卓が握られている。

待つてましたといわんばかりに、カメレオンオルフェノクは湿った舌先を顔面に這わせながら、籠った口調で喋り出した。

「だからさあ、せつかくの生身の女なんだぜえ。犯しちまおうよう」
「黙れ、喋るな。てめえには聞いてねえ」

辛辣な返答にも構わず、避役の異形はみっともなく喚き続けた。
「なあなあなあああつ、冴子さんはさ、生け捕りにしろつて言っただけなんだろう？ だつ、だつたらよ、別におれらの肉便器にしちまつても、いいじゃねえかよう」

「ぎやあぎやあ喚くなつ。クソが、てめえの声は癩に障るんだよ！」

発狂にも似た怒声が、森閑とした廃墟に響き、オルガマリーの身体が僅かに震えた。腕の中で起きた微かな動きを逃さず感じた異形は、

瘡蓋だらけの相貌を醜悪に歪め、てらてらと粘液が生臭くぬめる舌で、少女の白い肌を執拗に舐めずった。

「うひひっ、いい子にしてろよなあ。そうすりゃ、あとでたっぷり、おれ様の極太チンポに奉公させてやつからさあ」

「——ひ、う」

饑えた肉欲の気配が、少女の肢体に、蛇のように絡みついた。見る者すべてに嫌悪感を抱かせずにはいられない存在。怯えが混ざった表情と共に、絞めつけられた少女の喉から淡い呻きが漏れた。

助けを求めて、彷徨う視線。今にも溢れ出そうとしている涙。それでも泣き喚きだけはしないと、みつともなく、しかし必死に噛み締められた唇。

もはや、我慢の限界だった。

「——この、クソ野郎」

爪を深く食い込ませた掌の隙間から、熱く燃え盛る血が滴り落ちた。視界が紅い憎悪で隙間なく燃えている。全身を苛む止まない疼痛の奥底から、それがゆつくりと顔を出そうとしていた。

オルフェノクである以上、生涯をかけて向き合わなければならぬ、獰悪な破壊衝動。

殺意より陰惨に穢れているそれは、飽和点を越えて溢れ出そうとしていた。

悪態を聞き咎めたカメレオンオルフェノクが、大袈裟な仕草で巧に顔を向ける。途端、無機質な石像のような顔面に、不愉快な笑みが刻まれたように見えた。

「あああゝっ？　なんだてめえはあつ？　ただの人間ごときが、おれ様オルフェノクに向かって、調子こいてんじゃねえよっ、ボケっ！」
知性を感じない間延びした声が、唾を撒き散らしながら吐き出される。聞くに堪えない雑音を遮るようにして、水原と呼ばれた男——
ファイズは、ファイズフォンの銃口を押し黙るキャスターへと向けた。金色の眼が、憤怒を宿して光る。

「俺としちゃ、その青髪野郎に用があるんだがな」

「ほほお、ご指名されるたあ光栄だ。だが、オレがアンタに何かしでか

したか？」

銃口を向けられているにも関わらず、平然とした態度を貫くキャスターに苛立ったのか、ファイズは嵐のようになり立てた。

「とぼけんじゃねえっ！ てめえのせいどこちとら仲間が減ったんだ。一体、どう落とし前つけてくれるんだ？ あ？」

「お前らの事情なんざ、オレは知ったこつちやねえんだがな。……つうかよ、元々仕掛けてきたのはてめえらの方だろうが。自分の尻も拭けねえのか？ おまえ。情けねえ」

嘲笑混じりで放たれたキャスターの言葉に、ぶちりと、何かが切れた音が確かに聞こえた。

「……わかった。てめえだけは殺す。絶対楽には死なせやしねえ、じわじわと、苦しませて殺してやる」

逆恨みに近い水原の破綻した言動に話にならないと判断し、キャスターが後ろ手で密かにルーンを描こうとしたと同時に、負傷した側の肩を、散弾のようにばら撒かれたアサシンの短剣が貫いた。呻きが飛び出さなかったのは、ほとんど意地に近い。苦痛を湛えた鮮紅の瞳が、錆びついた街路灯の上で陽炎のように揺らめく黒影を睨みつけた。

「アサシン、テメエは……」

懐から再び数本の短剣を抜き取り、アサシンは嘎れた声で肅々と宣言した。

「指一本でも動かせば、次は、その男を殺す」

枯木にも似たやせ細った黒い指先が、ゆつくりと巧を指す。途端、洗練された殺意の棘が、巧の脊椎を何度も突き刺した。白い髑髏の仮面は、相も変わらず濃い静謐を湛えている。しかしその奥にある筈の瞳が、じつとりと検分するかのようこちらを見ているのを、巧は感じていた。

「——おい、アサシン。おまえ、最初からこいつらとグルだったのか？」

キャスターの言葉に、アサシンはからからと嗤った。

「まさか。全くの初見だ」

「だったら、何でこんなのに肩入れしてんだ」

「貴様の言を借りるとするなら、今は聖杯戦争中なのだろう？ 勝ち目のある陣営側に付くのは当然のこと。それに、サーヴァントである貴様を殺すのが最優先ではないのか？ ——まさか、己が発言も覚えていられないほどの低脳だったとはな。呆れたぞ、キャスター」

「——テメエ、後悔するなよ」

「それはこちらの台詞だ。漂流者についたことを後悔して、死ね」

暗器が冴え冴えとした月光を照り返し、鈍い光を放つ。瘦軀から滲みだす殺意が、闇を渡り歩き、巧達を取り囲もうとしている。決めた。躊躇している猶予もない。変身するしかない。巧が覚悟を決め、指先から紋様が浮かび上がるうとした瞬間、殺気が産みだそうとした異変に気づいた異形が、倒れ込んだマシユの首を素早く掴み、見せつけるようにして高く持ち上げた。少女の苦しむ呻き声が、巧の動きを僅かに怯ませた。

「そこのガキ。妙な事してみろ、こいつ殺すぞ」

「——っ」

そのひと言で動きを止められた巧の背後で、避役は涎を垂らしつつ声高に叫んだ。

「待てよ藤川っ！ そのクソガキはおれが殺すんだっ！ ——大人に、舐めた態度取りやがってよお。てめえみたいなのは、生きる価値もねえクズ中のクズ。産まれるだけ無駄だった、ゴミクズのカスだってんだ！ そんな粗大ゴミのてめえはな、このおれ様が、直々に駆除してやるっ」

「……良いのかよ、水原」

「好きにさせとけ。どうせ、ゴミを掃除するってのは変わらねえんだからよ」

振り向きもせず、ファイズはそう吐き捨てた。

オルガマリーへの性欲よりも、巧への殺意の方が優っているのか。与えられた不可視の殺害許可を、宝物を触るようにして脳内で弄びつつ、嬉々として近づこうとする異形の足を、少女の小さな声が止めた。
「——してください」

「あ？」

「訂正、してください」

喉から絞り出された声は、細く、薄い。だが、そこには確かな強い意志が、宿っていた。

「なにを、訂正するって？」

異形が、ひきつけでも起こしたように噛みながら問う。

「先輩は、わたしを助けてくれました」

——例えそれが、どんなにか弱い物だったとしても。

舐めるようにして、全てが炎に押し流されていったのをよく覚えて
いる。閃光と共に走り抜けた、筆舌に尽くしがたい衝撃。その後
残った物といえ、掌にこびりついた灰と、散らばる瓦礫の山と、見
渡す限りの火焰。皮膚は黒く焦げ、吐き出されるか細い吐息は、烈火
の如く燃える瘴氣混じりの黒煙に飲まれた。乾いた喉から出るのは
叫び声ではなく、すぐ足元まで迫っている死を予期して怯む喘ぎ声。
押し潰された下半身からは痛みすら感じず、流れ出す血液と薄れ始め
ていた感覚と共にあって、何か大切な物まで抜け落ちていくような幻
想すら覚えていた。

そして、黒く濁った死の足音が、耳元で鳴り響いた瞬間。

「先輩は——わたしの手を、握ってくださいました」

滔々と紡がれるマシユの言葉に共鳴するように、円卓が震え始め
る。白く清らかな光が、廃ビルにこびりついた闇を切り払っていく。
異変に気づいたジャンピングスパイダーが、満身の力を腕に籠めた。
何度聞いても飽きない音——首が折れる瞬間の、灌木を叩き割ったよ
うな音が、自らの耳孔を震わせてくれるはずだった。

だが、

「それを、あなた達に否定なんてさせない——！」

光が、満ちた。

盾を爆心地とした、絶大な魔力——それは次第に、聖なる牙城へと
その形を成していった。決して許せない悪、暗雲の如く立ち込める困
難、津波のように押し寄せてくるそれら全てを食い止める為に打ち建
てられた、騎士■■■■のかつてありし故郷——。

分厚い暗黒に覆われた天蓋を、白亜の逆光が塗り潰す。

瀑布のように雪崩れ込む轟音と風の中で、少女は確かにそれを見た。

誰もいない荒野に突き立てられた、傷だらけの円卓――。

それは、まるで正義の御旗のごとく、少女の胸の中で高々と掲げられていた。

簡単な事だった、と少女はそう思う。誰かを守りたいと、ただひたすらに思っていたらよかった。

そうすれば、己の中にいる誰かは必ず応えてくれる。

いや――ずっと、彼はそう言ってくれていたのだ。

「宝具――断片、展開」

眩かれた、一小節。

瞬間、爆発と見紛う衝撃が、異形達の身体を走り抜けた。対悪宝具。邪悪なるものを拒む、絶対無比なる無敵の城壁。例え発現できたのが、僅かな断片だけだったとしても、その絶大な効力は弱まる気配を欠片ほども見せず。途方も無く巨大な何かにぶつかられたようにして、四つの影は痛みを意識する間も無く、壁に凄まじい勢いで叩きつけられた。

「――っ！」

闇の中で、確かに巧には見えた。宙に浮く、オルガマリーの身体。間に合え。

半ば身体を投げ出す勢いで、予測位置に飛び込んだ。間に合った。傷だらけになりながらも、巧は投げ出されたオルガマリーの身体を両手を広げて受け止めると、腕の中の少女に向かって、案ずるかのよう
に問うた。

「大丈夫か」

オルガマリーは、ずらず、と鼻を嚙りながら、途切れ途切れに答えた。

「……………うん」

「そうか」

素っ気無く返答し、全身に怒りの気配を纏わせて起き上がるファイ

ズの姿を見て、素早く飛び退った。その時、視界の端に、倒れ込んだオートバジンが入った。その有様に、腹の底から苛立ちを覚える。いい加減にしろ。限界まで腕を伸ばし、遙か先に見える横倒しの鉄塊を、潰すようにして握り締める。半分以上は、賭けだった。だが、信じていた。

呼べば、必ず来ると。

果たして、

「——来いっ!!」

男の雄叫びに、

——鉄騎は、応えた。

フュールコンバーターとブレインズコンバーターに内在されたソルグリセリンが加速度的に爆発、サスペンドされていた次世代高速CPU・スマートPCIVの自律神経が一斉に復活を遂げた。刹那、可変型バリアブルビークルはその白銀の車体を、戦闘形態——バトルモードに変形させた。

「なん——だと!」

瓦礫を蹴飛ばしてファイズが驚愕の声をあげた刹那、その胸部に、オートバジンの鉄拳が突き刺さった。ひび割れていた壁に更なる衝撃が走り、ファイズの身体が深々と奥底にめり込む。ソルメタル315製の金属装甲が、装着者が耐え切れない損壊を検知し、即座に変身が解除された。オートバジンは奪い取るように、落ちたファイズギアを握り締め、飛翔。脚部から発射される高圧ガスを撒き散らしつつ、巧の前に降り立った。

「——何だ、こいつは」

キャスターが杖を向けつつ、呆然と口を開いた。巧は振り返りもせず、簡素に答えた。

「味方だ」

「これが? ……何かあるとは思ってたが、まさか、こんな物だったとは」

オルガマリーも呆気にとられてばかりと大口を開いている。巧は何度も見慣れているから驚きこそしないが、それでもどうやって変形

しているのか、この期に及んでもまったく見当がつかなかった。

だがそれでも、来た。来たのだ。

不意に緩みそうになった頬を誤魔化すように、巧はオートバジンを小突いた。

「おまえ、遅いんだよ」

電子音が軽快に響く。鉄騎はその言葉に応えるようにして、巧の前にベルトを差し出した。

——長かった。

ただひたすらに、そう思う。時間にすれば、たった数時間かもしれない。だが、いつの間にか、知らない場所において。頭がおかしい出来事に遭遇して。正直言えば、うんざりだった。今すぐ帰って寝たいという気持ちには、今でも変わらない。だが、

こいつは、俺に戦えと言っている。

ファイズギアを手にとって、腰に巻きつけた。馴染み深い暖かさが、全身に染み渡っていく。

「……おまえら、よくも好き放題やってくれやがったな」

慣れた仕草でファイズフォンを開き、コードを入力し始める。一つボタンを押す度に、身体が自然と戦闘態勢に入る。三度、響いた電子音。

『Standing By』

「——きつちり、借りを返してやる」

高々と、天に掲げられた右腕。

そして、希望の時を告げる一節が、放たれた。

「変身っ!!」

『Complete』

○

「——ふじ、まるっ?」

オルガマリーの呆気にとられた声が聞こえ、ファイズは微かに首を傾かせた。そして馴染ませるように、手を小刻みにスナップする。

「この野っ」

飛び掛かったカメレオンオルフェノクの顔面に、渾身の右が入った。鼻っ柱をへし折られ、上体を反らした異形が鼻血を垂らしつつ、戸惑ったように立ち止まる。やがて、憎悪の咆哮。啞内から連続して吐き出される溶解液。遅すぎる。仮面の騎士は滑るようにして避けつつ、極限まで敵に接近する。極まった、潮合。ファイズの左フックが脇腹に突き刺さり、肋骨を粉々に叩き割った。苦痛に呻く間も与えず、腹部に膝を入れた。ファイズはなおも追撃を続ける。崩れるようにして屈んだ敵の腹を蹴って立たせ、再び顔面に右を入れた。嵐のような拳打が異形に放たれる。殴っている最中、不意に、オルガマリーの泣き顔を思い出した。放り出すようにして、敵を突き放す。開いた、間合い。振りかぶった、右脚。

そして巧は全力で、敵の股間を蹴り潰した。?!?!?!?!?

「イ——アががががぎガアツツツツツ」

耳を塞ぐ絶叫が轟いた。?!?!?!?!?

ぶちゆり、と柔らかい何かが弾ける音が、その中でも確かに聞こえた。続く悲鳴。そのまま蹴り上げて、宙に浮かせた。敵の視界が旋回し、地と宙が逆転する。積み重なり続ける痛みの波濤で、異形はもはや意識も失えなかつた。

吐き出される吐瀉物混じりの反吐を避けもせず、ファイズは首を掴む。そして、躊躇なく敵の脳天を地面に叩きつけた。

アスファルトに頭部をめり込ませた敵を見る。もはや、戦えまい。残るは、三体。

闇に紛れて、アサシンがファイズに高速で迫った。何故か、生かしておいてはならないと、本能が訴えているからだ。しかし、キヤスターの炎がアサシンの進路を遮るようにして吹き荒れた。燃える外套を取り払い、アサシンは怒りの咆哮をキヤスターにぶつけた。

「——貴様！」

「テメエにやたつぷり借りがあるんだ。そう簡単に行かせる訳ねえだろうがよおっ!!」

背後で争う両者に紛れるようにして、炎の隙間から、ジャンピング

スパイダーの毒糸がファイズの腕に絡みついた。構わない。装甲を透かし染みつく神経毒の感覚にも怯まず、渾身の咆哮と共に敵を手繰り寄せた。炎の壁を突き破り、蜘蛛の異形が節々を焦がしながらその姿を見せる。同時に疾駆。一瞬で懐に辿り着いた。焦る顔面に、右、と見せかけた。簡単なフェイント。しかし凄まじい殺気が、強制的にその両腕をあげさせた。空いた腹部への蹴りが炸裂する。破裂音と共に、蜘蛛の内臓が潰れた。吹き飛ぶ敵影。僅かに、逃走の気配が鼻を漂う。

——決して、逃がさない。
ここで潰す。

ファイズはファイズギア・クレードルに装着されているデジタルカメラ型パンチングユニット——ファイズショットにミッションメモリーをセットする。同時に、ミッションメモリーを抜き取られたファイズフォンを開き、エンターキーを叩き潰すように押した。

『Ready——Exceeded Charge』

それは、断罪の電子音だった。

血脈のように全身を走るフォトンストリームが、その輝きを次第に増していく。鮮血を思わせる真紅の閃光が、右腕に絡みついた白糸を瞬時に溶かした。そして、ファイズの拳が、黄金の光を纏う。

成った。

「てめえはあああああっ!!!」

怒り狂ったジャンピングスパイダーが踊りかかる。応じるように、ファイズも突撃を開始した。疾走するその姿は、黄金色の流星だった。

徐々に縮まる両者の間合い。やがて、交錯の時が訪れる。スロームーシヨンになった視界の中で、巧の意識は更に先鋭化されていく。もつと深く。もつと速く。

そして、

確かにその拳は、敵を貫いた。

ファイズ、必殺の拳撃。

「——ぐ、が」

——グランインパクト。

φの巨大な紋章が、異形の背後に浮かぶ。小さい呻き。そして、ジャンピングスパイダーはただの灰の塊となって崩れた。

「ひっ、」

自分に向けられた、無機質なまでの輝きを放つ金色の複眼にポーキュパインは心底から怯え、ずるずると後ずさり、やがて堰を切られたように駆け出した。情けない悲鳴をあげつつ、思考する。まだ手はある。あの気に喰わない面をした用心棒——レオを呼べば、帝王のベルトさえあれば、事は容易く済むのだ。そもそもあんな低級のベルトさえ使わなければ、おれは、このおれが、こんなクソどもに、負けるはず、が——

「おい」

闇から伸ばされた腕が、ポーキュパインの肩を掴んだ。そして、凄まじい握力で振り向かせられる。

最期に映った、拳。

「ちよつとま」

そして、キャスターの炎はアサシンを焼き尽くし。

ほぼ同時に、ファイズの一撃が、ポーキュパインを打ち抜いた。

○

「——これは、一体どういうこと」

詰問するような口調のオルガマリーに、巧は視線を合わせなかった。

未だに涙目なのが恥ずかしいのか、目を合わせれば殺すとまで言われた。だが、涙目もクソも鼻水を垂らした泣き顔まで見てしまったのだから、もう手遅れなんじゃないかとは思ったが、また面倒な事になると考え直して、巧は指示に肅々と従った。何故か正座させられているのは全く分からないが、ヒステリックを起こされるよりははるかにマシだと無理やり思い込む。

「ちよつと、藤丸」

押し黙る巧に業を煮やしているのか、オルガマリーはイラつきを隠せず、ヒールをかつかつと鳴らし続けている。その隣では、事態の推移を面白そうに見るキャスターと、傷を治療されつつ、心配げにこちらを見るマシユの姿があった。キャスターは絶対殴ると今決めた。

「こらっ、藤丸っ!!」

「……なんだよ」

渋々といった感じで答えると、予想通り、オルガマリーは怒声を以って返した。

「だから、これは一体何なのかって聞いているのよっ!」

そういうとオルガマリーは、オートバジンのシートの上に乗せられたファイズギアを叩いた。そして、くううと呻いた。勢いよく叩き過ぎたのか、想定外の痛みと屈辱に震える瞳がこちらを睨む。

「……ベルトに、あの変な怪物。それとその……バイク? ……ともかく、あなたにはどこがおかしい所があるとは思っていたけれど、もはや看過できません。さあ、説明しなさいっ。一から十まで、全部っ!!」

「だから何度も言っただろうが。それはファイズで、あれはオルフェノクだ」

巧のあまりに簡素すぎる説明に、オルガマリーは困り果てたように頭を抱えた。

「それはさっき聞きましたっ! わたしが聞きたいのは、あなたがどうしてあのベルトを使えるって事を、今の今まで黙っていたってことっ!!」

「手元に無かったんだから、しょうがねえだろ」

「そういう問題じゃないっ!! いい? わたし達は今、追い詰められているの。そんな時になって、仲間に重大な隠し事されてみなさい。どう思う?」

「好きにさせとけ」

「……だからあっ!!」

「まあまあ、落ち着けよ嬢ちゃん」

さすがにこれ以上熱くしてはいけないと、キャスターが二人の間に割り込んだ。

「よく考えてみる、事情は後でいくらでも説明してもらえる。それに、それなりの戦力が増えたってのは吉報じゃねえか。オレに、盾の嬢ちゃん。それにベルトの坊主を加えりや、セイバーとアーチャーなんぞちよちよいのちよいだ」

「あなたは楽観的過ぎるのよっ。それに大体、こいつが戦力になるってのはまだ決まったわけじゃないでしょ。もし臆病風に吹かれて逃げ出したりなんてされたら、どうするのよ」

「それは、有り得ません」

唾のように黙り込んでいたマッシュが、明々とした調子で告げた。

「……何で」

「先輩が、先輩だからです。それに、所長も心の底では、先輩が逃げ出すような人なんて、思っていないんじゃないですか？」

「……それは、まあ」

それを認めるのが癪なのだ、オルガマリーは子供ののように唇を尖らした。やがて、溜め息をつき、いまだに正座を続けている巧に視線を向けた。

「……分かりました。とにかく、今はあなたを戦力として認めます。その代わり、帰ったらカルデアできつちり話を聞かせてもらいますから。覚悟しておくように」

「ああ」

生返事を返す。説明がどうこうよりも、足が痛くてたまらなかつた。そもそも、こんな瓦礫だらけの場所で正座をやらかす馬鹿はこの世の何処にもいない。立ち上がると、かすかな眩暈が襲った。

「それと、さつきは……ありがとう」

耳元で鳴り響くモスキート音が、言葉の語尾を削り取った。小声のせいもあって、まったく聞こえなかった。眉を顰めて、聞き返す。

「何だって？」

「だから……もう、いいっ」

巧の顔を悔し気に睨みつけてから、オルガマリーはふんと鼻を鳴ら

して歩き出した。その後ろを控えめな速度でマシユがついていく。

「……何なんだ、あいつ」

肩を怒らせて歩いていているオルガマリーの背を見て、巧は女性という人種に存在する摩訶不思議さを改めて感じた。憤りと疑問を渦巻かせていると、キヤスターが肩に手を回してきた。明らかに面白がっている面だった。

「おまえはもうちつと女心を理解しねえとなあ。そんなんじや、いい女に一生縁が持てねえぞ」

「いらねえ。離せ」

「ええ、おい。なんだ、オレの師匠でも紹介してやろうか？」

「だから、離せって。重いんだよおまえはっ！」

何がそんなに面白いのか、巧の再三の怒声にも構わず、キヤスターは笑い続けた。こいつ酔ってんのか、とすら思う。元の身体ならともかく、今の小柄な身体では抗うことすらままならない。巧が理不尽な力に甘んじようとしたその時、

背筋を、

殺気が、

走って。

「——マジかよ」

ぽつりと、キヤスターの声。

巧も、まったく同じ事を思っていた。わずかに聞こえる風切り音。超高速で近づいてくるなにかが引き起こしている予兆。

それは死だった。

今まで出会った誰よりも濃密な死を思わせる圧力。オルフェノクすら遠く及ばない。自然が引き起こす災厄全てを、無理やり人型に封じ込めたような。

その気配が極まった、刹那。

巧達の背後に、その巨軀は降り立った。

黒い泥を振りまきながら、それはゆっくりと立ち上がった。全身を包む鉄塊のような筋肉。大樹の如き太さを誇る腕。磨き抜かれた巖のような拳。肩に担がれているのは、人間では触れることすらままな

らない、長大な斧剣。

振り乱した長髪が揺らぎ、その奥に潜む眼球がじろりと巧達を一瞥する。その動作だけでも圧倒された。一つ一つの動きに、高密度の殺意が宿っていた。心臓が拍動し、呼吸は荒くなる。全身の細胞が退けと命じている。得体の知れない怖気が、背筋を高速で揺るがしながら駆け上がっていく。

「バーサーカー……」

巧の耳に、聞き慣れない言葉が響いた。

「デメエ、あそこから動かないんじゃないのか」

その場に留めるように、キャスターはバーサーカーに話しかけていく。その背後では、神速の勢いでルーンが編まれていた。間に合うか。巧も退がりつつ、オートバジンのエンジンをかける。

呼吸すら留める刹那。

ゆっくりと口が開かれ、

世界を震わせる咆哮が、荘厳と放たれた。

第八節 「駆け抜ける鉄騎」

ごう、と風が唸り、ともすれば掠りかねない距離を、巨大な瓦礫が通り過ぎていった。

数秒後、着弾。粉塵が舞い上がり、巨大な震動が地面を伝って、荒れ果てた高架道路を奔るオートバジンの車体を震わせた。

大きく跳ねたりアから、オルガマリーの声無き悲鳴が飛び出す。身体に回されたか細い腕が、過剰なまでに締めつけを強くする。自分の肋骨が鈍く軋む音が一瞬間こえた。こみ上げるような痛みが走る。

——こいつ、わざとやっつてんのかっ！

悪態混じりにそう怒鳴ろうとしたが、そんな地味な嫌がらせをしている余裕がこの女に有るわけが無いと考え直し、巧は暴れ狂っているメーターを、八つ当たりするように睨んだ。200キロを少し超えた辺りで、長針は狂ったメトロノームのように揺れ動いている。まだ、足りないのか。焦燥が大きく煮えたぎりながら募っていく。

振り返らずとも、感じられた。津波の如く押し寄せる、純然たる殺意。

圧倒的な質量を持って迫る殺意の大元——バーサーカーは、その巨体に似合わぬ敏捷性をもって、巧達を執拗に追跡し続けていた。視覚か、聴覚か、それとも嗅覚か。滝のように全身を覆っている赤褐色の泥に塗れた相貌からは判別できない。空間を引き裂くようにして振るわれる斧剣のほとんどが、まったく見当違いの方向を切り裂いている事から、少なくともこちらを正確に認識出来ているわけでは無いらしい。

が、それでも相当な脅威である事には変わりなかった。剣筋と呼ぶにはあまりにも粗雑な名残が、背後をちらつく度に、巧は死をこれ以上ないほど身近に感じていた。その上、投げ放たれる瓦礫は、徐々にその精密さを増しているときている。いつそ何もかもを投げ出せればどれほど楽か。

「——すび、すびどをつ、スピードを、落としてっ！ 落としなさいっ!! 藤丸っ！ わたし、ほんとにもう限界、だからっ!!」

風を割いて、オルガマリーの叫びが轟く。追従するように、半笑いのロマンの声が通信機から飛び出した。

『確かにこれは飛ばし過ぎだっ！ 200キロ超えだなんて、ちよつといびられただけで吐いてしまう虚弱体質の所長に耐えられる訳が無い!』

「ロマニイ!!」

「いいから黙ってる気が散るっ!」

オルガマリーの悲鳴を振り切るように巧はギアを上げて、更に加速。全開まで振り絞る。

ビルの谷間をどよめいている炎が、道路に蔓延る暗闇を払ってくれていた。吹きつけてくる熱気に汗ばんだ掌で、ぬめるグリップを強く握り締める。眼下を過るアスファルトは次第に流線状へと融けていき、競うようにオートバジンの速度は加速的に膨れ上がっていく。絶えず鳴り響く駆動音。乾ききった車道に、タイヤが規則的に轍を刻んでいく。跳ね上げられた砂利が宙を舞う。風を薄く切る疾走感はいつしか、分厚い風の膜を無理やりぶち破る、暴力的な物に成り果てていた。構わずしがみつくと遠心力を強引にねじ伏せて、無人の道路を右へ左へと縦横無尽に駆け抜け続ける。

だが、やはりと言うべきか、逃れられなかった。小さく歯噛みしながら、バックミラーを睨みつける。

バーサーカーは目に見えるほどの瘴気を纏いながら、相も変わらず追跡を続けていた。酩酊者を思わせる、ふらついた足取り。しかし、どうやっても振り切ることが出来ないその影は、逃れられない悪夢が頭の中から這い出してきたようにも思える。

「——クソ」

高速で流れゆく景色に悪態を吐いて、頭に湧いた馬鹿げた妄想を振り払う。瞬間、ともすれば吹き飛びかねない意識の中、背筋に感じた集束する殺気。まずい。咄嗟にハンドルを右に切る。だが悪寒は追隨してきた。——間に合わない。

そして、マシユの怒号とロマンの叫びが重なり、突風が荒れ狂っている鼓膜を鋭く貫いた。

『八時方角——』

「——来ますっ!!」

咆哮。

鉄杭の如く鋭利に角張った瓦礫を通りざまに拾い上げ、間も持たず狂戦士は、ほんの一呼吸で投擲した。正しい姿勢も糞もない、力任せの一投。だがバーサーカーの突出した凄まじい膂力は、ただの瓦礫一片を、絶対的な破壊力を内含する絶殺の突槍へと変貌させた。

「わたしが止めま——」

言葉を途中で貫いて、音速を超えた衝撃が、咄嗟に掲げられた少女の円卓に突き刺さった。衝撃。世界が一瞬消えた。鼓膜に怒号にも似た爆音が破裂。瞬間、意識を取り戻したマシユの両腕に、脳髓を焼き尽くす激痛が走り抜けた。指先は焼失し、視界は一瞬で破滅の白濁に覆われた。脳髓が灼け、金槌で叩き割られたような頭痛。ぷつ、と何処かの神経が断裂する音が聞こえ、皮膚から沸騰せんばかりに煮え立った血液が勢いよく噴出する。生臭い血の芳しい香りに混じって、懐かしい死の匂いが、じわりと臭った。脳裏に浮かんだ、黒い言葉。死。

「——ふ、ぐ、ぐうううあああ、ああああっ!!」

感覚すら散り散りに千切れた腕を死ぬ気で動かした。ここで死ぬ訳にはいかない。地面に突き刺さった盾の一端が、壮絶な音階を世界に刻み込む。地面を削る靴の踵が、無数の火花を散らす。僅かに緩んだ、勢い。今しかない。臍下丹田に全身の気力を込めて、盾を殴るように振り抜いた。乱雑にいなされ行き場を無くした瓦礫が、高速で傍らのビルに突っ込む。轟音と同時に撒き散らされる砂塵。大きく、指先が震える。岩石のように強張っていた神経が一気に緩む。思わず取り落としそうになった盾をあわてて握り直した。

命を拾った。

数千、数万分の一。いやそれ以上低い確率で、自分は生還という結果を勝ち取れた。

安堵を込めて、大きく深呼吸をしたマシユの、血涙の滲んだ淡い紫紺の瞳に、

黒く、濁る。

『——マシユ!』

影が——

「——A u s u z !!」

キャスターの杖先から、特大の炎弾が放たれた。濃密な呪は紅蓮に燃える火線を細長く引きつつ、直撃。至近距離からの砲撃を無防備に食らい、黒い鉄塊は後方に吹き飛ばされた。キャスターは崩れ折れたマシユの身体を横抱くと、すぐさま飛び退いた。直後に二人がいた空間を、斧剣が薙ぐ。噴煙を突き破って現れた鉄塊の如き面輪に、撤退の意思は欠片も見られず。憤怒に彩られた咆哮が、夜空に雄々しく轟いた。

「——だからランサーの方が良かったってんだ。杖だけじゃ——仕留めきれねえんだよ!」

文句と共に杖が振るわれ、空間に八つの文言が並び立つ。直後、爆炎。アスファルトを舐め尽くすようにして、紅い濁流が目標物に殺到する。しかし、狂戦士は歯牙にもかけない。

瓦礫を蹴り上げて即座の盾を造り、爆発と共に散らばった破片を、暴風と化した斧剣が薙いだ。塊が、散弾となつて迫る。巧は振り向く事なく、ハンドルを一段と強く握り、無茶な軌道に対する悲鳴混じりの抗議を一切無視して、車体を左右に振って躲し続ける。小雨のように降り注ぐ礫が、アスファルトを鋭く穿つ。

「ロマンニっ!! アレの解析はもう済んだのっ!?!」

オルガマリーの甲高い声に、ロマンは刺されたように呻いた。

『泥にまみれて判別できないんだ!。これは、いや、泥の影響か? ——』

——とにかく、今のバーサーカーは受肉してる状態に近いから、神秘の宿っていない攻撃も通用する筈だっ!。……たぶん』

「そんな事は聞いてないっ!」

「しつかりしろよ軟弱男っ!」

『な、軟弱男って……ひどい……』

オルガマリー とキャスターの遠慮ない罵倒が飛び交う中、再び飛来した瓦礫を、何とか立ち直ったマシユの盾が叩き落とした。同時に、血に濡れた少女の顔に絶望にも似た驚愕が混じる。

「どうしたっ!」

「先輩いけませんっ、この先は——!」

その声に、張り詰めていた巧の反射神経は即座に反応を見せた。遅れて視覚が追いつき、吹きつける風で乾いた眼球が、不平混じりに前方を視認する。

思わず、眉を顰めた。

闇夜を透かして浮かんだ道路の間は、底無しの暗闇に引きずり込まれてしまったように、ぽっかりと穴が開いていた。折れ曲がった鉄骨を粗雑な断面から曝け出し、ひび割れたアスファルトの間から吐瀉物にも似た砂塵を断続的に吐き出している。向こう岸までの距離など、概算するまでも無い。結論などどうに分かりきっていた。

——無理だ。

「——あんなの、無理に決まってるじゃないっ!」

巧とほぼ同時に結論に至ったオルガマリーの悲痛な叫びが、風を切って虚しく響く。キャスターが苦い舌打ちを鳴らした。

「野郎、これを狙ってやがったのか? ……泥臭えして、浅知恵働かせてくれやがる」

「……あの泥は、一体何なんですか?」

マシユの問いに、キャスターは溜め息をついて、

「オレも詳しくは分からん。聖杯が何かしら関係してるのは確実だが、アンタらの言う人理焼却って奴も関わりあるかもしれねえ。——だが、一つだけ確かなのは、ありやもうオレが知ってるバーサーカーじゃねえって事だ。」

理性も無く、信念も無く、技量も無く、誇りも無い。残ってるのは聖杯を手に入れる為に、全部皆殺しにしなきゃ気の済まないクソつたれた本能——サーヴァントじゃねえよ、奴は。英霊に成り切れなかった、搾り滓みてえなもんだ」

低く唸るように吐き出されたキャスターの言葉の端々には、あから

さまざまな嫌悪が滲んでいた。自分でもその事に気づいたのか、取り直すようにして咳払いをする。

「とにかく、退路は無いんだ。こうなりや、ここで迎え撃つしかねえ。……盾の嬢ちゃん。あんた、城みてえなアレ、もう一度出せるか？」
「……分かります。あの時は、ほぼ無意識でしたから。……欠片、のような物はあるのですが」

——多分、出せない。

そういう確信があった。あの時何を思考し、何を実行したのかすら、塵一つとして憶えていなかった。あれをやってみせたのは、ほとんど自分ではない誰かだったと、マシユは今になってそう思う。もう一度やってみせろと言われても、全く出来る気がしない。残っていると言ってみせた断片すらも、あるかどうかもわからない、蜃気楼のような物に等しい。

扉を開くための取っ手は確かに見えている。

掴みさえすれば、きつと成せる。

——だが、掴もうとすればするほど、それは遠のき、消えていくばかり。

行き詰まった事態の打破を見込めない空虚な雰囲気が漂い始め、やがてマシユとキャスターの視線は、決断を急ぎ立てるかのようになり、不可視の実体をもって巧に突き刺さった。視線を全身で受けながら巧は思う。あまり、猶予は無いだろう。緩やかに迫りつつある断崖が、いつそ嫌味なまでに教えてくれていた。

一拍の呼吸すら許されない状況の中。

だが、巧は無言だった。

「——先輩？」

マシユが小声で呟く。キャスターは横目で様子を窺う。オルガマリーは反応しない巧を訝しむ。

それでも、巧はしばし無言でいた。

止めろと。出来るわけがないと、心の何処かで、そう囁いている自分がいるのがわかる。今なら、まだ引き返せるだろう。キャスターが言う通りここで立ち止まり、背水の陣で戦えば、ひよつとすれば生き

残れるかもしれない。だがそれは、無限に広がる茫漠とした砂漠の中から、たった一粒の砂金を見つけたす難事に等しい。巧は半ば確信している。間違いなく、無駄死にするだけだと。

までもで正常な神経を持つ人間ならば、そもそもこんな選択肢すら思い浮かべはしない筈だ。否定する訳にもいかなない怯えが、背を這いずっている。少し手を伸ばせば触れられそうなほど、確実な死が近くにある。両手に纏わりつく倦怠感が極限まで高まり、ハンドルを握る巧の手を、ゆっくりと緩ませようとした瞬間。

——鼓舞するように、低いエグゾーストノイズが鳴り響いた。

「……おまえ」

オートバジンは、それ以上何もしなかった。激しい振動と共に、巧が望む動きをひたすらに続けている。それはまるで、乾巧が下す決断など疾うに分かっていると、宣言しているように見えた。

「……そうだな」

独りごち、苦笑と共に澱んだ思考を脳から叩き出す。

ウジウジ考えるなど、性に合わなかった。そうだった。元より俺に引き退るという選択肢など、ありはしなかったのだ。全身にこびりついている筈の無数の灰を思い出す。

——誰かの命を、踏みにじったあの瞬間から。

辿れる道は、ただひとつ。泣いても叫んでも、それしかないと言うのなら。

俺は——

「——ねえ、藤丸っ！ あんたこの期に及んでまだ寝ぼけてんのっ!？」

「キヤスター」

「なんだ？」

がなりたてるオルガマリーを無視して投げかけられた巧の言葉に、キヤスターは一瞬だけ正気を疑うような目つきをし、やがて獰猛な笑みを端正な相貌に刻んだ。

「……おまえ、正気の沙汰じゃねえな。よくもまあそんな事を」

「出来るか？」

「へッ、オレを誰だと思ってやがる。アルスターの大英雄、クー・フリー

リンだぞ？ それぐらい朝飯前にもならねえよ」

「頼む」

キヤスターは両眼を閉じて、得体の知れない文言を唱え始めた。次いで巧は、マシユに視線を送る。キがつくほど真面目かつ頑固な少女を納得させるには骨が折れそうだったが、マシユはただ巧の眼を見て、しつかと頷いた。それだけで充分だった。

すべての準備は整った。ハンドルを握り締めようとした巧の耳に、オルガマリーの声が届いた。

「ちよつと、あなた達、何考えてるの？ 何する気？」

蚊帳の外にされている苛立ちと、急速に進められていく事態に対する焦燥が入り混じった情けないその声に、巧は、ただひと言だけしか言わなかった。

「——しつかり、つかまつてろ」

「何を——」

言ってる、と続く筈だった言葉は、無常にも虚空の中へと消えた。加速。

急激な速度の上昇に遅れて、オルガマリーの顔面が巧の背中に叩きつけられた。無視。握り潰す程に締められたハンドルが、エンジンに壮絶な過負荷をかけ、不穏な唸りを上げさせる。それも無視。地面に不可視の線が高速で刻まれていく。すぐ傍まで迫っていた魔物の姿が、急速に遠ざかっていく。その代償として、寸前まで迫る断崖。もはや、手が届く位置にあった。まだまだ。最後の最後、限界まで振り絞る。意識が白熱し、鉄騎と己が一体と化した。世界が流線状に融け始める。強い意志を宿した轍が砂塵の飛沫を上げて、灰色の海を断ち割っていく。

「——まさか、まさか、まさかつ！ 藤丸っ!!」

「その——まさかだ」

意識を取り戻し、己がおかれている状態を把握したオルガマリーの脳髓に、まさかやる訳が無いと、暢気な意見が浮かぶ。悪い冗談だと、ほんの少しからかっただけだと、返ってくる筈の答えを待ちわびた。

返って来なかった。

そして、巧とオルガマリーを乗せたオートバジンは一瞬の静寂の後、加速した衝撃を伴って、

空を、
駆けた。

「
ーッ
!!!!!!!」

オルガマリーの喉から飛び出した悲鳴は臨界点を超えて、常人の喉では到底出せないだろう超音波じみた物となっていた。はつきり言って五月蠅すぎる。だが構わない。耳なんて潰れてしまえばいい。鼓膜を破らんばかりの音声の中で、キヤスターの極限まで練られた濃厚な魔力が、向こう側の橋桁を木端微塵に打ち砕いた轟音と、橋脚諸共に瓦礫の海へと飲み込まれていくバーサーカーの無念の叫びが聞こえた。

残ったのは、ただ一つ。

届くか。――否、

届かせる。

中空に橋を架けるように、車輪が虚しい空転を幾度となく繰り返す。届けと、力強く願う。だが願うだけで叶うのなら、ここまで世界は苦勞しなかっただろう。巧とオルガマリーを乗せて、駆けた鉄騎は刹那の銀翼を散らそうとしていた。急速に近づく地面、渦巻く炎の中に、伸ばされる死神の腕を確かに見た。

――せめて、こいつだけでも。

巧の手がオルガマリーの襟首をつかむ。渾身の膂力を込めて、持ち上げようとしたその時、

オートバジンの後輪を、円卓が弾き飛ばした。

雲の上を歩いているような、現実味を感じられない浮遊感から一転。引き戻された巧は我に返ると、荒れ狂う機体を抑えつけ、アクセルを強く捻る。大きく弧を描いて、前輪が断崖ぎりぎりの部分を噛み、そこを基点として車体が大きく円の軌跡を地面に刻む。数秒の沈

黙。やがて、オートバジンはその役目を終えたように、ヘッドライトの灯りを消した。

乗り、切れた。

「——は、あ」

強張っていた神経が解かれて、全身を弛緩させた巧は思わず溜め息を吐いた。今度こそ本当に死ぬと覚悟した。これまで何度も死ぬような目には合ってきたが、今ほどそれを身近に感じたことは無い。自分の無謀さに思わず倒れ込みそうになったのを必死にこらえて、傍らに降り立ったマシユを見やる。膝につき、荒れた息を吐き出している。

「——ありがとな」

巧は、自分が思った以上に素直に礼が言えたことに驚き、何となく決まり悪い気持ちで頬を掻いた。

「——当たり前です。わたしは、先輩のサーヴァントですからっ」

僅かに目を見開いた後、誇らしげに胸を張る。荒廃した街に似つかわしくない、和やかな雰囲気が始めた中、腰を抜かしてしがみついていたオルガマリーがいきなり大声を上げた。

「この、大バカあ——っ!! もうほんとにしんっじられない

っ!!」

耳を塞ぐ暇などある訳が無く、至近距離で直接喰らった巧の耳朶に、キ——ン、と金槌でぶん殴られたような、鋭い耳鳴りが奔り抜けた。一瞬、視界が白く染まり、わんわんと脳髓を金切り声が反響する。

「——うるせえっ!」

堪りかねた巧の、腹の底からの怒声にも負けずに、オルガマリーは怒鳴り返した。

「ぜっつっつっつっつたいあんたの運転するバイクにはもう乗らないっ! ありえないっ! あのね、バイクってのは、道路を走るために造られたの! 間違っても断崖絶壁を飛び越えるために造られたんじゃないっ!! このバカっ! バカバカバカバカバカっ!! 大体、落ちたらどうするつもりだったのよっ!」

「成功したから良いだろうが。それより離れる。熱い」

「あんたのせいで動けないのよ!!」

本人は精一杯ドスを利かせているつもりなのだろうが、しがみついているせいでいまいち締まらない。うんざりした巧が腰に巻きつけられた両腕を無理やり振りほどいていると、いつの間にもいたのか——キャストが杖で肩を叩きつつ、巧達の様子を面白げに眺めていた。「お二人さん、痴話喧嘩もいいが、そろそろ動かなきゃまずいぜ。オレも少し、疲れたんでな」

「あなたは黙ってなさいっ! ……でも、確かにそうね。あれだけでバーサーカーが止まるとは、思えないし」

怒りでぐつぐつと煮え立っている頭を冷やして、オルガマリーは積み重なった瓦礫の山を見た。暴れた子供が玩具箱を引っくり返した後のように、乱雑に積み上げられた大小様々の瓦礫が、ちよつとした小丘を形作っている。一体、どれだけの規模を誇る魔術を使ったのだろうか。そして、橋を半壊させるだけの大魔術を使っておきながら、少し疲れた程度で済んでいる目の前の男もやはり、サーヴァント——超常の存在なのだ。

真名は判明していないが、恐らくはバーサーカーもそういった名のある英霊の一人に違いないのだろう。あれだけの質量をまともに喰らっておきながら、隙間から響く唸りに鬨りは一切見られない事に背筋を震わせた。しかし、その存在意義を根底から歪めてしまうあの泥は、一体何なのだろうか。なぜ、キャストは泥に塗れていないのか。冬木に一体何があったのか。

——何故か、踏み込んでほならないような気がした。

「どうした」

物思いに耽る少女を訝しげに巧が見る。何でもないとならぬと煩わしげに手を払って、オルガマリーは瓦礫の山を無表情に見るキャストに問いかけた。

「……それより、これからどうする気? これだけやっても無理なら、バーサーカーはわたし達じゃ倒せないし。それに、アーチャーとセイバーまで残ってるんでしょ?」

「さて……どうするかねえ」

考え込んでいたキヤスターが不意に首を上げて、燃え盛るビルの群れを見る。追従するように視線を向けると、蒼白い流星が遙か天上目掛けて雲を裂いていた。

「あれは……」

「アーチャーか。……よし、良い考えを思いついた」

「……ものすごく嫌な予感がするから一応聞いておくけど、どんな」

無数に連なるビルが生み出す炎の壁。その先にある柳洞寺を確かに見つめて、キヤスターは笑った。

「バケモンに、バケモン。サーヴァントには、サーヴァント。なら泥野郎には、泥野郎をぶつけるってな」

第九節 「泥に染まるは」

極大の魔力を宿した偽・螺旋剣は、分厚い雲をかき消して、柳洞寺の上空に妖しく煌めく月を曝け出した。

大半を根こそぎ消し飛ばされたフライングアタッカーを見たサイガが、無機質な単眼に計り知れない驚愕を映しつつ、徐々に高度を下げていく。直撃はどうか避けられたとしても、その余波は充分と堪能したのか。その装甲には、大量の傷を刻み込まれていた。飛行手段を失った騎士は、羽を失った羽虫のように空から転げ落ちて行く。

いくら頑丈な装甲を着込んでいたとしても、人間には到底耐えきれない衝撃が待つ高さ。だが、それはまともな人間ならの話だった。相手は、人で無しの異形。例えば人の皮を被っていたとしても、その身から溢れ出る凄惨なまでの血臭が、アーチャーに躊躇を捨てさせた。急激な魔力上昇により、かすかにノイズが奔る魔力回路を強引に呼び覚まして、再び矢をつがえた。決して外さない。ここで殺す。無機質な機械のように淀みのない、男の一射が頭蓋を捉えようとしていた時。

指を離そうとしたアーチャーの耳に、

突如、

——『Complette』

無視できない、電子音が響いた。

「!?!」

迫る、閃光。

身体を横殴りに穿った光弾の色は、サイガと同色の蒼白。しかし込められたエネルギーの量は一桁違っている。瞬時に反応していた右手が防御壁を作り出していたが、かろうじて編み上げられた程度では、止められない威力をそれは持っていた。アーチャーは減速した光弾を脇腹に喰らい、砂利を巻き上げながら吹き飛ばす。

みしり、と身体が軋む。脇が掻き消えた気さえしたが、大した負傷ではない。砕けたあばらから発せられる鋭い痛みの信号を無視して

起き上がり、

そして男は、見た。

闇に浮かぶ、眼窩のような漆黒の銃口を。

「——貴様は」

その先に浮かぶのは、橙の灯火を宿した冷徹な眼光。

金属質な体軀を三又に走るブライトストリームは、サイガより一段階上の、高出力のフォトンブラッドが流れている証。

ドライバーに装着されているのは、△の印が刻まれたミツシヨンメモリー。

その印を持つ者は、この世でただ一人だけ。

人知を超えた力を揮う、超金属の仮面騎士が一人。

またの名を——デルタと云う。

「……」

小首を傾げながら狙いを定めているその視線に、アーチャーは空中で碎かれた短剣の残骸を想念し、不意に笑みを浮かべた。

「そうか……空中で私の獲物を砕いてくれたのも、君の仕業か。なるほど、良い眼をしている。それとも——その腰に付けたみつももない玩具を褒めた方が良いのか？」

皮肉めいた問い掛けにも、デルタは答えなかった。

「——もう少し、余裕を持ってみてはどうだ？」

身の内に湧いた疲労を吐き捨てると、アーチャーは双剣を構え直した。敵の狙いは、恐らく眉間。額を焼きつける殺気は、いつそ笑い出したくなる程に分かりやすい。撃たせる前に殺すと、本能と思考が合致する。近距離。どちらが先に動くか。それだけに神経を集中させる。

「——」

摺り足で間合いを計りながら、アーチャーはゆっくりと動き始めた。敵はあくまで不動を貫き、その銃口は一欠片とも揺らぐ事は無い。仮面で隠されている以上、感覚のみで相手の射を見抜くしかなかった。上等。乾いた唇を湿らせ、アーチャーは深く息を吐き、腰を落として、いつでも飛びかかれる態勢を整えた。

ざり、と靴底が砂利を踏みしめて、小さく音を立てる。耳障りこの上なかったが、今気にしている暇は無い。

目測、あと3メートルも無い。無意識の内に、激突の気配を察知した。

握り締める短剣。魔力を通した眼を限界まで見開き、デルタの掌を注視する。やがて、

ゆっくりと、

引き金に

指が、

か

「ッ———！」

かる直前には既に、アーチャーは動いていた。砂利の爆発と指の動きはほぼ同時。赤影を宙に残した瞬間、引き金が引かれ、暗渠をくり抜いて、破壊の砲弾が眼前に迫った。予測と同じ射線。だが速過ぎる。出力が違う。強引に身体を傾けて回避。轟音を引き連れて掠めた光弾は、顔の側面を焼きつつ、右耳を削ぎ落とした。

搔き筆りたくなるような激痛を無視して、体勢を立て直し、標的までの最短距離を砲弾のように駆け抜ける。距離、もはや半歩も無い。間近に迫る鉄の臭い。その瞬間、男の背が大きく隆起し、人知を超えた膂力がその両の腕に宿った。渾身の咆哮。力を込めて、夫婦剣を大きく上段に振り被った。煌めきを放つ白刃が、唸りを上げて闇を斬り裂く。回避不能。装甲を両袈裟に斬り裂く太刀筋を予想し、事実その通りの運命を辿ろうとする刃を、

鈍い轟音と共に、巨岩を叩いたような感触が弾き飛ばした。

その一撃を弾かれた衝撃に、思わず動きが硬直する。そして視界の端に灰色の影が過ぎつたと同時に、背後を襲い来る悪寒。直感に従って膝をかめたその直後、驟雨を思わせる剣閃が、頭皮を掠めていった。散らされた白髪が宙を舞う。隙だらけの射撃は罨。湧き出す後悔と自己嫌悪に蓋をして、飛び退ったアーチャーの懐を逃さず、その異形は決死の間合いに踏み込んだ。

月光に照らし出された硬質の皮膚が、胡乱な光沢を宿して輝く。

その全身に施されているのは海老の意匠——すなわち異形の正体は、影山冴子の変異する、ロブスターオルフェノクに他ならなかった。微かな呼吸と音無しの踏み込みと共に放たれた、眼球を狙う刺突を受け流し、逆手に持ち替えた莫耶を頭蓋目がけ振り下ろした。しかし、異形は両手に装着した手甲を交差して防ぐ。ぶつかり合った鋼が、闇に包まれた境内に点々と火花を散らした。弾かれた右腕を右の横薙ぎへと繋げ、コンマ遅れて、左腕が蛇のようにしなる斬撃を下段から繰り出す。顎の如き双刃が異形の胴を両断せんと迫る。

その直前に、回復したサイガの右拳が、男の頭蓋を砕かんとばかりに振り抜かれた。

反応は出来る。だが、間に合うか。咄嗟に下げた頭部の表面を、決死の破壊力を秘めたルナメタル製の拳が通り過ぎていく。頭髪が数本引き千切られる感覚。しかしサイガも避けられることを予期していたのか、伸ばした右腕を肘打ちへと変化させると、アーチャーの無防備な背骨に一撃を加えた。ぐむ、と低い呻き。束の間襲う硬直を見逃さずに、サイガは先ほどの鬱憤を晴らすように、右、左、右と嵐めいた連打を加えていく。

間合いに踏み込んだ瞬間放たれた左掌は、いつそ分かりやすいほどの囷。足取りと眼球の揺らめきから判断する本命は——水月を狙った一撃必殺の盤肘。腰を沈めたサイガは、アーチャーの予想をなぞるかのように複雑な足取りを描くと、分厚い水月目がけて鋭い肘撃を送った。予期していたアーチャーはわざと足を崩し、身体を右に傾けて回避。上体を泳がせしかし軸足だけは地を強固に噛んだまま、ガラ空き之首筋を狙って剣撃を放った。殺った。確信。だがその直前で、意識の隙間を縫ったサイガの右の二指が、アーチャーの人中を躊躇なく貫いた。

かッ——と無様な呼吸を洩らすアーチャーの視界の隅に、迫りくる拳。避けられない、と思った瞬間にはすでに、勝機を見極めたサイガの渾身のアッパーが男の脇腹に突き刺さっていた。粉々に砕けたアバラが肺に突き刺さる嫌な触感。粘ついた血液を吐き出したアーチャーの姿に、仮面の下に隠された男の顔が冷徹な笑みを浮かべる。

腰の回転を蹴り足の動きへと繋いで、サイガは鋭いローをアーチャーの腿に叩き込む。崩れおちながらも放たれた豪速の反撃をバツクスでテップで躲すと、バツクスから抜き放ったサイガフォンをブラスタモードへと移行させて、アーチャーの頭蓋目がけて数発の光弾を放った。次いで、後方に回っていたデルタが逃走経路を防ぐ射撃、わざと残された逃げ道から、ロブスターオルフェノクが決死の斬撃を放つ。

回避不能。確実な死が約束された攻撃。

それを、男は打ち砕く。

——ひと息、吐いて、

そして、アーチャーの両手に握られた双刃が人知を超えた軌道を描いて、破壊の光を掻き消した。

「なっ——！」

場に満ちる驚愕とある種の恐怖。

それでも、無傷とはいられなかった。干将・莫耶は根元から粉け散り、不意に走った鈍痛と肉と血が焦げる得も言えぬ悪臭。見れば、碎き損ねていたフォトンブラッドの破片が、両腕を隅々まで黒く焼き焦がしていた。笑って、無視。元より負傷は覚悟の上である。例え四肢を失ったとしても、構いはしない。立ち塞がる障害は全て取り除く。それが、サーヴァント・アーチャーに課せられた使命なのだから。

間も空かせず、鱗粉のように宙に撒き散らされたフォトンブラッドを振り払いながら、突撃。渾身の踏み込みが僅かな間合いすら吹き飛ばし、お互いの吐息さえ感じられる距離に到達する。徐々に蓄積されていくダメージ。最早形振り構ってはいられない。アーチャーは大きく首を退けざると、真つ先に反応を取り戻したサイガの放つ、額に迫る拳撃目掛けて、被せるような頭突きを放った。

爆発。

一瞬の空白の後、頭蓋を透かして、皮膚全体を引き摺るような痛みが脳を襲った。例えサーヴァントといえども、ダイヤモンドを遥かに超える硬度を持つルナメタルの前では、血を流さざるを得なかった。割れた肉の裂け目から漏れた大量の血液が、アーチャーの視界を赤黒く染め上げた。だが——混じるノイズの中に見えた、四方八方に振れ

た指——必要な代価は受け取らせたと判断。痛みに呻く声を察知した瞬間、アーチャーは身体を半回転させながら、高速で薙いだ莫耶でサイガのベルトを横薙ぎに切り裂き、コンマの差で投影した干将で、白銀の装甲を左袈裟掛けに斬り下ろした。

修復不可能なまでに陥ったベルトが限界を迎えた瞬間、ルナメタル製の装甲が夢のように溶けていき、その中から零れ出た血塗れの青年が、芋虫のように蠢く内臓を抑えながらゆっくりと地に伏した。

「——レオっ！」

女の痛烈な悲鳴が響く。転んだ我が子を助けるように、倒れた男目がけて飛び出したその無防備な姿目がけて、アーチャーは容赦なく剣を振り被った。無論、それを黙って見ていられるほど、デルタは無能ではない。デルタムーバーの銃口を男の紅い背中に向けた瞬間、振り被られていた剣が鈍い光を放ち、爆発した。至近距離で破片を伴った爆風をまともに喰らい、デルタのアルティメットファインダーに大きなノイズが奔る。その一瞬を男は決して見逃さず、そして、

立ち込める黒煙を掻き分けた、血だらけの男。

その手に握られた一刀が、狼狽するデルタの胸を意識ごと断ち割った次の瞬間、

——『SIDE BASSHER Come Closer』

脅威は、空から現れた。

害意その物を表した異形の四肢。架かる満点の月を覆い隠すほどの、戦車の如き威容を宿す巨軀。紫電の眼光に宿る無機質な殺意が、膨大な瀑布となって弓兵へと突き刺さった。カイザ専用の可変型バリアブルビークル——サイドバツシャーは、空中でその身を戦闘形態に変化させると、俊敏に構えた豪腕から、六発のミサイルを撃ち放った。六発。避けるまでもない。

そう考えたアーチャーの上空で、六発のミサイルは、数知れぬ無数の散弾へと変貌した。

避けない訳が、無かった。

「ッ——！！」

すぐさま飛びのいて、豪雨のように降り注ぐ散弾の群れを回避し

た。直後、掠る程の距離で轟音が炸裂。毒々しいまでの眩光が世界を包み込み、次いで猛烈な爆風が空間ごと全てを穿った。断続的な衝撃で世界が白く揺れる。華々しく上がった高い火柱が、柳洞寺を取り巻く夜闇を深く切り裂いた。

焼けた外套を破り捨てたアーチャーが、爆音の狭間を縫うように、膨れ上がる噴煙を裂いて飛び出す。——危ない所だった、と正直に思う。神秘の集合体であるサーヴァントに、通常兵器は通用しない——それは当然至極の理——だがしかし、今や受肉に近い状態となったこの身の痛覚では、あの程度の砲撃すら致命的である。当たればまず無事では済まず、最悪の場合は致命傷ですらあり得る。心の中で軽く舌打ちしつつ、体勢を立て直す。心の漣を鎮めるために、立ち込める硝煙、深く息を吸った。それが唯一の失敗だった。

紅蓮の咆哮が煌々と鳴り響く中、かすかに響いたバイクの駆動音。それを掻き消すかの如く、全てを平等に薙ぎ払う絶望の気配。

馬鹿な、と思う。アレは、決してあの城からは動かない筈だ。いかに泥で腐り果てようとも、その身が屈指の大英雄であることに変わりはないのだから。

ならば——何故——

「ま、さか——！」

視線で殺す勢いで女がいた場所を睨みつけるが、そこには最早、塵一つすら残っていないかった。

同時に膨れ上がる、脳髓にへばりついた泥。人が産み出した最大の禁忌である聖杯の泥を自由自在に操れる者など、心当たりはひとりしかいなかった。

響く、男の高笑い。嘲笑と憎悪と空虚に彩られた、ひどく虚しい物。

——■■■■。

泥に塗れゆく意識の中、懐かしいその一節を、男は呟いて、笑った。そして、アーチャー・エミヤの意識はそこで途絶え、彼は完全な泥人形と化した。

○

断続して響いた爆発音。

次いでうねる炎の渦が、舐め尽くすようにして押し寄せてきた。

「ちよつと藤丸藤丸ふじまるっ！ あんたバイクもつとスピード出さないよ出してはやくっ！ じゃなきや追いつかれ——危ない危ない危ないっ！ バカバカバカバカっちゃん前前前っ!!」

「——クソが！」

立ち上る火炎を、避けている暇など無い。

無論、変身している時間など欠片も無い。つまりは生身で炎を受けなければならぬという事だ。猛烈なフラッシュバックに襲われながらも、それでもやるしかない、巧は瞬時に覚悟を決めた。全身の毛が逆立ち、漣のように次々と立つ鳥肌。舌を噛み切る思いで、巧はスロツトルを開いた。

オルガマリーは当然、そんな真似など出来はしない。いくら優秀な家系に産まれた魔術師と言えども、ごうごうと大口を開けている炎の海と漆黒の殺意を纏って襲い来る巨軀の前に、即座に覚悟を決められるほど修羅場を巡っている訳ではない。今この瞬間第三者からどちらがマシかと問われれば、どちらもマシな訳がないバカじゃないの何考えてんの死ね、と彼女は答えた筈である。

それでもどうか防衛魔術を働かせたのは、ひとえにこれまで積み重ねて来た魔術師としての矜持のおかげだ。元来優秀な魔術師である彼女が描いたルーン文字は淀みなくその効力を発揮し、所詮は異能も何も無いただの火の粉。奇跡の御業に等しい魔術の前では、ただの塵芥に過ぎない——即座に刻んだ防御のルーンが火の粉を振り払っていくのを見て、オルガマリーは密かな満悦に包まれる。その視界を、

全身を切り裂かれ、壊れかけた異形の影——サイドバツシャーが覆い尽くした。

ぱり、と電流が奔る音。

悪寒が、巧とオルガマリーを包み込む。

「うそでしょ」

直後、爆発。炎と黒煙が急激に産声を上げた。聴覚と視覚を粉微塵に切り裂く爆音が耳をつんざき、土砂のように押し寄せた爆風がル―

ンに包まれたバジンの車体を大きく揺らした。巨体から解き放たれた紅蓮は柳洞寺に敷き詰められた無数の砂利を空高く吹き飛ばし、その下の地面を抉って粉塵を吹き上げる。サイドバツシャーが引き起こした爆発は、柳洞寺に残っていたわずかな景観すらも片っ端から破壊し、ほぼ更地に近い状態へと帰した。

増大しつづける黒煙を切り裂いて、舌がひりひりと痛んで仏頂面な巧と、目の前の男の無茶に怒り心頭なオルガマリーを乗せたオートバジンが飛び出す。傷だらけの前輪が大地を何とか噛む。煤けた銀色の車体には、炎の臭いが染みついていそうだった。巧は片方だけ残った左のミラーで後方を確認し、なおも這い出るバーサーカーに舌打ちを繰り返す。そのままスロットルを開け、加速。朽ち果てた門を突っ切り、そのまま境内へと突入する。

その瞬間、絶え間なく繰り返される振動に脳味噌のネジまで弛んでしまったのか、平常なら有り得ないテンションでオルガマリーは叫んだ。

「このっ、あんたって奴は——っ!! 何をどうして、どうやって生きてきたらっ、こんな無茶ばっかする頭なんかに——っ! 付き合わされる私の身もちよっとは考えた!? いいえっ、ぜっつっつっつたい考えてないでしょうねっ! 何故ならあんたはバカだからっ!」

「——じっとしてろっ! 大体、遅くなってるのはおまえが重いからなんじゃないのか? ちよっとは痩せたらどうなんだっ」

「はあああああああああああ! ——あっ、あああああっ!! まえまえまえ——っ!!」

「——ッ!」

迫る、陰陽の二刀。

守れなければ、生きている価値などない。

巧は、奥歯を噛み締めるとオルガマリーを脇に抱えて、高速で流れ行く地面に背中から飛び込んだ。

激痛。背筋をずるずる這い上がるそれに、巧は苦悶の叫びを上げかけた。それでも、堪えた。肉が抉れる感触。巻き上がる砂礫に点々と血飛沫が混じり込む。それでも、抱き寄せたぬくもりだけは、必死で

守り抜いた。操縦者を失ったオートバジンは一挙にバランスを失うと、前輪と後輪を横滑らせ、側面を削りながら止まった。前方から迫るは、血だらけの弓兵。後方から押し寄せるは、泥色の狂戦士。やがて、巧の鼻に、嗅ぎ慣れた死が立ち込め始めた。

「い——つつう……。藤丸、あんたね……」

思わず抗議の声を上げようとした少女の声、尻すぼみに消えていく。

闇に紛れて見えなかった、目の前の男の背中、惨劇に、ようやくオルガマリーは気づいた。かっぱらってきたコートはずたぼろに引き裂かれ、その下にあるカルデア制服の白い生地を染め上げるのは、粘度の高い真紅色の液体。裂けた繊維の隙間からは、引き千切られたかのように荒々しく破れた皮膚が覗いている。勢いよく叩きつけられた後頭部には無数の砂利が付着しており、湧き出る脂汗が混じった血色の雫が、顎を伝い落ちて地面に赤黒い染みを作った。だが、少年は、それでも苦痛の声を上げなかった。ただ無言で、少女を背に庇いながら、後ろ手を寄越すのみ。

その動作が意味する物は、たった一つしかない。つまり、

——あのベルトを付けて、サーヴァントと戦う事。

「どう、して……」

「何が」

息も絶え絶えになりながら、巧は呟いた。

何でもないように振る舞う男の姿に、オルガマリーはどうとう抑え切れなくなつた悲痛な叫びを上げた。

「どうして、そんなになるまで、戦うのって聞いているのよっ！——貴方は、ただ」

巻き込まれただけなのに。

四十八番目のマスターという資格を背負っているとはいえ、所詮目の前の少年は、ただの一般人に過ぎない。本当ならば、魔術師などという血生臭い物とは関わらず、陽の当たる場所を歩いていかなければならないのに。こんな、何処とも知れぬ世界の果ての廃墟で、常識外れの殺し合いに巻き込まれて、塵芥のように死んでいくなど許される

筈が無いのに――

「どうしてっ!」

「――俺は、決めたんだ。戦うって!」

血の気を失い、小刻みに震える掌を無理矢理こじ開けて、確かめるように、ベルトを握り締めた。

そのままファイズドライバーを腰に巻きつけ、立ち上がろうとして、膝を付いた。内臓ごと飛び出しそうな吐き気。ちかちかと点滅する視界。眩暈が刻々と酷さを増していく。ますます目を瞑って意識を闇に沈めれば、まだ間に合うかもしれないと、どこか冷静な思考がそう叫んでいる。

だから、立った。

血まみれの指先のまま、ファイズコードをプッシュする。

555と。

「乾巧」を覚えている人間など、誰一人存在しないこの世界で、それだけが自分でいる為の、唯一の導だった。

「人間を、守るために――!」

――『Standing By!』

右手を突き上げて、巧はあらん限りの力を込めて、鼓舞するように吼え立てた。

「――変身っ!!」

バックルに叩きこまれる、ファイズフォン。

その次の瞬間、巧の身体を紅い光――フォトンブラッドが駆け巡り、輝きを放つ超金属ソルメタルが次第にあるべき形へと整えられていく。

『Complete!』の音と同時に、電子音。一瞬の強い閃光の後。そこには、超金属の仮面の騎士が一人――ファイズが、歴戦の勇士を思わせる振る舞いのまま佇んでいた

金色の瞳が、己を挟んで向かい合う敵を睥睨する。やがて、ファイズはベルトからメモリーを抜き取り、転がっていたバジンのハンドルに装着して、ファイズエッジを抜き放った。残光が、夜闇を切り裂いて震えた。敵意を敏感に察知した泥人形が、呪詛の如きうめき声を上

げる。

それを見ながらファイズは、腕に取りつけられたリストウオッチ型コントロールデバイス——ファイズアクセルから、アクセルメモリーを抜き取ると、がら空きになったバックルに換装した。

——『Complete!』

宣言と同時に、胸のフルメタルラングが開き、露出したブラッディ・コアが鈍い光を放った。金から真紅へと瞳が変わり、超高密度のフォトンブラッドを内包するシルバーストリームが、ファイズの身体を包み込んでいく。

超加速形態——アクセルフォームに変身したファイズは、低く呟いた。

「——十秒あれば、充分だ」

そして、十秒を司る神が、裁きを告げる鐘を高々と鳴らした。

——『Start Up!』

第十節「Start Up!」

時は少し遡る。

バーサーカーを瓦礫の下に封じ込めた後、最終的な目的地である柳桐寺の近場までバジンを走らせてから、僅かでも休息を摂る為、すぐ傍にあった廃墟へと巧達は身を隠していた。

人気の途絶えた武家屋敷に着いた途端、キャスターとオルガマリーは魔力を断絶する為の結界を、忙しげに周囲に張り巡らせ始める。なんでもバーサーカーから身を隠す為だそうだが、巧にしてはほとんど他人事に近い。置いていかれた瞬間、ここぞとばかりに大きな欠伸をかまし、すぐ傍で座っているマシユは傷ついた身体を癒しながら、少し身体を動かせばすぐにでも点けたのに、やけに手馴れた手つきで強引に熾された焚き火を、穏やかな目で見つめていた。

——あたたかい。

雑に投げ掛けられた砂色のコートを軽く引き寄せる。ざらついた布の厚い感触が、剥き出しの部分を含み込み、焚火の温度もあいまつて血の気を失っていた身体には有難かった。

すぐ傍にある、優しく動く火を見ていると、マシユは不意に、少年と言葉を交わしたくなかった。

これが最後に、なるかもしれないから。

それでも長年来の友人のごとく、軽々しく話しかけられるほど、仲が深まっているわけではない事は重々承知している。というわけで、控え目に目を動かして、ぼうつとした横顔を捉えるのみに留めた。責めないで欲しい。マシユ本人はこれでも、かなりギリギリのラインを攻めているつもりだった。

常に顰められている眉と、不貞腐れた唇の引き締めさえ無視すれば、少年の容姿はどこにでもいる十代半ばの平凡な顔つき——ほんの少し童顔だが——のように見える。だが、その深い海を湛えているかのように蒼い瞳の奥で、果ての無い荒野を彷徨い続けたような、乾き切った光が時折ちらつく事をマシユは知っていた。

今もそうだ。独りで物思いに耽る時、変形機能を持つ銀色の車体を

見る時、摩訶不思議な力を宿すベルトを触る時。決まって彼は、あの例えようの無い眼つきをしている。

その瞬間だけ、マシユには目の前の少年が、カルデアが爆破される以前に、自販機の前でわずかながらでも言葉を交わした少年と同じ人間だとは、どうしても思えなくなるのだ。

似つかわしくない、と思う。これが素なのだと言われればそれまでだが、それにしたつて度が過ぎているとも思う。注意深く観察してみれば、身体の動かし方も、立ち昇る気配も、全てがレイシフト前とは百八十度異なっているのが、サーヴァントと化した今になってようやくわかった。

気の所為かもしれない。ほとんど妄想に近い、確証の無いくだらない思考。それでもマシユはこう考えてしまうのだ。

今、藤丸立香という人間の中には、まるで——そう、まるで。

全く別の人間が、乗り移っているかのような、気がして——

「——おい」

そして気づいた瞬間には既に、吸い込まれるように蒼い瞳が、触れられそうなほど間近にあった。

特に何の意図も無く、鼻と鼻がくっつかんばかりの距離で、二人は見つめあう形になっていた。

数秒固まり、我を取り戻し、そして指先まで一瞬で鮮やかな朱に染まったマシユの口から、

「あ、う——」

と、心細げな声が漏れる。それを見た巧、何のてらいもなく少女に話しかけた。

「どうした」

無論、至近距離のままである。

少年のやけに落ち着いた息遣いが、鮮明に響いた。その距離の近さに、先ほどまで浮かべていた妄想は綺麗に吹き飛んだ。今はただ、気恥ずかしくてたまらない。

「え、その、先輩——」

「なんか変だぞ、お前」

訝しげに首を傾けた巧に、マシユの頭はますます混沌と化している。このままでは、何を口滑らすか分かったものではない。どうにか取り繕おうと口を開くが、喉に何かがへばりついてしまったかのように、もごもごと言い淀む事しか出来なかった。

——正直なところ、穴があつたらそこに閉じ籠りたかった。

「——あ、そ、そのっ、ええつとですわね」

変わらないその様子に、すっかり関心を失ったのか。巧は、マシユから視線を逸らすと、筋張った指先で積み上げた枝を掴み上げると、弱まりかけている焚き火の中心部へと乱雑に放り込んだ。音を立てて膨れ上がる火を見ながら、特に何を言うわけでもなく、黙り込む。

このまま放置しておけば、見境なく他人に近づく変な女だと思われるままになる。それはよくなかった。マシユは勇気を振り絞って、おずおずと拙い弁解を始めた。

「あの……別に先輩に近づきたくて近づいたわけじゃ、無いんです。気がついたら、この距離だったというか」

「それで」

「……それで、ええと、その。いや、別に先輩のことが嫌いだとか、近寄りがたいとかそういうわけではなくてですねっ」

言い訳を重ねるたびに、どんどん自分が追い込まれていつているような気がしてきた。うろたえるマシユを後目にして、巧はつまらなそうに呟いた。

「話終わったんなら、離れろ。暑い」

言葉の響きは、ひどくそっけなかった。

それでも、応じない訳にもいかない。マシユは、はいっ、と食い気味に答えて、そそくさと元の位置に座る。

そこから、身動きどころか瞬き一つすさえしなかったが、生まれて初めての男性との至近距離に、少女の体温は限りなく上昇したままだった。すぐ傍で燃え続けている焚き火のせいかと思ったが、それが違う事は自分が一番よくわかる。心臓は上下左右あちこちを動き回り、頭の中は蒸されてしまったかのように汗ばんでいる。

この感覚の正体を、少女はよく知らない。

マシユは、すぐ傍にあつた少年の瞳と息遣いをふたたび思い出してしまい、ますます赤らんでいく頬を抑えた。こんな、絶対ヘンだ。勿論、恐竜並みに鈍感な巧は、そんな少女の様子に対して不思議そうに顔を歪めるのみである。何やってんだ、こいつ。そんな視線に気づいたのだろうか。マシユは頬を赤らめながら、小さな咳払いを繰り返して、新たな会話の接ぎ穂を無理やり作った。

「——あの、先輩」
「何だ」

先ほどのやり取りに何も感じていないかのように、巧は投げやりに答えた。実際、何も感じてはいないのだろう。いつか、所長が唐変木だと言っていたが、かなりの的を得た言葉だったのだと今さらになって気づいた。なんとなく納得しながら、マシユはおそろおそろ口を開いた。

「——ほんの、少しで良いんです。なにか、話しませんか？」
「話？」

上目遣いで見上げてくるマシユに、巧は怪訝そうに問うた。

「はい。何でも良いんです。先輩の事なら、何でも。……ダメですか？」

「ダメもクソも、いきなりどうした。やっぱ、お前おかしいぞ。さつき頭でも打ったのか？」

そこまでする事も無い。

とはいえ、巧の反応もあまり責める事は出来なかった。何せ、ついさつきまで黙り込んでいた隣人——それも大人しい女——が、いきなり至近距離まで詰め寄り、更に自分の事を話せと催促してきたのだ。女に関しては、あまりロクな思い出が無い巧にとって、マシユの奇々怪々な言動は充分な警戒に値していた。

巧の訝しそうな様子と、唐突な提案をしてしまった事により、マシユの身体に、形容しがたい不安がじわじわと襲いかかってきた。本当にこの言葉で良かったのだろうか。今さら人付き合いをあまりしてこなかった事が悔やまれる。もつと上手く不自然でない、相手を不快な気分させない誘い方もあつたんじゃないか——

「……いえ、やっぱり何でもありません。さっきの言葉は、忘れてください」

儂げな笑みを浮かべる裏で、得体の知れない煩悶に苦しむマシユ。それを見て、巧はふと気の無さげに呟いた。

「……ま、内容によるな」

まさか、返答——それも、了承が戻ってくるとは思ってはいなかったのだろうか。

驚きに大きく見開かれた瞳が突き刺さっていることに気づき、巧はなんだよ、と居心地悪そうに問いかける。我に返ったマシユは、あたふたと手を忙しく答えた。

「いえ、その。まさか、……先輩から返事が返ってくるとは、予想していなかったのです」

「お前は俺を何だと思ってるんだ」

「所長の言によれば、唐変木の鈍感猫舌バカと」

「……これからあいつの言う事は全部無視しろ」

ふて腐れた顔つきのまま、ふたたび火勢の弱くなつた焚き火の中に枯れ木を放り込んで、巧はひどく心外そうな目を向けてくるマシユから顔を逸らした。

逡巡が少女の顔を過ぎる。やがて、ぽつりと躊躇うように、

「——カルデアに来る前、先輩はどんな生活をされていたんですか？」

巧はその問いに動きを止めると、何をどう話せば良いのかを真剣に考えた。

この身体の元の持ち主——藤丸立香という少年が過ごしていた日々の詳細を、もちろん乾巧が記憶しているという都合の良い事はない。元々、彼が他人だけでなく自分に対しても淡泊である事も関係していたが、そもそも見えず知らずな人間の中に唐突に放り込まれ、見知らぬ街でトラウマを刺激されながら否応なしに戦いの渦に飛び込む事になって、そのいの一番で、身体の持ち主の日常生活を知ろうとする方がどうかしているだろう。かと言って、無視して黙り込む訳にもいかない。だから巧は、自分がかつて過ごしていた日々を、限りなく簡潔に話す事を決めた。

「――別に、普通に暮らしてた。起きて、洗濯物して、飯食って、風呂入って、寝て」

言っておいて、我ながらつまらない生活をしているなど、心底から思った。啓太郎のように夢を叶える為に人助けに精を出す事もなければ、真理のように夢に向かつて着々と走り続けている訳でもない。ここまで人間的につまらなければ、いつそ笑えてきた。

にも関わらず、巧の話を少女は興味深そうに聞いていた。きらきらと目を光らせて、見た事のないおもちゃを差し出された時の子供のように、再び身を大きく乗り出した。

「もっと、聞かせてください。先輩の話」

少女の瞳、さらに輝きを増す。

その光に耐えられなくなって目を逸らし、それでも頭をばりばり掻いてから、渋々と巧は答えた。

「――期待すんなよ」

ぱちり、と焚かれて枯れ木が、軽い産声を上げた。

○

炎の廃都市に似つかわしくない空気を二人がしばらく享受していると、結界を張り終わったらしいキャスターとオルガマリーが、何事かをぼやきながら夜闇の中から歩いてきた。

「あー疲れた疲れた。まったく、無駄に広いんだよここは」

「アンタが選んだんでしょがっ。……まったく、大体ね、少し休憩したらずぐ出て行っちゃうんだから、こんな嚴重に結界を張る必要は無かったんじゃないの」

「分かってねえなあ。ここは敵の本拠地のお膝元なんだぜ？ もしかすれば、アーチャーの野郎がこのこ降りてくるかもしれないねえじゃねえか。ま、アイツは今の所立てこんでるらしいから、目下の敵はバーサーカーのみだがな……おっ、嬢ちゃんが淹れたのか、それ」

興味深げに覗き込んでくるキャスターに、マシユは申し訳なさそうに呟いた。

「はい。支援物資が乏しいため、簡単な物しか作れませんでしたけど……」

「なあに気にすんなって。男つてのはな、良い女が手付けたモンなら何だつて喜ぶんだ。な、坊主？」

「俺に振んな」

「ツレねえなあ。お前だつてほんとは喜んでんだろ？ 素直になれよ」

「だから、一々寄つかかってくんな！ 暑いんだよ！」

「あーあ、男つてほんつと単純ね。……そうよ。藤丸立香。貴方には、私が直々に淹れてあげます。さあつ、泣いて喜んで跪いて、今まで舐め腐った対応を取つてごめんなさいこれから心を入れ換えてオルガマリー所長様に一生ついていきますと叫びなさいっ！ さあつ」

「絶対、いらねえ」

「その態度は無いんじゃないの？」

「所長……それはさすがにどうかと」

「何でなのよっ！ ずっと思つてただけど、ちよつと私の扱いが雑なんじゃないっ!？」

途端に湧きだした喧噪が、周囲を厚く取り囲んでいた暗い静寂を切り払っていく。巧はあまり騒がしいのは好きではなかったが、暗闇と炎と静寂だけが渦巻くこの世界では、たぶん必要な事なのだと思う。最も、飛び交う話題と云つたら、如何にして残存している敵サーヴァントの脅威を乗り切るかが主だった。

ずぶの素人どころか、全く無縁の生活を送っていた巧に、魔術だのサーヴァントだのといった話題が理解できるわけもない。話す三人もまた、構っている暇は無いとばかりに意見を頻繁に交わし合っている。どこか異国に独り取り残されてしまったかのような心地のまま、巧はふうふうと湯気立っているコーヒーマシンの表面を吹いた。

——暇だ。

眠たくなってきた。

ここまで他人事になれる人間もいまい。暇を持て余した巧が、本気で寝る態勢に入ろうとした瞬その間、不意に、肩に軽い感触が連続して響いた。

気だるげに首を動かして振り向く。するとそこには、オルガマリー

が何かを噛み締めているような表情のまま、巧の肩をつんつんと執拗に突っついてきていた。やめろ、と振り払っても、また突っ突き続ける。放っておけば、ずっとやっていそうだと、巧は思った。

何だこいつ。

「なんだよ。言つとくが、俺に聞いても無駄だからな」

「そんな事、誰だって知ってるわよ」

分かり切った事を聞くなど、冷たいオルガマリーの声が響く。少女の言動の意図がまったく読めず、苛立ちかけたところで、奥歯に物が挟まったような少女の表情に気づく。そうか。巧はぼんと拳で掌を叩いて、納得の意を示した。

「もしかして、お前……」

「……そうよ。私は」

「トイレか」

「——ぜんぜん、違うっ！ このバカっ！ いい？ わたしが聞きたいの……」

どこことなく物問いたげな雰囲気醸し出しつつ、オルガマリーはさも重大な機密を聞き出すかのような姿勢を作った。

「……わたし達がいけない間、マシユと何話してたの？」

そんな事かと思う。それでも説明するのが面倒くさくて、巧は顔を背けた。

「別に。何でもいいだろ」

「何でもよく、ないっ！ 今の私はカルデア所長で、貴方達はその部下なのよ？ 情報の共有は組織に所属する者として当然の義務なんですっ」

出た。

露骨に顔を歪めても、オルガマリーは少しも氣勢を緩めない。隙あらば噛みつかんばかりの勢いで、ぎやあぎやあと吼えている。この女、喋らせるとロクな事を言わない。巧はうんざりしながら、すっかり冷めきった液体を飲みほして、苦味に顔を渋くさせたまま話し出した。

「別に、普通に話したただけだ」

「普通って、どんな」

「だから、普通のこったよ。どんな生活してたかとか、食べ物は何が好きだとか、それだけだ」

「……………ふーん。あつそ。ま、私は別に、貴方とマシユが何を話してどう仲良くなるうが、どうでもいいんだけどね」

別に興味なんかないとでも言いたげな顔をして、オルガマリーはつんとそっぽを向いた。もちろん、巧は置いてけぼりにされてひどく頭にきている。一発文句でも叩きつけてやろうかと一瞬思ったが、また馬鹿げた言い争いに発展するのは目に見えていたので、諦めてうんざりとした視線を送りつけた。

「……………なによ、その目」

巧はしばらく黄金色の瞳を眺めた後、感慨深げに呟いた。

「お前って、ほんとに変な奴だな」

「あんたにだけは言われたくないっ！」

○

「まずだ。お前ら囮になれ」

作戦を頭の中で纏め切ったキャスターが、真顔でそう最初にそう発言した瞬間、巧の隣に座っていたオルガマリーは年頃の乙女が見せてはならない表情を試みさせた。爆発する。そう思った瞬間にはすでに、堪え切れない激昂の叫びが放たれようとした少女の口を、巧の手が防いでいた。もごもごと苦しげに呻く少女を無視して、巧はやたら軽快な笑みを浮かべるキャスターを見つめた。

「どういう意味だ」

「なに。簡単な話だよ。奴——バーサーカーは一見すりや、オレ達を執拗につけ狙っている、風に見える。だが、それは大きな勘違いだ。泥まみれで理性も無くなったあいつに、いちいち敵が誰かを識別する脳味噌なんざ、もう残ってねえよ。奴が追いかけてくるワケは、魔力だ。今の奴は近距離にある、より強い魔力に反応を示して追いかけてくる。蛍光灯に群がる羽虫みてえなもんだよ。最終的には聖杯の元へ辿り着くんだが、極限まで腹ア空かしてる時になって、目と鼻先に獲物が二匹もうろつき始めたんだ。飛び付く以外他にねえよな。も

し捕まりや全部おじやんだ。アンタらの旅も、オレの目的も潰える。それはオレも困るし、アンタらも困る。そこで取る最善策が、お前らを囮にする作戦だって事だ」

「——つれがー・ なつとくできな——つ！」

どうにか拘束を引き剥がし、抗議の声を上げかけたオルガマリーの口を、今度は両手で塞いだ。むがががが——！こいつが話し出すと、ロクな事にならない。巧は掌に張りつき始めた湿り気に顔を顰めながら、顔を振って続きを促した。

「——しかし。何故バーサーカーは、他のサーヴァント達のように冬木市内を活動していなかったのでしょうか？」

控え目に手を上げて、マシユがそろそろと問いかける。しかし、キヤスターは齒の奥に物が挟まったような、形容しがたい表情を浮かべるのみだった。

「嬢ちゃんには悪いが、詳しい所はオレも分からねえ。……アンタらが来る前の奴は、冬木市内の最奥にあるデケえ城の真前で、ずっと木偶の坊みてえに陣取ってたんがな」

「……わたし達カルデアの介入が、ある種のトリガーのような物になってしまった、という事でしょうか？」

「さあな。ま、障害になるんならなるで、叩き潰すまでだ。そうすりや全部解決する」

「——っのー！」

なおも抑え続けていた巧の手をかなりの勢いではたき落とすと、裾で口元をがしがし拭いながら、オルガマリーが勢いよく吼えた。

「じゃあ、何でわたしとこいつが囮にならなきゃなんないのよ。大体、バーサーカーはより強い魔力を道しるべにして追い掛けて来てるんでしょ？ だったら、二手になんか分かれなくて、四人で行動する方がまだマシに決まってるんじゃない」

「相手がバーサーカーだけだったら、それがベストなんだがな。オレらの目標は、聖杯だ。それで、聖杯の前にある障害はうざってえ事に二つもありやがる。アーチャーと、セイバーだ」

セイバー。

このグラントオーダーにおける最終目標である聖杯——その前に立ち塞がる、無敵の騎士王。泥に墜ちた聖剣使い。暴虐の剣士。理想を果たす者。その真名は——

「アルトリア・ペンドラゴン——」

何らかの複雑な感情を含んだマシユは呟いた。オルガマリーは瞼を閉じ、目頭を押さえて陰鬱に唸る。

「貴方の言う事が本当に正しいのなら、確かにセイバーとその宝具が並の英霊とは比べ物にならないぐらい強力なのは確かね。何せ、人類史上最も有名な英霊の一人なんだから。……こつちも、宝具が使えれば良かったんだけど」

巧とマシユに視線をよこしたオルガマリーが、深いため息を吐いた。マシユは、申し訳なさそうに目を伏せたが、巧は、露骨に不愉快さを示した。

「何だよその態度。大体、宝具つてのはなんなんだ」

「マシユ」

「わかりました」

心底めんどくさそうに手を振ったオルガマリーに従って、マシユは、未だ不機嫌な巧に対し、拗ねている子供に菓子を与えて懐柔させる時のような態度と口調で話し始めたところで、「……ちよつと待った」と、オルガマリーが唐突に遮った。

「なんですか？」

「やっぱり、私が話すわ」

「……はあ、所長がそう言うのなら」

「早くしろよな」

この男、教えてもらう分際で態度が大層デカい。それに多少のイラつきを感じながらも、オルガマリーは話し始めた。

「良い？ 藤丸。宝具つてのは、サーヴァントを象徴する道具——まあ言ってしまうえば、最後の切り札とか、必殺技みたいな物なの。それ自体も強力なんだけど、その真価を最高に発揮するのは、『真名』を解放した時——つまり、正体を明かした時なのよ。」

勝負を決める奥の手の宝具を最大限に発揮する為には、相手に対し

て長所も短所も、ぜんぶ曝け出さなきゃならないの。それって不利でしょ？」

「それをギリギリまで隠しておく為に、オレはキャスターって偽名を与えられてるわけだ。ま、真名はもうバラしてんだがな」

「サーヴァントの存在価値は、ほとんどが宝具に依存してるって言っても過言じゃないわ。——だからね、キリエライトが宝具を使えない今は、物凄く危機的な状況ってわけ」

「そうなのか」

あまりにも気の無い巧の返事に、オルガマリーは眉を顰めた。

「——あんた、本当に分かってんでしょうね」

巧は、こくりと神妙に頷いたが、表情はやけにぼんやりとしている。オルガマリーは自分の行動の無為さを悟り、年齢に似つかわしくない妙な無常感に駆られた。

「——で、もう一度聞くけど、どうしてこいつとわたしが囷なのよ。そんな暴論を振りかざせるんだもの、納得させるだけの理屈はあるんでしょうね」

「ある」

キャスターの思わぬ力強い断定に、オルガマリーはぱちぱちと金色の瞳を開閉させた。そのまま話題の中心の一人でもある巧にも視線を送ったが、少年はどこ吹く風かと言わんばかりに、湯気立つ液体を吹いていた。

このバカは、本当に——

憤るオルガマリーを余所に、キャスターは話を続ける。

「盾の嬢ちゃんが持つそれは、おそらく、セイバーの野郎にかなり縁深い宝具だ。それさえありゃ、誰がやったか知らねえが、途方も無いほど巨大な結界で隠蔽されてる奴の根城——つまり、聖杯の居所も見つかる。だが、それをするには嬢ちゃんとオレの魔力を大量に使わなきゃならねえし、そんな時にバーサーカーの野郎の邪魔が入る事は、ほとんど確定って言ってもいい。奴の妨害を受けながらやり遂げられるほど、オレはオレを過信しちやいない。

だからな——」

○

——オレらが隠れて結界をぶち破ってる間、お前らがアーチャーの場所まで奴を惹きつける。

キャスターの作戦は、間違つてはいない。バーサーカーがより強大な魔力の方に惹かれるという考察は的を得ているし、いくら泥に埋もれてしまったとはいえ、魔術師を遥かに上回る魔力を有しているサーヴァントにまで辿り着けば、バーサーカーはそちらに集中するという作戦も、本来ならば上手くいく筈だった。

彼の唯一の誤算は、本来は藤丸立香である筈の人間の中身が、「乾巧」だったという事だけだった。

無論、それを知る由もない巧は、自分だけに圧倒的な殺意が集中している事を、強く感じていた。

それはいい。敵意や殺意を向けられる事には、嫌というほど慣れている。慣れざるを得ない。そういう生き方をしてきた。

だが、その巻き添えになる人間がいるという事を、乾巧は決して許しはしない。

そして、覚悟を決めた。

戦わなければ生き残れないのなら、戦うだけだ。元より自分に、退路など残されていないという事は分かっている。ならばせめて、誰かを守る事ぐらいは、成し遂げたい。いや、

必ず、成し遂げてみせる。

——『Complette』

光を伴って、超加速形態へと変身したファイズ——アクセル・フォームの前では、有限の十秒は、無限の刹那へと裁断される。

しかし、変身したからとはいえ、生身の傷が修復するわけではない。無理に身体を動かしたせいで、神経を食い破りかねない痛みが、背筋を喰い破り出そうとしていた。生じ続ける痛みは、熱を伴って脊椎を這いずり脳まで浸食し、視界は次第に赤く燃えていく。小刻みに震える指先は、決して武者震いしているわけではないだろう。零れる吐

息、たまらなく熱かった。散り散りに裂けては、記憶の海へと消えていく意識の欠片。

時折、思考の間に挟まる空白が、もはや一刻の猶予も無い事を、冷酷に告げていた。

だからこそ、

なればこそ、

「――十秒あれば、充分だ」

それは、動かし難い真実だった。

首をごきごきと鳴らし、手を軽くスナップさせる。

絶大な出力のフォトンブラッドが、ファイズエッジの刀身を通り抜けていき、無慈悲な叫びを伴って大気を震わせる。

スタータースイッチを、叩き潰すように押した。

――『Start Up』

そして、オルガマリーが瞬きすると同時に、ファイズは地を揺るがさんばかりの勢いで大地を蹴りつけた。加速する。世界が流線状へ融け、ファイズは独り、時の刹那へ放り込まれた。全てを斬り裂く紅蓮の光を携えた銀色の騎士が、敵を殲滅せんと迫る。アーチャーの背後に投影された夥しい刃が、一瞬遅れて飛来。世界を埋め尽くさんばかりの鈍い刀光が、冴え渡った音を立てて迫る。だが、何もかもが、遅すぎた。地を蹴って、更なる加速。光を乗せた剣が、眼前に突き出された無数の切っ先を、払い除けた。それでも、無傷ではいられない。弾けなかった白刃がソルメタル製の装甲を削り取り、激痛が足に絡みついた。

それでも、奔る。

無限に引き延ばされた一瞬。強い覚悟と意志だけが、この身を動かしている。たまらず飛び出した咆哮に呼応するかのように、剣に宿った真紅のフォトンブラッドが大きな唸りを上げた。

二秒。

瓦礫の突き立った刀剣の墓標を背後にして、懐に飛び込んだファイズの横薙ぎの斬撃が、泥まみれの身体を深く引き裂いた。穢れた飛沫が宙を舞う直前に、呼吸すら忘れて、一撃。一撃。また一撃と、光を

超えた速度で、アーチャーの身体が斬り刻まれていく。

最早留まる事を知らず叩きこまれた無数の剣閃が、絶殺の檻を形作る。

それでも動いてみせたのは、泥に塗れても消えぬ、戦士としての意地だったのか。

神速の襲来に反応を見せたアーチャーが、生み出した双刃を首に向かって振り抜くその寸前で、

「おおおおおっ!!」

渾身の刺突が胸を貫き、サーヴァント・アーチャーは今度こそ確固たる終わりを迎えた。

崩れ去る泥の山を見届けず、ファイズはファイズエツジを投げ捨てると、オルガマリーの頭蓋を叩き潰さんと斧剣を振り被ったバーサーカー目掛けて強く跳躍した。同時にバーサーカーも白銀の火線に気づいたのか、標的を一瞬で変えると、世界を揺るがす咆哮を捻り出し、大地を深々と抉りながら突撃を開始した。

四秒。

横薙ぎの爆風。ファイズは足を止めず、凄まじい速度のまま首を刈り取ろうとする刃をかくぐり、斧剣を握り締めている右手を勢いよく蹴り上げた。担い手を失った斧剣が、中天を舞い、深々と石畳に突き刺さる。大きく呻いたバーサーカーは、皮膚から骨の飛び出た右腕を捨て、残った左腕で騎士を叩き潰さんと鉄槌を振り下ろす。加速。ファイズは颯風と化して一気に巨体の懐に飛び込むと同時に鳩尾に神速の連撃を叩きこむ。千を超える拳撃が突き刺さり、僅かに仰け反った敵の姿を視認。身を深く沈めると、脛を外側から払った。体勢を崩した巨軀が前のめりに倒れた。

好機。

渾身の力。右足に溜められたフォトンブラッドが唸りを上げ、絶大なる破壊の光を解き放とうとした瞬間。

忍び寄る破滅が、とうとう開花した。

背中を喰い破って飛び出した激痛が、断末魔を上げた。

「ぐ、が」

五秒。

動きを止めてしまった刹那、拳。倒れざまに放った狂戦士の一撃がファイズの側頭部を薙ぎ払う。ひび割れる仮面、迸るノイズ、歪みゆく世界をこらえて跳ぶ。だがその直前に、起き上がったバーサーカーの捨て身の突進がまともに入った。分厚い鉄を叩くような音が響き渡る。全身に罅が入ったような感覚。バーサーカーは、枯れ葉のように力無く舞い上がったファイズを、愉悦の瞳で捉えて跳躍。虚空の檻に囚われた騎士へと一直線に迫る。来る。耳元に風切音。ファイズは全力を振り絞って回避。拳が、脇腹を掠めて音を立てた。どうにか着地すると同時に上を見上げる。

巨人は、世界を覆い尽くす殺意を纏って、豪雨のように降り注いで来た。

咆哮。

七秒。

最早、一刻の猶予も無い。

意志が髪を逆立たせ、決意が戦意を奮わせた。

シルバーストリームが危うい白銀の輝きを放ち、足裏に刻印されたφの記号が、力強い閃光を宿す。

そして、跳躍。

千分の一に裁断された刹那の狭間を、銀色の流星が、時をも越えて駆け抜ける。

——『Exceed Charge』

鳴り響くは、断罪の晩鐘。

振り下ろされるは、破神の鉄槌。

虚空に突き立つ、無窮なる紅の穂先。狙うは直上、暗黒の化身。僅かな一瞬も、逃しはしない。

ブチ殺す。

——『Three』

飛来する巨軀に向けて、豪雨のように降り注ぐのは、決して揺るがぬ意思が込められた神速の蹴撃。

——『Two』

落雷の如き速度で放たれる、ファイズ決殺の一撃。

——『One』

——アクセル・クリムゾンスマッシュ。

——『Time Out』——『Reformation』

そして、魔法は解けた。

フルメタルラングが畳み込まれ、元の姿に戻ったファイズが静かに地面へと降り立った直後、無数の衝撃を存分に受けたバーサーカーの巨体にゆの紋章が浮かび、蒼白い輝きと共に泥の塊と化して、ざらざらと地面の上に積み重なった。

「な、あ——」

思わず、絶句した。

オルガマリーにしてみれば、何がどうなったのか分からない。傷だらけの少年があ理解できないベルトを使つて、鋼鉄の騎士へと変化したまではどうにか理解できる。だがその直後、仮面の騎士が腕に装着された奇妙な道具を行使してからは全てが範疇外だった。瞬きを二、三度繰り返している間に、全ては終わりを告げていたのだから。背中を向けた少年が、震える手つきで変身を解いた。そして、ゆっくりと自分に向かって歩み寄って来る。顔は疲労の色が濃い、ひとまず五体無事で済んだ事に、少女はたまらなく安堵した。ふと湧き出たそんな気持ちを抑すように、憎まれ口を叩きかけたオルガマリーの目の前で、巧はぷつぷつと糸が切れた人形のように、唐突に倒れ込んだ。

どさり、とゴミ袋が落ちたような、鈍い音が響き渡った。

あまりにも唐突に起きたそれに一瞬、オルガマリーは何が起きたのか理解できず、呆気にとられる。

「ちよっ——ふ、藤丸っ！ ちよつとっ！ 大丈夫っ!？」

呆けてる場合ではない。

すぐさま正気を取り戻し、かなりの勢いで俯けに倒れた少年に駆け寄る。むしろあの状態で、今まで動いていた方がおかしいのだと、今さらになつて気づいた。もし、息が途絶えていたとしたら——そんな事はさせない、と力強く思う。決して。借りを押しつけておいて、後

は知らんぷりだなんて、絶対に許さない。

仰向けにすると、少年の苦悶にゆがんだ顔が真っ先に目に入った。次いで、全身に広がる無数の裂傷。見た目は派手だが、そこまで深いわけではない。オルガマリーは、全身が血塗れになるのも躊躇わず、掌に魔力を込めて治癒の魔法陣を描き出した。碧色の淡い光が、巧の身体を包み込む。幸い、アーチャーとバーサーカーに、ランサーのような治癒無効の能力は無かったらしい。少年に刻み込まれていた傷が、じわじわと塞がっていく。すうすう、と微かに聞こえる吐息と血色の戻った顔に、ようやくオルガマリーは全身の力を抜いた。そのまま、服が汚れるのも構わず地べたにへたりこむ。

「——この、バカ。余計な心配かけさせんじやないつての」

暢気に寝息を立てている少年の、やけに安らかな寝顔に目を向けた。起きている時は、視界に入る全てが気に喰わないとでも言うような聳めっ面をしているくせに、今は年相応——ほんの少し、童顔だが——の素直な顔つきをしている。ほんの気の迷いから頬に手を置くと、思いのほか柔らかな感触が返ってきた。

——こいつ、寝てる時はまあまあ良いじゃない。

オルガマリーは今までの仕返しのように指を連打させ、やがて大きく息を吸うと、その細身の身体からは予想もできない力で、巧を背負い上げた。

力の抜けた少年の体重が、まともに押し掛かって来る。ついさっきに激しく魔力と体力を消費した為か、たちまち額から汗が湧き出て、顎を滴っていく。構うものか。半ば意固地になって、オルガマリーはゆっくりと、闇に向かって歩き出した。

小さく上下する胸板に、そういえば、あの時とは立場が逆だなと、ふと思いつく。

「……これで目え覚めなかったら、ほんつとに承知しないんだからね。藤丸」

答えは、当たり前のように返ってこない。

それでもオルガマリーの耳には、相も変わらない憎まれ口が響いたような、気がした。

○

セイバーは、唐突に目を見開いた。

鴉羽色の仮面を透かして、大空洞の広大な景観が視界に移る。超抜級の魔術回路である聖杯から漏れ出した、膨大な量の魔力が、明確な形を為して、煙霧のように辺りに立ち込めていた。冬木市を突然覆った異変の元凶が座し、今回の特異点修復における最後の門番が立ち塞がる、暗黒の玉座。そこに訪れる者は、この間違った世界を糺す為に、彼方から来訪した異邦者しかない、筈だった。

だが、

「——貴様は」

「やあ……麗しの騎士王。身体の具合は、如何かな？」

霧の隙間を縫うようにして、何らの気配も感じさせず姿を現した男の名は——レフ・ライノール。

この異変の、本当の首謀者。

「少し、話があるんだが——どうか、ご傾聴頂けないかね？」

齒軋りのような笑い声が、暗闇の中で甲高く響いた。

第十一節「クライマックスF」

夢を見ている。

上下は無く、左右も無い。呆けていれば、あつという間にバランスを崩してしまいそうなほど、ひたすら黒一色の視界。ただただ茫漠と広がっている暗黒の中を、巧はたった一人で歩いていった。

足は粘ついた泥濘を掻き分けているかのように重く、歩を進めるたびに身体に纏わりついてくる漆黒は、次第に四肢を抗いようの無い重苦しさを海へと沈めていこうと画策している。何処かで嗅いだ覚えのある異臭がうねりながら鼻先を漂い、耳に痛いほどの静寂が、しんと周囲に降り積もっていく。

確かに足は地をしつかりと踏みしめているはずなのに、靴音は全く響かなかつた。というより、まるきり地を噛む感触を感じられない。まるで、足先が腐り果てたような気持ち。歩いているというより、泳いでいる感覚に近い。そんな違和感を周囲から絶え間なく感じながらも、巧はひたすら歩き続けた。理由は無かつた。ただ、何となくそうしたかっただけだ。

視線を感じるくせに、誰の姿も見当たらない。まるで、夜の中に閉じ込められてしまったようだ。ぼんやりとした頭でそう考えた。

——やはり夢を、見ているのだと思う。

だから、歩き続ける。それ以外にできることなど、巧の頭では思いつかない。しかし、出口を指し示す明かりは、どれだけ経っても見えてこなかった。それどころか、周囲はますますその暗さを増しているようにも思える。かすんだ目に移る、次第に闇へと飲み込まれていく下肢の様相は、決して気の所為ではないだろう。

それでも、巧は歩き続けた。

別に、この先に必ず出口があるという確信を持っているわけでも、いずれ救いの手が伸ばされると期待しているわけでもない。いつか

覚める夢だと理解しているから、というわけでもなかった。何故進むのか。巧は自分に問いかけて、辞めた。分かるわけがない。だが、この先に自分の求める何かがあるということだけは、誰にも否定出来ないぐらい確かな事だと、不思議と確信できた。

元より、負けるのが嫌いだった。

何もかもを諦め、見捨て、腐り果てるのは驚くほど簡単だ。

それが嫌だから、意地を張って、弱音を封じ込め、ただ前へ進むことだけを考えた。

誰かの命を奪って、このちっぽけな掌の上に灰をこびりつかせた瞬間から——乾巧という存在に、退がるという行為は二度と許されなくなったのだ。

人間として、生きていたい。

それは、自分の意志で決めた。

少なくとも、巧はそのつもりだった。

そこに、後悔は少しもない——と断言することは出来ない。両手の指では数え切れないほど迷ったし、苦しんだ。いっそ、何もかもを放り出してしまえばどれだけ楽かと、思わず足を止めようとした事だった。幾度となくある。

だが、人ではない自分が、人として生きたいと望むのなら、往く道はたった一つしかなかったのだ。

かつては同じ人間だった、同胞の血肉と灰で、全身を染め上げようとも。

人間の為に——誰かの夢を守る為に、誰かの命を踏みにじることを選び続ける。

それが嘘偽りの無い、乾巧が選んだ道だった。

振り返る事など出来ないし、悔やむ事など絶対に許されない。

いつか自分は、どうしようもないほど惨たらしく死ぬだろうという確信が、巧にはある。背負い続けた罪過の重さに耐え切れず潰れるか、背後に忍び寄りつつある無数の灰色の腕が、首を楯子切ってしまうか。どちらにしても、ロクな最期を迎える事は出来ないだろう。

当ても無く歩いている内に、いつしか下半身は完全に闇の中に埋没

していた。途切れがちな意識が、二度と覚めはしない休息を無理やり押しつけてくる。なおも無視して進もうとする巧の足首に、冷たい五指が引き止めるように絡みついた。だが、振り払った。

そうだ、と強く思う。こんな所で止まってられない。俺にはまだ、やるべき事があつて、会わなければならぬ人がいるのだから——しつこくまとわりつく泥を振り払うように、力強く腕を伸ばした。

その瞬間、何もあるはずのない泥の中に、冷たい鉄の感触を臍げながら感じ取った。指先に微かに触れたそれは、確固たる形を取り戻して、巧の意識を過剰なまでに刺激する。

これだ、と思う。

これが、俺の探していた物。

碎けるほどに握り締めていたそれを開き、導かれるようにコードを入力する。いつの間にか腰に巻かれていたベルトに、それを装填しようとして——

○

目覚めた先は、見知らぬ天井だった。

必死に伸ばした腕はベルトではなく、湿った空気が籠もる虚無を、無謀にも掴もうとしていた。閉鎖された空間独特のじめついた臭いが鼻につく。しばらく呆然として、ようやく巧は、自分が今まで夢を見ていたことに気づいた。

「——は」

ここは、何処だ。

そう言葉を吐き出そうとして、掠れた喘ぎだけが弱々しく飛び出し、喉がひどく乾いていることに気づいた。それに、なぜか鈍い痛みが身体中に所狭しとへばりついている。

汗でびっしりと濡れそぼった襟に不快感を覚えながらも、苦痛と疲労感に軋む身体を叱咤して、巧はゆっくりと上体を起こした。どうやら、横に寝かされていたらしい。身体の下には長年使い古された証が残る、青色の厚いローブが敷かれている。

いまいち状況を把握できていない巧に、突如大きな影が覆い被さった。唐突なそれに思わず固まった巧を他所に、明朗な調子の声が次いで降り注いできた。

「――よ、起きたか坊主？」

見上げると、蒼い痩身の男が薄い笑みを浮かべて、こちらを見下ろしていた。ぼやけていた意識が、男の顔と記憶の焦点をゆつくりと合わせていく。獣のような相貌。紅く燃える瞳。尋常ならざる者の気配。

「――キヤス、ター」

ひどく乾いた声色で巧がそう名を呼ぶと、キヤスターは、片手に持った長大な杖を肩にかけて、ようやく肩の荷が下りたと言わんばかりに溜め息を吐いてみせた。

「つたくよお、敵地で堂々と眠りこけやがって。え？　良い夢見れたかよ？」

「ほっ、とけ」

放りなげられた水を受け取ると、獣のように一気に飲み干す。水分を失っていた喉に潤いが取り戻され、冷えた液体が全体に心地よく沁み渡っていく。

濡れた口元を裾で拭くと、薄まった赤色がひつついてきた。おもわず訝しんだが、臭いを嗅いだ瞬間、それが自分の血だということが分かった。

そして蘇る、血みどろの記憶と闘争の生臭い感覚。

「俺は、確か――」

頭をおさえた巧に、キヤスターは気遣わしげな様子で、

「なんだ、覚えてねえのか？　バーサーカーとアーチャーの野郎とやり合って、ズタボロになったお前を、あの気の強い嬢ちゃんが運んできたんだよ」

「――俺が？」

キヤスターの領きを見て、巧は自分の身に起きた出来事をどうにか思い出そうと試みたが、戦っている間の記憶は綺麗に抜け落ちていた。

ベルトを巻いて、変身した瞬間までは、確かに記憶に刻み込まれている。だが、そこから先は、鮮血と暗闇に塗れていて、何も見えはしなかった。まるで、その部分だけ虫食いされてしまったように。

頭の中にぼつんと取り残されていたのは、津波のように押し寄せる殺意に必死に抗ったことと、血塗れになつてふらつく自分を、安堵の視線で見つめる少女の姿だけ。

——俺はあいつを、ちゃんと守れたのだろうか。

巧は、傍らに白髪の少女の姿がない事に気づくと、キャスターに言葉を投げかけた。

「あいつは——オルガマリーは」

キャスターはにやり、と頭の後ろで両手を組みながら、

「生きてるから、安心しとけ。お前をここまで運んだ後、いつも通りぐちぐち文句言つてたよ。寝てるお前の下に、オレのローブを敷いたのも嬢ちゃんだ。

有無も言わさずあつという間にひん剥かれちゃってな。ったく、つくづく良い女になるだろうよ。アイツは」

「そう、か」

人間を守ると、強く誓つた。けれど、少しの不安もなかったと言えど、嘘になる。何度も打ち勝ち、何度も守れたとしても、必ず取りこぼしという物は存在する。必ずという言葉ほど、信じられない物はない。だから自分に出来るのは、例え命を賭けてでも、それを未然に防ぎきる事だけだった。

いつ落ちるか分からない綱渡りを、永遠と繰り返しているようなものの。

だがしかし、守れたのだ。このちっぽけな手でも。

巧は、無言でかさついた自分の掌を見つめた後、辺りの景色に見覚えがないことに気づいて顔をめぐらせた。

仄暗い黒がたつぷり塗りこめられた壁が、上下左右見渡す限りどこまでも広がっていた。わずかに鼻を動かせば、雨の予感にも似た湿った臭いが漂つてくる。人気どころか、生物の気配すらひとかけらも感じられない異様な雰囲気。間違いなく、常人ならば立ち寄らない場

所だと、判断できた。

「——ここは、何処なんだ？」

「あ？ ああ、大空洞だ。つまり、敵の本拠地真っ只中ってわけだな。喜べよ。この異変の解決まで、あと一歩だ」

「そうか」

極めて簡潔に答えた巧に、キャスターは不満そうに眉根を寄せた。

「んだよ、ツレねえな。そんな老けた反応してないで、大人しくガキみてえに飛び跳ねたらどうだ？」

「そんなガラかよ。……大体、俺はガキって歳じゃない」

「はあ？」

言ってから、今の自分が自分ではない事に気づき、舌打ちした。いくら時間が経っても、慣れない物はとことん慣れない。ましてや、他人の身体などという未知数の相手では。

ぱりぱりと頭を掻き毟って、訂正する。

「忘れる」

「……」

妙に生暖かい視線が、背中に突き刺さっている。巧はなんとなく、壮絶な誤解をされているような気がしてならなかった。そして巧の予想は一ミリも変わらず、キャスターは少年の言動を、思春期に差し掛かった男ならば、誰にでも訪れるであろう影響のせいだと考えていた。そして、触れないことこそが最大の気遣いなのだ、にこやかな笑みを浮かべるに留めていた。

まったく余計なお世話である。

立ち上がろうとした巧の足が、ぐらりと大きく揺れた。思わず声が漏れる。傷は綺麗さっぱり消えていても、熾烈な戦いが残した疲労感はまだ残っている。こればかりは仕方がなかった。

「おいおい、あんま無理すんなって。最低限は治癒されてても、ひでえ怪我だったらしいからな。今倒れられちゃかなわねえ」

「余計な、お世話だ」

ふらつく姿を見兼ねたキャスターは手を差し伸べたが、巧はつんとそっぽを向いて、痛みに顔を顰めながらも身体を持ち上げた。キャス

ターはそういった、無意味な意固地が嫌いではない。だから大人しく手を引っ込めて、素直に事の推移を見守った。

「——っふう……」

やがて立ち上がった巧は、地面に転がっていたベルトを手に取ると、先ほどの夢を連想させる暗闇が満ちた、深い眼窩のような穴をじっと見据えた。

粘ついた瘴気をたつぷりと詰め込み、真つ黒な口臭を始終漂わせている闇。一寸でも踏み込めば、瞬きする暇もなく飲み込まれそうなその空間の先には、こちらを見定める怪物の眼球が居座っているような気がしてならない。漂ってきた生温い風が、皮膚を蚯蚓のように這いずりまわってきた。

思わず手を固く握りしめていると、隣まで歩いてきたキャスターが、冗談めいた口調で問いかけてきた。

「怖いか？」

その問いを尋ねようとキャスターが考えたのは、暗闇に包まれた巧の心の水面に、とうとう隠しきることの出来なかった、熾火のようにちらつく小さな怖気の気泡が、浮かび上がったからなのかもしれない。

いつの間にか、行き場を無くしたように震えている掌を、巧はじつと見つめた。

自分のことは、自分が一番よくわかっている。目の前に迫る脅威を前にして、何を考えているのか。火を見るよりも明らかだ。

しかし。

キャスターの問い掛けに答えるのは、ひどく簡単なことだった。

「怖いさ、いつだって」

——君は、死ぬのが怖くないのか？

あの時の自分は怖い、と答えた。だから、一生懸命生きるのだと。だから、人間を守るのだと。きつと、今の自分の答えも、何一つ変わらないと確信していた。

死ぬのが怖くない奴なんて何処にもいない。積み重ねてきた人生も、大事に育んできた夢も、抱いてきた信念も、すべてが一瞬で砕け

散り、空虚な灰と化していく。それはひどく度し難い。けれど、背を向けられても、誰にも逃がれることはできないのだ。一度死を乗り越えたオルフェノクですら、いつかは灰となって、朽ちてゆく定めにある。人間も、オルフェノクも、死ねば何もかもが終わってしまうことに変わりはない。

だからこそ、一生懸命生きていかなければならないのだと思う。

ただ死んで終わるのではなく、命ある限り、後の誰かに繋がる尊いなにかを残していく。人間にはそれが出来たから、ここまで生きてこられたのだ。

——燃え盛る炎のなかで、ひたすら他人の身を案じていたあの少女のように。

だから、俺は人間を守りたいと思った。

そうした自分の考えを上手く言葉にすることが出来ない。俺は口下手だ。だから巧は、頭をばりばりと掻き毟って、ひと言だけ告げた。「けど、行くしかないんだ。そういう時って、あるだろ。だから俺は行く。それだけだ」

巧の言葉に、キヤスターは大きく目を見開いて、それから今までにないほど、快活に笑った。

○

ぶん、と間抜けた音が響くと、お人好しの雰囲気を全身から醸し出した、胡散臭い男の顔が空中に映し出された。

いつ見てもどういいう仕組みで成り立ってるのかさっぱり分からな。巧はわたわたと騒ぐ男——ロマニ・アーキマンの面をぼんやりと眺めながら、すっかり冷め切った蜂蜜茶を口に含んだ。

『もしもし！ こちらカルデア管制室のロマニ・アーキマンだ！ 頼むから、応答してくれ！ もしも——』

「こちら、オルガマリー。とつくに聞こえてるから、そう何度も呼ばないで。鬱陶しくてかなわないわ」

疎ましげな声を聴いたロマニは、信じられないものを見るような目

でオルガマリーを見た。そして、おそるおそる、口を開く。

『しよ、所長ですか？　ほんとに？』

「そうよ」

『生きてるんですか？　それとも、もうとっくに所長は死んじやつて、溜まりに溜まった僕への怨みやら鬱憤やらを晴らす為に、ジャパニーズ・オンリヨーとかそういうカンジになっちゃつてませんか?!』

「——っ！　誰がなるかそんなモノっ！　あんたね、帰ってたら覚えてなさいよっ」

『しまった余計なこと言わなきゃ——って、そうだ！　それよりもマシゅはっ?!　藤丸くんはっ?!』

オルガマリーとの漫才をそこそこに、ロマニの焦り顔が画面いっぱいに広がった。それを諫めるために、巧の隣に座ったマシゅが控えめに手をあげた。

「私も先輩も、どうにか無事です。ドクター」

『ほ……ほんとうに、無事なんだね？　五体は全部揃ってるかい？』

『悪い奴らに悪いことされてないかい？』

『はい。心配しないでください』

『——よ、よかったああああ』

そしてロマニは、電子のため息を深々と吐きつけながら、ずるずると全身を脱力させていった。よほど焦っていたのかもしれない。男の額に浮かんでいた汗は、ざらついたノイズ混じりでも分かるほど、尋常ではない量だった。

すっかり安心したのだろう。顔を緩ませてずず、とみっともなく鼻を嚙りながら、ロマニは話を続ける。

『——どういうわけか、外部と連絡が繋がらないし、君たちにも今までコンタクトが出来なかったから、もしもの可能性もあると思って——本当に無事でよかったよ……』

「あのね。たとえ一時的でもカルデアの総責任者を担っているんだから、そんなみっともない顔しないでくれるかしら、ロマニ。貴方がわたし達の上司って考えると、心の底から不安になるの」

『はは……所長の憎まれ口も、なんだか懐かしく感じられる。ええつと……それで所長達は、今どこに?』

きよろきよろとあたりを見回す仕草をするロマニに、オルガマリーは呆れたような口調で、

「もう、大聖杯の近くまで来てるわよ。貴方たちがあたふたしてる間にね」

どことなく誇らしげに胸を張る少女を、巧は呆れた目で見つめた。鼻水まで垂らしてたくせに、よくもまあここまで自信満々に振る舞うことができる。そのツラの皮の分厚さだけが、手放して褒められる唯一の部分だった。

ただ、それを口に出せば面倒事に発展するのは間違いないからで、巧は黙って注ぎ足された茶を啜るのみに留めた。

もちろん、これまでのオルガマリーの醜態をまるで知らないロマニは、暢気に喜びの歓声をあげた。

『おおっ! ついにやったじゃないですか所長! これで今まで降り積もってきた汚名を、ようやく返上できますねっ!』

「おめ……っ、ちよつとどういう意味なのよ、それはっ! ……いえ、それは後でたっぷり聞かせてもらおうとして。」

——それより、ロマニ。ちよつと話したいことがあるんだけど」
『はい? 何ですか?』

オルガマリーはしばらく躊躇った後、バカみたいに欠伸を洩らしている少年に視線をやった。

ベルトのこと、あの謎の怪物のこと——他人の感情に対して、鋭敏にならざるを得ない環境に置かれていた彼女にとって、少年と怪物との間に何らかの因縁があるのだということは、それとなく知ることができた。

だから、話してもいいのか、迷っていた。普段のオルガマリーならば絶対にあり得ない行動だったが、この涙と鼻水と血に塗れた数時間を共に過ごすうちに、目の前の無愛想な少年に対して、少女の頑なな心は少なからず開かれつつあった。

おそるおそる、尋ねてみる。

「——ねえ、藤丸？」

「ん」

「……いまから話すの、貴方のことなんだけど」

「別に、いいぞ」

視線に込められた意味を察しているのか、それとも察していないのか。恐らく察していないだろう。眼差しにぼやけた光を詰め込みながら、巧は簡単にうなずいてみせた。

どうやら気にいったらしい。蜂蜜茶が注がれたコップを、子供のよううに両手で大事に抱えたその様は、重大な機密をバラしてもいいと許可を出しているようには、とても思えないし、思いたくもなかった。

コイツに機微を求めたわたしがバカだった。

ひそかに肩を落とすオルガマリをよそに、巧は蜂蜜茶を飲んで、帰ってから作らせてみるのもいいかもしれない——なんてことを考えていた。

○

そして、オルガマリは少しずつではあるが、これまでの出来事を話し始めた。もちろん、自分の醜態は徹底的に省いて。

ある人物にとつて実に都合よく整頓された話を聞くロマニの表情には、次第に驚愕が刻まれ、それは好奇心へと早変わりし、しまいにはきらきらと輝く視線が巧に突きつけられた。

「……」

ひどく、居心地が悪かった。逃げるように、巧はマシユの後ろに隠れる。それでも、マシユを透かして、男の視線がまだこちらを見据えているような気がした。

『——へえ、へええ、へええつ！ 謎の怪物も驚きだけど、まさか藤丸君に、そんな奥の手があったとは……。確かアンダーソンの話じゃ、素性は本当にただの一般人らしいけど。しかし……。変身かあ……。良いなあ。僕も見てみたかったなあ』

話をひと通り聞き終えたロマニが、好奇心を丸出しにしながら、

嬉々とした声をあげた。それがなんとなく気に喰わず、オルガマリーはそつぽを向きながらぶつぶつと文句を垂れた。

「——フン。なによガキみたいに喜んじやつて。大体ね、ちよつと不思議な力を持つてるからつて、こんなつ、協調性のかけらもない、無愛想猫舌バカが何だつてのよ！　こんなベルトを使えるのも、単なるまぐれよ、ま・ぐ・れ！」

『所長はロマンがないなあ。もつと夢持たないと、そのうち老けますよ？　あ、はは！　僕としたことが。元から老け顔でしたっけ』

「ふっ……」

これで無自覚なのだから、未恐ろしい。オルガマリーの地雷を踏み抜いた直後にもかかわらず、ロマニは言葉にできない怒りに震える少女を無視して、巧の方を向いた。

『藤丸くん』

「なんだ」

気の無い巧の返事にも構わず、ロマニは深く頭を下げた。

『所長を、そしてマシユを救ってくれてありがとう、藤丸くん。カルデア医療部門の総責任者として——いや、ひとりの大人として、心から君に礼を』

「よせよ。堅苦しいのは嫌いなんだ」

うざったそうに手を振る巧に、それでもロマニは感謝の笑みを向け続けた。

『それでも、僕が言いたいんだ——本当に、ありがとう。君が彼女たちの傍にいてくれて、よかった』

その瞬間、電波の悪くなつたラジオのように、一瞬だけ男に大きなノイズが奔る。やがて蛍光灯に群がる羽虫のようにノイズは増えていき、砂嵐が画面を覆い尽くしたころには、通信はすっかり途絶えていた。

「……」

巧は、別れ際に放たれたあけすけな感謝をどう呑み込んでいいかわからず、がしがしと頭を掻きながら乱暴に顔を背ける。

そむけた先には、キャスターが相好を崩して、いやらしくにやけて

いた。

「ニヤニヤ、すんな」

「ええ？・べつに笑ってねえよ？」

いつそわざとらしいまでに、キャスターは身体を震わせながら、なおも笑いを崩さない。巧は不愉快だと言わんばかりに、思い切り顔を顰めた。だが、その頬はわずかに赤らんでいる。

それを見て、遊び道具を手に入れた子供のように、オルガマリーは表情を喜悦に歪ませた。完全にさっきの憂さ晴らしにする腹である。

「藤丸ってば。一匹狼気取ってるけど、なんだかんだ言ってる人に褒められたら照れちゃうのね」

「お前……」

「いい加減、素直になつたらどうなの？ わざとつつけんどんな態度を取る男なんて、今時流行らないわよ」

「しよ、所長。そのへんにしてあげてください。また先輩が拗ねちゃいますから」

「イヤよ。大体ね、マシユは甘すぎなの。こういう輩には、一回ガツンと言ってやったほうが本人の為にもなるもんなの。ね？ 好意に慣れてない藤丸クン？」

オルガマリーは、ぷくく、と笑いを噛み殺しつつ、照れている巧を徹底的にからかい続けた。容赦を見せないその姿勢に、しかし黙り込むしかできない巧の脳に映ったオルガマリーの顔には、いくつかの文章が書きこまれる。嫌な女。高慢ちき。性格悪し。泣き虫。腹が立つ。ぴーぴーうるさい。いつか絶対ぶつ飛ばす。

そうとも知らず、オルガマリーは未だに、巧を嘲笑っている。

○

一時の休息を終え、ふたたび歩き出した巧達は、広々とした空間に辿り着いた。

ひどく閉塞的だった通路とは打って変わって、街一つは収まりそうなほど広大な景観がそこには広がっている。ただし、漂っているのは穏やかな都市の雰囲気ではなく、間違っても常人には到底耐えきれないであろう現世から逸脱した気候。濛々と立ち込める霧には、周囲の暗闇に勝るとも劣らない陰鬱さがこめられている。

そして、離れていてもすぐ傍に感じられる、膨大な陰の気を、へド口の如く垂れ流し続けている光の柱。

その前に立ち塞がる、一筋の雄々しき影。

それを視認したオルガマリーは、忌々しげに舌打ちを漏らした。

「なんて、ひどいザマ……あれが噂の聖杯ね。——それで、あの前にいるのが」

「セイバー——ア—サー王、なのででしょうか……いえ、そうとしか考えられません。それにしては……」

何かが、違う。

この場に足を踏み入れた時から、何か得体の知れない違和感を、マシユは感じていた。

漆黒の甲冑、鴉羽色の長剣、静謐の内に暴威を秘めた佇まい——それらもあるが、何よりも、英霊として重大な何かが、ズレているようにしか思えない。

だが、それはあえて言うならカンのようなもので、誰かに説明してみろと言われればマシユは押し黙るしかなかっただろう。

ひとり重苦しい思索に耽るマシユを尻目に、オルガマリーは光の柱を見つめる。あれを止めれば、全てが終わる。そうすれば晴れて自分はカルデアの所長に返り咲き、この生意気で気に入らない同行者たちと、共に歩むことはなくなる——それは、本来ならば喜ぶべきはずなのに、なぜかオルガマリーは無性に寂しさを覚えた。

「——おい、セイバーっ！ 相変わらず暇そうにしやがって、来てやつたんだからもてなしの一つぐらいしてみたらどうだ！」

そんな二人を放って、キャスターは声を張り上げた。しかし男の大声は、空しくも虚空に響くのみに終わった。

反応が返ってこないことは、予想済みだったのだろう。キャスター

は舌打ちを繰り返すと、仕方なさそうに頬をかいた。

「いっつもアレだ。話しかけても何も答えやしねえ。ずいぶんつまらねえ女になっちまったもんだ……」

「——あの」

禍々しい空気は、留まる気配すら見せずに膨らみ続けている。じわじわと蝕まれていく嫌な感覚に我慢ならず、マシユはどうとう違和感を口に出す事に決めた。

「何か……おかしくありませんか？」

「何か？」

「彼女が……アーサー王がおかしくなっていることは、わかるんですが、でも——説明はうまく出来ないのですが、その、雰囲気とか容姿ではなくて、もつと深い何かが違うってしまっているように思えて……」

「なんだそりや——と言いたいところだが、その宝具を持つてる嬢ちゃんの言葉だ。そう無碍にできやしねえな」

顎に手を添えて考え出したキャスターに、オルガマリーは抗議の声を上げる。

「何言ってるのよ。貴方が言ってたこよが嘘じゃないとしたら、あれはアーサー王以外の何者でも無いんでしょう？」

「つってもよ。アイツに縁深い嬢ちゃんがこう言ってるんだ。それに、聖杯の泥とやらが、オレたちサーヴァントにどんな変質をもたらすのかも定かじゃねえ……ここは一端退いて、状況を考え直すって手もある」

「はあ!?……ここまで来ておいてそれはないでしょうっ」

議論が始まりかけたそのとき、それまで黙っていた巧が、なにかに気づいた様子を見せた。そして、オルガマリーの背中をついた。

「——おい」

「ちよつと、後にして」

「おいって」

つつん、とひたすら突いてくる巧の指を払って、オルガマリーは苛立たしげに叫んだ。

「何よっ！……こっちは今忙しくて、あんたに構ってらんないのっ！」

「あいつ、無いぞ」

「無いって、何がっ!？」

「だから、顔が」

無い。

巧の眩きと同時に、深い暗闇の奥で、それはゆっくりと蠢き始めた。オルフェノクゆえの視覚だからこそ見ることができた、それ。

顔の無い、騎士王。

「ありや、一体——!」

キヤスターの、驚愕の声。

背後の光の柱が産み出した影が顔面を覆っているのかと思えば、違った。

空洞なのだ、どこまでも。

鼻も、眉も、目も、唇も、全てが光の届かない深淵の中に吸い込まれてしまっている。

セイバーは、不意に俯かせていた顔をゆっくりと上げると、巧達を視界に捉えた。目なんてなくせに、それは確かに、満面の笑顔を浮かべたように見えた。

そして、高らかに、哄笑。

聞くに堪えない、この世の物とは思えぬ笑い声が響き、

マシユが、叫んだ。

「——あれは、

——もうアーサー王では、いえ、サーヴァントですらありませんっ!!」

同時に、

悲鳴とも叫びともつかない奇異なる唸り声を捻り出しながら、断崖から走り出した無貌の騎士は、巧達に向かって一直線に飛翔した。

逸脱した騎士王が、深い暗渠を引き連れて、砲弾のように飛来する。遅れて風を切り開く音が低く冴え渡り、一瞬で音速を超えたことによつて生じた真空の膜が、次々と刻まれていく。途方もないほどの威圧感を伴った、回避不能の岩石が落ちてきた感覚。巧はベルトを腰に巻きつけたが、どう考えても間に合わない距離まで、漆黒の殺意は来

ていた。

「――A u s u z u !」

キヤスターが杖を構え、先端から無数の炎弾を放つ。しかし、セイバーは止まらない。避けずにむしろ、自ら進んで炎の群れへと突撃していく様子は、狂気に身を浸しきった獣のそれだ。

まともに標的へと着弾した炎が、大量の火花と黒煙を空に咲かせる。轟音と生じた眩光により、大空洞の禍々しい様相が明らかになった。強引に剥がされた闇が降り注ぐ中、黒雲を突き破って、漆黒の脅威が轟々と音を立て空間を荒々しく引き裂きながら迫る。

「――構えろよっ!」

キヤスターの怒号を切り裂くように、セイバーは人知を超えた速度で飛来した。

着地の衝撃で足元の分厚い岩盤が破碎し、砕けた破片が四方に散らばり、土褐色の柱が轟と音を立てて闇の中に天高く屹立した。衝撃に震える空洞が、苦しげな呻きを零す。

褐色の噴煙の中から、オルガマリーを小脇に抱えた巧が飛び出し、それを追って、セイバーがその姿を見せた。背筋に強烈な殺気。這い寄るすんでの所でオルガマリーを突き飛ばし、振り向いた。見える、暗い剣閃。俺はここで死ぬのか。巧が闇色の光を睨みつけ、セイバーが上段に振り被った剣を、立ち尽くす獲物の頭蓋に冷徹に叩き下ろそうとした瞬間。密かに接近していたマシュの渾身の薙ぎ払いが、騎士の脇腹に直撃した。

一切の手加減なしで施行された一撃はしかし、姿勢をたじろがせるのみに終わった。ぎよろりと、セイバーの意識が標的を切り替え、一瞬動きが止まる。

今はそれだけで、充分だった。

巧は、とつくにコードを入力していたファイズフォンを、トランスホルダーに叩きこむ。

『Complette』の電子音と共に、巧は紅い閃光を纏った仮面の騎士――ファイズに変身すると、すかさずファイズギア・クレードルに装備されたファイズショットを右拳に装着。流れるようにエン

ターキーを押し、腰を極限まで捻って拳に力を溜めた。

——『Exceed Charge』

真紅のフォトンストリームが、一層強い輝きを放つ。

耳鳴りにも似た音が、闘志を大きく駆り立てた。

瞬時に力を解き放ち、渾身の拳撃——グラン・インパクトが、セイバーの胸部を真っ直ぐに捉える。間違いなく、直撃だった。

だが、

——硬え!!

想像を絶する鎧の硬度に、超金属で包まれているはずの拳が、原型も留めぬほど粉々に砕け散った気さえした。腕全体に亀裂が入ったかのような衝撃が神経を伝わって、脳を揺るがせる。それでも、ここで退くわけにはいかない。

ファイズは、迸る痛みを無理やり飲み込むと、雄叫びを上げながら音を立てて唸る拳を、前のめりになりながらも振り抜いた。鈍い音と共に吹き飛んだ敵影が土煙の中にふたたび姿を消す。

まだ、終わりではない。ファイズはオルガマリーを立ち上がると、庇う位置に移動した。

「——あれは、なんなのっ!」

「さあな。——伏せてろっ!!」

背中に奔った怖気よりも先にファイズは腕を交差。瞬間、轟音。粉塵を切り裂いたセイバーが、獣のように宙を駆け抜ける音。遅れて衝撃。擦れ違いざまに斬られたのだと知覚するより先に、背後を襲わんと、騎士はふたたび跳躍の姿勢を取った。セイバーの足裏に、膨大な魔力が凝縮される。

「させる、かよ——っ!」

煙のなかからキャスターの声が高らかに響いたと同時に、地中から飛び出した無数の鳶がセイバーの下半身を一瞬で覆い尽くした。

間を置かず、詠唱。鳶がセイバーの首元まで巻きついた瞬間、煙を突っ切って飛び出した巨大な火球が、内部に熾烈な破壊を宿しつつ、吸い込まれるようにしてセイバーに殺到した。

着弾。

ファイズの視界で、黒い甲冑が拡散した光の内に飲み込まれ、生じた轟音と共に世界が爆散した。

荒れ狂う爆風が同心円状に周囲を廻り、たちまち上がった巨大な火柱が、救いを求める腕のようにあがきながら天を目指して煌々と伸びていく。

煙を振り払いながら、確かめるようにファイズは独りごちた。

「——やった、か？」

しかし、その隣で盾を構えるマシユは、叫んだ。

「い、え——まだです。まだ、あの人は終わりません……これで終わるはずが、ありません……！」

まだ終わりではないと。少女の胸の内に宿った、顔の見えない誰かがそう警告している。素性も明らかではないその人物が吐く、確固たる確証もないその言葉を無条件に信じていることに対して、なぜか違和感を覚えなかった。本能が理解していた。きっと、自分の中にいる誰かは、あの騎士を止めて欲しいと願っている——

そして、マシユの呟きに呼応するかのようには、黒煙の中から低い遠吠えが反響した。

並び立ったキャスターが、立ち昇る煙を見、そして手に握り締めた杖を苛立たしげに見てから、叫んだ。

「——ああくそっ！ だから、槍の方が良いつつつたんだよっ!!」

飛び出した、一条の影。

キャスターが瞬時に張り巡らせた障壁をいとも簡単に打ち破ったセイバーは、泥に塗れた左腕を歪な鞭と化してキャスターを縛り付けると、息吐く間も与えずに虚空へと投げ放った。遠くにみえる岩盤に高速で叩きつけられた男の姿が、粉塵に塗れて消える。すかさずマシユが、盾を振り上げた、刹那。下段。跳ね上がった刺突が、紫紺の鎧を透かして白い生身を穿った。白く瞬く視界。マシユが崩れようとする膝を必死に支えている間に、セイバーはとどめを刺さんと、返しの斬撃を少女の首に目掛けて放つ。

させはしない。

ファイズ、餓狼の如く疾走。その途中で見つけた瓦礫を、躊躇なく

蹴り飛ばした。飛来物に反応したセイバーが、振り向いて迎撃する。高速で飛んだ瓦礫が一瞬で微細に碎かれ煙霧と化す。土色の隙間を縫うようにして、ファイズが飛び出した。横に寝かせた刀身が飛来。呼吸を合わせ、手の甲で刃を逸らし、更に一步踏み込んだ。互いの吐息さえ交わせる距離に到達。比較的装甲の薄い脇腹を狙って、ボディを放った。直撃。敵の呼気が乱れた、気がした。表情が無いから分かる訳がない。気にせず、腹を幾度となく殴りつけ、小刻みに震えている背中に肘を叩きこんだ。鼻っ柱に拳を打ちこまんと、手近にあった色素の抜けた髪を掴み上げる。

そして目に映った、顔全体を占める、ひたすらの虚無。

瞬間、異常なまでの脅威を感じ、ファイズは全身の筋肉を瞬時に緊張させた。だが、遅い。セイバーは不可視の愉悦を零しながら、内側でとぐろを巻いていたドス黒い魔力を、剥き出しの空洞から解き放った。

「ぐ——っ!!」

魔力の波濤にあっけなく吹き飛んだファイズを追って、セイバーが虚空を駆け抜ける。重力という檻に囚われて、身動きのとれなくなつたファイズの上に、影が覆い被さった。

瞬間、意趣返しのように、鉄塊のごとき蹴りが、腹部に叩きこまれた。

「が——あ、っ!!」

内臓を滅茶苦茶に攪拌されたような感覚の後、神経を巨大な電撃が貫いた。粘ついた血液が、喉奥から一挙に押し寄せてくる。鼻腔に溢れ変える濃厚な血臭。四肢が千切れ飛ぶような苦痛の嵐に見舞われているのが嫌でも分かる。

地面に身体をめり込ませて喘ぐファイズの視界に、無造作に振り下ろされる剣が目に入った。死に物狂いで避ける。ずぶりと豆腐でも突き刺すように切っ先が厚い地盤を貫いた。そのまま斬り上げて、地面が爆ぜ、大量の礫が舞う。散弾。全身を滝のように打たれながらも距離を取る。だがセイバーは流れるように残像を残しつつ、急速に接近。噛み切るような力強い連撃を次々と見舞う。近づく空洞は、夢で

見た闇にそっくりだった。捌けるか。捌かなければ、死ぬ。

踏み込んだ、セイバー。雪白のような髪が波打ち、闇に飲まれた相貌がファイズに近づく。手を伸ばせば抱き締められるような至近距離で、騎士王は一陣の刃風となって踊り狂う。一步間違えば自分ごと斬り付けかねない距離だったが、泥に染まった彼女は既に、目の前に立ち塞がる障害を退けるだけの戦闘機械と化していた。

逃げた先に勝機は無い。その言葉をなぞるように、ソルメタル製の装甲に修復不可能な傷が着々と刻み込まれていく。飛沫いた泥が火花と混じって陰陽のコントラストを生みだす。鮮烈な痛み。頭蓋を狙う一撃を肘で受け止めるが、予想以上の力に堪え切れなかった。腕ごしに伝わった莫大な振動に、不意に脳の箍が大きく弛む。瞬間、軌道を変えた剣閃が胸部を深く抉った。苦悶の声。膝を崩したファイズを、巻き上がる烈風が薙いだ。天を目指すように駆け上がった刃先が、大量の火花を闇に撒き散らす。

「——ああッ！」

苛立ちに塗れた大振りの右をかます。セイバー、全身の関節が一気に外れたような崩れ方で避けた。自分の頭の構造を疑いたくなるような軌道から、鈍く光る剣が袈裟掛けに飛来する。地面に映る少女の影は、もはや人の原型をとどめてはいない。驚愕する思考とは逆に、反射神経はきわめて冷静に間合いを詰めた。スローモーションになったかのように、ゆっくりと迫りくる剣。

やがて、激突。

鉄と鉄が激しくぶつかり合った音が、甲高く鳴り響き、地面に紅い飛沫が点々と散った。

「せん、ぱ——」

噎せ返るほど濃厚な血の臭いが、あたりに漂い始めた。少女の脳裏に、両断された少年の血だらけの姿が否が応でも克明に連想され、心の底からどす黒い絶望が百足ののように這いあがってきた。じわじわと胸が焼けるように痛む。アーチャー、バーサーカー、ライダー、そしてセイバー——あらゆる強者達が与えた苦痛にも耐えてみせた膝が、自分でも驚くぐらい、簡単に崩れ落ちた。

相貌にへばりついた深淵を喜悅に歪ませたセイバーは、次なる獲物を狩らんと剣を引いたが、巨大な巖に喰い込んだようにびくともしない切っ先に、わずかな困惑の色を見せた。

「——よくも、やってくれやがったな」

膨れ上がった戦気に、セイバーは自らに生じた致命的な隙の存在を認めた。

ファイズは肩で、剣の根元を受け止めていた。当然、無傷などではいられない。ソルメタル製の装甲は無残に砕け、破けた黒い生地がその下から覗いていた。すでに左半身の感覚はない。衝撃の走った身体は溶かされた鉛を浴びせかけられたように熱い。それでも、喰いとめていた。

唇を噛み千切って無理やりに感覚を取り戻した。痛みを堪え、身体と身体の間で片足をねじり込む。咆哮。そして、思い切り蹴り飛ばした。吹き飛ぶセイバー。

その中心部には、赤く光る円錐が、深々と突き刺さっていた。

——『Exceed Charge』

「倍返しに、してやる——！」

疾走。

そして舞い上がったファイズの足先に装着されたファイズポイントが、高圧力のエネルギーを内包する可視の煌めきを放った。身体中に張り巡らされたフォトンストリームを高速で駆け巡るフォトンブラッドが、徐々に鋭く収束する。胎動するソルテックレンズ。

極まった、潮合い。

セイバー。剣を振り上げるが、もう遅い。

深い闇を遮るように、ファイズの身体が大きく宙転する。

そして、渾身の咆哮と共に、必殺キックであるクリムゾンスマッシュが撃ち放たれた。

ぶつかり合った瞬間、凄まじいまでの衝撃が生じ、鎧に弾かれたフォトンブラッドが火花を散らしながら空中で燃え上がった。手応えがない。硬過ぎる。まるで、際限なく膨張し続ける鉄の城壁に拳を叩きこんでいるような。構わなかった。目の前に立ちはだかるのな

ら、打ち破るまで。

時間にしてわずか数秒の膠着。しかしファイズにとって、それは無限に続く苦難のように思えた。

始まりには、必ず終わりが待ち受けている。

そして、それは訪れた。

とうとう貫くことの叶わなかった蹴撃が威力を弱めた隙を見逃さず、殆ど掬い上げるようにして、セイバーは剣を下段から斬り上げた。硝子の割れる音が儂く響き、ファイズごと打ち据えられたポイントが、地表に紅い雪片をぽつぽつと降らせる。重力の檻へと囚われた標的を、セイバーが迎え撃とうと飛び上がった瞬間、

「避けてっ、くださー——いっ!!」

反応できたのは、偶然に近い。

首を捻る。それと同時に、マシユが全力で投げ放った円盾が轟音をあげながらファイズを掠めて、宙に浮くセイバーの脊椎を容赦なく叩いた。

ごぎっ、と思わず耳を塞ぎたくなるような鈍い音が響き、セイバーの身体が石のように固まる。その一瞬を見逃さず、ファイズは宙に留まった円卓を手にとった。鉄特有の、重く冷めた感触が掌に力強く伝わる。それ以上に伝わる、そこに宿った何者かの強い意志が、ボロボロになった巧の身体を動かした。

スローモーションになる世界。標的は、すでに定まっている。

回復したセイバーが回避行動を取ろうと、身動きをしたその刹那。

渾身の力が込められた殴打が、セイバーの身体を深く穿った。

「——!」

セイバーの身体が、木の葉が吹き上げられたような速度で虚空に放り出される。遅れて地面に落ちる音が鳴り響いた。

危機は去った。

だが、心臓は断崖絶壁へと追い詰められているかのように、強い拍動を繰り返していた。これ以上無いまでの恐怖を自分が覚えている事を、巧は正直に認める。あれだけの勢いで——しかも顔面のすぐ傍を——盾を投げてこられたら、当たり前前の話だ。

「先輩っ！」

心配そうに走り寄ってきたマシユを見て、巧は仮面越しに声を張り上げた。

「危ねえだろっ！ 俺に当たったら、どうするつもりだったんだっ！」
理不尽以外の何物でもない。

まさか、怒鳴られるとは思ってもいなかったのだろう。出鼻をくじかれた形になったマシユは、納得のいかない表情を見せながらも、おずおずと頭を下げた。

「す、すみません……。ですが、間に合わない以上、ああするしか手立てはっ」

「知るかっ！ もうちよつと考えろっ!! このバカっ！」

あまりにも理不尽な少年の物言いに、マシユの頬が不満で大きく膨らむ。

「——さすがに言い過ぎですっ。私は、私にいま出来る最善を、実行しただけですっ。あそこで盾を投げなければ、先輩は死んでいたかもしれないんですよっ。ここまで文句を言われる筋合いは無いはずですっ」

「うるせえバーカ！ バカバカバーカっ！」

ここまで子供じみてるといつそ笑えてくる。

言い争う二人の隙間に割って入るように、キャスターが姿を見せた。

「——痴話喧嘩はそこまでにしとけ、お二人さん。まだ、終わっちゃいないぜ。あいつ」

空気を震わせながら、やがて一点に収束する、絶大な魔力。

そして、

すべてを解き放った漆黒の聖剣が、世界その物を震わせるような唸りを上げて、落雷にも似た光を刀身に宿した。

急激な魔力放出に全身を着々と崩壊させながらも、騎士王はそこにいる。

輝き過ぎてむしろ黒く見える聖剣を振りかざし、敵対者を捻り潰さんと、大上段の構えを見せた。

オルガマリーは、今にも泣き出しそうな表情でそれを見ながら、ぼそりと呟いた。

「あれ——どうするつもりなの」

「真つ向勝負するしかねえよ。どうせ、避けられねえのは決まってるだ。はは、上等じゃねえか。なあ」

「俺に聞くな」

平然と普段通りのやり取りを交わし合う巧とキャスターの姿に、オルガマリーの精神は今度こそ崩壊しかけた。

「あ——バカ!? あんな、莫大な魔力の塊、受け切れるわけないじゃないっ」

「受け止めるさ、いや、受け止めなきゃなんねえ——是が非でもな。じゃなきゃ、英霊の名が廃るつてもんだ。そうだろう？ 嬢ちゃん」

向けられたキャスターの視線に応えるように、マシユは力強く頷いてみせた。

「はい。あの人の今の在り方は、間違っています——だから、絶対に、終わらせなければいけません」

「その意気だ。良いか、時間が無いから手短かに説明する。宝具つてのはつまるところ英霊の本能に近い。ごちゃごちゃ考える前に、まずは全部捨てる。何も考えんな。理性を無くせ。柵を乗り越えろ——そうすりゃ、自ずと見えてくるだろうよ」

「——はいっ」

「……良い返事だ。つくづく将来が楽しみだな、全く」

その時、五体の芯まで響くエグゾーストノイズを吐き出す塊が背後に降り立った。一斉に振り向く。そこには、ずいぶん見慣れた機械人形の姿があった。

——バトルモードに変形していたオートバジンは、無機質な瞳をファイズに向けると、手に持つトランクボックス型ツールを無造作に投げ渡した。

受け取る。冷たい鉄の質感が、装甲越しからでもありありと伝わってきた。

赤と銀と黒が入り混じった、ひどく無機質な装飾。

それは、ファイズ最後の強化形態への進化を可能とする——ファイズブラスターだった。

「お前、これ……」

「何これ——どうやってこんな物騒な代物送られてくるの？」

「宅配便、らしいぜ」

覗きこんでくる少女を無視して、オートバジンに目をやる。こくりと、無言の頷きだけが戻り、オートバジンはセイバーに向かって飛翔した。

ファイズは黄金色の瞳を輝かせながら、しばらく手の中のファイズブラスターを見つめた。紅く身体を巡るフォトンブラッド。青く揺らぐ炎。木場の最期の姿。仮面の下で目を瞑る。やがて覚悟を決めたように、バックルからファイズフォンを抜き取つ。

そして、

振り下ろされた聖剣によって、

「——来ますっ!!」

特異点F最後の決戦の幕が、開かれた。

○

衝撃は、一瞬後に来た。

「——ふ、ぐ、ぐううううあああ——あああああああつ——!!」

とつくに腕の感覚は無くなっていた。意識が切断と接続を激しく繰り返す。ぷつ、と何か切れる音が聞こえた瞬間、突っ張った皮膚から血液が勢いよく流れ出すのが見えた。それを察知したのか、禍々しく輝く死を詰め込んだ濁流がさらに勢いを増して、すべてを飲み込もうと押し寄せてくる。ざり、と踏みしめた足が下がるのを必死にこらえた。

歯を食い縛り、渾身の力を腕にこめる。ここで諦めれば、全員が死んでしまう。何もかもが、無為に終わってしまう。それだけは、絶対許さない。斬撃に込められた憎悪、無念、妄執を、穢れ無き円卓で死

に物狂いで喰いとめる。

更に、勢いが増した。

最早、敵はセイバー一人ではなくなっていた。かつて聖杯に託されていた、人々の夢や憧れや願いが、無残な屍となって積み重なり、腐り果てた無限の怨嗟と化して、いまを生きている者たちを引き摺りこもうとしているのがわかる。

脳が激しく点滅を繰り返し、どす黒いイメージを刻みつける。根元から削ぎ落とされるようにばさりと流れ落ちる前髪。斑に剥げ落ちた皮膚。薄黄緑色の膿から溢れ出る粘ついた体液。爛れた歯茎。傷口から這い出す白濁した蛆の群れ。反吐のように全身に降りかかる悪感情。まるで、世界その物が押し潰そうとしてきているような感覚。

それでも、立った。

戦いは怖かった。一歩間違えば、すぐそばに死が転がっているという事実にも、目を向けることはとても恐ろしい。だから逃げ出したい——そう思う気持ちは、今でも変わらない。いくら英霊の力を得たとはいえ、瞬間瞬間をやり過ごすことに精一杯だった。ここまで生きてこられたのは、ほとんど奇跡に近い。

それでも、負けるわけには、いかなかった。

後ろに感じる少年の気配。

顔は見えない。だがきつと、いつもの不貞腐れた表情ではなく、強い意志を宿した表情をしているはずだった。

覚えている——炎の中で、手を握ってくれた事を。

覚えている——薄れゆく意識の中で、必死に声をかけてくれた事を。

「だが、ら——」

そうだ、と思う。こんなところで、膝を折ってはいられない。

立ち向かえ。

立ち上がれ。

このちっぽけな身が、彼のサーヴァントである限りは——！

「宝具、展、開——っ!!」

淡く澄み切った白亜の輝きが、今度こそ、正真正銘の奇跡を成す。

盾に秘められた膨大な力が瞬時に解き放たれ、大挙する光の濁流をまとめて薙ぎ払った。

魔法のように煌めいた輝きが、大空洞を照らし出し、立ち込める暗鬱な霧を振り払っていく。

盾を中心に生じた光の波は、やがてセイバーへと到達すると、爆発したかのように騎士の身体を凄まじい勢いで吹き飛ばした。対悪宝具。邪悪なる者を退ける、聖なる光。

「あつ、つ、は——」

力を一気に解放したことにより、マシユの神経はついに限界に達した。焼き爛れたようなありさまの魔術回路がひととき大きく疼く。たえがたい痛みに呻きながら、自分の身体が地面に落ちていくのを感じた。

それを、誰かが優しく受け止めてくれた。

ほのかな驚きに瞬いていたマシユの眼が、受け止めてくれた誰かを——巧を捉えた瞬間、まなじりに緩やかな孤が描かれた。

「せんぱい——わたし、やりました」

「ああ」

掠れた声が、虚ろに響く。巧は頷いて、震える少女の手を取った。「わたし、わたし。ちゃんと、みんなを守れました、よね」

「ああ。守ったんだ、お前は」

「よかつ、た——」

少女の、心底安堵した声。それが宙に溶けた時には、少女の意識は途絶えていた。

巧は、無言のまま、少女をそろそろと地面に置く。

そして、ファイズフォンを、ファイズブラスターに装填する。

——『Awakening』

鳴り響く、電子音。

同時に、キャスターは杖を振り上げて、詠唱を開始した。

「——我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社——」

セイバー側に片寄っていた魔力が、じわじわとキャスターに収束する気配を見せる。大気その物が凍りつくような、圧倒的なまでの密度。やがてそれが胸の内でも明確な形を成した瞬間、キャスターは己が身に宿る唯一無二の宝具への使用を淀みなく宣誓した。

「倒壊するは、^{ウイックカーマ}焼き尽くす炎の檻——」

地響きと共に飛び出した、炎を纏った樹木の巨掌が、セイバーを握り締めた。凄まじい勢いで地面を抉って飛び出した手はやがて無数の枝が絡まる太腕へと続き、太腕は牢屋めいた様相の胸元へと続いた。救いを求める亡者の如く伸ばされた腕。やがて、全身から土煙をあげて立ちはだかった、藁人形めいた姿の火炎の巨人。かつてドルイドの儀式において、神への供物を捧げる為に製造された人型の檻——それこそが、^{ウイックカーマ}クロー・フリーンが持つ宝具——^{ウイックカーマ}焼き尽くす炎の檻である。掌で蠢く、神に捧げられる運命に陥った生贄を見て、ウイックカーマは狂人のごとき歓喜の雄叫びを上げる。そして永遠に封じ込めようと、胸元に収まった牢屋に、高速で腕を叩きこんだ。まわりつく紅蓮が、ウイックカーマンを包み込み、

その中で一際輝く、黒い流星。

解放されたセイバーの聖剣が、キャスターの宝具を粉々に打ち砕いた。

「ぐ——ッ！」

フィードバック。瞬間、キャスターの魔術回路を耐え難い痛みが奔り抜けた。聖杯からの莫大な魔力供給を得ているが故にできる、完全な力業。このバケモンが——！再起不能なまでに切り裂かれた回路で、即座に立て直すことはできない。積み重なった木々を吹き飛ばして、セイバーが迫る。

回避不能。聖杯戦争における最後の勝者が、淡々と裁決されようと

した刹那だった。

ついに、

——『S t a n d i n g B y』

真紅の救世主が、舞い降りた。

○

煙から飛び出した赤色の拳が、セイバーの装甲を粉碎した。

唐突に胸に突き刺さった今までに無いほど巨大な衝撃に、セイバーは思わずたたらを踏む。反撃を繰り出そうと試みるが、砂塵を透かして伝わる莫大な威圧感に、騎士王は思わず足を止めた。泥を被って使物にならなくなったはずの直感が、息を吹き返したように早鐘を打つ。目の前にいるのは、自分を滅ぼし得るナニカだと——

そして、ゆっくりと、それは姿を現した。

眩く光るアブソリユートラング。全身を覆い尽くすのは高密度のフォトンブラッド。身体を駆け巡るフォトンストリームは、完全遮断を意味する漆黒の血脈——ブラックアウトストリームへと変化している。

超金属の仮面の騎士、ファイズの強化最終形態——ブラスタ―フォームが、ここに降臨した。

「■■■■——！」

はじめて、セイバーが声を出した。聞くだけで神経が腐っていくおぞましい声色に、巧は欠片も怯まなかった。

最初から、返す言葉は決まっていた。

「——行くぞ」

地を蹴って加速。一瞬にして距離を詰める。先ほどまでとは段違いの速度に、セイバーの反応が遅れた。その隙について、挟り込むような拳が、胸に放たれた。そして間を置かず、右。左。右。轟音を纏

う怒りの拳が唸りを上げて、セイバーの身体を所構わず破壊していく。だが、無傷で終わるとは思っていない。降らせた拳の数に勝るとも劣らない、斬撃の豪雨が飛来する。避けられない。いや、避けるつもりなど、端からありはしない――！

フォトンを含めた紅蓮の拳が、泥の甲冑を打ち据え、呼応するように邪悪な魔力がこめられた泥色の剣が白銀の装甲を切り裂く。

「づう、ああああ――ツ！」

ファイズは雄叫びをあげて肩口に飛来した聖剣を受け止めると、至近距離にある、幾度となく狙い続けた鳩尾に、渾身のアッパーを叩きこんだ。

めきめきめきと肋骨を砕いた感触が、鎧越しに伝わって来る。だが、痛覚はやはり存在しないのか、セイバーは無視してファイズの顔面に強烈な殴打を加えた。アルティメットファインダーにヒビが入る。しかしその時には既に、ファイズの足がセイバーの鳩尾に減り込んでいた。お互いに距離をとった形。顔を上げ、拳を構えた瞬間には既に、相手も同じ行動を取っていた。

咆哮。

紅と黒の拳が空中で衝突し、フォトンと泥の衝撃波が辺りに舞い踊った。クロスカウンター。仮面越しに鼻血を拭って、思う。上等だ。手首を軽く振る。そして、右足を一步出す。フェイント。敵も釣られるように接近。わずかな沈黙。それから地を蹴った。蹴りながら、横へ跳んだ。すれ違いざま、敵の腹に膝をぶち込む。セイバーの身体がくの字に折れた瞬間、無防備に露呈した右脇腹に、殆ど全身で殴りつけるが如き、大振りの右フックがまともに直撃した。

「――ッ!!」

拳が、完全に砕け切った音。

苦悶の叫びは、どちらのものか。いや、どちらでも良かった。俺が、こいつが苦しもうが、そんな事はどうでもいい。

だが、と思う。

こんなところで、あいつは死んではいけない。

なけなしの勇気を振り絞り、一步間違えば死ぬかもしれないという

恐怖を抑え込んで、巧たちをその身一つで守り切ってくれた、少女。強く、思う。

この俺が、アイツのマスターだというのなら。

サーヴァントに報いず、どのツラさげで生きていけるといえるのか――

「おおおおおおお――！！」

もう一度、倒れるような超低空姿勢で、地面からを斥力をあまねく貪り尽くす。見える、拳の軌道。重ねた。直撃が確定。意志に呼応したブラックアウトストリームが、大きな唸りを上げる。

叫びながら、拳眼に全身の力を集中させた。

とどめだ。

抉り込むように放たれたそれは、鎧を完全に砕いて、セイバーを遥か上空に打ち上げた。

転がっていたファイズブラスターにコードを入力する。5246。

――『Faiz Blaster Take Off!』

瞬間、左右四門のフォトンフィールドジェネレーターにより、フォトンフィールドが発現。ファイズブラスターは、高く飛翔した。

狙いは、とつくに決まっていた。迷うはずがなかった。視線の先に、敵がいる。虚空を切り裂きながら、更にコードを入力した。5532。

――『Faiz Pointer Exceed Charge!』

足に装着されたファイズポインターに莫大な量のフォトンブラッドが流し込まれる。用が済んだファイズブラスターを投げ捨てると、ファイズは紅い閃光を纏いながら、一直線にセイバーへ進んだ。

荒れ狂う烈火の輝きが、闇を切り裂き、光をもたらす。

間近に迫る、漆黒の甲冑。

迸る赤色の落雷。

全てを右足に注ぎ込み。

そして、

朝焼けにも似た暖かな光が、辺りを一瞬で埋め尽くした。

第十二節 「生誕」

分厚い岩盤が幾重にも重なった大空洞の天井を、いとも容易く貫いてみせた真紅のフォトンブラッドは、深く昏い闇に包まれた柳洞寺一帯を、赤く眩く照らし出した。

――
その輝きを、見つめる不吉な影が一つ。

中天に座した月と淡い夜に染まった空を隅々まで覆い隠す黒雲と同じ高さにある影は、闘争の気配が満ちるこの都市にいなながらも、世界への悪意と害意を欠片とも隠そうとはしていない。それも当然だった。彼の影――視界に映る全てを見下すかのように空に立つその男こそ、この世界の理から最も外れた存在であり、時と空間を越えた玉座に座した王が送り込んだ尖兵なのだから。

通りすがりに踏み潰した蟻の心身をいちいち斟酌しないように、男――レフ・ライノール・フラウロスにとつて、この短くも長い夜に起きた惨劇は、たった瞬き一つで忘れてしまえる程度でしかなかった。そこにどんな決意が、苦痛が、信念が、絶望が、希望があらうとも、どうせ最期にはすべて燃え尽きてしまう物に、一体どう価値を見出せばいいと言うのか――？

ゆえにレフは、この特異点における虎の子であり、唯一の懸念材料でもあったセイバーの巨大な気配が、跡形もなく消滅したことにも揺らがない、鼻歌交じりにゆつくりと地上に降り立った。そして、古ぼけた時の臭いが染みついた柳洞寺への石段を、一步一步踏み締めるように登っていく。

盤面の終局は近い。残る英霊は、あと一騎。そして、この歪な聖杯戦争において、唯一の勝者となり得る資格をついに手に入れた異形が――

知らず、哄笑の形に頬が歪んだ。どうにか抑えようと口元に手をやるが、とうとう堪え切れなかった笑いが口の端から漏れ出してしまった。漣めいた笑い声は次第に、辺りを覆い尽くさんばかりの大音声へ

と変わる。脳髓を掻き穿るかのような響きを持つて、声はどこまでも低く、どこまでも不吉に、あたりを震わせ続けた。

○

雨が降っている。

乾巧は、その雨が誰かの涙だということに、口の中に入った瞬間に広がった、微妙な塩辛さで気づいた。

「っ——う」

意識を取り戻した途端、鈍い痛みが慌ただしく走り回り始めて、肩間に深いシワが寄った。情けない呻きを漏らしつつ、のろのろと実体を取り戻していく世界を、ぼうつと眺めた。雲の代わりに岩を敷き詰めた暗い空、鼻腔を舐める錆臭い血の香り、手を伸ばせば届く距離にある、金色のぼやけた二つの月——それが自分を見下ろす誰かの瞳だと気づき、巧はようやく、自分と取り巻いている状況を思い出した。

カルデア、サーヴァント、特異点、聖杯戦争。

燃える都市、瓦礫に潰された少女、自分ではない自分。

全部、夢ではなかった。

「——ふじ、まるっ」

巧の目に光が戻ったことに気づいても、まだその光景を信じることができないとばかりに、オルガマリーはぱちぱちと瞬きを繰り返している。それがとんでもなく間抜けに見えて、巧は思わず笑顔を浮かべた。頬の深い切り傷が痛んだが、それでも笑った。

「なに、泣いてんだ、お前。バカみたいに」

「……っる、さいっ！ それにっ、バカって、あ、あなたの方がっ、バカみたいなことばかりして……心配かけさせてばかりで……！」

感情が昂り過ぎたのだろう。オルガマリーは、取り繕っていた外面もへつたくれも無くして、顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら巧の胸を叩いてくる。死ぬほどみっともないが、出会った頃に張りついていた、常に急ぎ立てられているような顔よりはよっぽどマシだと、巧は思った。

それでも涙と鼻水で濡れたシャツの感触と少女の体重がかかって痺れてきた胸で、さすがに鬱陶しくなってきた。巧は地面にへばりついて怠けている腕をどうにか叩き起こし、少女をどけようと試みる。しかし、接着剤で貼りついていているかのように、オルガマリーは動かなかった。

「おい……」

「なに、よっ!!」

露わになった般若の如き形相に若干引きつつ、巧は淡々とした調子で要望を伝える。

「いい加減、どけて。重いんだよ」

「うる、さいっ! どうせいま動いたってお荷物にしかないんだからっ、しばらくわたしのハンカチ代わりにでもなつてなさいよこのバカっ!」

言ってることが無茶苦茶だ。

多少乱暴にでも引き剥がすか——と一瞬思案したが、ヒステリックに陥った目の前の少女が、死ぬほど面倒な生き物へ変わることを重々承知していた巧は、とうとう諦めたかのように力を抜いた。大きなため息を空中に吐き散らかしながら、もう一度目をつぶる。心地のいい暗闇が、ゆっくりと脳に染み渡っていく。

「——疲れた」

今はただ、それだけが全てだった。

女に肩を貸される趣味はない。

そう駄々を捏ねて頑なに動こうとしなかった巧であったが、焦れた拳句の果てに簡易な身体強化の魔術を行使したオルガマリーに片腕で担ぎ上げられた瞬間に、ぽつきり折れてしまったのだろう。不満を垂れ流しつつ、巧は大人しくオルガマリーの肩を借りて歩いていた。「……ちよつと、藤丸。肩を借りるにしても、もうちよつとちゃんと歩けるんじゃないの? まさか、足の骨が全部砕けてる訳じゃないでしょうに」

「寄り掛かれつつったのはお前だろうが」

「それにも限度があるって言ってるのっ！ ……もうやだ、あなたと話してると無駄に体力使うわ」

そうやって不機嫌さを露わにしても、オルガマリーは決して自分の肩に置かれた巧の腕を手放そうとはしなかった。激しい憤りが、巧の脳を赤く染めていく。

巧の今の身体は、かつての身長よりもいくらか低い。

だが、巧のすぐそばにある少女は、それよりもずっと小さく、細かった。その奥に隠されている内面も、決して強くないだろう。

血塗れた打算と欲望が周囲を取り囲む中で、見下されないために、侮られないために、臆病で泣き虫で弱々しい自分を押し殺すために、全身だけでなく心の中にも敵意の棘を生やしながら、必死になってかき集めた意地を張りながら生きてきた——オルガマリー・アニムスファイアがこの十数年の間に辿ってきたそんな道筋のにおいを、無意識のうちに巧は嗅ぎ取っていた。ゆえに、腹が立った。そんな存在を杖にして縋りつかなければ立てないほど弱った自分が、ひどく腹立たしかった。

裡に蔓延る、どうすることも出来ないそんな苛立ちを前に巧は黙ることしかできない。男のそんな様子をどう捉えたのだろうか、オルガマリーは気に喰わなさそうに小さく鼻を鳴らした。

「——まだ文句を言うようなら、もう一度持ち上げてあげるから。なんなら、お手玉でもやってあげましょうか？」

「……」

「……何よ、すっかり静かになっちゃって。そうやって殊勝に反省の意を示せば、許されるとでも思ってるわけ？ はっ！ さすが一般人は精神の緩み具合がずば抜けてるわね」

「……なあ」

「な、なに」

さすがに言い過ぎたという自覚があるのか、びくりと肩を震わせながら、オルガマリーは巧の横顔を恐る恐ると窺う。しかし巧は一切気にすることなく、いつもの乾き切った声で少女に尋ねた。

「これが終わったら、お前はどうするんだ」

罵声の一つでもぶつけられると覚悟していたのだろう。安堵よりもむしろ拍子抜けしたかのような声色で、オルガマリーは答えた。

「……別に、あなた如きに心配されるようなことなんて無いわよ。そりゃあ、凍結保存やら内部犯行やら問題が山積みだけど……どうせ、誰も助けてくれないんだもの。だったら、せめてわたしだけは引き下がるわけにはいかないわ。アニメスフィア家の当主として、父さんの遺志を受け継ぐ者として、なによりも、一介の魔術師として——自分の不始末は、自分でつける」

少女の堅く引き締められた唇が開き、そんな言葉が漏れ落ちた。一見気丈そうに見えるそれに、強がり混じっていると分かったのは、回した腕に微かな震えを感じたからだ。巧は、とうとう我慢ならなくなって、普段は硬く封じ込めている心の声を、つい溢してしまった。

「死ぬなよ」

「は？」

唐突なそれに、珍妙な生き物を発見したかの如き視線が深々と刺さる。しかし、ここまで来て撤回するわけにもいかない。巧はほとんどヤケクソで、自分の内心をゆっくりと吐露していく。

「今、思い出した。お前には、橋ん時に借りを作ったまんまだ——だから、死ぬな」

「……あのね。あなた、心配する方向が、まるつきり見当違い過ぎるのよ。とっ捕まえられて拷問されたりなんてしないわ。精々が査問か、監査官をつけられるか……確かにキツいっちゃキツいけど、藤丸みたいな大馬鹿に付き合わされたあれこれに比べれば、なんてことないわ」

「……馬鹿って、言うな」

「ふん。この先、何度でも言ってやるから。ばか、ばか、ばーか」

自分から言い出したくせにひどく照れ臭そうにする男の姿がどうにもおかしくて、オルガマリーは半笑いながら軽い痛罵を繰り返していたが、しばらくすると片掌で自分の口を隠した。なぜか緩みが止まらない。ひくひく、と痙攣し続ける頬を必死に抑える。触れた肌は、焼けたように熱っぽい。寒さに凍えた身体のすぐそばで火を灯され

たように、落ち着く暖かさが染み渡る感覚が波紋のように広がっていく。

——ああもう、なんだってのよ！

ぎやあぎやあと言い合っている内に、いつの間にか抜け出したそれは、虚空に溶けて消え去ってしまったが、出来ることならもう少しだけ感じていたかったと、オルガマリーは密かに思った。

「なにニヤついてんだ……気持ち悪い」

「うるっさいこのバカ藤丸っ！」

台無しである。

○

「——先輩っ！」

「——よお、坊主。まさか生きてるたあ驚きだ」

面白いほど息の合わない二人三脚をしながら、どうにか合流を果たそうとしている巧とオルガマリーに気づいたマシユとキャスターは、一方は氣遣いと微かな怒気を、もう一方は深い驚嘆とあからさまな愉悦をもって彼らを出迎えた。

キャスターに断り、慌ててこちらに駆け寄ってきたマシユを見たオルガマリーは巧の腕をゆっくり外すと、肩を解すように回しながらキャスターの元へ向かっていく。交替するように巧の前に辿り着いたマシユは、荒れた息を数秒で整えると、開口一番虎のように吠えた。

「——先輩の、あんぽんたんっ!!」

「……」

「どんちんかんっ、唐変木っ、ぶきつちよっ、おたんこなすっ、ええと……猫舌っ、ツンデレっ、むっつりっ、えとえと……先輩っ、先輩先輩先輩せんぱいっ」

先輩は悪口じゃない。

それからしばらくの間、マシユは自分の思いつく限りの悪態を舌足らずに吐き出し続けていたが、数秒と経たない内に悪口のボキャブラリーが尽きた為だろう。罵倒のぼの字も保てていない有様に、巧は途

中で止めようかと思ったが、口を出すと余計にややこしくなりそうなので黙って見届けた。

「気は済んだか」

「……本当は、まだまだ言いたいことがたくさんあります。けれど、それよりもわたしは、先輩が生きていてくれたことの方がどうしようもなく嬉しく思ってしまうのです——改めて、言わせてください。お帰りなさい、先輩」

恥ずかしくないのか、と思う。

だが巧は、マシユの言動をいつものように笑い飛ばせなかった。ここまで明け透けに物を告げられてしまうと、逆に自分の方がむず痒さを覚えてしまうらしい。

いつそ無遠慮と取れるほど真っ直ぐに刺さってくる、真摯な光に濡れた視線がやけに眩しくて、巧は視線を逸らしながら開きにくそうにモゴモゴと動かしていた口を開けた。

「世話、掛けたな」

少女ははにかみながら、男の言葉に頷いてみせた。

「……わたしは、先輩のサーヴァントですから、これぐらい何ともありませんっ。——いえ、あのような無茶をされると、さすがに怒ります。が。というか、まだ怒ってるんですからねっ」

「謝ったんだから、もう良いだろ」

「それとこれとは話が違います！　いくら先輩が強いと言っても、あんな戦い方ではどれだけ命があっても足りないように僭越ながら思いますっ！　大体、」

人差し指を立て、クドクドと立て板に水を流すようなお小言が、巧の耳へと入り込んでサラサラと流れていく。

あーうるせえ。こいつやっぱ面倒くさいなど、心底から思った。

「——痴話喧嘩は済んだかよ？」

ニヤつきながら杖で肩を小突き回してくるキャスターに肘を入れた——当然の如く避けられたが——巧は、光る粒子をあたりに撒き散らしながら、ゆつくりと宙に身体を溶かしていくセイバーを見下ろし

た。

顔を包み隠していた泥はフォトンブラッドの余波で一滴残らず蒸発しており、暴君の道を選んだ騎士王は、少年と少女の狭間にある中世的な容姿を曝け出していた。陶器のように白い肌はまさしく死人のそれである。硬く閉じられた目蓋から伸びた睫毛と同様、色素の抜けた淡い蜂蜜色をした髪は、闇の中にあつてなお薄い輝きを放ち続けていた。

鴉羽色の甲冑は、聖杯の泥による半強制的な魔力解放と巧たちの決死の猛攻によつて、目に映る範囲全てに細やかな罅が刻まれていた。その胸部が微かに上下したのを見て取った巧の手が、ファイズフオンを握り締めたまま、電撃を流されたように跳ね上がりかけ——それをキャスターが容易に抑えつけた。

「よせ。仕留め切った獲物に脅えて追撃するなんざ、素人のやることだぜ」

「……」

「安心しろ。コイツに立ち上がる力はもう残つてねえよ——なにせ、ついさつきまで泥人形も同然だったんだからな。作り主に飽きられたら地面に還る定めつてやつだ。誇りを失った英霊にしちゃあ、随分と上等な末路じゃねえか——ええ？ セイバーさんよ」

「……ふ。キャスターになつて、少しはマシな口を利けるようになったのか。アイルランドの光の御子よ」

憑き物が落ちたかのように整然とした目つきのまま喋り出したセイバーに、キャスターは驚きを隠せなかった。どんな事態に陥ろうと常に一定の静けさだけは保っていた男の目が、一瞬揺らぐ。それで少しは鬱憤を晴らせたらしく、セイバーは鉄面皮に指摘されなければ気づかないほど小さく笑った。

「んだよ……喋れるんなら先に言えつての」

「不愉快だが、何を語っても見られている。ならば、案山子に徹した方がよかつた……のだが、それも最早、無意味か」

警戒するような響きに、キャスターは訝しむ。しかしセイバーはそれ以上を語ることなく、どこか自嘲するような響きのまま、淡々と話

し続けた。

「防人である私は打ち倒された。ゆえに、この特異点は崩壊し、そして聖杯は、いずれ最後の勝者となる貴方たちの手に渡るだろう……ふふ。己が執着に傾き続けた結果が、これか。結局、どう運命が変わろうと、私ひとりでは同じ末路を迎えるという訳だ」

「なあオイ、セイバー。テメエ、何を言っついていやがる？ いや——何を知らされた？」

粒子化が進み輪郭がぼやけ始めた少女に、キャスターは躊躇なく杖を突きつける。しかしセイバーは欠片も怯まず、むしろ問い返すように、黄金の瞳をキャスターに刺した。

「いずれ、貴方も知る。グランドオーダー——聖杯を巡る戦いは、まだ始まったばかりだという事を」

そこで言葉を切ると、セイバーは並び立つ巧とマシユを見やった。目が合った事に気づいたマシユは唇を決意の形に噛み締めると、決して逸らすことなく真っ正面から、騎士王の視線を受け止めた。

「——生き恥を晒してしまう機会を無くしてくれたようで、感謝します。名も知らぬサーヴァントとマスターよ」

「——セイバー、さん」

セイバーの表情が、ふと緩む。まるで、故郷にようやく帰り着けたような旅人のようだ、マシユは思った。

「貴方たちの旅路が、どのように終わるのか——私は推し量れません。ですが……その宝具を持つ貴女ならば、きっと、追い求めた物を必ず手にできるでしょう」

「わたしは……わたしはきつと、一人ではこの宝具を使いこなせませんでした。先輩や、所長、キャスターさんが一緒にいてくれたから——それに、貴方が立ち塞がってくれたから、わたしは、守るべき物を、ちゃんと見つける事ができました……ありがとうございます、ごじます」

マシユは、傷だらけの身体をおして、頭を深く下げた。セイバーは呆気に取られていたが、やがてクスクスと、可笑しそうに声を上げた。そして、澄み切った瞳を天井へ向ける。

「ああ——貴女が、最期の相手で良かった。本当に、本当に——」

決して届くはずがない星を追い求めるように、空に手を伸ばしたまま、

サーヴァント・セイバーはようやく、辿りつくべき結末を迎えた。

○

セイバーとの別れを経て、巧たちは、ついに聖杯の元へと辿り着いた。

聖杯は、禍々しくも昂然たる絶大な魔力を宿した光を湛えて、血みどろの闘争の果てに生き残った最後の一人を待ち望んでいたかのように深く聳え立っていた。超抜級の魔力を、際限なく垂れ流し続けるそれに改めて驚嘆を示す少女たちを尻目に、巧は一人、気に喰わない、と舌打ちしかけて口の中に押し留めた。

オルガマリーから又聞きした、聖杯戦争という響きが、そもそも嫌いだ。己の願いを叶えるためにまったく見ず知らずの人間と——あるいは顔見知りと——殺し合うなど、はつきり言って頭がどうかしているとしたか巧には思えない。

オルガマリーの話を、思い出し続ける。もし魔術と名のつく全てが、本当に等価交換の法則で成り立っているというのならば、何の対価もなく一方的に呼び出された聖杯が、一方的に願いを叶えてくれるなどさすがに都合が良すぎる。

だから恐らく、喰らうのだろうと思う。

何を喰らうのかは、事情を知らない巧にはよく分からない。ひよつとすれば、ただの考えすぎなのかもしれない。

だが、破壊と殺戮を前提に願いを叶える怪物が望むモノには、嫌というほど心当たりがあった。

「先輩？……どうかしましたか？ 具合でも悪いのですか？」

颯め面で黙ったままにいる巧の顔を、マシユが心配そうに覗き込んでくる。なんでもねえよ、とおぎなりに手を振りながら答えると、いまいち納得がいかないような顔をしながらも、少女は大人しく引き下がった。

「で……どうすんだ、これから」

光を見上げるオルガマリーに問いを投げかける。顎に手を当てて何がしかを考えていたオルガマリーは我に返ると、そうね、と一端前置きして、

「取り合えず、聖杯を回収するわよ。そうすれば、この異変は解決する——でしょ、キャスター」

「ああ。それはこのオレも、例外じゃねえ。本当なら、セイバーの野郎をブチのめした時点で消えてなきやおかしいんだが……お前らの旅を最後まで見届けられるってことで、ま、役得だな」

「ほんつとうにアバウトね……けど、一応、お礼は言っておくわ。色々、あ……ありがとう」

「……クツ」

「——ニヤニヤ、すんなあつ!! マシユも笑わないっ! そこっ! 藤丸もっ、なに口押さえてんのよムカツクわねアンタってやつは本当にっ!!」

あまりの羞恥にぎゃあぎゃああと理不尽に喚き出したオルガマリーと、それを面白がって揶揄うキャスターからそろそろと距離を離しつつ、巧は促すかのように首を横に振った。

「さっさと行けよ」

「え……わたしが、ですか」

「お前以外に、誰がいるってんだ」

「で、ですが……クー・フリーンさんが……その、適任なのではないかと。この都市で起きた異変に最初に立ち上がったのは、私たちではなく、彼ですから」

マシユは戸惑いながらキャスターを見やる。獲物を見つけた女豹が如く追いかけて回してくるオルガマリーから逃げ続けていたキャスターは、不意に足を止めると、不敵に笑いながらしっかと頷き返した。「いいや。今回の功労者は、文句なしに嬢ちゃんだ。セイバーの野郎が正気を失っていたとはいえ、あの聖剣の一撃を真っ向から受けきった……誰がどつからどう見ても、一人前の立派なサーヴァントさ」

立ち止まったキャスターの肩に鼻をぶつけたオルガマリーも、我に

帰った様子で、いまいましたようにキャスターを押し退けながら答える。

「不要な謙遜は辞めなさい、マシユ。あなたとあなたの宝具は、わたしたちをあの手この手のセイバーの宝具から最後まで護り抜いた。それは誰にも否定できない事実——だったら、誰よりもあなた自身が、その価値を認めてやらなきゃならないのよ。そうでなきゃ、守られたわたしたちの立場が無いでしょう」

「ほんつと素直じゃないな、お前」

「アンタはまだこれから先わたしの下について馬車馬のように働くって自覚が足りてないようね……!」

三人の後押しを受け、それでもマシユは少しだけ躊躇った。自分ひとりだけでは、きつと今の状況には至れなかったと心の底から思う。自分はいわゆる未熟者で、キャスターがいなければ抗う術を、オルガマリーがいなければ目指す先を、マスターが——藤丸立香がいなければ、戦う導を見つけれなかったままだった。それはこの先も、きつと変わらないだろう。迷って、躓いて、膝を折ってしまうこともあるかもしれない。けれど。

『貴女が、最期の相手で良かった——』

消えゆくセイバーが言い残した言葉が、頭の中でわんわんと反響を繰り返す。

だからこそ、大切な物を守っていくために。

この先の道を、立って歩いていくために。

受け継ごうと、思った。かの騎士王が遺した物を。

「分かりました。わたしが、この特異点を……終わらせませす」

覚悟を決めて、そつと光に手を伸ばして——

「——いいや、まだ終わっていないさ」

背後から響いた声が、全てを絶望に叩き落とし、何もかもを無為に終わらせる為の、悲劇の幕を開けた。



「ぐ——！」

一番最初に反応を示したのは、キャスターだった。決して近づけてはいけない「ナニカ」がこちらを——正確には聖杯を目指して——近づきつつある。ある程度の距離が残った時点で気づけたのは僥倖か。後ろ手で残り少ない魔力を編みながら、全速力でルーン文字を刻んでいく。発現すべきは死を司る師匠より授けられた、18の原初のルーンを全て使用する絶技——大神刻印。総身から絶大な魔力が立ち上り始める。15まで刻んだ時点で全身の魔術回路を焼き切らんばかりの苦痛が走ったが一切無視。内蔵から溢れ出ようとする粘ついた血を死ぬ気で嚙下し、17個目のルーンを描こうとした次の瞬間だった。

暗闇から這いより出た触手が、キャスターの霊核を正確無比に貫いた。

「ぐ——が、げ、ええ」

激痛に思わず情けない声が漏れる。史実によると、彼は生前に彼自身の武器によつて命を落とし、その際に傷口から飛び出た臓物を体内に戻した後に、石柱に己の身体を縛りつけてから死んだ——という壮絶な伝承が残されている。しかし、今なお全身を貫く痛みを前に、クー・フリーンの精神は半ば発狂しかけていた。白い点滅を繰り返す視界。痛みには、慣れていくつもりだった。少なくとも、それだけでは決して足を止めないつもりだった。だが、この存在その物を揺さぶられるような痛みは、何だ——!?

疑問と狂気と憤怒が思考の回廊を絶え間なく行き来する中で、それでもクー・フリーンは血塗れの指を震わせながら動かしていく。目的はたったひとつ、最後に残った原初のルーンを刻み、この短時間の間にできた目の前の連れ合いを、最後まで守り抜くため——キャスターの隠し名を持って現界した自分に、死に体でも戦闘を続行できるような技術は生憎と備わっていない。しかし立ち続けた理由は恐らく、ひとえにクー・フリーンという男が生前も死後も永遠に持ち続けるであろう、英霊としての意地に違いなかった。

だが、

「下らない——実に下らないな、クー・フリーン。凡百の英霊が、今際の際に張る意地など……眠りにつく幼子の駄々にも等しいよ」

見下すように、蔑むように、心底つまらなそうにそう呟いた影は、手のひらを緩く握り締める。

たったそれだけで、

「——ク、ソ」

サーヴァント・キャスターの霊核は完全に砕け、同時にキャスターの存在も、この特異点から一瞬で完膚なきまでに消え去った。

「な——」

突然の呻き声に訝しんで振り向くが、いつの間にか姿を消していたキャスターに呆気にとられるオルガマリーのすぐ横を、影は音もなくすり抜けた。オルガマリーにつられるようにして後ろを見た巧たちも、やはり気づかず。

デミ・サーヴァントとオルフェノクの超感覚ですら感知できないその影は、聖杯の前に陣取るや否や、ぱち、ぱち、ぱちと、耳障りな拍手を打ち鳴らし始めた。

「おめでどう、カルデアの諸君——君たちは見事、この特異点の攻略を果たした。いやはや、全く計画の想定外で——同時に私の許容外だ」

世界を軋ませるような声だった。

常人ならば、耳にするだけで精神を擦り潰しかねない声は、そこまでの音量ではないにも関わらず、大空洞全体を容易く覆う。最初に顔を戻したのも、やはりオルガマリーだった。

「——」

光の柱の前に立ち尽くしていたのは、深い緑を基調とした服装で全身を整えた、柔和な笑みを浮かべた男だ。その一見温和そうに見える物腰の奥には、一個人を規律で正し集団へとまとめあげる為の力強さを隠していて、閉じた目蓋の下には理知的な双眸が穏やかに佇んでいる事を、オルガマリー・アニムスフィアはよく知っていた。

知らない訳が、なかった。

「——レ、フ？」

「やあ、オルガ。相も変わらず息災そうで何よりだ」

『レフ——レフだつてっ!? まさか、あのレフ・ライノールかいっ!?』
元凶であるセイバーを倒した事により、通信機能が復活したのだから。しかし、そんな事を欠片も気にせず、言葉の端々に大きな焦りと戦慄を滲ませながら通信機越しに叫んだロマニに、オルガマリーは歓喜を抑えきれない様子で叫び返した。

「ええっ! そうよっ、レフよっ! ああ、きつと彼も生身のままでレイシフトしたんだわ……っ! そしてわたし達を、助けに来てくれた……っ!」

「待つてくださいい所長っ! アレはわたし達の知っている教授とは何か……っ!」

駆け寄るオルガマリーをどうにか止めようとしたマシユの手は、届かなかった。オルガマリーは目端に涙を滲ませながら、レフの元へ近づいていく。

『そんな馬鹿な……あり得ない……そんな事が、そんな事があり得る筈がない……っ!』

「なにバカなこと言っているのよっ!! あんたには、今ここにレフがいるのが見えてないのっ!」

『僕にも見えているからこそ、言っているんですよ……! だって、彼は——レフ・ライノールは、爆発に巻き込まれてとつくの昔に死んでしまった筈なんだ!』

「え——」

ロマニの言葉に少女は足を止め、男は嘲笑を吐き出した。

「その通り。カルデアで君たちと長いあいだ苦楽を共にしたレフ・ライノールは、爆発に巻き込まれて死んだ。その果てに、今の私が生まれたのさ——レフ・ライノール・フラウロスが」

大きな拍手が、高らかに鳴り渡る。そして、あと一步の所で男に触れられる距離にいたオルガマリーが、唐突に宙へと浮かび上がった。

「やっ——なに、これ。レフ、ねえ、レフってば! ちよつとっ! ねえっ!!」

自分の身に何が起きようとしているのか把握できず、ひたすら藻掻

く事しかできないオルガマリーは、眼下のレフに向かって白い手を伸ばし続ける。しかしレフは一瞬の一瞥をくれたのみで、それ以上の干渉をしなかった。

人質を取られたような物だった。レフは、下手に身動きできず立ち止まるしかない巧とマシユを見ると、場違いな朗らかさを二人に向けた。

「いや、はや、カルデアの諸君。君たちがここまでやるとは——まさしく計画の想定外で、同時に私の許容外だ。どいつもこいつも、統率のなっていないクズばかり……いい加減に、耐え切れなくなってきたよ。その醜さに」

レフは絡ませ合っていた両手を解くと、固まっていたマシユを指さし、ここにはいないロマニを指さし、そして最後に睨みを利かせている巧へと指をさす。

「マシユ、ロマニ、そして——48人目の適合者。君たちのような存在が湧き出すから、私は人間が大嫌いなんだ。定められた運命に従わず、敷かれたレールを外れようとする……何故だ？ 何故なんだ？ 私には理解できない——理解したくも、ない」

『——爆発の際に残されていた死体は、「自分は死んだ」という印象を僕たちに植えつけて、特異点内でもある程度の自由を得る為のフェイクだったのか。いや……そういえば、レイシフト実験を実施する直前に、一般職員が一人休暇届を出していた……まさか、君は彼を使って』
「相変わらず無駄な所で頭が回るなア、ロマニ。私はね、君のそういう賢しらかな所が、昔から大嫌いだったよ。殺せなかったのが、悔やまれる」

レフは、過去への郷愁と現在への憎悪を両立させた表情で、くつくつ、と引き笑っている。誰もが黙り込む中、ふと思いついたかのように、レフは上空で足掻き続けているオルガマリーを見た。

「殺せなかったといえは——そうだね、オルガ。君もだ。なぜ君が生きている？ そして、なぜ君如きがレイシフトをできている？」

「なぜ、って——そんなの、分かるわけないでしょっ!？」

ほとんど泣き叫ぶように答えたオルガマリーの姿に、レフは一瞬眉

を寄せたが、すぐさま納得したように手を合わせた。

「ああ、なんだ。いや、すまない。私とした事が、問いを間違えてしまったね。既に死した身である君に、どうして生きているのかという質問をしてしまうとは、些か酷だ」

「は——？」

目の前の男が何を言っているのかまるで理解できず、オルガマリーは咄嗟に動きを止めた。それを見たレフは、少女の存在自体に憎悪と侮蔑をぶつけるかのように、凄絶な嗤いを漂わせながら言った。

「君はとっくに死んでいる。」

私が仕掛けた爆弾は、元々君のすぐ足元にあった——ゆえに、今の君はただの未練がましい残留思念なのさ。そして肉体を失い魂だけの存在と化したゆえに、君は夢にまで見たレイシフト適性を、ついに手に入れたんだ。喜ばしい事じゃないか！ 本当に、おめでとう！」再び鳴り始めた万雷の拍手は、心を壊しつつあるオルガマリーの耳には、決して届かない。

——自分は、既に死んでいて。それは、レフのせいだ。今の自分は、魂だけになっていて。やっと手に入れられたと思つた適性は、泡みたいな物で。カルデアには、戻ることができなくて。

二度と、自分は、両の足で立つ事さえできなく、て——

「よ……」

「ん？」

「うそ、うそうそうそ嘘嘘よっ!! 全部っ、アンタの作つたデタラメでしょうっ！ そうやってわたしを欺いて、ここで得た全部を、わたしのカルデアスを、自分の手柄にしてやろうって魂胆なんでしょうっ!?! 違うっ!?!」

キャパシティを超えた事実を次々と突きつけられたオルガマリーは、置き去りにされた子供のように頭を抱えてうずくまると、悲痛な金切り声を上げた。

レフはそれを見て耳を抑えながら、心底呆れたといった風に、深いため息を吐き出す。

「アレは、君の所有物ではない。本当に不愉快だよ……死んだことで、

頭の回転も遅くなったのか？ アニムスファイア。だが……ここで無常に殺してしまうのも、忍びない。せめてもの慈悲だ。君たちが必死の思いで受け継いできたカルデアを、存分に満喫してくるといい」

レフはひとしきり嘲弄をぶつけ終わると、指を軽く鳴らす。同時に光の柱が一際輝き、やがて煌々と燃え盛る地球環境モデル——カルデアの姿が、空中へ鮮明に映し出された。

それを視界に入れた途端、オルガマリーは確かに、自分の中でかろうじて折れずにいたなにかが折れた音を聞いた。

「よく見たまえよ、アニムスファイアの末裔。人類の生存を示す青色は一片もなく、あるのは破滅を示す赤色だけ。実に美しいじゃないか、マリー。」

——君の引き起こした結果が、愚行が、我々が終ぞ待ち望んでやまなかったこの景色を招いてくれたんだ。ありがとう、ありがとう。本当にありがとう……！」

両手を大きく広げながら高笑い続けるレフに、オルガマリーは騙し続けられたことへの怒りも、親身に支えてくれたことが嘘だということへの悲しみも、父の理想の結実であったカルデアスを悪用したことへの怨みも、何も言えない。言う事ができない。自分の末路は既に決まってしまったている。高密度の情報体であるカルデアスは、次元の異なる領域であり、いわば一種のブラックホールに近い。そんな場所へと人間が放り込まれてしまえば、一体どうなるのか——赤子でも分かる事だった。

間近にある「死」を認識した瞬間、オルガマリーの身体が壮絶な恐怖で総毛だった。こちらに向かつて手を伸ばしている死からどうにかして逃れまいと、必死になって藻掻いたが、まるで地球から見放されたかのように、オルガマリーはいつまでも、空に浮き続けていた。「や、だ——や、だ、やだやだやだあつ！ ま、まだ、わた、しつ、しつ、しつ死にたく、死にたくないっ！ だって、だってだってわたし——！」

さつき、死なないって約束を、アイツとしたばかりなのに——！
拒絶の言葉を周囲に撒き散らし、無様に泣き叫びながら、カルデア

スへ徐々に近づいていくオルガマリーを、レフは軽蔑の眼差しで見
ていた。本当に見苦しく目障りな小娘だった。だが、これで終わりだ。
彼女は分子レベルに分解され、文字通りの生き地獄を永遠に味わい続
ける。そのザマをこの目にできないのは残念だったが、今響いている
苦しみの叫びだけで満足するでしょう。

そう、悪辣に噛み続けるレフの頭上を、

——一筋の影が、過ぎ去っていった。

「……………なに？」

そうして、かつての長田結花のように、生身のまま瞬間的にオル
フェノクの力を行使した乾巧は、空中のオルガマリーを腕の中に抱き
かかえて、レフの背後にそっと降り立った。

せめて分解される瞬間だけは味わうまいと目を瞑っていたオルガ
マリーは、二度と触れる事ができない筈の人の体温を感じて、恐る恐
る目を開く。

そこには、未だ治らない傷がついた顔を、柔らかく緩めた男がいた。

「……………これで、貸し借りナシ、だな」

「……………ふじ、まる……………」

非常事態も非常事態だというのに、オルガマリーはどうしようもな
く、目の前の温もりに縋りつきそうになってしまった。その衝動をか
ろうじて堪えられたのは、目の前の男にだけは弱さを見せたくない
という、不格好な意地のおかげだ。

決して泣き出さないように口内を噛み締めている少女に、巧はため
息を吐いた。

「お前、服に顔くっつけんなよ。濡れるの、イヤだからな」

「うっ……………さいっ！… ないてなんか、ないっ」

嘘をつけ、と思う。だが口には出さず、ひと言だけ尋ねた。

「平気か」

言っておきながら、平気な訳が無いと思った。すぐ近くにまで確実
な死が迫っていて、平気でいられるはずがない。

しかし、目の前の少女は、無言で首を縦に振った。

本当にこいつは強い、と巧は思う。そして、手を出さずただ面白そ

うに観察の眼を向けてくるレフを真つ向から睨みつけた。

レフはふむ、と興味深い物を見つけたように頷くと、

「48番……確か、名前は……なんだったか。まあ、いい。しかし、今のはどういう事だい？ アンダーソンの調査では、君は魔術に何の関係もない、正真正銘の一般人だった筈だが……彼が身辺調査をしくじるとはとても思えないな。キャスターに魔術でも習ったのかい？ だとすれば、虫唾が走るほど健気だが」

「好きにしろよ。あんたに教えてやる義理は、どこにも無い」

そう吐き捨てて、巧は腰にベルトを巻き付けた。

「……まさか、彼女を助ける為に、私と相對するつもりか？ 脅威に對して手立ても持たない君が？ たった一人で？ ……——は、ははは、ははははははははははっ!! 苛立ちも限界を超えると笑いに変わるらしい!」

腹を抱えて笑い出したレフの様子は場違いなほど快活だったが、瘦身から放たれる殺気は尋常ではなかった。物理的な重圧さえ感じさせるそれに、オルガマリーの身体が再度怯えの色を見せた。たちまち震え出した少女を、背で庇うように巧は立ち位置を変える。レフの眉が、訝し気に歪んだ。

「何だ？ その間抜けな玩具は」

「さあ、な。当ててみるよ」

挑発するように、ゆっくりとコードを入力していく。それを見て自分を取り戻したマシユが、挟み込むようにゆっくりと、レフの背後へ回り始めた。気づいた、レフ。笑顔を引っ返めて、極大の殺意を露わにした。

ひりつく肌。細胞が、戦うなど叫んでいる。

敵う筈がない事は、よく分かっていた。目の前の存在はきつと、オルフェノクやサーヴァントやらとは、全く別次元の何かだ。相對するどころか、こうして正面から向き合う事自体が、既に間違っている。本当なら何もかも放り出して、諦めてしまう事が正しい選択というやつなのだろう。

だから、逃げる訳にはいかなかった。

自分がやるべき事は、ただ一つだけだ。

——コイツを守る。人間を、守る。

拳を握る。コードを入力し終える。あとは、いつものようにバックルに叩きこむだけ。

——それが、俺に出来る事だから——！

「変——！」

ファイズフォンを天高く掲げた彼の心臓を、

一筋の剣がそつと静かに刺し貫いた。



全ては一瞬だった。

自分を幾度となく守ってくれた「先輩」の胸から、細身の切っ先が飛び出している。

それを認識した直後に、巧は糸の切れた人形のように顔面から地面に突っ伏し、そのままぴくりとも動かなくなった。

まるで、死体のように。

「な、え、せん——ぱい？」

あまりにも唐突過ぎる惨劇に、マシユの反射神経は大きく遅れた。数秒経つてから、ようやく身体が動いた。酩酊者めいた足取りで倒れ伏す巧の元へ向かうマシユをレフは止めず、息を荒げながらこちらへ歩いてくる異形——影山冴子の変異するロボスターオルフェノクの到着を、ただ待っていた。

冴子はふらつく足をどうにか整えて、なんとかレフの元へ辿り着いた。

「貴方に言われた通り、漂流者を——マスターを始末したわ。サーヴァントは……彼らがやってくれたようね」

「ああ……ご苦労だったね。余計な苦労を省くことができ嬉しいよ」

「そんな事は、どうでも良い。それより聖杯を……聖杯を渡しなさい。貴方との約束は、果たしたでしょう」

冴子は変異を解くと、血の海に沈みつつある少年に横目をやりながら、男に傷だらけの掌を差し出した。いずれ来る漂流者の始末と全てのサーヴァントの脱落——それが、レフ・ライノールが、影山冴子に望んだ事だった。

そしてその約定は、たった今果たされた。

「聖杯——それさえあれば、彼を蘇らせる事ができるのよ。そうすれば、オルフェノクは救われる——」

「そうだ、そうだったね。確かそんな約束だった……さあ、受け取ってくれ。これが君への報酬だ」

レフはしばらく考え込んでいたが、急に態度を急変させると、ここやかな様子で、光の中から取り出した聖杯を冴子に手渡した。

疲労困憊で受け取った冴子の手の中で、無限の願望器が赤子のように唸る。何者も穢す事のできない金色の光を放つ聖杯は、街に異変が起こるより以前から、この時を待ち望んでいたかのように、輝きをより一層強くした。

「いよいよ、願いを叶える事ができる——全てのオルフェノクに幸福と生命を齎す王がこの世に再誕を果たし、蔓延り続ける旧人類を一匹残らず駆除して、新人類であるオルフェノクの王国を築く瞬間が、ついに訪れるのだ。」

夢想到浸る冴子に、

「——だが、君にそれは扱えまい」

そんな冷めた声が、掛けられた。

冴子はその言葉の意味を訪ねようとした次の瞬間。

声を出す暇もなく、

冴子の心臓に、聖杯ごとレフの貫手が突き込まれた。

「が——?????——いぎ、ぎいいいいいい、ああいいいいいい!!!!」

「君ね!ちの存在は、我々にとって実に興味深かった。ゆえに、私は君たちをこの聖杯戦争に引き摺り込んだんだよ——オルフェノク。魂にもうひとつの遺伝子を宿し、生と死の輪廻を超えた、この星で唯一の存在。ガイアでもアラヤでもない、第三の理から産まれ出ようとして

いる新たな生命——」

粘土を捏ね回すように心臓に突っ込んだ手を絶え間なく動かしながら、レフは笑顔のまま淡々と話し続ける。その閉じた目には、目前で血反吐を吐きながら苦しみ続ける命など、塵ひとつさえ映ってはいない。ただ、新たな同胞の誕生を、そして、更なる進化の始まりを、全身全霊で祝福していた。

「ゆえに、私たちは決めたんだ。——君たちを、仲間として迎え入れてやろうと。喜びたまえ、進化の行き止まりを破った君たちは、我らが王の寵愛を見事受ける事ができたのだから」

変成が、終わる。

生誕が、始まる。

冴子の体内で絶えずのたうち回っていたアークオルフェノクの遺伝子と、レフに植えつけられた聖杯と魔神柱の遺伝子が混ざり合っては反発し合い、反発し合っては混ざり合う。その衝撃によって、女性的な冴子の全身から大小問わず無数の腕が伸びては血を噴き出しながら折れていく。撒き散らされた血液が凝固し、気泡がぷつぷつと表面に浮かぶグロテスクな肉と化して冴子を徐々に覆っていく。彼女の意識は、既に亡い。灰色の腕と、暗褐色の血と、柘榴色の肉を無機質に生産するだけの機械となった影山冴子は、光を失った虚ろな瞳を最後まで空に向けたまま、その生涯をつつがなく終えた。

際限なく肥大していく、血と灰に塗れた肉の山を見て、レフ・ライノール・フラウロスは、歓喜のままに新たなる仲間祝福の祈りを捧げる。

「——顕現せよ。牢记せよ。これに至るは七十二柱の魔神なり」
その名を、

「七十二柱の魔神が、一柱。魔神、ビフンロス——」



特異点が、崩壊していく。

異変の元凶であるセイバーの消滅に本来ならばあり得ない魔神柱

の誕生が重なった事によって、特異点Fはその崩壊のペースを急激に速めていた。大地が揺れるたびに、立ち並んだ高層ビルが地面に生じた亀裂の中へ陥り、やがてその先で大口を開きながら待ち構えている時空の歪みに飲み込まれていく。歪みは冬木市だけに留まらず、世界全てを飲み干さんと、暗闇を深く大きく広げていく。

『魔神——魔神だって、レフ！ 君は一体——！』

ロマニは、窮地に陥っているマシュたちに対して、何ひとつ手助けしてやれない自分に強く歯噛みした。それでもせめて敵から有力な情報だけでも得んと、ノイズ混じりの画面に映るレフを睨みつけながら叫ぶ。ロマニの叫びに応じたレフの相貌に、もはや嘲弄はなかった。

「ドクター・ロマニ。旧友のよしみとして、教えてやる。未来は見えないだろう。外部とは通信が取れないだろう。職員はまだ戻って来ないだろう。

——ならば結末は確定した。人類はこの時点で滅んでいく。カルデアスが深紅に染まった時点で、既に貴様らの未来は燃え尽きた」

『——外部との連絡が通じないのは、そういう事だったんですね。僕らが無事なのは、カルデアスの磁場のおかげ……』

「だがそれも、もうじき無為に終わる。カルデア内の時間が2016年を過ぎた時点で、貴様らはカルデアごと完全に消滅するだろう。……その前に、やり残しがまだ残っていたね、オルガ」

「ひい——」

怯えながら後ずさるオルガマリーに、レフは迷いのない足取りで一步一步近づいていく。

「君に——アムスフィアに、都合のいい結末は齎されない。君のその致命的なまでのいたらなさが、彼を殺したんだよ。それが分かるかい？」

「ぐっ……うっ」

「君はまた、大切な物を受け取り損ねた……父親の次は、人望、カルデアス、そしてお仲間。——果たしてこの次は、何を失ってくるのかな？」

「……だ、まれえっ!!」

喉を張り裂けさせせんばかりの怒号と共に、オルガマリーはガンドを撃ち放った。殺す気しかなかった。命中すれば確実に人間一人の頭部を木端微塵に破裂させるだけの威力を持ったそれは、しかし蚊を振り払うような仕草一つで、あっけなく消え去った。

「君も、随分と諦めが悪くなったね……いや、しぶとくなった、と云うべきか。特異点に放り込まれて、少しは成長したらしい。

……ならば私も、成長した所を見せなければ、些か不公平という物だろう」

「……！ 所長、わたしの後ろに下がってください——」

少女の視線の先で、男の指が鞭のようなしなりを見せながら、ゆったりと伸び始めた。魔力を一つも感じられないそれになぜか根源的な恐怖を覚え、マシユは円卓を構えながらオルガマリーの前に立ち塞がった。祓うべき巨大な邪悪の気配を察知した円卓が、聖なる輝きを放たんと唸る。

「遅いよ、マシユ。何もかもが」

次の瞬間。

瞬きを一つした、その直後。盾をすり抜けるように虚空を泳いだ男の指が、オルガマリーの心臓を突き刺していた。

「え、あ——へ。え？」

何が起きたのか理解できず、呆然と目を見開く少女の身体から、蒼く光る炎が、ぼつと音を立てて燃え出した。

「い——いや、いやいやいやあっ!! やめてっ、助けて誰かつ!! マシユっ!! 藤丸っ!!!」

そこで目覚めてしまったのは、守るべき物を守り通せなかった自分に課せられた、当然の罰だったのかもしれない。

血と灰のにおいを漂わせた死神が、足音を立てて背後に忍び寄ろうとしている幻覚を見ながら、巧は意識を取り戻した。身体の内から生きている必要がなくなると溢れていく感覚がひどい。このまま目を閉じれば楽になれるだろうか、と一瞬考えた瞬間、視界に蒼い焰をあげて燃え続けるオルガマリーの姿が映った。

「——つ、あ」

「やだ……やだやだやだあ——つ!!」

漏れた呻き声をかき消す悲痛な少女の叫びが木霊する。それは、巧がかつて何度も見届けた光景と——二度と起こさせはしないと誓ったはずの光景と、まったく同じものだった。

「わたし、死にたくないっ、まだ、まだ死にたくないっ。死にたくないよおっ!! だからっ、だれか、誰でも、いいからっ!! ——わたしの手をつ、手を」

握って。

心の奥底に刻まれた傷痕が、灰色の膿を捻り出しながら開いていく。

ぼろぼろと灰になって崩れ落ちていく少女を、世界に引き止めたい一心で、巧はひたすら血塗れの手を伸ばした。伸ばされた手に気づいたオルガマリィもまた、願うように巧に手を伸ばす。

「——おる、」

「あ、ああ。ふじま——」

少女の唇から、懇願にも似た掠れ声が漏れる。

そしてようやく、二人の指先が触れ合おうとした直前に、オルガマリィ・アニムスフィアは、二度と還らぬ灰と化した。

そこから先に起きたことを、巧はよく覚えていない。ただ、何もかもが限界だったのだと思う。

「——長……んな……先——!」

『——味……消失……可能——失敗』

「——輩、せ……い。先輩……しの手……握って……!!」

脳の輪郭が薄れゆく中で、

少女の声が最後に聞こえて、

近くにある誰かの温もりに、縋りつき、

そして、意識、が
とだ、えて――

――ブラックアウト。

終節「掌の灰」

少年は、夢を見ていた。

それは、自分が炎の海に巻き込まれる夢だった。確かな害意を持った火の群れが、視界に映る全てを飲み込まんと、波のように畝り続けている。

ある種の地獄めいたそんな風景の中に閉じ込められてしまった自分は、逃げようともせず、ひたすら呑気に寝転がっている——とても不思議な夢だった。

ひよつとしてこれは夢ではないのかもしれないと気づいたのは、纏わりつく熱気と周囲を渦巻く何かの焼ける音がいやに鮮明だったからだ。

生きたまま焼かれる趣味はない。だったらさっさと逃げなければ——と立ち上がろうとして、自分の下半身の感覚がまるでない事にいまさら気づく。おそるおそる呼吸をしてみると、肺が黒く焦げついていく音がした。指を動かすと、脆い炭の塊となって崩れ去る音がした。それはまるで、精神よりも先に身体が死をとうとう受け入れてしまったようにも見えて、ああ自分はもう助からないのだなど、少年はふと悟った。

不思議と、恐怖はなかった。何もかもが炎に包まれた中で、頭の中に居座るはずだった恐怖心も、一緒に焼け落ちてしまったのかもしれない。それとも、これは本当にただの夢でしかなく、自分は今ごろ布団の中で眠りこけているからなのか——
いや。

本当の事を言えば、もうどちらでも良かったのだと思う。夢でも、現実でも。

確かなのはたった一つだけで、どうやら自分の人生は、ここで終わってしまおうという事。

ひどく寂しかった。

充満し切った熱気が、鼓膜から体内に入り込み、じわじわと記憶を

焦がしていく。最後に残った精神まで殺し尽くさんと、火は少年を激しく責め立てる。

初めに、自分が消えた。次に、家族が消えた。その次に、積み重ねた日々が消えた。

大切なものは失ってから初めて気づくとよく言われるが、失いながら気づく事もあるのだと、その時に少年は知った。それは堪え難い苦痛でしかなく、思わず発狂しかけたが、そのうち何に苦しんでいたのかを忘れた。

瞬きを繰り返すたびに、「」を構成していた何もかもが、炙るように溶けていく。

そんな中で、最後に脳裏に過つたのは、純真な眼差しをこちらに向けてくる、紫色の少女の姿だった。

自分すら忘れ去ってしまった中で、自分は、彼女をまだ憶えている。もちろん全てを憶えている訳ではない。名乗ってくれたはずの名前も、呼び掛けてくれたはずの声も、握り締めたはずの掌の感触も、とつくの昔に忘れてしまっている。

ただ、一つだけ。脳を焰に焼かれ続けてもなお、ずっと憶えていることがあった。

彼女は、自分を先輩と呼んでいた。

人間らしいと、言ってくれた。

何故かそれだけは、どうしても忘れる事ができなかった。

炎はさらに勢いを増す。もはや、地上の理が自分の存在を許しておく時間は、塵ほども無いだろう。

刻々と燃えていく少年の中には、少女しか残っていないなかった。輝く瞳の奥に、虚ろな何かを残しているあの女の子が、どうかこの先も幸せに生きていけるようにと、こんな時にもかかわらず考える。

ゆえに、手を伸ばした。鮮やかな赤と息苦しい黒が混ざり合う空に向けて、指先のない掌を伸ばし続けた。

それはなんてことはない神頼みだ。何気ない日常の合間にやるよ
うな、届くはずのない下らない仕草。

だけど、なぜか今だけは、届くような気がした。

この願いさえ届けば、自分の生まれた意味はあった、と思った。だから願った。掠れた吐息しか零さない喉を必死に動かした。どうかあの少女が、幸せに生きていきますように。道の途中で迷って、躓いて、膝を折ってしまいかもしれないけど、それでもどうか、幸福な結末を迎えられますように、と。

少年が、燃え尽きる最期に零した、か細い叫び。

すぐさま炎に巻かれて消えたそれは、確かに世界を救う鍵となった。

○

なめられている。

目を開けるとざらついて底が見えない獣の瞳と出くわした。次いで頬をペロペロと行き来し続ける湿った舌。巧は何度か瞬きしてから、意識を取り戻した事に気づいた瞬間に顔をくるくると歩き回りだした白い塊の首根っこを掴み上げた。

「……」

「……」

犬とも猫ともリスともつかないその生物は、ぶらぶらと揺れながら紫色に光るつぶらな目で巧をじっと見返してくる。なにかを見透かしているような、試しているかのような目だった。

巧と白い獣はしばらく見つめ合っていたが、やがて獣の方が飽きたように「ふおう」と珍妙な鳴き声をあげて、器用に後ろ足で巧の手首を蹴り飛ばし、華麗に床に着地した。そのまま、てちてちと間拔けな足音を立てながら扉に向かう姿を、巧はぼうっと眺め続けている。まだ寝ぼけているのかもしれない。

獣が扉の前に辿り着いたのと、扉が何者かによって開かれたのは同時だった。

たぶん、扉に触れるつもりだったのだと思う。前足を伸ばした姿勢のまま、前のめりに転けかけた獣をひよいと軽く抱き上げた人物は、

意識を取り戻した巧を見ると嬉しそうに笑った。

「——や、起きた？ 身体の調子はいかがかな？ お腹とか空いたりしてない？ リンゴでも剥いてあげよっか？」

ひらひらと手を振りながら、偶然旧知の友人に再会したような口振り、その女は巧に話しかけてくる。面識はまるでなかった。過去に出会って、巧が一方的に忘れていた——という可能性もなくはないが、左腕が異形めいた義手と化している人間など忘れようにも忘れられない。

つまり、目の前の女はまったく知らない誰かだ。

「誰だ、あんた」

初対面の相手には滅法辛辣な、我らが乾巧。しかし女は無愛想な視線をあつさり受け流すと、巧が寝かしつけられていたベッドのそばの丸椅子に座り込んだ。警戒を露わにする巧の前で、女はどこから取り出してみせたのか、真っ赤に熟れたリンゴを器用に剥き始める。

「誰だ、って聞いてんだ」

「まあまあ落ち着いて。……ほら、ウサちゃんリンゴ」

「……」

「あれ、ウサちゃんはお嫌いだったかな？ それならこの………タコさんリンゴなら、気に入るんじゃないかな！」

「いらん」

頑なに口と心を閉ざし続ける巧に女は困り眉になったが、やがて面白そうな事を思いついたように笑うと、よよよ、と閉じた目元に指を当てながらわざとらしい泣き真似を始め出した。

「酷い……君にとつての私なんて、所詮一夜のお遊び相手だったって事なんだね……」

「あんたと遊ぶぐらいなら、さっさと帰って寝てる」

つれない返事ばかり寄越す巧に、しかし女は愉快そうに話し続ける。

「あ——んなに熱い夜と一緒に過ごしたっていうのに、随分冷たいねえ。文字通り傷つきに傷ついた君のハートを一日かけて癒してあげたのは、この私なんだぜ？」

膝の上で眠たげに目を瞬かせていた獣を持ちあげておもちゃにしながら、女は冗談めいた口振りでそう呟く。まったくもって、身に覚えがなかった。初対面にも関わらず馴々しくウサちゃんリングを押しつけてくる女にも、犬とも猫ともリスともつかない珍妙な鳴き声を発する白い塊にも。

話すだけ時間の無駄だな——と嘆息する。変人に付き纏われる事にそろそろ慣れてきてしまった自分に嫌気が差して、ここから抜け出そうと立ち上がりかけた次の瞬間、

巧の胸を、稲妻のような痛みが貫いた。

「い——づ、う」

思わず胸を抑えた。洪水のように押し寄せる吐き気と目眩と冷や汗に、黒と白の交互に点滅を繰り返す視界。ニヤつきを消して背中を撫でてくる女の手を振り払った巧の脳裏に、芳しき血と灰と後悔に塗れた数時間の記憶が一瞬で走り抜ける。

蒼く燃え続けながら、最期まで自分に助けを求めていた少女。

灰を零しながら、それでも必死に伸ばされた手を、自分という愚者はとうとう握ってやる事ができなかった。

なぜ、いままで忘れていたのか。

なぜ、忘れる事が、できていたのか。

「……」

震える手で、毛布を強く握り締める。噛み締めた唇から洩れた血が、赤いシミを数滴作る。

乱暴に振り払われたせいか、軽い痺れがある手で、女は俯いた巧の背をふたたび穏やかに撫で始めた。たちまち背筋に染み込んでいく暖かさを前に、今度は振り払う気力が湧き上がらなかった。

ただ、ひたすら嫌になってきた。為すべき事を為せず、交わした約束ひとつさえ守り通せないまま、おめおめと生き残ってしまった自分の存在が。自分など今すぐ灰になってしまえばいいと本気で思いつけた。

それでも踏み止まったのは、自分が悔やんで死んでみせたところで、蒼く燃え尽きてしまった少女が——そして、これまで死んでいっ

た奴らが帰ってくる訳ではない事を、知っているから。命はたった一つしかない。死ねば、そこで何もかもお終いだ。人である事を、辞めない限りは。

二度目は無い。

二度目、は――。

巧が深い自己嫌悪に苛まれる中、女は何も言わず、ただ全てを受け入れるように。

震え続ける少年の、ことのほか小さな背を、いつまでも撫で続けた。

○

「……落ち着いたかい？」

「……悪い」

「こちらこそ、すまなかつたね。なにせ特異点を攻略して、まだ一日しか経っていないんだから。私とした事が、少しばかり気が利かなさすぎた」

「別に……変に気を回される方が、気持ち悪い。大の男がみつともないなって、笑えよ」

滅多に表に出さなかつた自分の傷を、あろう事かまるつきり初対面の相手に堂々と見せつけてしまい、自嘲気味に唇を歪める巧の横顔を、しかし女は慈愛を籠めた目で見つめた。

「みつともないなんて、あるものか。いなくなってしまうた誰かを思つてやれるのは、君が善いヒトである証拠さ……優しいんだね」

「――優しくなんか、ない」

その言葉ほど、今の自分に似つかわしくないものは無かつた。忌み嫌うかの如く苦々しく呟き返した巧に、女は幼子を諭すかのように柔らかに語り掛ける。

「主観の問題だよ。君から見た君自身は優しく見えないように見えていても、私から見た君は、とても優しく見える。ま、ちよーつとだけ口が悪いけれども、何、私に比べれば可愛いものさ」

「……確かに、な」

「む。中々言ってくれるじゃないか」

「自分で言っただら」

それもそうだと意地悪く笑う女の姿に、巧もつられて苦笑する。和やかな空気が流れる中で、さて、と女は手を叩き、

「もうちよつとだけ親交を深めたい気持ちはあるけれど、そろそろ君の帰りを待っている誰かさんの元に行つてやった方が良さだろう。」

——藤丸立香くん。君がこの先どんな選択をするにしても、私個人としては、君とまたこうしてお喋りできる日が来てくれると嬉しいな」

「……」

「だめ、かな？」

「……内容による」

突きつけられる上目遣いから顔を背けて出した巧の答えに、女はそれじゃあ考えておかなきゃね、と笑った。

毛布を畳み、寝かされていた寝台から降りる。丁寧に用意されていたスリッパを履いてとんとんと爪先で床を叩いている最中、女の名前を知らない事に気づいた。後で聞き出せばいい——と思ったが、わざわざ名前を尋ねるのを後回しにする方が面倒だった。

「なあ」

「ん？　なあに？　手始めに私のスリーサイズでも教えてほしいって？　しよーがないなア。一度しか言わないから、耳の穴をかつぽじつてよおく聞いておきたまえよ。まずバストから——」

「名前、何て言うんだ」

一切をスルーして繰り出された巧の問いかけに女はしばらく目を瞬いていたが、やがてウェーブがかかった豊かな栗色の長髪を大袈裟にぱつと靡かせ、衣服越しからでも大きさが分かる胸に手を当てながら、得意満面といった感じで高らかに名乗りを上げた。

「——では、遅まきながら自己紹介としよう。私は、カルデア召喚式英霊第三号にして、サーヴァント・キャスターのレオナルド・ダ・ヴィンチさ。以後、お見知りおきを？　って……ふふふ、冗談だよお。私の事ぐらい、とつくの昔に知っているだろう？」

「誰だ、そいつ」

真顔でそう返した巧に、ダ・ヴィンチは笑顔のまま固まった。

○

姿形だけでなく台座や位置の部分まで整えられた一流の彫刻のように、その場で固まったまままったく動かなくなってしまうたダ・ヴィンチを置いて、巧は部屋を出た。そして、無駄に広いカルデアの回廊を歩いていく。

てちてち、と足音を立ててついてきた白い小動物は放置していた。それほどこちらに懐いているという様子でもないし、放っているうちに飽きてどこかへ逃げ出すだろう——と予想していたのだが、そんな巧の甘い下馬評を覆し、獣はいつまでも後ろをくつつき回ってくる。心なしか、獣の視線の中には、巧が迷子にならないようにしっかりと見張っているかのような感情が籠っている気がした。

そんな監視の視線があつたおかげか、やがて巧とその小動物は中央管制室とやらの扉の前に辿り着いた。とは言え表札も何もなく、位置を知らされたとはいえ完全なる当てずっぽうでここまで来た為、本当に合っているのかと少し不安になってくる。まあ、もし間違っていたとしても全部すっぱかせばいいだけの話だ、と巧は思う。別に強制されている訳でもあるまいし、放っておけばそのうちあつちの方から探しに来るだろう——というどうしようもない思考のまま、巧はそつと扉をノックする。

開かない。

その後も何度かノックを繰り返してみるが、何秒経つても開く気配がしない。

「……帰るか」

呟いた途端、ふおう、という鳴き声と共に足元から突き刺さってきた非難の視線を無視して、元いた部屋に戻ろうとさっさと方向転換しかけた巧の背に、「あの、管制室はそこじゃないです」と控え目に言葉が投げかけられた。振り返ると、すっかり数少ない顔馴染みとなった紫紺の少女が立っていた。

「……先、輩」

「……」

特異点で共に過ごした数時間がふたたび過ぎる。何を言えばいいのか、わからなかった。無言を貫き続ける巧に、マシユもまた沈黙を返すしかない。重苦しい気まずさが、時を経るにつれて淡々と積み上がっていく。やがて、そのままではいけないと思ったのだろう。妙に思い詰めたような顔を見せたと思った途端、少女はいきなり頭を下げた。

「——おはよう、ごいいます」

「……ああ」

唐突なそれに硬直した巧は、呻きにも似た声でそう返した。そして、ふたたび沈黙。つまらない返事しかできない自分が、情けなくたまらなかった。搾り出すように、気になっていた事を尋ねる。

「あの後、どうなった」

「所長が灰になった後は、彼は——レフ・ライノールは、魔神柱と共に消えました。恐らく、撤退したのだと思われます」

「……あいつの、灰は」

「所長の灰は……カルデアスに、飲み込まれました」
「……」

沈鬱に顔を俯けた巧に、マシユは言葉を続けるべきかどうか迷ったが、後回しにする方が余計に辛いと判断し、手の中に握り締めていた長方形型の薄いチップを差し出した。

「なんだ、これ」

「先輩のバイクが、最期にわたしに遺した物です。あの機体は、レイシフト直前に起きた崩落からわたし達を守って、破壊されました」

「そ、うか……」

あいつは、守り抜いたのか。巧は手渡されたチップを、包み込むようにそっと握る。あの、当たり前のようにいつも傍にあった無骨な鉄の冷たさがまだ、残っているような気がした。

どうにも辛気臭い空気が漂い続ける中、手の中の冷えた感触に背中を押されるようにして、巧は頭を掻きながら、ぼそぼそと何事かを呟

いた。

「え？」

咄嗟で聞き取れず大きな疑問符を頭の上に浮かべるマシユに、巧はだから、と一拍置き、

「……あとでここ、案内しろよ。いい歳こいて迷ったりするのは、もう御免だからな」

照れ臭そうに目を逸らす巧の姿に、マシユは引き締まっていた頬の緊張を解いて、はい、とあたたかく笑ってみせた。

○

「——ああ、本当に目覚めてくれて良かったよ！ いや、あの出不精なダ・ヴィンチが直々に出張ったとはいえ、背後から心臓を一刺しだったからね……君の治療力がずば抜けていなかったら、一体どうなっていた事か……」

扉が開き巧たちの姿が見えた途端に大慌てで駆け寄ってきた男——ロマニ・アーキマンは、額に浮かんだ汗を拭き取りながら目に見える安堵を曝け出した。大袈裟な身振り手振りを繰り返し続けるロマニに、マシユは咳払いをして落ち着きを促す。

「ドクター、落ち着いてください。先輩がその、ものすごく引いてらっしゃいます」

「へ？ あつ、ごめんよ！ 一人で盛り上がっちゃって。……藤丸くんの意識が戻ってくれた事は、今の状況じゃ唯一と言つてもいい吉報だからつい、ね。……その、君自身がどう思っているかは、分からないけれど」

「どうでもいい。それより、話って何なんだ」

巧は、申し訳なさそうなロマニの言葉をばつさり断ち切り、さつさと話題に入れと言わんばかりに首を振った。ロマニはこくりと頷くと、話を打ち切って自分の背後の赤く染まった地球儀状の物体——カルデアスを見つめた。内部に世界を焼いた焔を宿しているカルデアスは、禍々しい赤光をあたりに放ちながら、唯一生き残った人類であ

るロマニたちを睥睨するように悠々と宙に浮かんでいる。

「見ての通り、人類社会の存続を示すカルデアスは赤く染まっている。つまり今現在、カルデア内にいる僕たちを除いた人類はすべて滅びているという事だ」

「……」

その言葉を聞いて、巧の腕に力が入った。男の台詞はきつと嘘ではないのだろう。つまり、あの小さな洗濯舗で巧が短いながらも積み重ねたかけがえのない日々は、そして共に過ごしてきたかけがえのない人々は、ひとつ残らず消え去ってしまったという事だ。もし真実だったならそれは、乾巧という存在には到底、受け入れる事ができない悲劇だった。

だが、もはや夢とは思えないほどリアルなこの世界が、本当に自分がいた世界と同じなのかは、まだわかっていない。もしかしたら、これまで目の前で起きたすべては、巧があんがの生気が欠けた薄暗い王の住処で倒れ伏している最中に見た一瞬の幻想でしかなく、現実の自分は今も呑気に微睡んでいる最中なのかもしれない。

だが――

渦巻く炎の海の中で、死に瀕した少女が、それでも生きようと必死に伸ばしたあの手を。

崩れゆく世界の中で、とうとう掴めなかったまま、掌を擦り抜けていったあの手を。

夢と断じては、いけないと思った。

「……所長の事は、本当に残念だ。けど、今の僕らには、悼むだけの余裕しかない。

――だからこそ、所長の願いであり使命だったこのグランドオーダーを完遂する事が、オルガマリー・アニメスファイアへの最大の弔いになると、僕は思っている」

ロマニは、黙り込む巧に視線を据えた。そして、白い手袋に包まれた大きな手をそっと差し出す。

「――マスター適性者番号48番、藤丸立香くん。ただ一人だけ残ってしまった君に、すべてを背負わせてしまうのは、ひどく酷だとは思

う。それを承知で、言わせてもらう。

君にもし、カルデアの——そして、人類の未来を救う覚悟があるのなら、どうか、僕の手を取って欲しい」

世界が燃え尽きかけている今、この手を取る以外の道など、最初からどこにもない。それを踏まえて、目の前の男は自分に選択肢を突きつけて来ている。

抗う覚悟が、あるのかどうかを。

きつと敵は、呆れるぐらいに強大だ。対する自分は、訳の分からぬ状況に置いてけぼりにされた、ちっぽけな一匹の異形に過ぎない。叶えるべき夢も叶えられず、守るべき誓いも果たせないままにいる、いつ灰と化すかも知れない、弱々しい存在だ。

それでも、と思う。

迷っているうちに、誰かの夢が潰えようとしているなら。

その運命を、覆す事ができるのならば。

俺は、戦う。

立って、戦い続ける。

心に湧いた迷いを振り切り、灰の感触が未だに残る手を、強く、強く、傷がつくほどに握り締めて、

巧は、男の手を握り返した。

A. D. 1431 邪竜百年戦争 オルレアン
序節「灰と焰の影」

ピエール・コーシヨンの気分は、この十数時間のうちに激しい乱高下を繰り返していた。

三日前。烏澁がましくも教会を差し置いて神の遣いを名乗り、厚かましくも偽りの聖女面を衆目に晒し続けた悪女——ジャンヌ・ダルクをついに火刑に処す事が叶い、ようやく心に平穏を取り戻せたかと思えば、お次は複数の街で謎の失踪事件が多発すると来た。自分たちも成す術が無いくせにぎやあぎやあと喚き続けるしか能が無い上層部の言によれば、他にも人を喰らう翼竜の群れや、異形となって甦る死者などの聞くに耐えない馬鹿馬鹿しい噂が、フランス全土で広まりつつあるらしく、教会への献金の額も日を追うごとに少なくなっているらしかった。曰く、祈るだけで助かるならば苦勞はしないと。

ピエールに言わせれば、どの厄介事もすべて、あの忌々しいジャンヌ・ダルクが死に際に産み落とした呪いの類に違いなく、聖なる炎に焼かれ続けていてもなお己の人生を阻み続ける少女に対して、聖職者にあるまじき邪心を彼は抱いた。

いつそ呪う気すら起きないほど、徹底的に痛めつけてやれば良かったか——

薄暗い牢屋の中で、知性と品性が著しく欠けた傭兵紛いの兵士たちに組み伏せられ、恥辱と苦痛が入り混じった実に情けない喘ぎをあげていた少女の姿を思い出す事で、ピエールは頭に渦巻いていた鬱憤を少し晴らした。

額に浮いた脂っぽい汗を拭い、瀟洒な刺繍が入った厚手の絨毯の上を早歩きで移動しながら、彼は自室への道を急ぐ。等間隔に設置された窓から差し込む日差しの色は淡く、ピエールのこれから先に待っている人生を祝福してくれているかのように思えた。

そうだ、と思う。自分は神に仕え、そして守られている。なにも恐れる物など、ありはしない。死した聖女擬きが遺した呪いなど、取るに足らない。

纏わりついてくる怖気を振り払うかのように、漆喰の塗られた木製の扉に手をかけて、一気に開いた。そして視界に広がった闇に、ピエールは思わず立ち止まった。灯りを消して出て行ったため、当たり前だが何も見えない。だが、どうしようもなく分かってしまった。

得体の知れない、何かがいる。

人間としてではなく、生物としての本能が、これ以上先に進むではいけないと訴えかけてくる。蛇に睨まれた蛙のように硬直するピエールに、闇の奥から声が投げかけられた。

「——ああ、いや、私の事は気にせず、さつさと椅子にかけてくれ。できれば無警戒のままできてくれると、余計な手間が省けて、非常に助かるんだが」

新たな友人を迎え入れるような、親しげな調子の声だった。思いのほか人間らしいそれにピエールは自分を取り戻すと、まず己のテリトリーを無断で踏み荒らされた事への怒りを湧き上がらせた。

「だ——誰だっ！ この部屋は、私の……ピエール・コーシヨンの部屋だぞっ。どんな立場の、どこの誰であろうとも、無断で入室する許可は出していないっ」

「そうか、それはすまなかった。次からは、きちんと許可を取るとしよう……きみに、次があればの話だが」

そうして、影の中から抜け出してきたのは、闇を纏った女だった。見慣れない服装に包まれた、しなやかな肢体。凹凸のはつきりした身体には滴るような色気を備えており、死蟻のように生気の欠けた白い肌と、闇その物に浸し切った直後のような黒い長髪が見事な陰陽のコントラストを描き出している。いい意味でも悪い意味でも、造り物めいた見た目の女だった。

だが、闇の中で一際輝く瞳が、その耽美な印象を一気に吹き飛ばしてしまっている。

赤く染まった結膜に黒い菱形をした瞳孔。すべてを焼き尽くすま

で燃え尽きない炎を、直に眼球に塗り込めたような——見ているだけで比喻抜きに吸い込まれてしまいそうな、そんな眼を女はしていた。「とんでもない化物が出てくると思っただかい？ ご期待に添う事は一応できるんだが……生憎、いまは具合がちよつとだけ悪いんだ。時間が経った後で、また聞いてみてくれ。たぶん、憶えてないと思うけど」困ったように笑う姿が、恐ろしかった。人間の皮を被ったナニカが、人間のフリをしている。だというのに、ふとした拍子に群衆の中に見失ってしまえそうに見える事が悍ましくて、ピエールは後ろ手に扉を触った。

開かない。

「今きみに逃げてもらっては困るんだ。だから、閉めさせてもらった。……ああ、これも事前に言っておけばよかったね」

「私は、貴様に誰だと聞いているんだっ！ 訊ねた質問だけに答えろ！ 余計な口は一切叩くな！ ジャンヌ・ダルクや貴様のような、頭のおかしい女は、私が言った事だけに従っていればいい!!」

退路が絶たれてしまった事に、激しい焦燥を浮かべながら狼狽する男に、女は申し訳なさそうに眉根を寄せる。

「ごめんね。怒らせるつもりも、怯えさせるつもりもなかったんだ、本当に。きみが部屋に入って、いつものように大人しく座ってくれてさえいけば、すべては丸く済んだはずなんだよ。だからこれは、うん、余計に警戒させてしまった私の責任とも言える」

「何を頭のおかしな——！」

「だから、せめて優しくしてあげる」

闇が、濃くなる。

女の姿が、影にふたたび紛れる。そして陰惨な気配が、爆発したように膨れ上がり、部屋を覆う。

得体の知れない、何か。人の皮を被った、異形。

自分の推測は、決して間違っただけではなかった。女の細身から垂れ流される瘴気は尋常の物ではなく、確かにそれは人外と断じられる代物である。

だが、

それでもこの生き物を形容するには、まだ足りなかった。きつと、この世に存在するあらゆる言葉を以つてしても、この女を言い表す事は出来はしない。

ピエールは胸に下げた十字架を血が滲む程に握り締め、生まれて初めて、心の底から神に祈った。それは、自分の欲望に塗れて道を見失った男が、それでも無意識のうちに残していた、清らかな信仰心の断片だったのかもしれない。

しかし、何もかも、遅すぎた。

「神様に守られてるんだろ？　だから大丈夫さ。きみは、きつと、生まれ変わるよ」

女の唇が、童女の如き無邪気な笑みの形をとる。その狭間に、底知れない闇が生まれる。

そして、化生の嗤いが、低く木霊する。

暗鬱な灰の欠片が、世界を瞬く間に塗り潰す。

○

「――つまり簡単に言えば、僕たちが世界を救うためには、その七つの特異点を修復しなければならぬって事だ」

マシユから受け取ったお茶を一口飲んで、ロマニは話をそう締めくくった。

怪我の事もあり、一日置いて再び集まった巧たちは、食堂でそのまま簡単なブリーフィングを行っていた。殆どの職員たちが集まっているせいで、喧噪が常に絶えない食堂の雑多とした雰囲気は、いつも三、四人程度でしか食卓を囲んでこなかった巧にとって新鮮だった。

騒がしきや人混みはあまり好きではないが、自分たち以外の人類が減んでいるという、おかしな状況下に置かれてしまったせいだろうか。胸の中にある寂しさや虚しさを滲ませた靄が、見る見るうちに蒸発していくのがわかる。むず痒いが、悪くない気分だった。口には出

す筈もないが。

ロマニとマシユが今後の詳しい方針を話し合っている傍で、まったく話の内容に興味を惹かれない巧は、久方ぶりのまともな食事をゆつくりと堪能し始めた。

ひと口大にまで解体したキツネ色の焼き鯖を、醤油を数滴垂らしておいた大根おろしと一緒に口に含む。おろしのつんとくる爽やかな辛みとしつかりと火が通された肉身から溢れる濃厚な旨味が、少量の醤油とバランスよく溶け合って飯がよく進む。添え物であるほうれん草のごま和えは、甘さが控え目に抑えられているおかげか、合間合間に摘むにはちょうど良い一品だった。ひと通りおかずを堪能した仕上げに、ようやくくぬるまった豆腐のすまし汁をそつと喉に流し込むと、思わず微睡みたくなるような心地いい暖かさが、胃の底に沈殿していくのを感じる。

「……うまい」

病み上がりもあってか、子どものような無邪気さで朝食をかき込む巧の姿を、しかし恨めしそうに睨みつける女が対面に一人。言わずと知れた、レオナルド・ダ・ヴィンチである。

「……ねえ、本当に私の事知らないのかい?」

「知らない」

にべもなく撥ねつける巧に、しかしダ・ヴィンチは執拗に食らいつく。

「そんなのあり得ないっ。だってあのっ! レオナルド・ダ・ヴィンチだよっ? ルネサンスに誉れの高い、万能の発明家にして天才芸術家だよ? 英霊ならともかく、まともな教育を受けて、今この時代を生きている君が知らない訳がないだろう! ——あ、ほら、この笑顔に見覚えとか、あったりしちゃわない?」

己が最大にして最高の芸術を完璧に再現する為に、臍あたりで構えた左手の上に右手を重ねて、女神もかくやと言わんばかりに美しく微笑むダ・ヴィンチを見ても、巧にはまったく心当たる気配がなかった。

「だから、知らないって言ってるんだろ。そろそろしつこいぞ」

「それがおかしいんだってもお~~~~~」

くくくくく

納豆をかき混ぜながら言われてもどうしようもない。

それでもまだ諦めきれないのか、ダ・ヴィンチは大人げなくも自らの美貌を十全に生かした誘惑を、巧に仕掛け始めた。隣のロマニから突き刺さる果てしない呆れの視線を、徹底的に意識から遮断するその姿はいっそ清々しい。

「ね、ね。それじゃ、今からでも知る気はないかな？ ——なんと今なら！ レオナルド・ダ・ヴィンチ本人からレオナルド・ダ・ヴィンチの素晴らしさを聞けちゃう豪華プレゼントが」

「どうでもいい」

「そうそうどうでもいい……どっ………えっ、どうでっ、なっ、え、えっ……」

巧はさつさと残りを食べ終わると、ぬるいお茶をがぶりと飲み干して手を合わせた。そして悲痛な喘ぎを洩らし続ける対面を無視して、ロマニに問いかける。

「で、そのレイシフトってヤツはいつするんだ」

鮮やかな色味の卵焼きを、噛み締めるように味わっていたロマニは、慌てて咀嚼し飲み下して答えようとした。その際に少々喉に引っかかってしまったらしく、げほげほ、と激しく咳き込み出す。見かねたマシユが手渡したお茶を飲み干してようやくひと息ついた様子を見て、巧は本当に大丈夫かコイツ、と少し先行きが不安になった。

息を落ち着けたロマニは、喉を擦りながら、冷静な口調で話し始める。

「……そうだね。食事が終わり次第、準備に取り掛かるよ。君の怪我の事もあるけど、残念ながら時間は有限だからね。連絡するから、マシユと一緒に待機しておいてくれ」

「そうか」

素っ気なくはあるものの大人しく従う様子の巧を見て満足そうに頷いた後、ロマニは人差し指をピンと立てて、

「ああ、それと藤丸くんにもうひとつ、伝えておかなくちゃならない事があったんだ……レオナルド」

「なに」

お手本のようなジト目をするダ・ヴィンチに、ロマニは仕方なさそうにため息を吐く。

「何を凹んでいるんだよ。ちよつと鬱陶しいぐらい自信満々ないつもの君はどこ行つたんだい」

「べつに………凹んでなんかないし………」

「良いじゃないか。藤丸くん一人に覚えられてなくなつて、他に君を万能の天才だと知っている人はいっぱいいるんだから」

何気ないロマニの言葉に、ダ・ヴィンチはとうとう耐え切れなくなつたかのように爆発した。

「そういう問題じゃ、ないっ！　いいか、彼の認識では、私は大した証拠もないくせに自分を万能だの天才だのほざき回つてる妄想狂としか捉えられてない、つて事が気に喰わないんだっ！　見たまえ彼のこの冷たい目をつ！　完全にアブナイ人を見る目つきじゃないかっ！」

「そんな大袈裟な……」

「そうじゃないのか」

「ほら………」

ダ・ヴィンチは両手でわしやわしやと頭を掻きながら、机に勢いよく突つ伏した。勘弁してくれ、と言外に告げるように見てくるロマニから、巧はつんと顔を逸らす。

「あの、先輩が喋るとややこしくなりますから、黙っておくのが賢明かと」

「冗談だ」

「でしたらせめて真顔は辞めた方が……」

「次からそうする」

控えめに進言してくるマシユへおざなりに返事し、巧はさつさと話すなら話せ、と言わんばかりに首を振つた。ロマニは、用件を済ませるべく伏せるダ・ヴィンチの肩を遠慮なく揺するが、ダ・ヴィンチはとうとう顔を上げず、地獄の底から吹く風のような細かい声で呟いた。

「ロマニが先に渡しといて……ちよつといま精神を安定させるのに忙

しいから……」

「ええ……まあ、良いんだけどさ」

ロマニは、ぶつぶつ呟きながらも、よれた白衣のポケットをこそごとと弄り出した。不審な仕草に顔を歪める巧の前に、年寄り臭いかけ声と共に差し出されたのは、巧がよく知っている物——ファイズフォンだった。

「君のдарろ？ コートのポケットに入ってたんだ。バッテリーが切れてたから、充電しておいたんだけど……」

「ベルトは」

画面が点く事を確認しながら巧が問うと、ダ・ヴィンチはそろそろと顔を上げて、足元に用意しておいた一本のベルトを、机に置いた。ふたたび揃ったギア一式を手に取りうと巧が腕を伸ばした瞬間、

「言っておくけど、使えないからね。それ」

投げかけられた言葉に、思わず動きを止めた。

「……どういう事だ」

「そのまんま、言葉の通りだよ。君が眠ってる間に、ちよろつと解析したんだ。それでこのベルトの大体は、分かった。気になるところが、ちよつとあるけど」

「あの、僕、そんな許可出した覚えないんだけど……」

「そりゃ、取らなかつたからね」

困惑を露わにするロマニに、ダ・ヴィンチはあつけらかなと答えた。「いやー！ そんな事はどうでもいいんだ。問題は、このベルトだよ。泥で受肉した状態に近くなっていたとはいえ、魔力を持たないただの人間が、神秘の塊であるサーヴァント相手に渡り合えるようになるなんて、実に興味深い……」

ベルトを持ち上げ、とっておきの玩具を手に入れた子どものように目を輝かせるダ・ヴィンチに呆れつつも、ロマニもまた湧き出す好奇心を抑えられない様子だった。

「そういえば藤丸くん、これの扱い方を知っているみたいだけど、一体どこで覚えたんだい？ それに、あの怪物……」

「オルフェノクか」

「そう！ その、オルフェノクって怪物の存在も、気になる。あのレフがご執心だったからね。敵の情報は多いに越したことはない」

向けられる視線を厭うかのように、巧は顔をしばし俯けた後、極めて簡潔に答えを紡ぎ出した。

「——あいつらは、人を襲う。だから俺は、それを止める為に、ファイズで戦ってきた。それだけだ」

「ファイズ……あの、姿の事ですか？」

脳裏に白銀と紅の閃光を纏った仮面の騎士の姿を思い浮かべながら尋ねてきたマシユに、巧はこくり、と無言で頷く。

「戦ってきた……って事は、これまで、そうやって生きてきたのかいっ!? 確かに、それなら、サーヴァントたちと戦えたのも納得いくんだけど……そんな事、経歴には書いてなかったよね？」

「んな事、書けるか？ 信じられるわけないだろ」

それは、まあ……と洩々ながらも何とか事実を噛み砕けた様子口のマニとは対照的に、ダ・ヴィンチは、巧の固く閉ざされた表情を見て、目の前の少年がそれ以外にも何かを隠している事を、半ば直感的に見破っていた。

何を隠しているのかは、分からない。だが、内に秘めた不屈の意志を他者に見破られぬよう徹底的に奥へ奥へと封じ込める、引き締められた唇の形には、面白いほど見覚えがある。そしてそれは大抵、どうしようもないぐらい不器用で、愚かなぐらい真っ直ぐなバカがするものだ、ダ・ヴィンチはよく知っていた。

——苦勞が絶えないね、こりや。

「……まあ、とにかく、そのファイズってやつには、しばらくなれなあって事だけは覚えておいてくれたまえ。単体でもいちおう機能が完結できている携帯とは違って、ベルトは本当に役立たずだ。多分、あと一つパーツが要る。それが揃うまでは、精々が腹巻き扱いだろうね、あったかかったし」

「巻いたのか君……」

「気になっちゃって」

片目をつぶって舌をペロリ、と出しながら頭をこつんと叩いてみせ

ただ・ヴィンチに、ロマニはもう何も言えないようだった。それでも、気を取り直すように小さく咳払いをしてみせ、

「……けどまあ、藤丸くんが前線に出張らなくてもよくなったのは、良い事だ。いくら君が戦えると言っても、やっぱりサーヴァント相手に渡り合えるのは、サーヴァントしかいないからね。」

それに、君は人類最後のマスターだ。君が死ねば、僕らには文字通り、打つ手が無くなってしまう」

「大丈夫です。先輩は、わたしが必ずお守りいたします」

頬にご飯粒をつけたまま、大義そうに胸を張るマシユに、巧は胡乱な目を向けた。女の背中にコソコソ隠れるなんて真似できるかよ——と言いかけた口を、咄嗟に塞ぐ。そうしたのは、今の自分が役立たずも同然の存在だと気づいたからだ。

戦う手段——ベルトを失った今の自分は、本当にただの足手まといでしかない。サーヴァント相手に渡り合えるのは、サーヴァントしかない——特異点にて、幾つもの死闘を経てきた巧には、その言葉が嘘ではない事がよく分かった。自分が今回生き残れた理由は、ひとえにマシユやキャスターといった協力者がついており、なおかつ敵が正常な判断力を完全に失っていたおかげだ。そして正気を失った相手にさえ、自分はあるそこまで追い詰められた。この先に必ず立ち塞がるであろう、本来の力を発揮する難敵たちの姿を思わず想像してしまい、巧は顔を顰めた。

そして、退きそうな足を必死に堪えて、逃げ出したくなる恐怖を必死に抑えて、盾を構える少女の姿を。

自分を守る、ただそれだけの為に。

「……」

巧は、苦虫を飲み込んでいる最中のような面をして席を立った。そのまま場を後にしようとする少年の背に、ロマニはどこへいくんだい、という問いかける。巧は振り返らず、ぼそりと答えた。

「部屋で、寝とく」

○

自室に帰ろうと急ぐ巧の足を一瞬止めたのは、後ろにずっと付き纏ってくるばたばた、という軽い足音だった。それでも無視して歩き続けると、ついに裾を引っ張られる。いい加減にうざったくなくなって振り向くと、そこには頬を上気させたマシユの姿があった。

「なんだ」

「いえ、その、ええっと……」

何か用があつて追いかけて来たくせに、妙にもじもじし出した少女に、巧は怪訝そうに眉を寄せるが、すぐに興味を失つたような顔つきに変わる。

「なんでもないなら、行くぞ」

裾をぱつと振り払って立ち去ろうとした巧に、マシユは慌てて声をかけた。

「それじゃあ、その、少し話を——したいの、ですが」

「……話？」

「あの、特異点から帰ってきてから、先輩はずっと眠っていましたから。話をするタイミングがあまり無くて」

「……俺、寝たいって言ったよな」

「いえっ、嫌なら良いんですっ。無理に付き合わせて、先輩の気分を害してまで、わたしの我儘を押し通すわけにはいきませんから……」

何気ない仕草ながらも、振り払われた事が効いているのだろう。一歩どころか五歩以上引きがちな態度を見せるマシユに、巧はなぜか自分が責められているかのような気分になった。

粗雑な見た目と性格をしていたがゆえに、大人しめの女にはまるで縁が無い人生を送ってきたため、どんな対応をすればいいのかまるで見当がつかない。真理やオルガマリーといった、強気で自分の我儘を押し通す事に躊躇の欠片もない女ならば、それなりに会話できるのだが。

「……」

しばらく無言でいる。そして不安そうにこちらの様子を伺ってくるマシユをちらつと見やった後、巧は背を向けてゆつくりと歩き出し

た。やっぱり出過ぎた真似をだつたかと、大きく落ち込むマシユに、ぶつきらぼうな声がかかった。

「——話、しないのか」

言葉の意味を一瞬理解できず、少女は固まる。続く無言にどうなんだよ、とじれつたそうにする巧によろやく我を取り戻し、マシユは慌てて大声をあげた。

「……し、しますっ。絶対しますっ！ わたしの全身全霊を懸けて、話を聞いた誰もが拍手喝采してやまない会話役を成し遂げてみせませすっ!! 必ずっ!!」

そこまで求めてはいない。

○

軽い道案内を受けたとはいえ、カルデアについて精通してる訳がないため、巧は先導するマシユの後ろを猫背気味にそろそろとついていく。数分ほど経ち、やがて二人の視界に、一際巨大な窓が見えた。雪で全身を白く染めあげた山脈を、広々と望むことができたはずのその窓の外は、今では底無しの闇が蔓延るばかりである。

景色を眺めながら談笑できるよう設置された、こじんまりとしたテラスに座る。巧が、近くのぼやけた光を放ちながら佇む自販機をなんとなく見ていると、対面に座ったマシユがふと懐かしそうに呟いた。

「……こうして二人でいると、先輩と初めて会った時の事を思い出しますね」

「……会った事、あるのか」

「はい。……と言っても、ほんの二、三日前の事なんですけど……覚えて、ないですか?」

否定の意を込めて首を横に振る。マシユは残念そうな顔をしたが、すぐに明るさを取り戻すと、自分が藤丸立香という少年とどのような出会いを果たしたのかを、説明し始めた。

「霊子ダイブに慣れていなかった先輩は、シミュレートを受けてすぐ後に、廊下で眠ってしまわれたんです。それを偶々散歩していたフォ

ウさんが見つけて、その後を追いかけていたわたしが声をかけて、そして先輩は目を覚ましました」

「……廊下で、寝てた」

「はい。それはもう、気持ちよさそうにスヤスヤと」

「凄いな、そりゃ」

他人事丸出しの感想を思わず漏らしてしまった巧に、マシユはおかしそうに唇を曲げる。そして、どこか照れ臭げに続けた。

「わたし、変ですけど、それで思っただんです。ああ、この人は、本当に人間らしいんだなって」

「人間、らしい……」

「敵意も脅威も感じられず、悪意や害意を放たない——誰かはそれを情けないと、軟弱だと評するかもしれませんが、そんな先輩だからこそ、わたしはそう呼ぼうと思っただんです」

仄かに頬を赤らめるマシユを見て、巧は少女には見えない角度で、密かな自嘲を顔に浮かべた。本当に人間らしいと言われた人間の中に、本当は人間ではない自分が入り込んでいる。ひどい、皮肉だった。気まずさに濡れた沈黙が、まったく唐突に訪れた。巧はともかく、詳しい事情が分からないマシユにとっては、自分が何か失言をしてしまったのではないかと気が気でない。両者とも次の言葉を繰り返すことができず、このままどうしようもない重苦しさが続くかと思われたその時、空気を打ち破るような男の声が、カルデア全体に響き渡った。

『——藤丸くん、マシユ。レイシフト準備がようやく整った。君たちも準備ができ次第、管制室に集まってくれ』

男の声は、伝えるべき用件だけ告げて、鳴り響いた時と同様、断ち切られたように突然に途切れた。あまり話せませんでしたね、と黙り込んだ放送機器を残念そうに見上げるマシユを他所に、さつさと立ち上がろうとした巧は、視界の端に見える少女の手が微かに震えているのを見て取り、

ついに我慢が、ならなくなつた。

「なあ」

「はい？」

「何で、怖がるくせに戦うんだ」

自然と問い詰めるような響きになってしまい、少し躊躇う。それでも、尋ねずにはいられなかった。

男の真つ直ぐな視線に偽る事は不可能だと悟ったのだろう。マシユは少しだけ顔を俯けて、か細い声で巧に聞いた。

「……気づいていたん、ですか？」

「見りや、わかる」

そこで初めて、片手の震えに気づいたマシユは、咄嗟に覆い隠すように、もう片方の手で包み込んだ。弱々しく笑う姿は、どこからどう見ても、戦いに向かうべき人間には見えない。だからこそ、どうしても聞いてみたくなってしまうのだと思う。確かめたくなくなってしまったのだと思う。

——恐怖を抑え込んでまで、戦う理由を。

怖気付く心を奮い立たせるように、大きな深呼吸をひとつして、マシユは滔々と語り出した。

「……わたしは、先輩に命を救われました。だから、先輩を守る為だけに一度拾ったこの命を懸けようと、特異点に来た時はそう思っていました」

「……」

「でも……先輩がひとりでも戦える事を知って、わからなくなりました。何を守る為に、盾を持てばいいのか」

マシユは、震え続ける自らの白い手に、問いかけるかのような視線を向けた。守るべき対象と見ていた相手は、自分の手など借りなくともひとりですつ事ができて、守るべき立場にある筈の自分は、逆に守られてばかりで。

表にはさすがに出さなかったが、何度も何度も迷った。白状すれば、自分が盾を持つ必要など、どこにも無いのではないか——そう思った事さえある。

けれど、

「——けれど、キャスターさんと出逢って、セイバーさんや他のサー

ヴァントたちと戦って……わたしの中に宿っていた、名前もわからないあの人が託してくれた力に、意味を持たせたいと思っただけです。見つからないで済ませてしまうのではなく、あの人から受け継いだ物を、ここで終わらせたくなくなっただけです。

そしてようやく、見つけました。カルデア、それにドクターやダ・ヴィンチちゃん。職員の皆さんに、先輩——それがわたしの、守るべき物。それがわたしの、戦う理由です」

少女の手から、既に震えは、無くなっていた。

力強い決意の光を宿したマシユの眼差しに、巧は内心で嘆息する。守られてばかりなのは、むしろこちらの方だった。少女がいなければ、何度自分は死んでいた事か。ただ、それを告げようとする度、どうしても気恥ずかしさの方が勝ってしまう。だから巧は立ち上がり、マシユの髪をヤケクソのようにぐしゃぐしゃとかき混ぜた。

突然の暴挙に目を白黒させるマシユに、巧は目を逸らしながら、それでも確かな声色で言った。

「強いよ」

「へ——」

「強いよ、おまえは」

「あの、それはどういう」

「行こうぜ、待ってんだろ」

マシユは、妙にすっきりした足取りで歩き出した己がマスターの背中を呆然と眺めた後、曇りを拭い去った相貌のまま歯切れのよい返事を返した。

○

管制室に入ってきた巧とマシユを見て、ロマニはひらひらと手を振った。控えめに手を振り返すマシユに対し、巧はつまらなそうにあたりの機材や忙しなく行きかう職員たちを見回している。対照的な二人の様子に苦笑しながらも、ロマニは目の前の二人に、今回の作戦の概要について話し始めた。

「今回レイシフトするのは、観測された七つの特異点の中で最も揺らぎが小さな時代だ。だからといって、油断しちやいけない。君たちの前に立ちほだかるのは、歴史その物だ。必然的に、多くの英霊や伝説が敵になることだろう——」

輝くカルデアスを見上げながら、ロマニは続ける。

「きつと、辛い旅路になる。それに、どんな結末が待っているのか、まったくわからない。それでも、僕らは足を止めてはいけないんだ。たとえそれが過去に弓を引く冒険その物だとしても、僕らが僕ら自身の未来を取り戻す為には、そうする以外の道はない」

試すようにそう問うたロマニに、巧はただ拳を握り締め、マシユはきゅつ、と唇を引き締める事で応えた。ロマニはそれを見て、安堵と心配が縋い交ぜになった複雑な笑みを浮かべる。そして湿っぽい空気を叩き出すかのように自分の頬を勢いよく叩くと、元気よく声を張り上げた。

「さあつ、いよいよ、君たちの旅の始まりだつ！ 門出は盛大に祝ってやるべきなんだろうけど、生憎時間がない——から、帰りを楽しみにしておいてくれ。ご馳走をたっぷり用意しておくから」

「まずはなによりも、ベースキャンプとなる霊脈を探すようにね。じやなきや、物資を遅れないから……ああ、それと、藤丸くん」

ダ・ヴィンチは、思い出したかのように巧に近寄ると、胸元からファイズフォンを取り出した。どこから取り出していたんだコイツ——と思いつき切り後ずさる巧の手を強引に取って、問答無用で携帯を握らせる。「あんまり時間が無かったからちよっぴり機能するか不安だけど、カルデアと連絡が出来るようにしておいたから。よほどの異常が無ければ、いつでもどこでも通じるよ」

「……弄くったのか」

手の中のファイズフォンが、途端に怪しげな壺か何かに見えてきた。顔を顰める巧とは正反対に、ダ・ヴィンチの顔は興奮と満足で色めき立っている。

「まあね。ふふ、久々に骨のある仕事だったよ。並みの既製品を改造するのはワケが違った」

鋭く尖った左手の人差し指をふりふり振って喜びを示すダ・ヴィンチに、巧は何か言おうとして辞めた。段々と目の前の変人がどれだけ無茶苦茶な性格をしているのか、分かってきた気がする。だが、悪い奴ではないのだと、思う。巧が、躊躇いながらも、渋々とポケットにファイズフォンを仕舞うのを見届けて、ようやくダ・ヴィンチは巧たちからスキップで離れていった。

荒らすだけ荒らして去った台風を見送るような視線をしていたロマニは、困ったような笑みを浮かべた。

「……まあ、その、カレはああいう人種だから。いや、悪い奴じゃないんだけどさ」

「それは、わかる」

中心で巻き込まれてしまった本人である巧の顔に、濃い疲労が映っているのを見てとって、ロマニは同類を見つけたような親しさを表した。しかしマシユの咳払いを聞いて、すぐさま我に返る。

「……とにかくそういう事で。どうにも締まらないままだけど、頼んだよ。藤丸くん、マシユ。——君たちの健闘を祈る」

ロマニの言葉を受け取り、そして巧は、案内された細長いカプセルめいた形をした、一基のコフィンに乗り込んだ。透明な扉が足元からせり上がり、完全に内部と外界が遮断された瞬間、うたた寝をしている最中のような、脳の奥から湧き出した霧のような眠気が、ゆっくりと意識を溶かしていく感覚が巧を襲った。

視界を埋める暗闇、断続する白光、さらさらと灰が渦巻く音、拍動する心臓、

穏やかな風、生暖かい陽射し、誰かの声、響いて

やがてすべてを、厳かな静謐が支配し——

全工程 クリア 完了。

グランドオーダー 実証を 開始 します。

こうして、乾巧のグランドオーダーは、ついにその幕を開けた。

あらゆる苦悩と煩悶を湛え、無数の希望と絶望を抱えて。
何時か必ずやって来る、灰と蒼炎の異邦者を待ち望みながら。

第一節「穏やかな旅の始まり」

夢を見ている。

朦朧とした意識の中でまず浮かび上がってきたのは見知らぬ白い病室だった。無機質という文字を辞書から引っ張り出してきてそのまま形にしたような病室は雑音一つ存在しない。それゆえに自らの呼吸が大きく響くおかげで、部屋の中は逆に騒音が満ちているように感じた。

ここは何処だ、とまず思い、次にここから早く抜け出さなくては、と思った。自分はこのな所で暢気に寝ているわけにはいかない事情がある。それが何なのかは思い出すことはできないが、必ず成し遂げなければいけないという確信だけはあった。

だから、乾巧はベッドから立ち上がろうとして――驚いた。
手足の細さに、白さに――その弱々しさに。

同時にハッキリと意識が気づいた。この身体は自分の身体でも、ましてや乗り移ったあの身体でもない。茫然としながら自分の意思を持って動く自分のものではない手を見ていると、がちやり、と扉が開く音が聞こえた。振り向くとそこには白衣を着た男がおおよそ歓迎する気にはなれない表情を浮かべて立っていた。

「――被検体番号■、■、■、■、■、■、■。これより第十八回目の戦闘実験を開始する。準備が整い次第、実験室に来るよう」

男は手元のボードを見るばかりでこちらには少しも視線を送らないまま淡々とそんなことを告げた。そして巧の身体もまた抗うことをせず淡々と準備をし始める。まるで、逆らうという行為そのものを知らないかのようにだった。そこには自分の意思というものが欠片も存在しない。

生きた人形。

まさしくその言葉が似合う身体は準備を整え終えたらしくベッド

から立ち上がると、とてとて、とつたない足取りで扉に向かって歩き出した。先ほどとは違いまったく制御が効かなくなつたことに歯噛みしている最中、大きさを測るのもバカらしくなつてしまふほどのサイズをした窓ガラスがふと目に入る。

そこに映つたのは、無機質な虚無を張り付けた幼い少女の、伽藍洞の光を宿した紫紺の瞳――

合うはずのない視線が、合い、

「――あなたは、誰？」

暗転。

○

やがて。

乾巧は、見知らぬベッドの上で目を覚ました。

「……………」

またこの展開か、と思いつつながら、ゆつくりと身体を起こす。この身体に入ってからというもの、見知らぬ場所でききなり目を覚ましてしまう頻度がかなり多くなつてきたような気がしないでもない。

もしかしたら、そういう星の元に生まれた身体なのかもしれない、と思う。巧は元々旅に慣れているため動揺する事は無くなつてきたが、元の身体の少年は一体どのような感想を抱いたのだろうか、ふとそんな事を考えた。

寝ぼけ眼のまま、辺りを見回す。ベッドで寝かされていたことから、少なくとも外ではないだろうというあたりだけはあるが、それでも警戒を怠るわけにはいかなかった。外だろうが中だろうが、ここはすでに巧の常識を遥かに超えた物――魔術が関与している事に、変わりはないのだから。

部屋の外観をひと言で表すなら質素で、控えめだった。壁にぴったりとくつつく形で三個ほど立ち並んだタンスに、木材と埃が入り混じつたおいを漂わせながら佇む机と椅子のセットがひとつ。自分が今寝転がっているベッドも含めると、確認できる家具はその三つだ

けだ。

自室によくある生活感といったものが欠片も感じられない……死んだ部屋、とでも言うべきだろうか。机の正面すこし上で開けっ放しにされたままの窓から差し込む陽の光は、温かい筈だというのに部屋の様子と相まつてるせいでやけに薄ら寒い印象を巧に覚えさせた。

そこで、何かが机の上でちらちら光っているのが見えた。まだ温もりが残っているベッドから、のそのそと立ち上がった巧が近づいて見ると、そこには羽を括り付けたペンらしき何かが一本と、意味を全く理解できない文字列が数行ほど綴られた白い便箋が一枚あった。何を書いているのかはさっぱり分からないが、少なくとも日本語ではない事だけは確かだとわかった。

ひよい、と摘み上げて、矯めつ眇めつしながら眺めてみる。視界の中で揺らぐ紙が陽光を受けて微かな輝きを放ち、黒い文字列が光を吸い込んでインクの色をさらに濃くしていく。

「……英語か？」

フランス語である。

だがその違いが、この男に判別できるはずもなかった。巧はしばらく摘み上げた紙をひらひらと縦横に動かしながら眺めていたが、やがて乱雑極まりない手つきでぱつと紙を放り捨てると、次いで開きっぱなしになった窓の外に目をやった。

巧の視界に、爽やかな色の青を目いっぱい塗された広い空と、ぽつぽつと浮かぶ綿菓子のような雲の群れと、馬鹿みたいに広い草むらが一瞬で広がった。

どうやら巧が今いるこの建物は小高い場所に建てられているらしく、少し離れた場所に、幾つかの屋根が集まった村らしき物を確認する事ができた。ふと髪を撫でた風の中には、草いきれと獣の匂いが複雑に入り混じっている。

明らかに巧がかつて過ごしていた時代でも、恐らくこの身体の持ち主が過ごしていた時代の風景でもない。ましてや、巧の両親が生きていた頃よりも——ずっと前に違いないだろう。常識から大きく外れた理が支配する世界に、自分が置かれてしまった事を、巧は改めて実

感した。

「……どうすつかな」

がりがり、と頭を掻きながら考える。まず一番に実行すべきはやはりマシユとの——カルデアとの合流だろう。自分がこの場所に来たそもその理由を顧みれば当然だ。だが、そのためにはまず自分が置かれた現状を理解しなければならなくて。そしてその現状を理解するためにはここを抜け出さなくてはならなくて。だが何がどうなっているのか分からない状況で自分が迂闊な行動を起こしてしまえば、以前の炎の都市のように本来ならば協力し合う筈の仲間と争うという面倒事が起こるかもしれない。

——あー、面倒くせえ。

そのうち考えるのが面倒になり、巧は纏わりついてくる思索を振り切るかのように、長く深い溜め息を吐いた。元々、自分ごときの頭でごちゃごちゃ考えたところで、事態が打破できるわけがなかったのだ。

巧はポケットの中に入っていたファイズフォンを軽く握り締める。と、自らを鼓舞するかの如く、いささか乱暴な勢いで扉を開いた。何があるかと絶対に立ち止まらないといまここで腹を決める。こういうのは怯んだ方が負けなのだ。どんな時でも強い態度を取るべきなのだ。

そう決意を新たにした次の瞬間、

「うぎゃうっー」

無視できない音が二つ、厳かに鳴り響いた。

一つ目の音の正体は勢いよく開かれたドアが誰かにぶち当たった音で、もう一つの音の正体は扉がぶち当たった誰かが気を失って床に思いつきりぶつ倒れた音だった。

嫌な予感がする。

「……」

ノブを握った掌に波のように伝わってきた鈍い感触に冷や汗を垂らしながら、巧は先ほどの勢いを完全に殺してゆっくりとドアを開いていく。

そこにあつたのは目を回しながらウンウンと呻く、大きなたんこぶを額にこさえた、まったく見知らぬ女の姿。

「……」

そして、

巧はまず最初に何も見なかったフリを實行するべく、そつと扉を閉じた。

○

さすがにそのまま放置しておくというのはマズいと考えたらしい巧が、床に転がったまま動かない小柄な体躯を抱き上げてベッドに寝かせたほんの数分後に、寝込んでいた女は意識を取り戻した。あれほど大きく鈍い音がしたのだから、少なくとも数十分は付きつきりになるだろうな——と少しだけうんざりしていたのだが、意外と昔の人間は頑丈なのかもしれない。

「——う、うん。あ、れ。ええつと、わたし——」

呻きつつ、目を擦りながらゆっくりと上体を起こした女に、傍に持ってきた椅子に座っていた巧は、そのような状況に追いやった張本人であるにも関わらずひどく適当な調子で、

「大丈夫か」

と、ひと言だけ尋ねた。

問い掛けられた女は未だに意識に霧がかかっているらしく、しばらく臆気な目つきのまま意味のない曖昧な言葉をもごもごと口内で繰り返していたが、ふとした拍子で我に返ったらしく、やがて壮絶な勢いで取り乱し始めた。

「——つて、えっ！ あ、ええつ？ な、なんで私がっ。えっ、あつ、ええつ？ どうしてっ、貴方じゃなくて私がベッドに寝て……えっ!？」

「……慌てんのは後にして、先に答えてもらってもいいか」

巧がそう言うと、女は戸惑いながらも騒ぐのを止めて、赤くなつた額を擦りながら話し始めた。

「……へ、あ、えっと、はい。おでこがなんでか凄く痛むんですけど……どうにか、はい。大丈夫です」

「そうか」

「……あの、もしかして私、倒れてました？ この部屋を尋ねてからの記憶がさっぱり無くて……」

女の申し訳なさそうな上目遣いから顔をそっと背けた巧は、扉に視線を向けながら

「そこに倒れてた。疲れてたんじゃないのか」

とおざなりに答えた。ここまで嘘のつき方が堂々としているといっそ清々しきささを感じる。

男の言葉が、真つ赤を通り越して煌々と燃え盛り続けている嘘だという事がわかっていない女は、恥ずかしさから白い肌を紅潮させると、花卉の重さに堪えかねて茎を折ってしまった花を思わせる角度に頭を垂れた。

「そうですか……その、ご迷惑をお掛けしてしまって、すみません。お恥ずかしい姿を見せてしまった上に、ベッドまでお借りしちゃって……」

「いや……何かあった方が迷惑だから、別に良い」

巧はいちおうの本心を吐き出したあとで言葉を切ると、肩の荷が下りたと言わんばかりに、ほう、と大きなため息を吐いた。とても気絶させた張本人とは思えない態度だったが、そのような事情は露ほども知らない女は、そんな巧の姿にほわほわと心を暖かくしていた。

何故かは知らないが、この見知らぬ人は自分に怪我がなかった事を心の底から安心してきている。人の真心というやつはなんて暖かいものなのだろうか、少女が見当違いな事を考えている傍で、巧はそれで、とひと言置いて、頭の中で渦巻いていた疑問を女に問いかけた。

「ここは何処だ。あんたは、誰だ」

女はしばらくぱちぱちと目を瞬かせていたが、やがて凜と背筋を伸ばして、

「そうですね、まずは自己紹介から——クラスも真名も、本来ならば

易々と明かすべきでは無いのでしようが……貴方たち、というか人理についての大きな事情は大体説明してもらいましたから、信頼に足る証という意味も込めて、遠慮なく名乗らせていただきます。

——私はサーヴァント・アサシン。真名をコルデー——シャルロット・コルデーと申します！ どうぞ、お気軽にコルデーとお呼びくださいっ！」

と、そんな名乗りを果たした女は——シャルロット・コルデーは、花が咲いたような笑みを浮かべた。

○

シャルロット・コルデー。本名を、マリー＝アンヌ・シャルロット・コルデー・ダルモンという。

かのフランス革命で立法議会と国民公会の党派であったジロンド派を擁護し、当時の敵対勢力とされていたジャコバン派の中心人物である活動家のジャン＝ポール・マラーを暗殺した女性である。

マラー暗殺後、暗殺の動機や背後関係を探るべく数多くの裁判にかけられたが、ほとんど無計画に近い状態で暗殺を実行したということ以外は何もわからず、最終的には断頭台へと誘われてしまった。……だが、その際にこれからギロチンに首を撥ねられる人物とは思えない凛々しさや儚さ——そして美しさを見せたことから、後世において「暗殺の天使」と呼称された。

聖杯戦争において、聖杯を獲得するために必要な戦闘手段である以前に、人類を守護するという使命をガイアから与えられたサーヴァントたちは、それゆえに生前も国士無双、一騎当千の英雄として名を馳せた者——それ以外にも存在するが——が非常に多い。そして、英雄と評されるにふさわしい逸話や、常人には到底理解できない人間性を持った者もまた然りだ。

しかし、彼女にマラー暗殺以外のこれといった目立つ逸話は特に無く、その人間性もまた読書を好む物静かな女性と、さして特異なものでは無かったらしい。しかし、そのように出生も人物もいたって普通

だったからこそ、シャルロット・コルデーはその行為の特異性を人々——あるいは世界に認められたことによって、「暗殺の天使」の名を冠した暗殺者として人理に刻まれたのだろう——

『——とまあ、簡単に纏めると彼女はこういうサーヴァントなんだけど、どうだい？ あんまり説明するのは得意じゃないんだけど、大体はわかった？』

「ああ」

ファイズフォン越しに聞こえてくるロマンの声にそんな返事を寄越した巧の顔を見てみると、ほとんど話を聞いていなかったことがよくわかる。しかし電話越しでそれに気づけというのは困難だろう。ロマンはそうかなあわかりやすいかあぼくの話術もまだまだ捨てたもんじやないねえウッフ、と無邪気に喜んでいた。

無常である。

コルデーが起きたあと、巧は彼女に案内される形でマシユと合流することにした。どうやらレイシフトが成功した後でものんきに眠りこけている間に簡単な事情を説明していたらしく、ほぼ初対面の巧にコルデーが真名とクラスを易々と明かしたのも、そういった出来事があったからだそうである。

面倒な手間が省けて助かる……というのが巧の正直な感想だったが、同時に不安な点もあった。

果たしてこのサーヴァントは、本当に味方と断言できるのかどうか。

アサシン、という言葉聞いて巧が真っ先に思い出したのは、あの瘴気混じりの炎が群れを成した都市で出会った、黒外套に白い骸骨の仮面を顔面に張り付けた影だった。

枯れ木のような痩身から放たれていた迷いも躊躇いも無さ過ぎる殺意は、今も身体に染みついている。だからこそ、自分のクラスをアサシンと名乗ったコルデーには、密かに警戒心を抱いていたのだが——

「するれーぽんと、あびによーん、ろーにーだんす、ろーにーだんすっ」
どこからか湧いて出た子供と手を握り合いながら一緒になって何

かを歌っている様子を見ると、とても暗殺者の名を冠する英霊とは思えなかった。それどころか、サーヴァントにさえ見えない。キャスターやセイバー、マッシュなどといった存在が必ず醸し出している人間離れた戦意を感じるができないのである。

そんなことを言うと、ロマンはうん、と少し考え込んでから、

『アサシンはそういうクラスだからね……正攻法で相手を叩き潰すよりも、策を弄したり暗躍したりして勝つタイプだ。確か聖杯戦争におけるアサシンは、ハサン・サツバーハという中東の暗殺教団の頭首の中からしか選ばれないんだけど……まあ、何事にも例外はある。それに、泥に汚染されていたとはいえサーヴァントと戦った君にそうと思わせないのは、立派なアサシンの証拠だよ』

「……そういうもんか」

『それに彼女が敵なら、今頃きみはとっくにお陀仏してる筈だろ？』

心配は……一応しておいた方がいいかもしれないけれど、とにかく今は大丈夫さ』

「……」

「どうかしました？」

「なんでもない」

足を止めていることに気が付いたコルデーが不思議そうに尋ねてきたが、巧はそう返事をしてフェイスフォンを閉じた。とにかく、口々に現状を把握できてもない今は、目の前の女についていくしかない。仮にもし裏切られたのなら——その時は、その時で考えようと、巧は思った。

流石に行き当たりばつたりが過ぎるが、あれこれ考えてからようやく行動を起こすよりも、そちらの方が自分に似合っているように見えたし、多分、何よりも信じたかったのだと思う。

——あのな。勘違いしてるよーだからいちおう言っとくが俺様はな、ガキなんて大々大嫌いだってんだよ……あ？ 照夫オ？ ば、ばか。なんでアイツを出してくんだよ。……アイツはその……あれだ、俺様が助けたんだから、俺様に育てる責任があるつちゅーか……それだけだよ。クソっ。なに笑ってんだよ生意気

なっ。

子供と無邪気に笑い合える人間は、誰かを平気な顔して裏切れるような人間ではないのだと。

やがて、コルデーの背をとぼとぼとスローペースで追いかける巧の視界の中に、こちらに向かつて大きく手を振る、猫ともリスともつかない例の小動物をそばに付き従えた鎧姿の少女が入った。

「——い、んぱ——いっ、せんぱ——いっ！ 起きられたんですね——っ！ おはようございま——すっ！」

わざわざ大声で言う必要ないだろ。

そう叫び返したかったが、すぐ先を歩くコルデーが向けてくる微笑ましそうな視線に氣力を失ってしまい、巧は氣怠そうに片手を挙げてマシユに応えた。

○

「……それにしても、世界そのものが焼却されてしまうなんて……そんなに大変なことが起きてるんですねえ」

「話聞いてたんじゃなかったのかよ」

目を驚きに瞬かせるコルデーに巧は呆れの視線を向ける。それを受けたコルデーはむすつと頬を膨らませると心外そうに、

「ちゃんと聞くのが初めてなんですっ。話を聞かないおっちょこちよいの天然を見るみたいな目で私を見るのはやめてくださいっ」

と言った。その仕草がおっちょこちよいの天然に見える原因に繋がっていることに、果たして気づいているのかいないのか。おそらく気づいていないに違いない。だが巧はそれをわざわざ指摘することせず、ちら、と開けっ放しにされた扉や窓から見える外の景色に意識を向けた。

マシユと合流したあと、巧たちは改めてこれからの方針を話し合うべく、コルデーが現在仮住まいにしていると、いうこじんまりとした家屋に案内されたのだが、村の中は雑多な音で溢れかえっており、家の

中に入っても様々な——大通りを通るたびに軋みを立てる馬車の車輪、荷物を売り歩く行商人が張り上げる枯れただみ声、大きな水車が上げる水しぶき、鍛冶屋が何度も振り下ろすハンマー——音が入り混じって聞こえてくる。喧噪と人ごみが嫌いな巧は、さっさと家の中に入ってしまったかかったのだが、マシユが目に入るすべてが珍しいとばかりにあちこちふらつき回るおかげで、余計な時間を食ってしまったことは記憶に新しい。

話し合いにまったく興味を持ってない巧と、話し合いよりもどうしても気になってしまうことがあまりにも周囲に多すぎるマシユが外の景色をちらちらと眺めている傍で、ロマンはコルデーとの会話を着々と進めていた。

『レフ・ライノール——いや、敵が人理を焼却することで何を企んでいるのかはまだ分からないけれど……とにかく、この時代を破壊しようとしているのだけは確かなんだ。それで改めて聞くんだけれど、この時代で何か変わったところは見られなかったかい？』

「変わったこと？」

こくり、と頷いたロマンに、コルデーは困り眉になりながら、

「そう言われても……この時代に呼ばれてからまだ数日しか経っていませんし、ここでの生活に馴染むのに精一杯だったので、あまり詳しくはありませんよ」

と呟いた。しかしロマンは気にすることなく、

『本当に何でもいいんだ。たとえば、さっきマシユと藤丸くんから聞いた巨大な光の環みたいな大きな物から、小耳に挟んだ程度の小さな物まで。今はとにかく、情報を集めなきや始まらない。何かおかしくなっているのかさえわかっていないんだからね』

「はあ……異変、異変……」

コルデーは手を顎に当ててしばらく考え込んでいたが、瞳の中に思い当たることが見つかったらしき光を灯すと、探るような口調で話し始めた。

「さっきも言った通り、私はこの世界に呼ばれてから日が浅いので、あまり正確なことまでは知らないんですけど……今から数日前、オルレ

アンに魔女の襲撃があつた、という話なら少しだけ知っています」
「魔女、ですか？」

聞き慣れない響きに、ようやく会話に集中し始めたマシユは怪訝に眉を曲げた。コルデーははい、と首肯を返して話を続ける。

「魔女はこの時代に——いいえ、この世界に存在するはずのない竜を無数に引き連れて、オルレアンにて戴冠を受けたシャルル七世を殺害したと。——あくまでも噂なんです、魔女の正体はジャンヌ・ダルクと聞きました」

『——ジャンヌ・ダルクだつて……!? そんな馬鹿なことが……』

コルデーの言葉にロマンはよほどの衝撃を受けたらしく、虚空に映し出されたロマンの像が大きなブレを見せた。立ち上がったのかもしれない。巧は何が何だか理解できず、同じように驚きを隠せないでいるマシユに向かって、

「誰だそいつ」

と尋ねた。マシユは信じられないものを見るような目で見てきたが、やがて噛んで含めるような説明を始めた。

「——ジャンヌ・ダルクは、百年戦争で追い詰められていたフランスを救った英雄です。彼女の初陣であり、そして初めての勝ち戦となったオルレアン包囲戦は、敗色が色濃かった当時のフランスにとって、ある種のターニングポイントになりました」

『彼女がオルレアンを解放したおかげで、行き詰まっていたフランスは勢いを取り戻し、シャルル七世が正式に国王の座に就いた事によって、彼女は名実共にフランスを救った聖女になった——これが本来の歴史の流れだ』

「……で、そのどこに驚く必要があるんだ」

どうも腑に落ちない巧の問いかけにロマンは沈鬱そうな表情を浮かべると、重苦しさに塗れた言葉を吐き出した。

『そこで終われたら良かったんだろうけどね——彼女はその後、異端審問にかけられて、処刑されてしまったんだ。しかも、味方の筈だったフランスに見捨てられたことによつてね』

「……裏切られたのか？」

『彼女が捕縛された過程はどうであれ、結果的にはそういう事になるね。——だから、別に不思議じゃないんだよ。サーヴァントとなつて甦った彼女が、自らを見捨てたフランスに対して復讐に走つたとしても。それに今はちょうど1431年——つまり、彼女が処刑されて間もない時代だ。けど、まさか、実際に行動を起こすなんて……とても信じられないな』

ロマンは参つたと言わんばかりにがしがしと頭を搔き毟つた。守りたいと、救いたいと思つた物に、手酷く裏切られる。それはひどく辛く、許せなく、そしてとてもやるせない筈だつた。

裏切られた少女は、何を考えたのだろうか。纏わりついて離れない無念に巻きつかれて沈んだのか、堪えようのない悲しみと共に墮ちたのか、それとも——潰える事のない憎しみを抱いて焼けたのか。

かつての木場の台詞が鮮やかに蘇る。守る価値がない物を、守つても仕方がない——甦りを果たしたそのジャンヌという少女もまたそんな事を考えながら世界を滅ぼそうとしているのだろうか——

そこで違和感を覚えて、ふたたび通りに目を向けた。そして巧は、自分が何に対して違和感を覚えているのかハッキリと理解した。

「……魔女が現れたにしちゃ、随分と暢気だな」

「そういえば……皆さん、すごく活気がありますね。まるでそんな事なんて元から無かつたみたい……」

マシユもつられて外を見る。喧噪を次々と生み出しながら通り過ぎていく人々の表情は、どこまでも明るい。無理やり装つた寒々しい空元気などではない、明るさと暖かさに満ちた本物の活気がそこにはあつた。

語られた状況から推測できる光景と欠片も一致しない光景に巧たちが訝しんでいると、コルデーは引き結んでいた唇を開き、

「そして、これがもう一つの噂なんですが、これもちよつとおかしくて……オルレアンに自分を『救世主』と名乗る者が現れて、その『救世主』が邪悪な魔女を打ち倒した——と、そんな話がフランスに広がっているんです」

これこそが本題だ——と主張するかのような口調で、彼女はそう告

げた。

第二節「邂逅」

——とにかく、今は異変の中心になっていたオルレアンに行ってみるしかない。そこに特異点発生の原因か、それに関連する何かがあるのは、間違いないだろうからね。

コルデーの話をひと通り聴き終えたロマンから飛び出したそんな提案を断る理由などある筈もなく——巧はしばらくのあいだ渋っていたが——巧たちは村を出て、オルレアンへ向かうこととなった。しかし、方々に街が点在しているとはいえども、フランスという広大な土地を土地勘も無いまま徒歩で移動するのは、体力的にも時間的にも無駄しかないのでは——というマシユの素朴な疑問に、新たな旅の道連れとなったコルデーはこう答えた。

「それでは馬車に乗りましょう！」

それにしても尻が痛い、と巧は思う。

初めのうちはまだ我慢できる程度の痛みだったが、そろそろ無視を貫けなくなってきたような強さになってきたような気がする。それも当然だった。15世紀フランスの道路のインフラは、お世辞にも整っていたと呼べるような代物ではなく、死亡に繋がってしまうような事故が起きてしまうことも決して少なくはなかったという。

無論、そんな事情など露ほども知らない巧は、できるだけ痛くないポジションに落ち着くべく、ズボン越しの試行錯誤を繰り返していた。

無駄な努力に励み続ける巧の背中にふと、啄まれているかのようなむず痒い感覚が走った。怪訝に思っただけ振り向くとそこには、コルデーが馬車の隅っこに置かれていた座布団を持ってきて、

「これ、使います？」

と笑みを浮かべながら、こちらに差し出していった。

旅をする中で擦り切れるまで使い潰されたせいなのか、座布団はところどころからぐしゃぐしゃになった綿が飛び出た、世にも無残な姿

である。緩和できるとはとても思えず、断わろうとした瞬間、ふたたびの揺れと石で殴りつけられたような鈍い痛みが巧を襲った。同時に背筋がじんと痺れる。よりにもよって、尾骨を打った。

「すまねえなあ、ここらはちよつとした悪路なんだが、別の街に繋がる道で一番近いし、便利なんだ。もうちよつとでなだらかな道に入るから、それまで辛抱しといてくれ」

馬車を運転している行商人は、ふくよかな顔に似つかわしくない申し訳なさを浮かべながら言った。

「そんな……ただで乗せて貰っているのはこちらですから、そこまでお気遣いいただかなくても」

「何言ってるんだ。嬢ちゃん達みたいな別嬪さんと相乗りできた方が、よっぽど気イ遣うってモンだぜ——それにしても綺麗な姿勢だなあ、初めて乗るとはとても思えねえよ」

「こういう事態に備えてシミュレーターで——いえ、ええっと、その旅に出る前に、カルデー——村で、そうです、村で特訓しましたので」
「へえ、生真面目だなあ」

「——」
背中越しに交わされている時折ボロの埃が零れ落ちている会話を聞いて、巧は飛び出しそうになった声をそつと噛み殺した。

自分ひとり——しかも男が——だけ泣き言を吐くというのは、なんだかひどくみつともない気がする。巧は声をどうにか嚙下すると、無言でコルデーから座布団を受け取り、無言で尻に敷いた。巧の予想に反し、痛みは幾分かではあるが和らいでくれた。密かにため息を吐き出していると、コルデーがニコニコと笑いながらこちらを見ているのが、視界の端に不意に映り込んだ。

「……」
正直に言うとは触れたくはなかったが、無視を貫き続けていてもどうせ話しかけてくる結果は変わらない気がしてならず、巧は渋々と先手を打つことに決めた。

「んだよ」

コルデーはぱちん、と音を立てながら両手を合わせて、

「お話、しませんか？」

「……話？」

胡乱そうに眉を歪める巧とは正反対に、はい、とコルデーはどこまでも嬉しそうな顔をしながら頷いて、

「せっかくサーヴァントとマスターの関係に——もとい主従関係を結んだんですし、これを機に互いの親睦を深め合いましょ！ それに私、純粋に興味があるんです！ 貴方につ。だからお話、しましょね？」

たとえ初対面であつても、あつという間に絆されてしまいそうなくらい、柔らかで明るい人好きのしそうな笑顔だった。しかし彼女がそれを向けている相手は、恐竜の痛覚並みの鈍感を誇る我らが乾巧である。

「嫌だね」

巧はコルデーの提案をたったひと言でバツサリ見事に切り捨てみせると、これで用は済んだと広がる景色へと意識を集中させた。もちろんコルデーは納得がいかなさそうに、むすつと頬を膨らませている。

「何でですかっ」

「眠たい。面倒臭い。話したいって気分じゃない。——それに、」

「それに？」

「……なんかお前は、嫌だ」

歯切れ悪くもまっすぐに告げられた言葉に、コルデーの頭の中の導火線にとうとう火が点いた。

「座布団貸してあげたじゃないですかー！ー！ー！つ！！」

「それとこれとは話が別だ」

「あの……先輩はもう少し、誰かとコミュニケーションを取ることを試みた方が良いかと思えます」

冷たい態度ばかり取る巧を、なかなか友達ができずにいる我が子を慮るかのような目で見つめながら、マシユはそう言った。しかし巧はその発言を歯牙にも欠けず、

「かったるいんだよ、そういうの。お前やつとけ」

と気怠そうに言った。断るにしたつてもう少し別の言い方がある。それを聞いたマシユははあ、としようがなさそうに溜め息を吐き、コルデーはますます頬を膨らませる。だが巧は知らぬ存ぜぬという言葉を体現するかのごとく、明後日の方向を見続けている。そして巧は内心、ここまで意固地になつている自分に微かな戸惑いを覚えていた。

目の前で膨れっ面をしている女が、悪人でないことだけは分かる。子供と手を繋げる人間が悪人ではないと巧が信じたいだけかもしれないが、そういつた鼻肩目を抜きにしてもシャルロット・コルデーは、少なくとも信用してもいい味方だと頭では分かつている——分かつているというのに。

——どうしてか、俺はこいつが気に喰わない。

それが、嘘偽らざる巧の本心だった。理由はわからない。別に嫌いな性格をしているわけでもないし、最悪な出会い方をしたというわけでもない。ただ、正体不明としか言い表しようがないしこりが、コルデーを見るたびに心の底でちらちらと熾火のように燃えるのだ。

思わず沈み込んでしまいそうなほど深く、静謐を湛えた水面のように滑らかな、女の翡翠色の眼——その目を見ていると、自分の中にいつまでも居座り続けている、絶対に追い出すことが出来ない無力さを、真つ正面から突き付けられているような気分になつて——

「……ぐすん、ぐすん。そうですね、私みたいな、戦闘があんまり得意じゃないサーヴァントなんかと仲良くしたつて、貴方に何か得があるわけでもありませんよね。ごめんなさい」

果てのない深みに入りかけた巧の思考を、コルデーの泣き真似が遮った。だが顔を覆った掌の隙間からちらちらとこちらを窺っているのが丸見えだし、セリフには泣き声ではなくぎこちなさが入り混じっている。どうせやるならちゃんとしろ、と巧は思い、うだうだ考えていた自分が何だかバカらしくなつてきた。

「……少しだけだからな」

頭の中をふと通り過ぎていった、お節介な同居人に背中を押されたような気がした。

自分から折れるというのはもつとも苦手としていた巧だったが、しがしと頭を搔くと、仕方なさそうに会話に混じり始める。と言つても、自ら話題を出すことは皆無であり、殆ど聞き役に徹するという具合だったのだが、それでもこの男の以前を考えてみれば、大きな進歩である。

穏やかな旅にふさわしい、穏やかな時間が淡々と過ぎていった。

「……先輩は、どう思いますか？」

「何が」

立てた片膝の上に頬杖をつきながら景色を眺めていた巧の横顔に、マシユはそう問い掛けた。巧が気のない返事を寄越すと、マシユは自分でも確かめるかのように、

「オルレアンの救世主の噂です。……本当にいるんでしょうか、そんな人が」

と呟いた。しかし巧は相も変わらずにべもない口調で、

「いるわけねえだろ、そんなやつ。胡散臭すぎる。大体、そいつが本当にこの救世主だってんなら、なんで俺たちが来なきやいけなくなつたって話になるだろ……あと、気に入らない」

「何がです？」

「言葉の響きが。……自分をそうやって名乗るヤツは、ロクな性格してない」

と、珍しく饒舌になった巧に、コルデーはこてん、と首を傾げた。

「そうですか？ とても素敵な響きの言葉だと思っんですけど……」

「そりやおまえの感性がおかしいだけだ」

「……もしかして私、遠回しに喧嘩を売られてます？」

「さあな」

顔を逸らしながら巧がそう答えた次の瞬間、ポケットに雑に突っ込んであったフェイスフォンが、低い唸り声を上げた。取り出して耳に当てると、すっかり耳に馴染んでしまったロマンの声が巧の耳朶を打った。

『もしもし？ 藤丸くん？ ごめんね、何度も。でもほら、一般人が一

緒であんまり目立つ訳にはいかないだろ。だから自然と君の携帯の方にかけることが多くなっちゃうんだよね』

「用事は」

『ああそうそう——近くに、森が見えないかい？ 方位はえつと……北北西あたりで、』

「変わるぞ」

巧は、話がややこしくなりそうな気配を鋭く察知するや否や、こちらを見ていたマシユへとフェイスフォンを放り投げた。突然の暴挙に驚きながらも、マシユは空中で固まったまま動かないそれをしつかりと両手で受け止め、躊躇いがちに耳に持っていく。

「……もしもし？ ドクター、ですか？ 私です」

『距離はね——ってあれ、マシユ？ 藤丸くんは？』

「先輩はその……」

向けられる視線に、構うなど言わんばかりに手を振る。それですべてを察したらしく、マシユは扱いに慣れない機器に戸惑いながらロマンとの通話を再開した。

「取り込み中だそうです。なので、私が代わりに」

『あ、そう？ でもこういうのも何か新鮮だね……まさかマシユとこうして電話越しに会話するなんて。ほら、この前一緒に見たドラマを思い出し』

「ドクター。先に話をしてください」

『……はい』

漫才めいた二人の会話を巧がぼうつと見つめていると、いつの間にか隣に座り込んでできていたコルデーが会話の邪魔にならない程度の声の大きさで、

「ずっと気になっていたんですけど、アレって何なんですか？」

と耳打ちしてきた。巧は今度は無視はしなかったが、

「携帯」

と、極めて簡素に答えるのみであった。広がる気配のまったく無い不毛なやり取りに、さすがのコルデーも堪えたらしい。小ぶりな唇をきゅつと引き締めると、ため息を吐きながら両膝を抱え込んだ腕に顎

を置いた。

「……マスターはどうして、そんなに私に冷たいんですか？」

「考え過ぎなだけだろ」

するとコルデーはいーえ！と頭を勢いよく起こし、

「ぜえー……っつっつっつっつに私のこと嫌ってますっ。いえ、本当に私の気にし過ぎなのかもしれないんですけど……こう、マスターの目つきとか態度とかから、すぐ……く含みを感じるとうかつ」

「あのな、」

力説を繰り返すコルデーを、巧は呆れ果てた目で見つめている。それには気付かずコルデーはしばらく文句ありげに唸っていたが、突然天から啓示を受け取ったと言わんばかりにぱつと目を見開くと、

「もしかして私に構って欲しいから、わざと冷たくしてるんですか？」と、先ほどまでとは打って変わった余裕ある態度になって、巧にしのある半目を送った。

お前もしかしてバカなんじゃないのか——と開きかけた口を、しかし巧は閉じる。そして一端呼吸を置いてから、唇の端をそつと持ち上げて、

「かもな」

当然ツレない返事が返ってくるとばかり思い込んでいたコルデーは、困り眉になりながら仄かに赤みが差す頬を掻き始めた。

「——え、つと。私、もしかして聞いちゃいけないことを聞いちゃいました、か？ や、や。あの、その、嬉しくないってことは、無いんですけど、でも私たちまだ出会って間もないですし、そもそもあんまりお互いのことを知りませんし心の準備というかもう少し段階を踏んでからっ」

「バカ、冗談だ」

「……………」

全身に突き刺さる無言の非難を難なく受け流していると、会話を終えたらしきマッシュが閉じたフェイスフォンを手渡してきた。どうだった、と巧が尋ねると、マッシュは、

「霊脈が見つかったそうです——この近くにある森の中で」と答えた。

○

時刻はまだ昼を過ぎたばかりだというのに、森の中は鬱蒼とした仄暗さで満ちていた。

見渡す限り立ち並ぶ木々から垂れ下がる無数の葉が折り重なって、自然の天井を作り出し、差す陽の光を防いでいるからだろう。そのせいか、森の空気はどことなく冷やややかさを含んでおり、上着を持ってきていて正解だったなど、巧は思った。

ロマンから霊脈が見つかったという連絡があった後、巧たちは馬車から降りて、指定されたポイントへと向かっていた。オルレアンに着くことも重要だが、まずはベースキャンプを作る方を優先すべき——らしい。巧は霊脈だの召喚サークルだのといった魔術に関しては、まるで門外漢だったが、これ以上慣れない馬車旅をする必要がなくなるというだけで、ずいぶん楽な気持ちになっていた。

地面に生えた背の低い草が、靴に踏みしめられるたびに、ざくざくと軽やかな音を立てる。鼻先を湿ったような土の匂いが頻繁に掠める。単調な緑色の景色がいつまでも続いたため、ひよつとしてここには出口など存在しないのではないかとさえ巧が思っていると、前方で交わされていたマシユ達の会話の音が、いつの間にか聞こえなくなっていることに気づいた。

少し離れすぎたか、と距離を詰めるべく俯けていた顔を上げる。
いない。

「——マシユ。」

立ち止まり、辺りを見渡した。焦げ茶色に染まった木々の群れ。ちらちろとどこかで鳴く鳥。薄らと自然の天井から差し込む細い陽の光の柱。満ちる静寂を取り込んだかのように微動だにしない足元の草。

「——コルデー？」

何かが、おかしい。

静かすぎる。

見失うはずがない二人の姿が消えていたこともおかしかったし、自然がそこら中に溢れているというのに生きた気配が一切しないこともおかしかった。前者はまだ自分が迷子になってしまったという——決して認めたくはない——可能性が残っているが、後者は言い逃れなどできない、明らかな異常だった。

無言で周囲を警戒する。ひと呼吸ごとに張り詰めていく神経とは相反して、身体はいつでも動けるように準備を整えていく。どんなに小さな物であっても、それが状況を変える物でさえあれば、すぐさま全速力で走り出せるほどに。

だが、

「

その女は、いとも容易く、巧の目の前に姿を現した。

金色の髪をした女だった。

森の薄暗さは相も変わらないうのに、三つ編みに結われた女の髪は、いまもなお太陽で照らされているかのように光り輝いて見えた。こちらをまつすぐ捉えている双眸の奥には、決して崩れることのない強固な意志の光がちかちかと瞬いている。両腕と胴体を覆った厳つい鉄鎧と、服の下から垣間見える女性的な丸みを帯びた肢体の組み合わせは一見アンバランスに見えるが、逆にそのコントラストが侵しがたい神聖さを女から感じさせる事に成功していた。

逃げる暇もなかった。

正確に言えば、逃げようと思えば逃げられたはずだった。なのにそうしなかったのは、巧が不覚にも目の前の存在に圧倒されてしまったからだだった。

目に入れるだけで、人間とは違う存在だと一瞬で理解できる、密度の濃い気配。

瞬間、巧の脳裏に過ぎったのは、獣めいた雰囲気をもった杖を携えた蒼い男。

——サーヴァント。

「——アンタ、サーヴァントか」

固まったまま動かずにサボっていた口を、どうにか動かして捻り出した問い掛けに、女は驚いたように眉を上げた。

「貴方は……サーヴァントを知っているのですか？」

「……」

「いいえ、聞くまでもありませんでした。その右手の赤い刻印は、聖杯戦争に参加した魔術師のみが持つことができる聖痕——令呪。つまり貴方は、マスターなんですね」

余計な警戒はさせまいとばかりに、女は巧の間合いから一步退いた位置へと移動した。完璧に、見切られている。余計に緊張が走って知らず喉を上下させていると、女は解きほぐすかのような笑みを浮かべて、

「警戒する必要はありませんから、安心してください。貴方が聖杯戦争に参加するマスターである以上、ルールを破らない限りではありませんが、危害を加えることはしませんから。……しかし、私が呼び出されたという事は、この地の聖杯戦争は少し特殊な状況になっているようです」

思案する女に応じず、巧は横目で辺りを見回しながら、

「……これは、アンタがやったのか」

と、周囲一帯から生き物の気配が途絶えていることについて尋ねた。女ははい、と首肯し、

「不慣れではありますが、結界を少し張らせていただきました。ここには霊脈がありますし、それに……追手がいつ来るともしれませんから」

「……追手？」

不穏な言葉に眉根を寄せる。よく目を凝らしてみると、女が身に付けている鎧には微かな擦り傷のようなものが見て取れた。

「はい。おそらくは、この聖杯戦争に私というサーヴァントが召喚された理由のひとつではないかと推察、できるのです、が——」

そこで、女は言葉を途切れさせた。あまりにも唐突に訪れた沈黙に

巧が不信に思っていると、無言になった女の目が自分の手に——より正確に言えば、手の中のファイズフォンへと集中していることに気づいた。ダ・ヴィンチやコルデーもそうだったが、サーヴァントからするとコイツはよっぽど珍しく見えんのか——と巧が呆れた次の瞬間だった。

視界の端から、

白銀の塊が、

弧を描いて迫り——

「——つぶねえっ！」

さつきまで頭があつた場所を、暴力的なまでの鉄臭さを孕んだ風が削いだ。直後、眉間に怖気。恥も外聞もなく子供のように丸まりながら後ろに転がった瞬間、巧が座り込んでいた地面が、葉を撒き散らしながら盛大な土飛沫をあげた。距離を取って立ち上がる。前を見据えるとそこには、先ほどまでの柔和な気配とは真逆の、一切の容赦が見られない敵意と戦意を剥き出しにした女がいた。その手には、たなびく白い旗を括り付けた長大な鉄の棒が携えられている。

「——なんのつもりだ」

じわじわと下がりながら、語気鋭く問いただした。しかし女は態度を崩すことなく、むしろこちらを圧迫するかのような語調で、

「それはこちらの台詞です。あの時は、状況を把握できないまま、泣く泣く撤退しましたが……貴方達がどのような目的のためにこの聖杯戦争を始めたのか、今度こそ聴かせてもらいます」

「お前、何言ってるんだ？」

「喋りたくないのなら、それでも構いません——言葉よりも、実力行使の方が幾分か楽ですから」

ここで巧が興奮した相手を落ち着かせることができ、かつ冷静に互いの持っている情報の擦り合わせができる人間だったのなら、事は荒立たずに済んでいただろう。

だが、乾巧とはそのような器用な真似ができる性格ではなかったし、上から押し付けてくるかのような女の頭ごなしな態度にも腹が立っていたし、そもそもいきなり鉄の棒で頭をぶん殴られかけて落ち

着いていられるほど、巧はできた人間ではなかった。
つまりキレていた。

「じゃあ言ってやる——寝言は寝て言ってる」

眩くや否や、巧はブラスタモードに変形させていたファイズフォンを、女の額へと向けた。これに見覚えがあると言ったのはどうやら本当らしく、女は照準点を正確に防御しながら間合いを潰すべく駆け出し、

その、足元を狙った。

放たれた高速の閃光は、空気を引き裂きながら寸分の狂いもなく、女が踏み出しかけた右足の一步手前の地面に着弾した。先ほどの女の一撃が生み出したものに勝るとも劣らない土煙が立ち込める。数秒遅れて褐色の煙を旗で払った女の視界から、すでに巧の姿は消えていた。

——相手してられっかよ、あんな危ない女っ。

森の中を息を切らせて走りながら、巧はぼそりと吐き捨てた。とにかくマシユ達と合流しなければならぬ。よほど鈍感でなければ、あちらも異変に気づいているはずだった。横たわった大木をひと息で飛び越え、積もった落ち葉と腐った土を踏み台にしながら、飛ぶようにして走り続ける。背後に殺気。振り向かず後ろ手に引鉄を引いた。再び地面が弾け飛んだ音に混じって、怯んだ足音が微かだが確かに聞こえた。心臓が激しく揺れる。汗がひっきりなしに垂れ落ちる。視界は絶え間なく上下を繰り返し、抑えきれない熱が口から零れ落ちていく。もはやどこをどう走っているのかわからないが、それは元からだったと思い直した。

開けた場所に出る。

どれだけ走っただろうか。マシユ達とは相変わらず合流できなかったが、辺りを取り巻いていた異質な気配が少しずつではあるが晴れてきたような気がした。もしかすると出口が近づいてきたのかもしれないと、巧が気持ちを明るくさせて、

それは空から、来た。

止まることができたのは、ほとんど偶然だった。

まるで大砲が炸裂したかの如き桁違いの轟音が、森の静寂を今度こそ完膚なきまでに打ち破った。その衝撃を受けて、地面には修復不可能な深い断裂が走り、根を大地の奥底まで固く巡らせているはずの木々は嘘のように揺れ動いた。

当然、至近距離でまともにそれを喰らった巧も無事ではいられなかった。目立った外傷こそ無いものの、肌には大量の擦り傷が刻まれており、関節は油を差し忘れた螺子のようになぎこちなくなっている。それでもどうにか立ち上がり、口の中に入った土を吐き捨てながら逃げ出そうとした巧の喉に、

「——っ」

鋭い穂先が、容赦なく突きつけられた。

とうとう自分が袋小路に追い詰められてしまったことを悟る。この様子では、指一本分でも妙な動きを見せた瞬間、喉を刺し貫かれてしまうだろう。固まる巧を他所に、女は淡々と話を続ける。

「どうやらその手にあるものは、魔術と相性が悪いようですね。おかげで境界が解けてしまいました——この至近距離では、もはや無力です。追いかけてこは、いい加減お終いですよ」

「……」

「内情を話してもらった後で再起不能にはなってもらいます……命までは取りません」

「そうかよ」

打つ手が無くなったというにもかかわらず、不敵な態度を貫く巧に、女は眉をひそめる。しかし巧は構わず、

「俺も、そろそろ疲れた。だから交代だ」

と告げた。何を言っ——と女が口を開こうとしたその刹那、その場に漂う魔力が急激に膨れ上がり、振り返る寸前に膨大な衝撃が女の身体を叩いた。

高速で吹き飛んだ女の代わりに巧の視界に現れたのは、巧が探し続けていた少女——マシユ・キリエライトその人であった。虚空で盾を振り切った体勢にいたマシユは、曲芸めいた軌道で地面に着地してみせると、戦意が滾る眼差しを女が吹き飛んだ方向へと向けた。

ひとまずは危機を乗り越えたらしい。巧が思わず安堵の息を吐くと、ようやく巧がいることに気づいたらしいマシユが、

「——無事ですかっ、先輩っ！」

と、慌て顔で近づいて来た。

ああ、と生返事を返しつつ、ぐいぐいと近づいてくるマシユを遠ざけながら、巧は疼く右手の令呪を見下ろした。どうやら無意識のうちに、疼きが強くなる方向へと走っていたらしい。正直に話せばこんな得体の知れないものが、身体に刻まれていることが気に食わなかったのだが、マシユと引き寄せてくれたことには素直に感謝した。

「——スター！ どこですかマスターっ!? ——あっ、ほらいましたよフォウさんっ。マスターっ！ 大丈夫ですかーっ！」

「フォウフォウ——ウ!!」

フォウを腕の中に抱えたコルデーが、マシユに遅れる形で辿り着いた。そして巧の全身に纏わりついた葉や土をぱんぱんと手で払い始める。叩かれるたびに土汚れが落ちていく感覚は爽快だった。

「わわ、すっごいことになっちゃってますね……何があつたんです?」
コートの前をはたいていた巧はしばらく考え込んで、

「へんな女に、襲われた」

「なんですかそれ」

さっきまでの自分を真似たかのように、もう汚れの取れた巧のズボンをひたすら引つ掻き続けていたフォウを抱き上げたコルデーが、おかしそうに首を傾げる。しかし巧にはそうとしか言い表しようがないため、

「へんな女は、へんな女だ」

と頑なに言った。コルデーはいまいち納得できない様子だったが、やがて今考えてもどうしようもないと思いつたようで、何処からか取り出したナイフを構えながら、マシユと同じ方向へと視線をやった。

視線の先には、女がいる。

どうやら咄嗟にマシユの一撃を防いでいたらしく、汚れはあるものの、女は無傷のままだった。それでも不意を突かれてしまった事は確

かなようで、よく注意を凝らしてみれば、あれほど鋼めいて見えた重心が僅かにぐらついているのがわかった。

「——貴方は、いえ、貴方達は、いったい何者ですか」

旗を槍のように構えながら、女は油断のない口調で問うた。巧は唇の端についた土を裾で拭いながら、

「人にも聞かす時はまずアンタから名乗ったらどうだ」

と無愛想に応じる。

女はしばらく躊躇っていたが、教えても害はないと判断したのか、閉ざっていた唇を重々しく開いた。

「私の名は——」

「——ジャンヌ・ダルク」

その声は、まるで福音のように、天から鳴り響いた。

全員が、思わず動きを止めて、同時に空を見上げた。

そこには、二対の巨大な翼をはためかせる竜と——ひとりの、女がいた。

銀色の髪をした女だった。

色素が極限まで抜けた女の銀の髪は、陽の光を浴びているにもかかわらず、生気がまるで失われているように見える。こちらを睥睨する金の瞳の奥には、粘ついた妄執の光と見ているだけで燃やし尽くされてしまいそうな憎悪と悪意の炎がこびりついている——だということに、その眼差しの烈しさとは真逆に、女の表情はゾツとするほど空っぽだった。乾き切った血液を連想させる黒に濡れた鎧は、女の白い肌が内包している屍体めいた印象を、より際立たせている。

誰かに似ている、と思った。その人物がいったい誰なのかということとは、すぐに分かった。

虚空ではなく、地面に立った金色の髪の女——ジャンヌ・ダルクに、似ているのだ。いや、似ているというレベルではない。まるで同じ人物が同時に存在しているようだった。

誰もが急変した事態に身動きが取れずにいる中で、ただ一人支配者

の資格を持った空に君臨する魔女は、無言で禍々しい刻印がされた旗を掲げると、

「——死ね」

息をするのも困難になるほどの圧倒的な殺意と共に振り下ろした。

第三節 「魔女、強襲」

「貴女は、一体——」

驚愕に表情を染め上げて、呆然と立ち尽くしたまま動かない金色の少女——ジャンヌ・ダルクへと、虚空に佇む黒き魔女が差し向けた長槍は、轟々と音を立てて燃え盛る暗褐色の炎をその細身に纏いながら、少女の心臓と霊核を貫く道を最速で駆け抜けようとしていた。

真つ先に動いたのは、巧。

石のように固まる少女の元へと駆け出し、半ば押し倒すかのような勢いで少女の細い腰に飛びついた。団子になって地面に転がった二人のすぐ傍を、槍は炎を灯しながら通り過ぎていく。巧の背に堪え難い熱を孕んだ——幾重にも積み重なった記憶の奥底に封印されていた——痛みが走る。漏れかけた情けない呻きを怒りをもって噛み砕き、巧は吠えた。

「——マシユ！」

少年の怒号に、マシユの反射神経はコンマ一秒の遅れもなく反応する。

少女、腰を捻ってその場で急速に回転。暴風めいた勢いで回転するマシユの両手に握られた円卓は、人間の手では本来生み出せないほどの莫大な遠心力を引き連れて、間近にあった一本の木の根元を深く切り裂いた。

硬い物を打ち砕いたかのような耳障りな炸裂音が轟然と響き、根元の半分以上を一瞬で抉り飛ばされた木は、即座に倒壊を開始した。葉と枝の重さも相まって、打たれた矢のようにどんどん速度を増しながら、地面へ吸い寄せられていく木の通り道には——魔女の姿。まともに喰らえば間違いない負傷は避けられない大質量の到来に、しかし女は視線どころか意識すら寄越すことはなかった。

女の周囲に、突如として爆炎が湧き上がった。

湧き上がった炎は、女とその足元ではばたき続けている竜を球形に包み込むと、着実に迫って来ていた主幹の大半を焼き尽くした。その

際に生じた熱風は巧達を容赦なく打ち据え、瞬く間に周りの木々を黒く染め上げていく。焼き尽くされた静寂が、灰となって地表に降り注ぐ。

渦巻く炎を散らし、再び空に現れた女は、まるで最初から何事もなかったかのように、ただひたすらに巧を——より正確に言えば自分を見上げてくる聖女に視線をやっている。

瓜二つの顔をした二人の女の、瓜二つの光を宿した視線が束の間交わり、僅かな沈黙が生まれる。

殺意と決意が複雑怪奇に入り混じった火花が宙を舞う。

一瞬の瞬きにも満たないそれはしかし、サーヴァントが次なる行動を起こすには、あまりにも充分すぎた。

魔女はふたたび旗を振りかざし——

——聖女は側の男の身体を横

脇に抱え上げ、

虚空に無数の黒い槍を産み出して——

——脚に練り上げた魔力を詰

め込んで、

一気に、解き放った。

爆発音が二つ、まったく同時に鳴り響いた。

ひとつは、無数の槍が撃ち放たれた音。もうひとつは、地面が凄まじい勢いで蹴り抜かれた音だった。

巧の視界に映る景色が瞬く間にクリーム状に融解し、意識が半分置き去りにされた。置き去りにされた半分の意識が慌てて追いつこうと足を踏み出したその瞬間、飛来した槍の雨によって細切れに引き裂かれた。

全ては一瞬の出来事だった。

「ッ!!!!」

「声を出さないでください舌を噛みますよっ!」

「無茶苦茶、言うなっ! お前の足は一体どうなってんだっ!!」

「無茶苦茶ではありませんしほんの少しだけスピードを出したただけですっ!!」

無茶苦茶だろうが——！

静止した状態から、いきなり豪速とも言えるスピードを出されてしまったおかげで、巧はひどい頭痛と耳鳴りに襲われていた。しかしそんな細かい事を気にしている場合ではないと、ジャンヌは更にギアを上げる。

少女が踏み込み、駆け抜け、飛び越える度に、地面に積み重なった色も大きさもバラバラな葉や草や枝が渾然一体となって、世界さえもその形をぼやけさせていくのがわかった。いままで手加減を加えながら追いかけていたことによりやく気づき、巧は、だったら最初からそうしてろ——と、無駄に体力を消耗させられたことに対する理不尽な怒りを覚える。話し合っていればそもそもお互い走らずに済んでいた、という考えは少年の頭には無い。

次第にはあるが、速度に感覚が慣れていき、無限に続くのではないかと思われていた薄暗い森に、少しずつ光の隙間が増えつつあることに巧は気がついた。このまま逃げ切れるか——と、巧が淡い期待を抱いたその時、巨大な異形の影が、唐突に空から覆い被さってきた。金切り声にも似た咆哮が響く。迫る脅威にいち早く気づいたジャンヌは方向を変えようとするが、それよりも一足早く放たれた黒い槍は、少女の後ろ足を鋭く刺し貫いた。

「——っ」

鎧と布と肉が削がれた鈍い音が響く。苦悶に顔を歪ませながら、ジャンヌは巧と共に地面に倒れ込んだ。相当スピードがついていたためか、数メートル転がっても勢いはまったく緩まず、即席のクッションとなった巧が、前をジャンヌに、背後を木に挟まれる形になって、ようやく二人は動きは止めた。

「っ——お、まえな」

胴体を前後から挟み込まれた巧は勢いよく咽せながら、力無くもたれかかってくるジャンヌを退けようとして、惨状に息を呑んだ。少女の右脚には深く大きな穴が穿たれており、そこから垂れたぶつ切れの筋繊維が、生臭い血液をぽたぽたと滴らせていた。

声を失う巧に気付いたジャンヌは、強張りながらも確かな気丈さを

感じさせる声で、

「——へい、きです。この程度の痛み、で」

「ええ、ええ。ジャンヌ・ダルクは、そうでなくてはなりません。苦痛に屈さず、試練に折れず、苦難に抗う——反吐が出るほど、気高くなければ」

森の奥から、女の言葉が響いた。

粘度の高い悪意をたつぷりと染み込ませたその声は、蜘蛛の糸のように全身に絡みついてきた。命が惜しければ今すぐこの場から離れなければならぬことを、頭ではわかつているというのに、声の重さに絡み取られた身体がいつまでも経っても動いてくれない。

ふと闇の中に、歪に光る黄金が二つ浮かび、

女は、何のてらいもなく、巧達の前に姿を現した。

「——ああ。ちよつと待って、ほんつとに頭がおかしくなりそう。なにか悪い冗談だと、誰か言ってくれない？ ……こんな愚図に縊らなきゃ立てないぐらいこの国は——フランスは弱くて、醜かったの？」
いつしか日は西へ沈み、重苦しい夜が、森に忍び寄ろうとしていた。頭上を覆う葉の傘の隙間から見える空は、血のような赤に染まり切っている。

そんな中にあっても、女のどす黒い漆黒の鎧と、金色の瞳と、血管さえ見えそうなほど白い肌は、異物のように浮いて見えた。

「——初めまして、ジャンヌ・ダルク。哀れで惨めで救いようがない、救国の聖処女サマ？」

「貴女は……何者ですか」

「この顔を見ても、まだ察しがつかないのですか？ ……ここまで鈍いと、呆れを通り越していつそ哀れに思えてきますね。それとも、わざと気づかないフリをしているのかしら？」

くすくす、と童女のように無邪気に笑いながらも、その奥に隠し切れない悪意を押し込めてあるその顔は、とても自分と同じ物だとは思えなかった。ジャンヌは熱に浮かされた気分になりながらも、どうにか言葉を捻り出す。

「何者なのかと、訊いているんです」

「——ジャンヌ・ダルクですよ、『私』」

艶かしい指つきで己の頬を撫で上げた女は、微かに自嘲の響きが入り混じった口調で、

「ドンレミに生まれ落ち、主の声を聴いたと嘯き、聖女を騙ってオルレアンを解放し、最期は祖国に裏切られて焼け死んだ——ジャンヌ・ダルクです」

と、闇の中でも透けて見えるほどの嫌悪を浮かべながら、もう一人のジャンヌ・ダルク——ジャンヌ・ダルク・オルタはそう語ってみせた。

「……貴女が、私ですって?」

「信じたくありませんか? それは私も全く同じ意見ですよ。貴女のような、聖女気取りの薄汚い溝鼠と一緒にだなんて、気持ち悪くって仕方がない」

「……私が聖女であったことなど、生前において一度もありません。これからも」

決然としたジャンヌの物言いに、オルタは妖艶な赤に濡れた唇を三日月状に歪めて、

「——あら、あらあらあら。まだそんな馬鹿げた主張を掲げているのですか? 血を流し続けることを自分のみならず周囲にも強要し、救うに値しない下らない国と下らない人間どもを救い、この世の全てに裏切られて死んだ……ふふ、これを聖女と呼ばずして何と言うのです?」

オルタはそこで言葉を切ると、何もかもが下らないと言わんばかりの、鮮やかな嘲弄を浮かべた。巧には、それが不自然さの欠片もない——その顔にひどくふさわしいものだと感じてしまった。この少女には、世界をそう憎むだけの資格があるのだと理解できてしまった。押し黙る巧をよそに、二人のジャンヌはさらに問答を続ける。

「彼を——シャルル7世を殺したのは、何故ですか」

「ここまで言ってもまだ分からないのですか? 裏切りに、報復は付き物でしょう」

「……彼は、彼がすべきことを為しただけです。彼だけではありません。この百年戦争を駆け抜けた全ての人間は、己の為すべきことを為そうと必死でした。そこに、敵も味方も、裏切った裏切られたもありません」

「そうでしょうとも！ みんな、自分にできることを必死にやっただけ——では、牢屋で私達を凌辱し尽くした下卑た兵士共も、主に仕える身にも関わらず醜い虚飾に溺れた司祭共も、自分にできることを精一杯していただけたと、そう仰るのですね？」

「……それは」

「まあ、貴女がどう思っているのかなんて、理解するつもりなど最初からありません。どうぞお好きなように、聖女ぶってなさい——ですが、主の声はついに聞こえなくなった。ということは、主がこの国を見捨てたことに他ならない」

「……貴女の、目的は」

動揺を押し殺しながら放たれた問いに、黒いジャンヌは知れたこと、と、と更に笑みを深めて、

「主の声すら届かなくなったこのフランスを、沈黙する死者の国に作り替えること——」

と、吐き出した。しかし、女の怨嗟はそこで終わらない。それまで世界全体に向けられていた膨大な瘴気が、ジャンヌ・ダルクたった一人に収束していく。刃先のように尖った先端を持つそれは、旗を支えるにすることでどうにか身体を立たせているジャンヌに向けて、容赦なく据えられる。

「だが、それも最早どうでもいい。私は、私はただ……お前を殺すこの瞬間を、この世界に生み落とされた日からずっと夢見ていた——！」

みしり、という音がどこからか聞こえた。

それは、膨れ上がりすぎた女の憎悪と魔力が、質量を持ったことによつて空間を軋ませた音だった。

「——ッ！」

蹴られた。

巧が突然の衝撃に抗い切れず地面に投げ出された次の瞬間、いまま
で巧が寄りかかっていた木が、木っ端微塵に粉碎した。

地面を転がる巧の視界に一瞬入ったのは、自分を蹴ったあとで飛び
のいたらしきジャンヌの姿と、砕けた木の幹に突き刺さる無数の黒い
剣だった。深く突き刺さったそれは木の中にならずぶと沈み込んで
いくと、激しい炎を溶け込んだ木の内部から上げさせる。暗闇を散ら
す禍々しい炎には、明らかに致死の光が秘められていた。

「逃げてください——逃げてっ!!」

少女の叫びに、巧は唇を強く噛み締めると、マシユを呼ぼうと右手
で疼く令呪を光らせる。

——しかしその手は、地面に串刺しに縫いつけられた。

「づ、あ、ぐっう——!」

燃えるような痛みが神経をあつという間に焼き切った。じゅう、と
皮膚が焦げて溶け落ちた音が遅れて響き、肉の焼ける香ばしい臭いが
鼻先を掠める。度を越えた苦痛はいつそ快樂に近いものなのだと初
めて知った。

脳髓を責め立てる痛みを前に、即座に決断する。苦悶の叫びと舌を
噛む危険性を、服の裾を噛むことで殺しながら、巧は己の掌を貫通し
た短剣を一気に引き抜いた。瞬間、ごぼごぼと不快な音を立てて鮮血
が傷口からあふれ出した。垂れ落ちていく赤黒い血液は、いとも容易
く背景に溶け込んでいく。手に力が入らない。血塗れになった令呪
が、その輝きをじわじわと薄めていく。

「ゴミはゴミらしく、隅で大人しくしてなさい。それとも、そんなに早
く死にたいのですか？ だったらお望み通り、真っ先に殺してあげ—
—」

魔女の声は、烈風と化したジャンヌによって遮られた。

鉄と鉄が激しくぶつかり合い、火花が激しく宙を舞う。ジャンヌは
不意の一撃が防がれたと知るや否や、躊躇なく武器を手放して、代わ
りに勢い良く拳をもう一人のジャンヌの腹に叩きつけた。デタラメ
な体勢で放たれた拳撃はしかし、サーヴァントの臂力によって絶大な
一撃へと変わる。

敵が高速で消えていくのを見届けたあと、ジャンヌは肩を上下させながら、巧の前に立った。

「逃げて……ください。その右手の負傷は、あとで幾らでも治療できます。貴方もマスター——魔術師なら、治療魔術のひとつぐらい、使えるでしょう」

息も絶え絶えな背中に、巧はただひと言だけ問いかける。

「……お前はどうするつもりなんだ」

「私は、ここで彼女を喰い止めます。おそらく、彼女もまた——いいえ。彼女こそが、きつと、私がこの時代に呼ばれた理由なのです。それに……私が生み出した不始末は、他の誰でもない私で付けます。だから、早く」

悲壮なまでの決意に満ちた横顔だった。伸ばしかけた手をぐっと握り締めて、巧は、森の奥へと全力で駆け出していった。

徐々に遠ざかっていく少年の気配を背中で感じたジャンヌは、限界を迎えたようにその場に崩れ落ちた。

右脚に空いた真つ黒な穴から脳髓まで上り詰めてきた痛みは、もはや正気で耐えられる強さではなくなっている。おそらく、何らかの呪詛が込められているのだと判断——しかし、対魔力を超えれば、一体どれだけの呪いを詰め込んだのかと、ジャンヌがもう一人の己に背筋を震わせた瞬間、

炎をまき散らしながら、オルタはゆっくりと闇から這いずり出てきた。

「——下らない、下らない、ああ、下らない。アンタと同じ顔してるっただけで、たまらなく吐き気がする」

向けられる憎悪は酷く濃密で、息をするたびに肺の中に重苦しい空気が沈殿していくのが分かった。しかしジャンヌは目を背けず、もう一人の自分の目を正面から見据える。

「……貴女の目的は、私でしょう。彼を狙う必要など何処にも無いはずです」

「はあ？ 貴女、視界の隅にちらつくゴミにも慈悲を掛けているのですか？ それはまあ、何とも気合の入った聖女ぶりですこと」

そう言うや否や、オルタは片膝を突くジャンヌの顔面を容赦なく蹴り飛ばした。苦痛の声を上げながら仰向けに転がったジャンヌの胸を更に踏みつけた魔女は、歪んだ恍惚の表情を浮かべる。

「冥土の旅の道連れを気にしているなら、安心なさい。彼らには特別な相手を差し向けておきましたから、すぐに寂しくなくなりますよ——貴女もどうせ、見たのでしょうか？　オルレアンのアレを」

「……まさか」

思い当たりがあったのだろう。ジャンヌは脅威に顔を染め上げると、すぐさま立ち上がりんと全身に力を込めた。しかしオルタは立ち上がるよりも早く、ジャンヌの負傷した右脚を蹴りつけた。傷口の上で、磨り潰すように足を動かし始める。

「ぐ——」

抑えきれない苦悶がジャンヌの口の端から零れ落ちた瞬間、魔女は抑えきれなくなったかのように、高らかな哄笑を奏で始めた。

「くっ、くはっ、くはは——そうですよ、その顔が私は見たかった！　迫る危機に対して何もできない無力な自分を悔やむその顔がつ！　アンタがそうやってすました面を苦痛と恐怖と絶望で歪ませる瞬間を、私はこの世界に生まれた時から、ずうっと待ってた……い！」

「う、ぐ——」

「どうか、その表情のまま死んでちょうだいね。死ぬほど嫌いなアンタのことを、いまようやく好きになれそうな気がしてきたから」

痛みで霞むジャンヌの視界の中に、振りかぶった穂先をこちらに突き付ける魔女の姿が映った。

死ぬことは、恐ろしくはなかった。それよりも、為すべきことを為せないまま終わってしまうことが、何よりも恐ろしかった。痛みに一瞬でも屈してしまったせいで、地面に転がったまま拳を握り締めることしかできない自分が、たまらなく恥ずかしく、情けなかった。こんな無様を晒す女の、何が聖女なのかと思う。

せめて、目を瞑ることだけはしないと誓った。心残りは数えきれないほどある。この世界に存在するべきではない城塞と化したオルレアンを破壊できなかったこと。己を庇ってくれたあの少年に礼を言

えなかつたこと。もう一人の自分に、打ち負けてしまったこと——だけど、目を背けて、何もかもから逃げ出すようなことだけは、どうしてもしたくなかつた。

やがて迫る、切っ先。頭蓋までの距離、瞬き一度で届きそうなほど近い。

覚悟を決めて、大きく開かれた、ジャンヌの紺色の瞳の中に、

——銀色の流星が通り過ぎた。

「え——」

沈黙の帳が降り、心の底から驚いたかのように、時が束の間動きを止める。

その、滴り落ちた雨粒が地面に一つのシミを作り出すよりも短い刹那の中で、

狼の遺伝子を配されたウルフオルフェノクは、駆ける勢いを殺さず跳ぶと、槍を振りかぶるジャンヌ・ダルク・オルタの脇腹を、渾身の力を込めた両足で蹴り飛ばした。

○

未だ治りきらない右手の傷を見て、ジャンヌは目の前の異形の正体に気がついた。

「——貴方、は」

「——」

巧は、伏したジャンヌと一瞬だけ視線を合わせた。それから怖気が立つような凄まじい雄叫びを上げて、吹き飛んだ魔女へと駆けていった。

脇腹を抑えながら立ち上がったオルタは、迫りくる風の正体が何であるかを察した途端、先ほどまでジャンヌに向けていた物に勝るとも劣らない憎悪を身体から発し始めた。

「オル、フェノク——！！」

放たれる、爆炎。

巧は腕を交差して、迫る炎の渦を真っ正面から突き破った。がむしやらに払い除けた炎の幕の先に見えた敵を確認した刹那、異様な光が一つ。炎を目晦ませにした刺突。しかし巧は退かず、更に一步踏み込んだ。こちら側からの視界がまともではないということは、あちらも同じ条件にあるはずだ。巧のギャンブル混じりの予測通り、魔女が振るう旗の先端についた穂先は、巧の頬を浅く掠めるのみに留まった。

目を見開くオルタに構わず接近し、すれ違いざまに片手で襟元を掴んだ。喚く声は一切無視して走り抜ける。暗闇が抜けた視界の中で捉えた手近な木に、巧は女の身体を思い切り叩きつけた。

かつ、と呼吸が途切れた音が確かに聞こえた。だが緩めはしない。巧はその場で腰を捻り、鋭い横蹴りをオルタの側頭部に向けて放った。顔面に迫る高速の凶器を防がんと、オルタは鋼鉄の籠手を身につけた腕をぴくりと動かす。巧はそれを視認したと同時にわざと蹴りの軌道を外すと、さらに回転を加えて勢いを付けた後ろ蹴りを放った。

直撃。

タイミングを外されて、一撃をまともに食らい、地面に転がった女の無防備な横腹に向けて、巧が足を振りかぶった——瞬間だった。女の手から突如として伸びた旗の先端が、巧の脇腹を抉り取った。

「——っぐ」

苦痛に思わず止まった巧の顎を、立ち上がったオルタの掌底が打ち抜く。頭蓋が揺れ、意識がシャボン玉のように脆くなる。よろめく身体を制御し切れない巧を突き放すかのように、オルタは巧の腹に前蹴りを見舞った。かろうじて右腕で防御が間に合う。しかしダメージは大きく、その上、距離まで取られてしまった。

荒くなつた呼吸をどうにか沈め、姿勢を低く屈めながら隙を伺っている巧に、オルタは嫌悪丸出しの表情で語りかけた。

「アンタ……アイツの差し金？ それとも、なに。今頃になって手遅れの正義感に駆られて、この聖女サマを助けて、あんな事になったオルレアンを救ってもらおう……なんて思ったワケ？ はッ、おめでた

い頭してるわ、全く」

「……」

「だんまり、か。ああそう。心底興醒めしたけど、ま、いいわ。どうせ、殺すことには変わらないんだし。理由が無いならともかく、これって明らかな裏切りだもの。そうでしょ？ だから裏切り者には、報復を」

旗を振り回しながら、オルタは世界に呪いを刻みつけていく。魔女の呪言が生み出されるたびに、空間に歪みが生まれ、黒々と燃える呪いを宿した槍が産み落とされていく。

そして、

「——私は、裏切りを、決して許さない」

射出。

音速を超えた速度で飛来した槍をコンマの差で回避。だが逃げ道の一つは塞がれてしまった。巧は舌打ちを繰り返すと、揺さぶるような軌道で森の中を走り始めた。灰色の残像が葉と草が波打ち続ける夜の森の海を掻き分け、まったく唐突に消えた。

「——？」

闇に紛れ込んだ灰影を探して視線を彷徨わせるオルタの後頭部に、死角から放たれた鋭い木の枝が迫った。しかし、枝は突如として湧いた炎に焼き飛ばされる。枝を放った巧はそれを確認すると、概ねの位置を把握したことによって射出を再開した槍をふたたび避け始めた。避けながら、思う。遠距離攻撃は無駄骨、こちらの体力も無限ではない。対してあちらの槍は、おそらく体力が続く限り、何処までも降り注ぎ続ける。いや、体力や魔力とやらが空っぽになるまで無くなつたとしても、相手は間違いなく続けるだろう。命さえ賭けてでも。こちらの確実な死を見届けるまで、こいつは決して止まらない——

——やるしか、ない。

決意を固めた巧は急制動をかけると、元であるオルタを叩くべく闇から抜け出して、槍の雨の中へと特攻し始めた。

「——そこに、いたあつ！」

標的を確認した魔女が、喜悦を浮かべた。

踏み込んだ、一步。加速。音が消え、世界が消えた。白熱する視界の中で見えた、絶対に避けられない軌道に置かれた一本の黒い槍。来い。叫びながら、槌のように固めた左拳で迎え撃つ。瞬間、左腕が外骨格ごと焼き尽くされた。走り抜ける痛み。漂う悪臭。フラッシュバックする遠い過去の記憶。だが、怯まない。鋭い鋼の雨に次々と装甲を削がれながらも、巧はようやく懐まで辿り着く。敵の心臓、手を伸ばせばすぐ届く距離にある。渾身の力を右拳に込めて解き放とうとしたその刹那、微かに首を傾けた女が、低く嗤った。怖気。

そして、それを巧は見た。

タイミングを間違つて放てば、自分の頭を刺し貫いてしまうかもしれないほどの至近距離に、女は密かに槍を生み出していた。それはそのまま、巧を貫く軌道にある。ヒトとしての直感が悲鳴をあげて、さっさと退けと巧の脳に命じる。だが止まらない。例え相討ちになったとしても構わないと、獣の本能が雄叫びを上げた。どちらに従うかなど、決めるまでもなかった。

スローモーションになった世界で、槍がゆっくりと巧の頭に迫る。巧の思考から、自分が今どういう立場にあるかなどという事は、綺麗さっぱり抜け落ちていた。

確実な死が振り下ろされようとしている巧の頭上を、

一陣の風が凧いだ。

「お、前——！」

怒声さえ薙ぎ払うかのように、その風は勢いを強くした。たちまち離れていく陰惨な気配にへたり込んだ巧が呆気に取られていると、すつと手が伸ばされてきた。鈍く光る鉄に包まれたその無骨な手を辿って見上げてみると、そこには傷だらけの聖女——ジャンヌ・ダルクが、負傷していることなど微塵も感じさせない、凜とした姿勢で立っていた。

「……これで、借りは返せましたね」

巧に手を差し伸べながら、ジャンヌはこの状況には似つかわしくもない、朗らかな笑みを浮かべた。それにどう対応していいのかわからず戸惑っている巧をとうとう見かねたのか、ジャンヌは刃物だらけのウ

ルフオルフェノクの手を強引に掴んで立ち上がらせた。

様々な感情が含まれた無言の視線を、ジャンヌは欠片も気にしない。しばらく躊躇ってから、巧は恐る恐るといった感じで少女に尋ねた。

「……お前、良いのか」

「何がですか。傷ならば、案ずることはありません。貴方が時間稼ぎしてくれたおかげで、戦闘続行に支障がない程度には治癒しました」
「そうじゃなくて、俺は——」

化け物なんだぞ——と、言葉を続けようとした巧を、再び目の前に差し出されたジャンヌの手が遮った。

「……色々聞きたいことはあります。ですが、貴方は私を助けてくれました——それだけで、信じるには充分です」

「……」

「……あの、何か反応していただけると助かるんですが」

そう言って、ジャンヌは差し出した手をひらひらと振った。その行動が何を欲しているのか巧は気づいたが、あえて無視を貫いた。信頼の証の握手なんて、照れ臭すぎてやってられない。ドラマじゃねえんだからよ——と心の中で愚痴りながら、巧は身を低くして、戦闘態勢に入った。

巧のそんな反応にはあ、としようがなさそうに溜め息を吐きながら、ジャンヌは旗を手にして、巧の傍に並んだ。

二人が相対するは、憎悪の業火をますます強めていく魔女。

際限なく膨らみ続けるそれは、戦うどころか正面に立つ気すら失せてしまいそうなほど、強大だ。対してこちらは、どちらも傷を負った半端者——だというのに、なぜか不思議と、負ける気がしなかった。

「……足、引つ張んなよ」

「それは、こちらの台詞です」

「ふざけた、真似を——！」

咆哮と共に、槍の豪雨が放たれる。

先手は、ジャンヌ。

爆発的な踏み込みと同時に、オルタに向かって大加速で突撃した。

応じるかのようにごう、と音を立てて放たれる無数の槍を、旗を振り回して薙ぎ払い、叩き落とす。弾き飛ばしていく。聖なる刻印を宿した旗が作り出す風が、邪悪な気配を灯す炎を一挙に吹き飛ばしていく。

その僅かな隙間を縫うように、ウルフオルフェノクが時速300kmを超える灰色の矢と化して、ジャンヌの脇から飛び出した。

たちまち極まった、潮合。オルタが反応するよりも早く巧は得物の旗を蹴り上げると、がら空きになった胴体に渾身の一発を入れた。しかしオルタは堪え、腰に提げた漆黒の長剣を抜きざまに払った。

巧の頸動脈を狙ったその一振りはしかし、横合いから入り込んだジャンヌによって完全に阻止される。

激怒が魔女を染め上げる。相手の掌にふと炎のちらつきを感じた巧は、姿勢を極限まで下げて、オルタの足を払った。一瞬姿勢が崩れ、あらぬ方向へと飛んだ爆炎をちらりとも見ず、ジャンヌは黒い鎧に包まれた鳩尾に石突を叩き込んだ。

「が——っ！」

後ずさったオルタの視界に、入ったもの。

それは、灰と銀をそれぞれ纏いながら突き進む、左右の拳だった。直撃。

吹き飛ぶ影。巧とジャンヌは自分達の拳に、確かな感触があったことを確認した。さらに攻勢をかけるべくオルタに近づこうとした巧の腕を、立ち止まったジャンヌが掴んだ。突然の制止と馬鹿力に、巧は鬱陶しそうに振り向いて、

「何だ」

「……少し、待ってください。いくらなんでもこれは、おかしすぎます」

「おかしいって、何が」

「弱すぎなんです。……いえ、魔力は確かに想像を絶する量なのですが、その、あまりこちらに集中していないというか」

「……手加減してる、ってことか？」

「恐らくは。——ですが、その理由がわかりません。貴方はともかく、

あれだけ憎んでいる私のそうする理由が」

その、刹那。

「——これは、憎悪によって磨かれた、我が魂の咆哮——」

世界が、文字通り凍りついた。

この現象が何を意味しているのか、何を引き起こそうとしているのかを、巧はよく知っていた。かつて幾つもの死闘を繰り広げた燃える炎の都市において、その最奥で待ち受けていた泥の騎士が放つどす黒い輝きを思い出した脳味噌が戦慄に震え出す。

ジャンヌの声がやけに透き通って、巧の耳朵に響いた。

「——宝、具……！ そのために、わざと。いえ、ですが、これは……自分ごと焼き尽くしているような物っ！」

「おいっ、どうするんだっ！」

「私の後ろに下がってください、早くっ！ ——間に合うか……！」

激しい焦燥を浮かべながらそう叫んだジャンヌの背後に巧が転がり込んだその直後だった。

光が。

弾けて。

「ラ・ゲロンドメント、デユ、ヘイン
吼え立てよ、我が憤怒——」

「リュミノジテ・エテルネル
我が神は、ここにありて——！」

人類を超越した存在であるサーヴァント——その最大の神秘ともいえる宝具が現世に二つ顕現し、ぶつかり合った。二つの大いなる神秘は互いに互いを喰らい尽くさんと、際限なく己の魔力を増大させていく。ある時には相手のそれを虚空に蹴散らし、またある時は相手のそれを取り込んで、淡々と——しかし確実に膨れ上がり続けていく。もはや、世界を覆い尽くさんばかりの規模。だが、終わりのない始まりなどこの世には無く、やがて両者の衝突は限界を迎える。

一瞬の沈黙。

そして。

轟音と共に、世界そのものが爆散した。

吹き荒れた爆風によって森を構成していた無数の木々は根こそぎ消し飛び、幾億もの時を経て固められた大地は実に容易く崩壊した。土の飛沫が舞い上がり、その雨の中から黒々とした煙が月が浮かぶ清々しい夜空を指して、その巨軀を瞬時に立ち上がらせた。

成す術など、あるわけもなかった。ただ、そばにある温もりを手放さないようにするだけで必死だった。

手練り寄せる。やがて意識、掻き消えて。

巧たちは、爆心地から外れた場所にある、夜闇に塗れた川の中へと吸い込まれていった。

○

サント・クロワ大聖堂。

苦難に晒されながらも決して諦めず、ついには栄光を勝ち取ってみせたオルレアンという都市を象徴するかのような威容を誇っているかの大聖堂は、夜闇の中にあってもその神々しさを微塵も失ってはいなかった。

手前の広場を居丈高に見下ろす二本の尖塔に、その間で一角獣のように突き立った青い屋根。ゴシック様式の瀟洒な意匠は、見るもの全てに荘厳さを感じさせる。その中に広がっている内部もまた、外観に勝るとも劣らない神聖さを湛えていた。

そんな大聖堂の、誰もいない夜の内部に、いつの間にか一つの影がある。

その影は、司祭の服を着ている。聖書を横脇に抱えている。十字架を左手に携えている。なにも持っていない右手には——血のように赤い、刻印がある。

月光を透かしたステンドグラスが淡い光を放ち、祭壇に登った影を照らし出す。

照らし出されたその影を、オルレアンに住まう人々は——ピエール・コーションと呼んでいた。

第四節 「夜空の月に誓うこと」

ぱちぱち、とどこかで火が燃えている。

そして、ジャンヌは意識を取り戻した。起き抜けのお陰であちこちがおぼろげに歪む視界は、どこを見てもムラ一つない黒で染まり切っている。身体を起こして周りを見回そうとして、節々がひどく痛むことに気づいた。さらに、魔力が身体の中からほとんど抜け落ちてしまっていることにも。

一体何が——と困惑の中にいるジャンヌの耳に、
「起きたか」

と、成熟し切っていない、少年が大人に成長する途上にあるような声が響いた。ジャンヌが声が出た方向に顔を向けると、そこには長い木の棒で目の前の焚き火を突つき回している、見覚えのない少年の姿があった。

「あ、あなたは……？」

「怪我してんだから、じっとしてろ」

お互いに初対面で、面識などあるはずもないのに、少年の口調は常よりも幾分か柔らかいものになっているとすぐに分かった。彼は誰なのか、とジャンヌはぼんやり考えて、その次の瞬間には全てを思い出していた。

異常に支配されたオルレアン、異質な光を纏った騎士、世界と自分への憎しみで燃える、異なる自分——起き上がろうとした時には、自分がいま起き上がれないほどの怪我を負っていることなどすっかり頭から抜け落ちていた。その結果は、語るまでもないだろう。

「い……っ！」

奔った痛みに思わず苦痛の声をあげながら、ジャンヌは身体を丸めた。だから言わんこっちゃない——と言外にほのめかす視線がちくちくと突き刺さる。みつともないところを見せてしまった気恥ずかしさからジャンヌは身体を小さく縮こめたが、しかし少年は特に気に

した様子もなく、つまらなそうに木の棒をふたたび動かし始めた。ぱちり、と焚き火が揺れ動く。

ジャンヌは痛む関節をさすりつつ、辺りを眺め始めた。焚き火の光はあるものの、夜の闇の方が多く視界はあまり良好とは言えなかったが、全身を包んでくる湿った土と草の匂いから、ここが森の中であることが分かった。ふと鼻先を掠めた生臭さはきつと近くに流れている川のそれだろう。耳を澄ませば、静かな水流の音を聞き入れることができた。

「……………」は、一体」

「さあな。俺も知りたい」

ジャンヌの当たり前の疑問に、少年は——巧はそう言って、焚き火の近くで手を擦り合わせ始めた。ぼんやりと照らされた少年の姿は、よく見ると天辺から爪先まで濡れている。そして濡れ鼠と化しているのは、自分も同様だったらしい。水をたっぷり吸い込んだ布が素肌にぴっとりへばりつく感触に今さら気づき、眉をしかめる。

「……………」あの、そちらに行ってもよろしいですか？」

「好きにしろよ」

おそろおそろ問い掛けてみて、返ってきたのはそんな返事だった。少々面食らいつつも、ジャンヌは手を擦っている巧の少し離れたところに座り込む。そして巧を真似るかのように、籠手を外した生身の手を、焚き火の前にそっとかざした。

二人の間に沈黙が降り注ぐ。

何を話せばいいのだろうか——とジャンヌは思う。というより、話すこと自体は山程あるのに、どの話題をどういう風に切り出せばいいのか分からないと言った方が良く。相手はどう思っているのだろうか、と横目で巧を見てみると、少年は大きな欠伸をかましていた。「……………」

そんな呑気な姿に、張り詰めていた緊張が一気に解けてしまつて、ジャンヌは思わず小さく笑った。くすくすと肩を揺らす少女に気づき、巧は気まずそうに顔を背ける。その姿が拗ねている子供のように見えて、ジャンヌはさらに笑う。

「笑うな」

「す、すみません。すぐ止めますから……ふ、ふく、ふふふ」
「だから笑うなっ」

とうとう耐え切れなくなった巧が声を張り上げたところで、ようやくジャンヌは笑みを収めた。しかしその顔には余韻が残っており、少しでも切っ掛けがあればまた笑い出しそうな危うさがあった。

それに気づいてか、巧は不機嫌そうに鼻を鳴らす。ジャンヌは完全に笑いの衝動が自分の中から去ったことを確認すると、胸元にそっと手を添えて、

「——では、自己紹介を。私はサーヴァント・ルーラー——真名をジャンヌ・ダルクと言います。まずは、貴方に感謝を……窮地を救っていただき、ありがとうございます」

と、感謝と共に頭を下げる。そして、

「良ければ、貴方の名前を教えてくださいませんか？」

まるで幼子に語りかけるかのような優しい口調と表情で、巧に向かって尋ねた。

巧はしばらくそっぽを向いて無視していたが、それでは目の前の少女は梃子でも動かないと理解したのか。やがて観念したかのような溜め息を吐いてジャンヌに向き直ると、この世界における自分の名である『藤丸立香』を名乗った。

「——そう、なのですか。世界その物が焼却されてしまったと」
「らしい」

呆然と呟くジャンヌに、巧は淡々とした調子で答えた。

互いの自己紹介が終わった後、巧達は初対面では叶わなかった情報交換をしていた。巧は、自分達は人理とかいうよく分からない物が焼き尽くされてしまったことで、確実に滅びつつある世界を救うために特異点と化したこの時代へ送り込まれたことを。ジャンヌは、数時間前に召喚されたばかりで詳しい状況はまだ把握し切れていないが、どうやら異常にはオルレアンともう一人の自分が関連しているらしいことを。

「要はそのオル何たらって場所が怪しいんだな」

「これまでの話を極めて大雑把に纏めた巧に、ジャンヌは呆れつつも頷いた。

「オル何たらではなく、オルレアンです。それに、怪しいかどうかはまだ確定していません……ですが、取りあえずはそう考えた方が妥当かと」

「……何がおかしかったんだ？」

巧が尋ねると、ジャンヌは言い淀むように声を落としてから話し始めた。

「貴方が持っているあの道具を、見せていただけますか」

ジャンヌの提案に、巧は思いのほか素直に従った。

ポケットの中の水滴がついたファイズフォンを取り出して差し出す。目の前の少女との追いかけてここで充電を使い果たしてしまったのか、それとも先ほどの死闘の中で悪い当たりどころでも打ってしまったのか。生憎と電源は切れてしまっているが、外装はほとんど無傷のままだった。思い返せば、これが傷を負ったところなど一度も見ることがないような気がする。巧がこれまで駆け抜けた戦いの中で、ベルトを吹っ飛ばされてしまう——という状況は幾度となくあったが、とうとう最後までこれが壊れることはなかった。おそらくは、自分がいなくなってしまうからそうだったのだらうと思う。

密かに感慨にふける巧を他所に、ジャンヌは手の上に乗せられたファイズフォンをしばらく眺めていたが、やがて胸に沈殿していた鉛を吐き出すように深く嘆息した。

「どうした」

「いえ……非常に似てはいますが、やはり違います。貴方のこれと、私が見た物とは」

「……違うっ」

はい、と頷くジャンヌに、巧は眉を顰めた。

ファイズとは異なる、ファイズと同質の物……そう言われて巧の脳裏に浮かび上がったのは、かつてスマートブレインと繰り広げた戦いの中で、人と異形の際限なき血みどろの欲望を一身に受け止め続けた

カイザとデルタの二つだった。

幾度となく共闘と敵対を繰り返したその果てに、オルフェノクの王を打ち倒すというひとつも目的の元によく集ったのだが、そのうちのひとつ——カイザは王に破壊されてしまったはずだった。

そして、その呪われたベルトの、最期の装着者となった男もまた。

「……」

「……リツカ？　どうかしましたか？」

突然押し黙ってしまったためか。心配そうに顔を覗き込んできたジャンヌを見て、巧はふと我に返った。何でもねえよ、と呟き返してもジャンヌはまだ案じている様子だったが、首を振って話の続きを促すと、ぽつぽつとはあるが話を再開した。

「とにかくオルレアン……いえ、この世界にアレを持ち込んだ者が、この異常の原因になっていると思われれます」

「お前と同じツラしたアイツは、一体何なんだ？」

「——同じ時代に、同じサーヴァントが二体召喚された……今は、そうとしか。聖杯戦争は何が起こってもおかしくありませんから」

そういうものか、と納得する巧にジャンヌは相槌を返しながら、心の中でだが、と続けた。確かに、聖杯戦争にイレギュラーは付き物である。魔術師という人でありながらも人ならざる精神を持った者が、己の欲望を叶えるただそれだけのために、生命を含めた全てを賭けて戦いに望むのだ。何も起こらないという方が、むしろおかしい。そして、その逸脱が世界を歪める物へ成長しかねないのを防ぐことこそ、ジャンヌに冠されたクラス——ルーラーの使命なのである。故に、もう一人の自分と敵対しなければならぬという複雑な状況下に置かれても、ジャンヌの精神は微塵とも揺らぐことなく裁定を執行できる——その筈だった。

目の前の焚き火をじっと見つめる。酸素を吸い込んで絶え間なく揺れ動く火は、もう一人の自分の瞳に宿っていた光によく似ている気がした。

誰に認められずとも、何と蔑まれようとも、その道が過ちでできていた物だったとしても、それを自分が信じると一度心に決めたのな

ら、何があつても最期まで歩き続けようと心に誓つた。その旅路の果てに待ち構えていた自身の破滅が、決して逃れられない物であつたとしても、自分が選んだ道を最期まで歩むことができたなら、心に悔いなどひとつも無いと——ずっとそう思つていた。その思いは今でも変わつていないつもりだつた。仮にやり直しが叶つたとしても、自分は何度でもフランスを救うために自らの破滅が確定している道を走る筈だつた。

だが、と思う。

——自分は本当に、最期まで何者をも恨むことなく、炎に焼かれたのだろうか？

火刑に処された時の記憶は、英霊となつた今でも鮮明に思い出すことができる。足元でぼうぼうと音を立てながら縛られた自分を弄ぶように炙る炎。燃える枯れ草や薪から立ち上る黒煙に犯されていく喉や肺。絶え間なく襲い来る炎の熱で次第に霞んでいく視界。それに反して息ができない苦しみと火に焼かれる痛みから、ますます覚醒していく意識——

主への祈りは、決して絶やさなかつた。しかし自分は本当に炎の海の中で、誰一人恨まずに死んだのかが、よくわからなくなつてきた。もう一人の自分が吐き出していた言葉が頭に過ぎる。救う価値のない人間と、救う価値のない国——嘘偽りのないあの憎悪はもしかして、他の誰でもない自分が心の奥底で無意識のうちに考えていた本音なのではないだろうか？ 有り余るあの悪意こそ、『ジャンヌ・ダルク』が抱いて然るべき真実なのではないだろうか？

己を裏切つた愚かな全てを恨み、憎み、復讐せんと旗を振る——もしそれが、世界がジャンヌ・ダルクに望んでいる役割なのだとしたら。それこそが、ジャンヌ・ダルクのあるべき姿なのだとしたら。

「……私、は」

水に濡れた寒さ以外の何かで震え出す手をぎゅつと握り締める。そのまま、内に秘めた重苦しい苦悩を吐露しかけたジャンヌを、

「——やめろ」

という、巧の素っ気ない声が押し留めた。

「え——」

途中で遮られたジャンヌが俯けていた顔をあげると、いつの間にか少年は立ち上がり、その場から去ろうとしていた。

「初対面の奴に話す内容じゃない。そういうの、無理だから。聞かせるなら別の誰かにしてくれ」

「……何処へ」

「木。集めてくる」

背中越しにそれだけ言って、巧は茂みの中へと消えていった。焚き火を見てみると、確かに火勢が弱まっていた。ジャンヌは喉の奥まで出かけていた苦悩をそっと飲み込み、確かにそうだ、と少年の言葉に苦笑した。

人を傷つける自分がいるかもしれないことが怖いなどと、いきなり目の前で悩み出されても、どうしようもない。しかもそれが初対面だというなら尚更。

周囲を取り巻く闇の濃度は飽和点を迎えつつあった。ジャンヌがそんな中でも濁ることなく煌々とした光を放ち続けている月を見上げていると、すぐ近くで気怠そうな足音が響き、その直後に生き返ったように火が燃え上がった。

集め終えた枯れ木を焚き火の中に放り込んだ巧は再び座り込んだあと、黙って火を見つめていたジャンヌに、

「……で、聞くか？」

と尋ねた。

何を、とは聞かなかつた。話すことなど、一つしか無い。目の前の少年が変身した、何らかの生命の意匠を全身に刻んだ灰色の異形……確か、オルフェノクと呼ばれていたか。ジャンヌは生前から魔術にはあまり詳しくなかったが、この少年が変身していたあの姿——オルフェノクは、サーヴァントや魔術師とはまた違う場所に位置する異常なのだという直感だけはあった。

頭の中に疑問の泡が次々と浮かび上がる。どのような経緯を経てその力を手に入れたのか。オルフェノクとは一体何なのか。どうして人類最後のマスターに選ばれたのか。

だが、問い質したいことは、たった一つだけだった。

「――貴方は、何故戦っているのですか」

「……」

他を差し置いてそんな質問をされるとは、思ってもいなかったのだろう。少年は青い目をぱつと見開いて呆気に取られていた。そうしているとは本当に、何処にでもいる平凡な人間にしか見えない。だが共に肩を並べて戦って、ジャンヌは少年が、数え切れないほどの戦場を潜り抜けてきたことが分かっていった。

そして恐らく力さえ無ければ、本当に平凡で――どうしようもなく幸せな日々を送っていた人間であることも。

だからこそ、聞いてみたくなった。ある意味で自分と似ているこの少年が、どのようにして運命に向き合っているのかが、とても気になった。

ジャンヌから顔を背けた巧は、しばらく視線を彷徨わせていたが、やがてぽつりと零した。

「夢だ」

「はっ」

「夢を守るために、俺は戦ってる」

怪訝に顔を歪めるジャンヌを気にすることなく、巧はここでは無いどこかを見つめながら話を続けた。

「俺は夢ってやつが何なのか、ずっと分からなかった――多分、今でも、これからもそうだ。けど、悪くないって思った……守りたいって思えたんだ」

「……だから、貴方は戦うのですか？」

「かもな。どうだ、満足したか？」

巧の疑問に、ジャンヌは躊躇ってから、

「どうして……私に打ち明けてくれたんですか？」

と質問した。巧はじとついた目をジャンヌに送りつけ、不機嫌そうに呟いた。

「……そっちから聞いてきたんだろ」

「いえっ、それは、そうなんです。貴方はその……あまり、自分のこ

とを話さない性格に見えますから」

慌てたように手を振りながら捻り出されたジャンヌの答えに、巧はしばらく考え込んでいたが、

「……お前だからかもな」

「私、だからですか？」

巧はこくりと頷いて、

「——俺にはお前が、誰かのこういう話を、笑い飛ばしたりするような奴には見えなかった……だから話した。ただ、それだけだ」

火に照らされた少年の横顔はいつも通りのぶすくれた顔だというのに、端々に照れ臭さを見て取ることができた。ジャンヌはそんな横顔を見て、巧が先ほど自分が吐き出しかけた、何もかもを憎んで滅ぼそうとするジャンヌ・ダルクこそが本当のジャンヌ・ダルクなのではないか——という弱音に、不器用ながらも返事をしてくれたことによりやく気が付いた。

「……まあ、今更そんなもん隠して何になるって話だけどな」

巧は、訪れてしまった沈黙に気まずそうにしながら、そんな誤魔化しを吐き出した。その不格好さにジャンヌは暖かな気持ちになつたが、笑うなど言われたことを思い出して、緩みかけた口元を抑えた。

「……答えてくれて、ありがとうございます。もう充分です」

「……もう良いのか？」

驚く巧に、ジャンヌは穏やかに返事した。

「ええ——きつと、これだけで充分なんです」

まだ訊ねたいことはたくさんある。しかし今のジャンヌは、この素直じゃない少年が吐露した本音の一部を聴くことができただけで、本当に満足だった。

今の自分は、聖杯戦争の知識も、ルーラーとしての権能も無い、他の英霊に比べればあまりにも未熟極まりない存在だ。そんな未熟者の前に立ちはだかっているのは、存在しない筈だった憎悪を持つもう一人の己。正直に言えば不安で堪らない。

だが、何のために戦うのかと問いかけて、夢を守るために戦っていると答えてみせた男が、信じてくれたのだ。だから、その信頼に応え

たいと思った。未だに自分で自分が信用できなくても、代わりに信じ
てくれる誰かのために旗を振ろうと思った。

だから――

ジャンヌは立ち上がり、旗を頭上に掲げた。月明かりに晒された布
が、暗い森の中でひと際強い輝きを放つ。そんな清らかな光を聖女は
受けつつ、こちらを見上げている巧に向けて、謳うように宣言した。
「主の啓示はもはや届かず、道は暗雲に包まれています……貴方達
の旅路の力になることを、貴方が信じてくれた『ジャンヌ・ダルク』の
名に懸けて、必ず約束いたします」

差し込む眩い月光に照らされた聖女は、どこまでも美しい。

そんな絵画のような佇まいを見せるジャンヌに、巧はただひと言だ
け、真顔で言った。

「恥ずかしくないのか、お前」

台無しだった。

○

見渡す限りの焼け野原であった。

地面の肌は無残に抉れ、辛うじて倒壊だけは防いだ木々も、長々と
伸ばしていた枝はぽつきりと折れて、年月を掛けて生い茂らせた葉を
ひとつ残らず散らし、積み重ねていた時間の層を見ることができた樹
皮をただの黒一色で染め上げてしまっていた。立ち込める空気は思
わずむせ返ってしまいそうな硝煙の匂いを漂わせており、点在する大
小様々な炎が、忍び寄る夜を追い返そうと身体を忙しなく揺らしてい
た。

穏やかな夜気と、静かに辺りを照らす月の光に包まれていてもな
お、見るものに荒廃した印象を与えてくるその場所は、かつてはそれ
なりの規模を保っていた森だった――しかしある理由によって、今は
草一つ無い荒野と化してしまっただのである。

魔術師と呼ばれる者ならば、その理由を一瞬で推察することができ
ただろう。その場に満ちる不可視の物質――魔力を視認することに

よって。

大気に充満している魔力は、寒気がするほど濃密だった。物理的な圧力さえ感じさせる濃度と量の魔力が、一体どこから生み出されたのか……その答えは、倒れ伏した木の隙間からいきなり突き出た腕の持ち主が、一番よく知っているはずだった。

「……」

ジャンヌ・ダルク・オルタは、自らに覆い被さっていた木々を一気に燃やし尽くすと、大量の灰をその身に纏わりつかせながら立ち上がった。

宝具の衝突によって起きた莫大な衝撃波を至近距離で受けたことと、自身の霊核が崩壊する寸前まで魔力を消費したことによって、少女の身体は戦うどころかまともに動くことすら敵わないほどの傷を負っていた。

しかしそんな負傷など欠片も気にせず、オルタはひたすら視線を彷徨わせていた。得物を握る手は小刻みに震えており、小さくとも動きさえあればすぐさま戦闘に移行しようと考えていることがわかる。今の状態のまま戦い続ければ、間違いなく消滅は免れないというのに——少女の戦おうとする意思はかえって強固に固められていた。まるで、すぐそばにある自身の破滅の到来を、強く待ち望んでいるかのように。

だが、探し求めている相手がこの場からいなくなっていることがわかると、少女は張り詰めた糸が途切れてしまったように膝をついた。そしてこみ上げる何かを堪えるかのように、籠手を身に付けたままの掌を握り締める。ざりざり、と鉄と鉄が擦れ合う音が響く。

聖杯戦争において裁定者の役割を担っているルーラーの固有技能——10キロ四方に及ぶサーヴァントに対する知覚能力にも、サーヴァントの反応はひとつも感じられない。それどころか、この近辺からは生命の影が一切切絶えていた。

しかしオルタには、あの女が——ジャンヌ・ダルクは必ず生き残っているという強い確信があった。それは直感としか言い表しようが無い、ひどくあやふやな物だ。だが、こうして目を瞑っていると微か

にはあるが、疎ましいあの気配をどこかに感じる事ができるのだ。

今も『ジャンヌ・ダルク』は、何も知らずのうのと生きている。そう考えただけでオルタの臓腑はたちまちねじくれるような怒りで燃え上がる。

「——お前さえ、この世に生まれていなければ、私が生まれる必要も無かった……」

焼ける荒野にひとり佇む魔女の口から零れ落ちた呪詛は、どろりとした粘度を帯びながら、夜の静謐とした空気をゆつくりと蹂躪していく。

「絶対に、逃がさない。たとえ地獄の果てまで逃げたとしても、必ず追いついて、お前を殺してやる、殺してやる……!」

月と夜空を見上げる魔女の瞳は、目に映る全てを焼き滅ぼさんと宣言するかのようになり、周りの炎を吸い込んで、冴え冴えと輝き続けている。

第五節 「影が彷徨う街」

冷ややかさを孕んだ朝靄がいまだに立ち込めている、比較的なだらかな平地——その中に開かれた小さな道路を二つの影が歩いている。靄の中をかき分け続ける影の大きさが、あまりにもバラバラなことから、その二人が男女の二人組であることが推察できた。

「——ねえ、まだ歩くのかい？」

ひたすら歩いている影のうちの一つが、疲れ切ったような声を上げた。装飾が多い服装から伸びるすらつとした手足や、腰に届いてしまいうほど長々と伸ばされた髪から一見すると女性と見間違えてしまいうのだが、飛び出した声は低い男の声だった。

前を歩くもう一つの影に言葉を投げかけた男は、弁解するように続ける。

「いや、確かに旅は好きだよ？ 気持ちの良い汗をかけて気分も晴れるし、時には閃きの切っ掛けになるものも与えてくれる。さらには君と二人つきりと来た！ ——まさしく良いことづくめってヤツだ」

「——ありがとう。とっても嬉しいわ」

戯けた調子で吐き出された言葉に、笑いながら礼を言った前方の小さな影の声は、澄み切った少女の声だった。

くすくすと笑う少女に、男は先ほどの少女を真似るように一礼してみせる。

「こちらこそ。……じゃ、なくて。ほら、僕らがここに呼ばれた理由が、まだ分かってないだろ？ 呼んだのが何なのかって予想は大体ついてるけど——それにしちゃあ、長閑過ぎる」

「あら、長閑なのは良いことよ？」

首を傾げた少女に、男はこくりと頷き返した。

「ああそうさ。だから気に入らないんだ。僕らみたいなのが呼ばれて、何処もかしこも長閑なんてちよつとおかし過ぎるぜ。別に、血腥いのが好きって訳じゃないけど……胡散臭い、うん。胡散臭いんだ、何もかも。だからこうしてあても無く歩くのは、ちよつと危険だと思

う」

男の長広舌を聞き終えた少女は、胸の前で手を合わせて驚嘆の意を示した。

「不思議ね……貴方が真面目な顔でそう言うと、まるで本当にあったことみたいに聞こえちゃう」

「……そりや褒め言葉かい？」

「ええ、もちろんっ！ 私はいつだって貴方を褒めたいのよ？」

そりやどうも、と肩をすくめる男に、少女は本当のコトなのに、と頬を膨らませる。二人のやり取りには、深い交流を果たした先でしか産まれない親しきがあった。

ひとしきり会話をした後で、少女は男から目を逸らして霧を——正確にはその先にある物を見据えた。

「目的が無いわけじゃないわ。——あそこに行かなきゃ、って思ったの」

ゆつくりと晴れつつある霧の中に、やがて一つの街の姿が浮かび上がる。男もその街を見ながら、少女に問い掛けた。

「あの街に、何があるって言うんだい？」

すると少女は、なにかを自慢するような誇らしげな笑みを浮かべて、答えてみせた。

「そうね——きつと、素敵な出会いが待っているのよ」

道の途中で立ち止まった二人の、視線の先にある街を。

フランスに住まう人々は、ラ・シャリテ・シユル・ロワールと呼んでいた。

○

「おはようございます、リツカ。そろそろ出立の準備を」

「……」

閉じた目蓋を照らす日光と喧しい鳥の鳴き声とハキハキとした女の声で、巧は目を覚ました。毛布代わりに身体にかけておいたコート

を退かして起き上がってみると、すぐそばでジャンヌが旅に出るための支度を始めていた。とは言っても荷物と呼べる物はほとんど無く、今は消えてしまった焚き火のそばに干してあった外套を羽織るのみであったが。

「……さむ」

差し込む日射しの暖かさとは裏腹の、肌寒いひんやりとした空気に腕をさする。未だに太陽がのぼり切っていないため、ほんの少しの薄暗さが残っている森の中に目をやると、木々の間に霧がぼんやりと立ち込めているのが見て取れた。

のそのそと鈍い動きでコートを手繰り寄せている巧に、ジャンヌはこれからの具体的な方針を説明し始めた。

「付近の搜索は昨夜の内に済ませておきました。ひとまずは川に沿いながら、村か街を目指して移動したいと思います」

「場所なんて分かんのかよ」

「土地勘がありますし、この周辺の地形には幸い、見覚えがありますから。……本当は平地で移動した方が早く済むのですが、もう一人の私を警戒して、念のために。あれだけ霊核を自ら傷つけていたのです。しばらくは動けない筈ですが……」

「一つ言っただいいいか」

「？ 分からない所でもありましたか？ 今のうちに何でも言ったださいね」

真面目な表情で喋りかけてきた巧を見て、ジャンヌは律儀に背筋を伸ばしながら応えた。巧はひと呼吸分の間を置いた後で、今までに無いぐらい真剣なトーンで、

「眠たい」

「……………」

何でも言えといったくせに、まだこいつは寝ぼけているのか——という、冷たい呆れの視線が突き刺さってきた。眠たいもんは眠たいんだからしょうがねえだろと巧が眉根を寄せると、ジャンヌは眉を八の字に曲げて、はあと深く嘆息した。

「……街に着けば、取りあえずは寝かせてあげられますから。今は

ちゃんと起きていてください」

「お前は眠たくないのか」

「私たちサーヴァントは基本的に睡眠を必要としません……しかも、あのようなことがあったのです。眠ろうと思っても眠れませんよ」

「へえ」

自分から尋ねてきたくせに、心の底から興味の無さそうな返事だった。ジャンヌは思わず青筋を立てかけたが、ぐっと飲み込んで抑える。この少年がそういう性格——無愛想で自堕落で大雑把で粗暴な性格だということは、昨夜交わした会話の中で充分に理解できた。その奥にある、隠し切れていない不器用な優しさにも。

「……ふふっ」

焚き火に照らされた少年の横顔をふと思い出したジャンヌが、思わずといった風に小さく笑う。巧は聞き分けが悪くとも憎めない弟を見ているかのようなその笑みに眉を顰めたが、反応するとロクなことが無いと判断して立ち上がった。

「さっさと行くぞ」

凝り固まった関節を回してごきごき鳴らしながら歩き出そうとした巧の足に、いきなり毛布のような柔らかさを持った小さな何かがかくつついてきた。あまりにも唐突なそれに驚きの声を上げながら巧が足下を見てみると、そこには白い綿毛を全身に纏った猫ともリスともつかない小動物が、耳をぴこぴこ動かしながら紫色に光るつぶらな目をこちらに真っ直ぐ向けていた。

視線が合った途端、小動物はフオウ、と一度鳴いてから、くるくると巧の周囲を回り始めた。

「野生の子リスか何かでしょうか……？ もこもこしていて可愛らしいですね」

ジャンヌは足元で走り回っていた小動物をそつと抱き上げると、顔を緩めて頭を撫で始めた。ジャンヌの腕の中で大人しくなすがままにされているその白い塊に、巧は見覚えがあった。

「……は……」

ずくん、と令呪が強く疼く。がさごそと怪しげな物音が背後で響

き、振り向いた瞬間に巧の視界に広がったのは、
胸。

「ま、すた——つ!!」

背の高い草むらをがさごそ掻き分けて飛び込んできたそれを支え切れず、巧は諸共になって転がることになった。勢いよく地面に打ちつけられた背中に鈍い痛みが奔り、呼吸が一瞬止まる。

「っ、てえ……」

状況をよく理解できないまま、単純に痛みへの怒りで怒鳴ろうとした瞬間、ぐすぐすとみつともなく鼻を啜る音が巧を止めた。

胸元に埋められた栗色の髪は、絶え間なく小刻みに震えている。じわりと胸を濡らしていく暖かさに巧がなす術もなく狼狽していると、がばつと顔を上げた少女——コルデーの潤みに潤んだ瞳が向けられた。

「お前……」

「うわーんっ！ 生きててほんとに良かったーっ！」

「がっ」

泣き声混じりの言葉が飛び出すと同時に、形の良い豊かな双丘が巧の顔面に強く押し付けられる。上手く呼吸が出来なくなつたせいで苦しげにもがく巧に欠片とも気づかず、コルデーは自分がいまサーヴァントであることなどすっかり忘れてしまったように、全力で巧を抱き締めていた。

「マスターは自分が人間だつてことを忘れちゃつてるおバカさんなんですか何で無茶なことしちゃうんですか命が惜しくないんですかーっ！」

「や……めろっ！ 離れろ、つて！ おいつ、息できねーんだよっ」

どうにか遠ざけることは叶つたものの、コルデーは未だに鼻をぐすぐす鳴らしながら巧の胸にしがみついている。そうさせてしまったのは自分の不手際であることへのバツの悪さから背けた視線の先には、もう一人の少女——マシユが立っていた。

よほど急いで走ってきたのだろう。白い肌は赤く染まり、額には玉のような汗が浮かび、薄桃色の髪の毛はぼさぼさに荒れて、幾つもの葉っぱがくっついていた。

「……………せん、ばい……………」

コルデーにしがみつかれている巧の姿を目にしたマシユは、ふらふらと頼りない足取りで巧のそばまで近寄って、糸が切れた人形のようにそのままへたり込んだ。そして控え目に裾を掴みながら、コルデーと同じように涙をぼろぼろとこぼし始めた。

「——わ、わたっ、わたしっ、先輩との、レイラインが、急に、き、切れちゃって。だから、今度こそ本当に先輩が、死んじやつ、死んじやつたかと思っつてっ」

途切れ途切れにつつかえながらも、吐き出さずにはいられないと言った感じの言葉には、確かに心の底からの安堵が見えた。

「おい……………」

泣かれてもどうしようもない、と思う反面、そうさせてしまったのは自分であることに間違いはなかった。救いを求めるようにジャンヌの方を向くと、実に微笑ましそうな笑みが返ってきて、こいつに頼ろうとした俺が馬鹿だった、と巧は全力で後悔した。

自分の不手際によって泣いている誰かに、邪魔だから退けと言えろほど冷徹にはなり切れず、巧にとって拷問に近い時間が粛々と過ぎていく。

「——そんな事が、あつたのですか」

赤くなつた目の端を擦っているマシユに、これまでの経緯を改めて説明し直していたジャンヌはこくりと頷いてみせた。

すぐ近くに、穏やかな川のせせらぎが聞こえる岸辺を、巧とジャンヌ——さらにマシユとコルデーを含めた一行は歩いていた。ジャンヌの言によると、目指す街——ラ・シャリテは、川を下ったすぐ近くにあるという。その道程を辿っている途中で、ジャンヌが話した——巧は面倒臭いと言って語りたがらなかった——出来事に、マシユは驚きを隠せない様子だった。

「つい昨夜まで敵対しかけていた私の発言など、とても信じられないでしょうが……」

表情を陰らせるジャンヌに、マシユは首を横に振りながら、

「そんなことはありませんよ、マドモアゼル・ジャンヌ。貴方の眼には嘘の光が無いですから。それに——」

と言った。そして言葉を切り、四、五歩ほど間を空けて歩いている巧を見た。隣で話しかけてくるコルデーに、相変わらず適当な返事ばかり繰り返していた巧は、自分が見られていることに一瞬で気が付くと、明後日の方向に向けていた顔を怪訝そうに曲げながらマシユにやった。

「——？」

視線が交錯する。何かあったのか——と口パクで問い掛けてきた巧に、マシユは首を横に振って応えた。それで興味をすっかり失ったらしく、巧は再びコルデーの話を聞き流す作業に戻る。

「——先輩が信じた人ならきつと、わたしも信じられます」

どこか誇るかのように囁いた彼女の横顔にこそ、嘘偽りのない信頼の光があった。ジャンヌは眩しい物を見るように目を細めると、

「——貴女のような素敵な人がそばにいて、彼は幸せ者ですね」

と言った。マシユは一瞬なにを言っているのか分からない——と言わんばかりに呆気にとられた後、慌てたように両掌を顔の前で振り始めた。

「そんなことはつ。むしろわたしの方こそ、先輩に助けってもらってばかりで………いえ、態度がちよつとだけ乱暴なところだけは擁護することは出来ませんが」

「ああ……」

マシユの思い悩んだ顔に、ジャンヌは納得の色が濃いため息を吐いた。

「確かに彼の言動はその……少し、アレですね」

「そうなんですつ。いえ、本当はとても優しいことはわかっているんですけど、ここにレイシフトしてくる前にもですね——」

少しずつではあるが打ち解け始めた二人の話題にまさか自分が拳

げられているとは思ってもいない巧は、コルデーの話を聞いて大きく眉を顰めていた。

「——青い、ベルト?」

「はい。でも青一色というわけでもなくて、どっちかというところと白色の印象が強い身体でしたね——あと、空を飛んでたんですよ。こう、ビューンって感じに」

身振り手振りを添えた説明を始めるコルデーを放って、巧はひとり深い思考の海に潜っていた。変身後の姿に青と白が目立ち、なおかつ空を飛べるようになるベルト——正直に言うと、まるで見当がつかなかった。

巧が知る限り、スマートブレインがそのようなベルトを戦いに持ち出してきたことは無かったし、そもそもそんなベルトを所持しているのなら、唯一オルフェノクの滅びを覆す術を持った王を殺そうとする巧達の前に、必ず立ちをはだからせた筈だった。

「……」

「マスター? どうかしましたか?」

「何でもねえ……で、そいつはどうした」

「ええつとですね、私とマシユさんを襲って来て、それで、爆発があったでしょう? マスター達が逃げた方向に。あれを見た途端に、そっちにバーって飛んでつちやいました」

それでどうやら終わりらしく、コルデーは話を止めた。黒いジャンヌに、存在することさえ知らなかったベルト、そして恐らく生きているであろうオルフェノク——行く手に待ち受ける困難の多さを思つて巧がため息を吐いた時、ぶん、とノイズが響き、軽い男の声が辺りに木霊した。

『——それが、特異点発生の原因に間違いだらうね。シャルル7世を殺害したもう一人のジャンヌ・ダルクに、そのジャンヌを退けたらしい『救世主』。そして藤丸くんのアイズと、ほぼ同じ物を持った何者かがいるオルレアン——うん。歴史を破壊するには充分過ぎるぐらいだ』

「……誰ですか?」

姿が見えず、声だけが聞こえることに訝しむジャンヌに、声の主——ロマンは、

『自己紹介が遅れて申し訳なかった、マドモアゼル・ジャンヌ——藤丸くんから聞いてるだろうけど、改めて。僕達はカルデアという組織に所属していて、歪んだ歴史の修正を目的にこの時代に来ました』

とずいぶん張り切った声で言った。カルデア、と聞き慣れないであろう言葉を、ジャンヌがどうにか噛み締めたのを確認してから、ロマンは言葉を続けた。

『で、僕が彼らのサポートを担当してるロマニア・アーキマンです。もし呼び辛いようなら、気軽にロマンと呼んでください。みんなからもそう呼ばれてますし、僕も堅苦しくされるよりはそっちの方が気が楽ですから』

「ロマン……ロマン、ですか……」

ジャンヌはロマンの自己紹介を繰り返し、ちらりと巧に目をやっってから、花が咲いたような笑みを浮かべて、

「つまり……夢見がちな人なんですわねっ。よろしくお願いします！」

と言った。沈黙がその場を包み込む。やがて続いたロマンの声は、先ほどとは違ってなんとも言えない敗北感で満ち溢れていた。

『……いや、まあ、そうなんだけど。何なんだろう……この納得のいかなさは……』

「つーか何で俺を見た」

「だって、夢見がちな人なんでしょう？」

不機嫌に顔を歪める巧に、ジャンヌはにこやかに笑いながらそう答える。すると、それを聞いていたコルデアがわあ、と驚きの声を上げた。

「マスターって夢見がちな人だったんですねっ。私は意外性があって素敵だと思いますよー！」

『ってことはなに、僕達は仲間ってこと!?! 心強いよ藤丸くんっ！

いや君だけじゃ正直不安なんだけど、この際いらないよりは百倍マシだっ。二人でこの敗北感を分かち合おうっ』

「……お前らな……」

好き放題言われて我慢していられるほど大人しくない巧がひそかに拳を震わせていると、前を歩いていたマシユがふと指を持ち上げて、

「あれは——街でしようか？」

と言った。巧達がマシユの指し示す方向を向くと、確かにそこには街並みがあった。ジャンヌは立ち止まると、注視するためにすつと目を細めた。そして何度か頷いて、

「はい。あれが目的地——ラ・シャリテです」

と、静かに言った。

○

ロワール川に架けられた、歴史の厚みを感じさせる石造りの長大な橋。そこを渡ったすぐそばにラ・シャリテはある。

遠目からでも目立つ巨大な尖塔を持ったノートルダム修道院教会を中心に発展してきたこの街は、他の大都市に比べると些か規模は劣るが、それでも大勢の人々が暮らしていくには充分なほど広大な土地を有しており、市内には数百の建物が建築されている。

そんな街もまた、コルデーがかつて暮らしていた農村と同様に、不自然さの欠片も無い明るい喧騒に満ち溢れていた。

人混みが必ず醸し出す、むせ返ってしまいそうなほど濃厚な混沌に顔を歪めている巧の隣を歩いているのは、雨合羽のようなローブを深くに被ったジャンヌだ。余計な混乱を防ぐために、顔を最低限まで識別し辛くする認識障害の魔術が掛けられているらしいが、これはこれで逆に目立ってしまうが、ないんじゃないかと巧は思う。

「——凄い活気ですね」

道を進んでいくたびに、風に吹かれる雲のように次々と移り変わっていく人々や街並みをきよきよと見回しながら、後ろを歩いていたマシユが感慨深そうにそう呟いた。

農村にも確かに活気はあったが、やはり街のそれとは比べ物にならない。そもそも規模が違うのだから当然と言えば当然なのだが、その

証拠として、巧達よりは人混みに慣れているはずのゴルデーは、街の景色を満遍なく見ようとして目を回しかけている。一体何をやっているのか。

マシユの言葉を聞いたジャンヌは、懐かしむような表情を浮かべた。

「この教会は、フランスでも有名でしたから。それに、シャルル7世が魔女に——もう一人の私に殺害されてしまった事実が変わりはありません……ですから、みんな不安なんだと思います」

「でも、救世主って人が倒してくれたんですよね？」

見慣れない服装をした四人組を不思議そうに見ていた通りすがりの子供に手を振っていたゴルデーの質問に、ジャンヌは首を縦に振る。

「それがきつと、人々が明るいう理由でしょう。実際に魔女はオルレアンから去ったらいいですから」

「……けど、アイツは生きてたろ。どうなってんだ」

「——それを、確かめなくてはなりません。答えはきつと、オルレアンにあります」

巧の問いに、青空目掛けてそり立っている教会の尖塔を見上げながら、ジャンヌはそう答えた。

やがて、足裏が石畳の硬い感触をどうにか踏み慣れるようになった頃。両側を煉瓦造りの壁に挟み込まれた路地を抜けた四人は、大きな広場に足を踏み入れた。

瞬間、熱気が全身を満遍なく打ち付ける。どうやらそこは祭りか何かが開かれている真つ最中らしく、一段と厚さを増した人の波が、あちこちに開かれた屋台を物色しようと、行ったり来たりを繰り返していた。

ジャンヌは被ったフードを少し上げて、目の前の雑多とした景色を眺める。そして何かを決意したように頷くと、巧達の方に振り向いていった。

「——ひとまず、ここから情報収集といきましょう。広い上に人が多いので、二手に分かれた方が良さそうです。ひと通り聞き終えたら――」

「そうですね、あそこの宿屋に集合する、ということだ」

「はいはいっ。それじゃあ私はあっち側から聞いてきますねっ」

ジャンヌが提案したと同時に、コルデーが元気よく手を振り上げる。巧はそれを冷ややかな目で見ながら言った。

「遊ぶなよ」

「もお、分かっていますっば。マスターじゃ無いんですから、ちゃんとやることはやっています」

「……」

口ではそう言っているものの、コルデーの目は食べ物だけでなく服飾品や日用品など様々な売り物が並べられた様々な屋台に、すっかり釘付けになっていた。

「大丈夫か、こいつ。」

巧が目の前の少女の先行きに対する不安に駆られていると、そばのマシユが控えめな態度で問いかけてきた。

「……先輩はどうなされますか？」

「俺は、」

一同の視線が、暇そうに突っ立っていた巧に一気に集中する。

巧は人混みを面倒臭そうに見渡したあと、集合場所である三階建ての宿屋に目を向けて、

「ダルいから、パスで」

当然、許される訳がなかった。

——先輩のこと、よろしくお願いします。ワガママを言うようなら、多少強引に引きずっていても構いませんから。

そう言い残して、マシユとコルデーは広場の中へと消えていった。どういう言い草してんだアイツは、と苦々しい表情で愚痴を漏らし続ける巧を引っ張りながら、ジャンヌもまたオルレ안의情報を集めるべく、行き交う人々に話を聞き始めた。しかし、投げ返される言葉はどれもこれも同じだった。

——オルレアンには、魔女を倒した救世主様がいます。

じゃあその救世主サマとやらは一体どんな顔をしたヤツなのか、と訊いても、返ってくる言葉は同じ「分からない」なのだから手に負えない。あまりにも変わり映えしないために、ひよつとして街ぐるみで口裏を合わせているんじゃないかと疑いたくなるのだが、巧達がこの場所を目指していることを事前に知っていなければ、そんな芸当はできないだろう。

つまり、本当に誰も、何も知らないのだ。オルレアンのことを。救世主のことを。

延々と続く単調な作業に巧が耐え切れる訳もなく、ジャンヌも何もかもが徒労に終わるのだという気配を察し出したのか、聞き込みをした人数が両手両足の指をはるかに超えたところで、二人は宿屋の中にある食堂——その片隅のテーブルについていた。

「まさか、ここまで誰も知らないなんて」

椅子に座るや否や、ジャンヌはため息交じりにそう言葉を吐き出した。その向かい側にどっかりと腰を据えた巧は頬杖を突きながらぼそりと呟く。

「とんだ無駄足だったな」

「……そういうことは思っても口にしないのがマナーの筈ですが」「知るか」

手持ち無沙汰になって、巧はズボンのポケットに入れていたファイブフォンを開いた。カルデアから送られてきた物資の中に充電器があったため、ひとまずは危機を脱することはできたが、まだ液晶を表示できるほどの電池は溜まっていないらしく、画面は暗く染まっていた。舌打ちをして、仕方なく、そばの窓から見える往来を見て暇を潰すことに決めた。

道を行き交う人々の表情は、巧が知っている現代の人間とまったく変わらない。かけがえのない平凡な幸福が、時代を超えてそこにはあった。

穏やかな風景を眺めやる少年の横顔は凧いだように落ち着いていた。そんな巧を見て、ジャンヌは好奇心からふと問いかけたくなった。

「……好きなんですか？　こういう風景が」

　一拍置いてから、巧は訊ね返した。

「なんで、そう思う」

「そういう顔をしてましたから」

「——見てて、気分は悪くない。それだけだ」

真似るように往来に目を向けていたジャンヌには、少年の声が一瞬、まったく違う別の誰かの声に変わった風に聞こえた。振り向くと、そこには眠たげに目を瞬かせている少年の、いつもの姿があった。

「——どうした？」

「……いえ、何でもありません」

「トイレならさっさと済ましとけよ」

「だから何でもありませんっ！　というか、貴方には本当にデリカシーという物が欠けていますねっ。そもそも私はサーヴァ——」

デリカシーが欠けた発言に獅子のように吠えかけたジャンヌと、聞くだけ時間の無駄だと言わんばかりに耳を塞ごうとした巧を、

「——ムツシユー。マドモアゼル。相席しても、よろしくて？」

鈴の音を鳴らしたような、可憐な声が止めた。

喧騒が止んだ、気がした。

光などひとつも差し込んでいないにも関わらず、少女は輝いているように見えた。

二房に伸びた滑らかな白髪に、星のように煌く水色の瞳。真紅のドレスを身に纏った肢体は、少女の無垢さと女性の艶やかさという相容れる筈の無い二つを、奇跡的なバランスで成り立たせていた。立ちぶるまいは儂い硝子細工を連想させるが、同時に何者にも決して壊せない、力強い気高さを透かして見ることができた。

「あの……貴方は？」

我に返ったジャンヌが戸惑いながら問いかけると、少女はまあ、と感嘆の声を上げた。そしてジャンヌの右手を両手で包み込むと、互いの睫毛を数えられそうなほどの至近距離まで、一気に顔を寄せた。

「な、」

いきなり広がった甘い百合の香りに、思わず硬直したジャンヌに構

わず、少女は喜びを露わにしながら、

「——貴女、とつても素敵な眼をしてるのね！ 綺麗で、純粹で、真つ直ぐで。きらきら輝いていて……思わず見惚れそうになっちゃう。いいえ、ずつと貴女を見ていたいわ、私」

と謳うように言った。ジャンヌはぱちぱち、と瞬きを数度繰り返して、それからうろたえた声で答えた。

「は、はあ……ありがとうございます……？」

「あつ、いきなりごめんなさいね？ よく君は初対面の距離感を間違えてるって、アマ……彼に怒られちゃうから、そうならないよう気を付けてただけ……はしたなかったわね、本当にごめんなさい」

申し訳なさを示した後、少女はそつと手を離して、二歩ほど下がってから頭を下げた。あまりにも淀みが無いせいか、気品さえ滲み出ているそれを見て、ジャンヌは面白いように慌て出した。

「そんなんつ、その、頭を上げてください。はしたないなどは、ちつとも思っていませんから」

「本当？ 嬉しい……それじゃあ、またしてくれる？」

「いや、それはどうか——それよりも、相席、でしたか？ 構いませんよ。それに、私達の方も少し聞きたいこともあって——」

立ち上がり、椅子を引こうとしたジャンヌを、巧の声が止めた。

「俺は嫌だ」

「は？」

「俺は嫌だつて言ったんだ」

巧は心底気に入らなさそうに少女を見上げながら、ハッキリとした声で吐き捨てた。何もそこまで強く言うことは——とジャンヌが説得する前に、少女はつい、と一歩だけ前に歩み出た。突き刺さる鋭い視線に微塵も怯むことなく、少女は手を差し出す。

「——貴方も、素敵な眼ね。鋭くて、力強くて、気高くて——けれど、ほんの少しだけ寂しい眼。うん……好きよ、私。貴方のことが」

「悪いな——俺は、最初からニコニコ笑いかけてくる奴が嫌いなんだ。座りたいんなら、他当たれ」

最後まで少女の手を取らず、言いたいことだけ言って黙り込んでしまった巧に、どうするべきか、とジャンヌが悩んでいると、手を引つ込めた少女がにこやかに笑いかけてきた。

「お邪魔しちゃって、本当にごめんなさい。彼の気も害してしまっただけです……」

「……こちらこそ、申し訳ありませんでした。いつもは……その、もう少し柔らかい対応なのですが」

「いいえ、マドモアゼル。どうか頭を下げないで。無礼を働いてしまったのは私なの。それなのに貴女に頭を下げさせちゃ、私、とっても悪い女の子になってしまいわ」

「……」

「ふふ。縁があつたら、また逢いましょうね。綺麗な貴女に、素敵な貴女。今度はきちんと、互いに自己紹介から始めましょう?」

それが少女の最後の言葉だった。かつんこつん、とヒールを鳴らしながら去っていくその小さな背中には、問答無用で人の心を惹きつけてしまう魅力があつた。食堂中の視線を一身に受けながら揺るがない少女を、巧はやはり、気に食わなさそうに——何かを疑うかのように見ていた。

「……情けは人の為ならず、ですよ。リツカ。良いじゃないですか、一人ぐらい増えても。それに、彼女にはまだオルレアンの話聞いてませんでした」

ジャンヌが人差し指を立てて咎めると、巧は渋い顔をしたまま口を開いた。

「あいつが本当に人ならな」

「どういう意味ですか?」

大きな疑問符を浮かべたジャンヌに、巧はたちまち呆れた表情になつて、

「お前、本当に気づいてないのかよ」

「だから、どういう意味なんですか」

しばしの沈黙。そして巧は硬質な声色で続けた。

「あいつ、お前の眼がどうか言つてたろ。よく見えないはずなのに」

「――！」

そこでようやく自分が認識阻害のローブを着ていることに気づいたのだろう。ジャンヌは急いで宿屋の入り口の方を向いたが、既に少女の姿は無かった。おそらく、この建物の周辺からもとつくに消えているに違いない。もしかすれば、このラ・シャリテからも――

「……正体に気が付いたから接近してきた、のでしょうか？」

「さあな。仮にそうじゃなかったとしても、俺達に断られたぐらいで、さっさとここを出て行つてんだ。どっちみち怪しい」

「ということは、私達は既に、敵の陣地の中にいる……という可能性もありますね。……すみません。私が迂闊でした」

目に見えて落ち込むジャンヌに、巧はふんと鼻を鳴らした。

「別に、今に始まったことじゃねえんだから、いちいち落ち込むなよ。鬱陶しい」

「………あの、それは、どういう？」

「どうって、寝てる途中でよだれ垂らしてたヤツが――いてっ、いつ、おいつ、おいつ！ 足っ、足踏むなっ！ バカ！ おい！！ 聞いてんのか！ ってえ、このっ、馬鹿力――いっっ！」

大した成果を得られなかった聞き込みとほんの少しのシヨツピングを終えて、宿屋に入ってきたマシユとコルデーを、少年の苦痛の悲鳴が出迎えた。

○

そして日は沈み、夜が再び世界を塗り潰した。

空に浮かぶのは月と、わずかな星々のみ。足元さえ定かではない暗闇を、躊躇うことなく進む影が一つあった。

昼間を歩いているかのようには、道を迷いなくまっすぐ歩いている影の眼に、多くの光が灯った場所が見えた。影は一旦立ち止まると、なにかを確かめるかのように頷いてから、再び歩き始めた。

ふと、月明かりが、歩く影を照らす。すると影が、鞆のような物を手にぶら下げていることが分かった。明かりは差し続けていたが、動

き続ける影はやがて濃い闇の中に溶け込んでしまい、それつきり姿を見せなくなる。

だが、月は確かに見ていた。

影が持つ鞆の表面に、『SMART BRAIN』という刻印が打たれていることを。

しかしそれを知る者は、まだ、月以外の他にはいない。